第三巻

樓門五三桐（さんもんごさんのきり）

和田合戦女舞鶴（わたかつせんをんなまひづる）

織合襤褸錦（おりあはせつゞれのにしき）

菅原傳授手習鑑（すがはらでんじゆてならひかゞみ）

河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎
共編

第三卷

時代狂言傑作集

東京
春陽堂發行

一陽斎豊国画
香蝶楼豊国画
一陽斎豊国画

目次

插繪目次

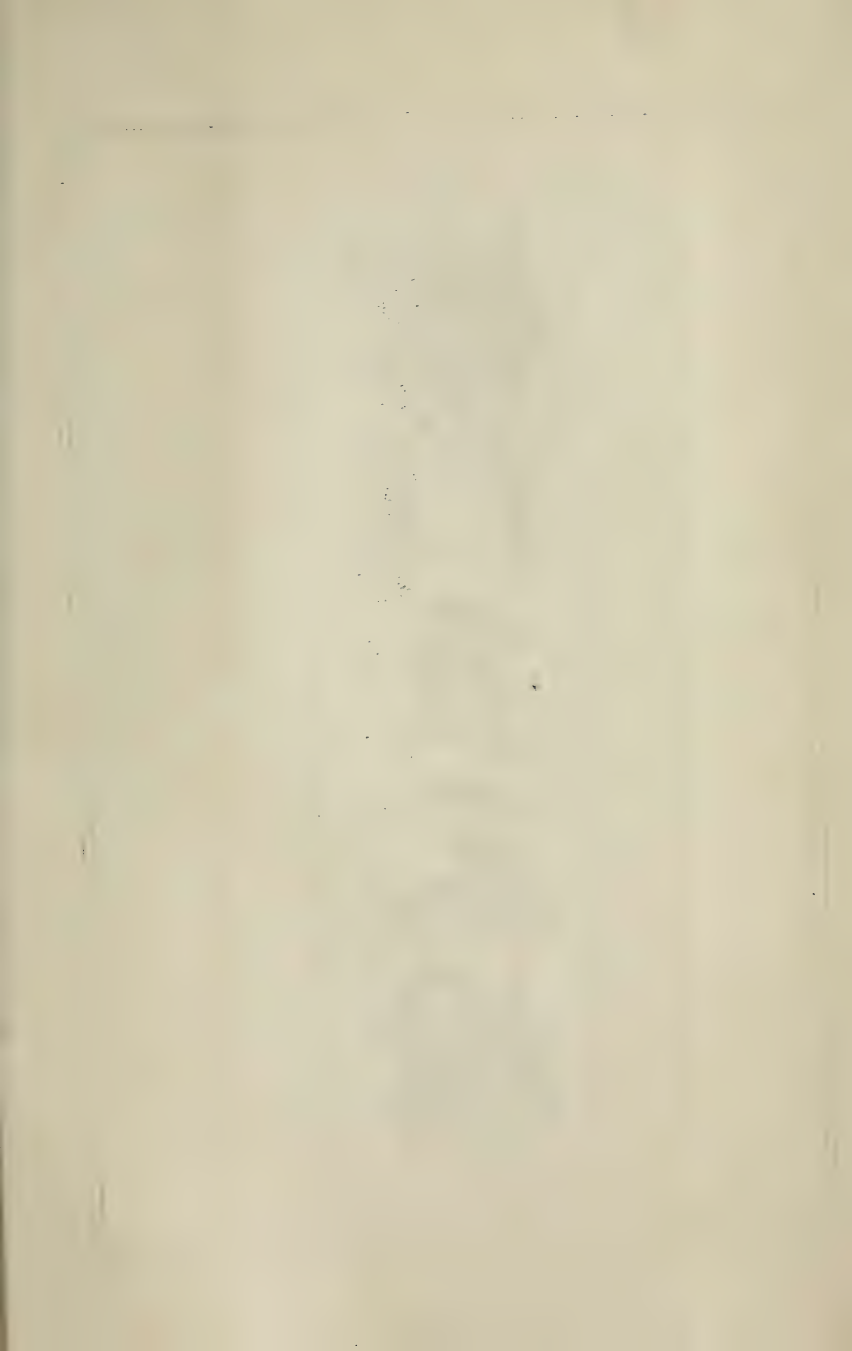
樓門五三桐

（さんもんごさんのきり）

樓門五三桐

洛陽清水寺の場

聚楽御所の場

序幕

淨瑠璃　有難きもの辭ざめの江戸の水　更名櫻の盞（あらためてはなのさかづき）　富本連中

役名　石川五右衛門、此村大江之助、眞柴久次、同久秋、片岡三木之進、櫻井新吾、奥家老岩倉、大江惡五郎、大淀姫、おりつ等。

洛陽清水寺の場　本舞臺正面に石段廻廊、下の方清水の舞臺、上の方に瀧壺石垣高く、日覆よりは見事に櫻の釣枝をおろし、床几二三脚直しある、都て清水寺の體。幕の内よりおりつ世話やつし高からげにて珠數を持ち舞臺の眞中に倒れてゐる、此の傍に蛇の目傘開きたるまゝ置く、上の方に緋の衣にて住職立ちかゝり、同宿△○附添ひ居る、町人甲乙草鞋にて鉦と太鼓を持ちおりつを呼び生け居

る、絹羽緞の侍二人立かゝり居る。此の見得太鼓入の双盤賑かに幕開く。

町人　おりつ殿ヤアイ〳〵。

同宿　旅の女中ヤアイ〳〵。

ト是にておりつ心付いて思入。

りつ　ほんにお前方は在所の衆、嬉しや〳〵、これで私が願ひも。

住職　コレ〳〵女中、いづれの人かは知らぬが、定めて何か心願にて。

△　まづ願ひが叶ふたかして。

○　早速心が付かれた様子。

住職　これで拙僧始め安堵致した。

りつ　有難う御座りまする。モウ〳〵心は確で御座りますわいなう。

甲　時に此方が、あの伏見にて、娘の行方が知れぬと、尋ねに行かれたその儘で、内へというては歸らず。

乙　それ故、わしらは貸した物を、當身にでもされうかと。

甲　こなさまの行方を、尋ね乍らの鉦太鼓。

乙　ところで舞臺から、女が飛んだと聞いた故、駈付見ればおりつ殿。

住職　コレ〳〵女中仔細があらう、とつくりと氣を落着けて。

りつ　サア仔細と申すは外ならぬ、私はあの伏見の里の中村長衛と申す百姓の娘、私が大事の娘が畑仕事のその場からかいくれ行方が知れませぬによつて、四邊の人に尋ねますれば、大勢のお侍が連れて何處へか行かれましたと申す事。その行方を尋ねたら、ひよつと娘に逢はれませうかと、あそこやこゝを尋ねても知れぬ故、此の淸水の觀音樣へお願ひ申して、舞臺から飛んで見たれど命のあるは、娘に恙のないといふ證據、それ故嬉しうて〳〵あなた方へも大きにお世話をかけましたわいな。

甲　マア〳〵こなたよりは、こつちの悅び、このまゝ死んで見さつしやい、貸したものはそれなりけり。

乙　サア〳〵おりつ殿、マア〳〵內へ歸つて、わしらが拂ひも、

二人　埒を明けて貰ひませう〳〵。

りつ　成程お前さまがたへ御苦勞をかけた上、しかし行方の知れぬうちは、滅多には。

住職　さぞ此方も心掛りであらう、マア〳〵庫裡へ御座つて、とつくりと心を休めてその上にて。

りつ　左樣ならばお詞に從ひ、お世話序に。

甲乙　私共もとも〳〵に。

りつ　そんならお前方も。

住職　愚僧と一緒に御座らつしやい。

ト双盤になり此の人數殘らず下手へ入る。直にしやでんになり、向うより大江惡五郎つかみ立前髮着流し袴大小にて出て來る、後から片岡三木之進上下衣裳大小にて、遙か後より紺看板の奴四人地車に千兩箱二箱載せ曳いて出て來る。次に加茂川法師の召仕〇垢染みたる黒羽二重破れたる袴大小、同じく△紺看板草履取の形にて、腰に草履を挾み撞木杖を持ち塗下駄を提げ出で來り。皆花道にて。

三木　頃は彌生の花見時、櫻が中に見うけますれば、大江の御次男惡五郎殿では御座らぬか。

惡五　これは〳〵何誰かと存ずれば、花に誘はれ途中より、片岡氏には能うこそ御參詣。

〇　恰度折好く御大身のお後に下りて、拙者めも。

△　お供は知れた草履取、それにつけても俺がお旦那。

〇　うか〳〵こゝは新清水。

△　舞臺の花を眺め乍ら。

奴四人　まづ〳〵あれへ。

三木　然らば御同道致すで御座らう。

ト矢張右の鳴物にて皆々舞臺へ來る。三木之進惡五郎床几に腰を掛け、皆々下の方に宜しく住ふ。音樂になる。

惡五　なんと片岡氏御覧なされい。都は花の名所と申せど、分けて清水の今を盛りの櫻の最中、花もの云はねど此の風情、一しほ盡きぬ眺めでは御座らぬか。

三木　成程、櫻は花の王にして實に王城の此の風景、それは格別、今日のお役目御苦勞千萬に存じまする。

惡五　何さ、拙者罷り越したるは、別儀に御座らぬ、先年、春永公伏見花狩の御催のその折から、賤の女子にたはむれ給ひ、いつしかその後かれが懐姙、春永公には程なく御落命。此の事久吉公の上聞に達し、内々にてかの女をば尋ね出し、主君の御胤と尊敬なし、早速召し連れ館にて敬ふ姫は今の大淀様。然るに、此節久次公姫に心を通はせ給ひ、久吉公名古屋御在陣のお留守故、今宵の内に人知れず輿入致せとの御上意。

奴一　成程戀に上下の隔のない、上を見れば方圖のない、

奴二　道理こそ久次公のお館はお取込、又承れば聚楽も、

奴三　久秋公をない／＼に天下の後継と御評議最中、

奴四　それといふも捕虜となした順觀太子樣を預るにも、

奴二　武將ならでは預り置かれぬとやらいふ難しい事、

奴一　しかし此事久次公のお耳へ入つたら、それこそ騷動。

○　そいつは飛んだお咄だ、四文と出るなら、俺が聞いては、順觀太子かしゆんくわんびらか、ねつから分らねえ。

奴四人　どうしておぬし達に分るものか。

三木　コリヤ／＼何をざわ／＼と、口さがなきは、下部のたしなみ控へぬか。

奴四人　へイ、、、。（ト思入。）

三木　シテ又これへ車に載せて多くの金子、いかゞの仔細に。

悪五　それこそは此の大江悪五郎、今日承はりたる役目、則ち春永公の御追福として、車に載せたる金子は、法師のやからへ遣はす施行。

奴二　その金高は二千兩、主人の言付、それ故これまで、

奴四人　引据ゑまして御座りまする。

○　コレ佐渡介聞いたか、なんと天下樣といふものは有難いもの、先づ一寸した所が御法事に下さるものが二千兩。

△　それ〳〵その上盲法師へ下さるとは、なんと俺が旦那もうらやましいなあ。

○　頭割に割つたら、いくらか知らないが、俺も急に盲になりたい。

△　それよりいつそ目をねむつて、貰はぬ方がましであらう。

惡五　それに就ても、久次公かね〴〵お心を掛けられし傾城九重、今に得心致さぬはどうあつても久秋公へ心中立てゝ居るに極つた、女に掛けては目のない我君。

○　イヤ目のないと申せば、御覽遊ばせ。（ト前へ出て。）私共は加茂川法師と申す琴指南致しまする、その召仕でござりまする、此度上樣より御法事に付き、施行金惣仲間へ下さるとの事、折あしく頭は病氣、その名代に私の主人加茂川參る道にて、思はずも清水へ御參詣のお姫樣のお供廻りへさはりましたと、お供の大勢が集つて主人を連れて何處へか。

△　目のない主人慌てふためき、それ故わざ〳〵家來の私共、これへ參りましたも申譯がてら。

三木　スリヤその方が主人たるアノ法師をば、（ト思入有つて。）姬君未だ御寺へ御參詣もあらず、其

節某能きに計ひ、只心がゝりは大淀樣、ハテ何として。

ト思入。此の時向う揚幕にて。

よび　姫君樣の御參詣。（ト呼ぶ。）

惡五　もはや姫君の參詣とあれば、

三木　それにて拙者も少しは安堵、此の事すぐさま住職方へ。

○△　お供致して私共も。

惡五　四人の下部はこれに控へて。

奴四人　畏つて御座ります。

三木　然らば惡五郎殿。

惡五　三木之進殿。

三木　後刻御意得ませう。

ト唄になり三木之進、○△兩人下手へ入ると、向うにてハイホウと聲して行列三重すり鉦入謡への唄になり、奴二人桐の紋付油單を掛けたる挾箱を擔ぎ、徒侍二人、袋入の長刀を擔ぎたる奴、麻上下高股立の侍二人、腰元八人、鋲打の乘物を陸尺四人にて擔ぎ、これに櫻井新吾上下衣裳大小股立を取り、

繼上下大小の奥家老岩倉付添ひ、茶びん持、十德の茶道、仲間二人、押へ二人出で來り、此の人數殘らず本舞臺へ來る。乘物は眞中へ据える。此の間下手より住職同宿出迎ふ。

岩倉　お乘物立てい。

皆々　ハア、。（トみな〳〵控える。）

住職　これは〳〵小田家の姫君さまには、ようこそ御參詣。

岩倉　今日姫君當寺へ御參詣は、先將軍春永公御逮夜の御命日、大悲の誓ひ法の庭、

新吾　お供に從ふ某は若木ながらも、姫君のお傍離れぬ宿直役、今日は彌生の櫻井新吾、

腰一　日毎に運ぶ參詣のあるが中にも、薫樹の中車返しの名によそへ花に嵐の仇櫻、

腰二　袂を袖にかざし草、しばし床几を柏木の右門櫻や、銑の尾のしだれ櫻の名も小でまり、

腰三　ふだん櫻のわたしらまで、お供に召されて江戸櫻、ほんに嬉しき八重櫻、

腰四　一重櫻のかちまうで、長閑に花の盛りさへ、それこそ目許の鹽竈櫻、

腰五　櫻が中にすつきりとその稚兒櫻、いとしさも淺黄櫻や樺櫻、

腰六　挿根の好み櫻川、吉野櫻と人目にも、

腰七　千本櫻のその中に一際は目立つ普賢象、

岩倉　咲き揃ふたる櫻の林、女中方にも此所で、一

住職　別當寺の住職、姫君樣のお出迎ひ、

岩倉　花の盛りの花盡し、

新吾　一先づ御覽あるのも御一興、

腰一　早う詠めを、

皆腰々　御遊覽あられませう。

トこの時乘物の內にて。

加茂　仇にのみうつろいぞ行くかげらふの、夕山櫻風に任せて。

ト唄になり乘物の內より、加茂川法師紫の衣撿校頭巾袴好みの拵、盲目のこなしにて出で來る。皆々見て喫驚、思入。此の門行列の人數入る。

岩惡　ヤ、、、大淀樣と思ひの外。

惡五　姫君ならぬ此の法師は。

奴四人　何故、こゝへ。（ト立ちかゝるを。）

新吾　その仔細こそ某がこれへ參りし道すがら、姫の同勢その內へ慮外致せし此法師、咎を受けし

を無理矢理に押へ留めて、お乘物の內へ入れ置く姬君樣。

惡五　ヤヽヽそんなら大淀樣と、思ひ寄らざる此の法師は、最前これへ供の者お詫と申して參りしが、そんならそれ故。

岩倉　シテ又お身の姓名は。

加茂　私は加茂川法師とて、音律は琵琶法師の流れを汲み、唱歌三絃に達し琴絃に妙手の名を得し者、今日公のお召に依つて是へ參る道すがら、姬君の御同勢共存ぜず無禮慮外、と無理に入れられたる駕の內、盲目故に何事やらん、と後先の辨へ知らず乘つた事は、ほんの盲目の蛇ならで、おめずおくせず此席へ罷り出でたは、いづれも樣御免なされて下されい。

惡五　ヤア大膽なる汝が振舞、恭くも小田の姬君大淀樣を知らぬのか。

新吾　縱へ盲目にもせよ、これ迄來るは慮外の法師、とく／＼此の場を、ソレ奴共。

奴四人　心得ました。（ト立上る。）

奴二　ヤアいかに目かいが見えぬとて、姬君樣のお乘物、

奴一　知つて乘つたか知らずにか、

奴四　駕賃惜んでかする氣か、

奴三　大膽不敵な、法師とて、
奴四人　用捨はならぬ、引立てん。
　　ト二人宛双方から一寸法師へかゝる、立廻りあつて止る。
奴二　サア盲目殿、
奴三人　きり〳〵こゝを。
腰一　それではやつぱり姫君様が。
加茂　それぢやと申して。〔ト行きかゝる。〕
惡五　早う立たぬか。
腰二　上意を叛くと。
加茂　イヤ全く以て。
腰皆々　姫君様へ申し上げませうか。
加茂　サアそれは。
腰皆々　サア〳〵〳〵。
惡五　きり〳〵此の場を、

奴四人　お立ちやれ、エヽ。

ト四人立ちかゝり引立ようとする。此の時揚幕の內にて。

大淀　人々待つた。

皆々　ヤ、なんと。

大淀　その法師こそ、自が仔細あつて留めたれば、慮外な者共控へぬか。

ト すり鉦入驛路の鈴、謡への馬士唄になり、向うより大淀姬廣袖、袖短の拵にて、鉢卷をして竹の鞭を持ち、飾馬の上に鐙を擔ぎたる奴を乘せ、手綱を持つて出て來る。鐙には大酒樽盃を結び付けてあり、花道好き處に止る。みな〳〵これを見て。

岩倉　ヤ、あなたは大淀姬君樣。

惡五　シテ又何故。

大淀　今日父上樣お逮夜のその御法事の助とて、目かいの見えぬその法師、自が乘物にて暫の間の足休め、又奴にもめれんにさゝの千鳥足、助の爲に引綱の。

奴　それが最屓の引倒し、生きた空さへ馬の上、引廻される心地の奴、醉もさつぱり、果は上氣で顏もひざつき、御上意なれば高上り。

腰二　姬君樣には、

腰皆々　イザ先づこれへ。

奴　エヽ、蓄生め。

大淀　ドリヤ行からうかいなう。

ト唄になり、□を引いて本舞臺へ來る。奴を馬より下す。

奴　ヤレ〳〵是迄は、ごくり〳〵といふ心持に乘つては來たが、人足馬と違つてお姫樣の口取で、折角飮んだ酒も醒め果てた。こゝへ降りたら日本晴がしたやうだわエ。

奴二　ほんにおぬしは俺が仲間の中でも、

奴三　あやかりものだぞ。

新吾　然らば姫君樣には、先づ〳〵これへ。

加茂　姫君樣なら、どうぞ御慈悲に私を。

大淀　イヤそなたは自が、それ〳〵そのお姫さんが強い嫌ひ故、在所育ちは此のやうに馬でも追ふたり田の草取るのが樂しみ故、私と思うて法師をば隨分大事に。

加茂　これは又有難迷惑。

ト音樂に成り、石段の上よりおりつ出て來て、大淀姫を見て。

りつ　ヤア／＼そこに居るのは娘ぢやないか。

大淀　ほんにお前はかゝさんか。

りつ　逢ひたかつた／＼、そなたの行方をはう／″＼と。

大淀　さぞ尋ねさんしたで御座んせう。マア／＼お前も達者で目出度う御座んす。これ見やしやんせ、何ぢやゝら春永公のお胤々々と、今時分種蒔時ぢや有るまいし、此のやうな着つけぬ姿、ほんにしみ／″＼早うお前と在所へ行き、晝は馬追ひ夜は沓打夜なべ仕事、お前を養ひ親子二人、早う在所へ行きたう御座んすわいなあ。

りつ　それ／＼私も我身を連れて、氣儘暮しがよいわいなう。モウ／＼此のやうな身の上になつてゐやうとは思ひもよらず、オ、いやゝの／＼、お姫様サア／＼一緒におぢや／＼。

ト大淀姫の手を提へて行くを。

岩倉　コレ／＼女中、そつちの儘には成るまい／＼、アノ姫君が母と呼ぶは、然らば前の將軍たる、

惡五　春永公のお手の附いたる賤の女、

新吾　おりつと申すはあの女中か。

りつ　申上ぐるも面目ない、ついした事から勿體ない、そんなら娘はそれ故に。

新吾　久吉公のお指圖にて、お引廻しある大淀樣。
りつ　さうとは知らいで娘が身の上、先刻からの無禮は、皆樣お赦しなされて下さりませ。
惡五　それ〳〵お取立の大淀樣、云はゞ武家の御養女も同然。
岩倉　誰憚らぬ高位の御息女。
新吾　母御諸共玉の輿。
りつ　我身一つの心にて、此の母までも行末の。
大淀　イエ〳〵母さんとした事が、お前までがそのやうに。しかし此の上現在のかゝさんが勸め給へば、そんなら厭でもマ一度は。
皆々　久吉公のこれぞ姬君。
腰一　早うお席へ。
腰皆々　姬君樣。
大淀　詞に從ひ行かうわいなう。

ト音樂になり、大淀姬こなしあつて眞中へ坐る。此の間下手より先刻の〇△出で來り、加茂川法師を見て。

○　ヤア旦那様か、モシあなたを先刻からお尋ね申して、

△　ヤレ〳〵こゝでお目にかゝるとは、

兩人　サア〳〵お手を引きまして。（ト兩人介抱する。）

加茂　ようマアそち達は尋ねて、どりや〳〵宿所へ。（ト行かうとする。）

○　モシ〳〵歸らうと仰つても、肝腎の受取るもの、

△　それはつかりに。（ト云はうとするを。）

加茂　アコレ。イヤ今日わざ〳〵これへお招につき罷り越したる加茂川法師、頭の名代仲間の總代、則ち今日我々共へ下さる施行金、卽ち私が受取にその切手もとノヽより持參、それ故わざ〳〵。

ト懷中より切手を出して渡す。惡五郎取つて見て。

惡五　いかにも違はぬ此の書きもの、則ちそれに二千兩、切手と引換。

加茂　然らば拙宅にて仲間の者に披露致す。上より下さる御惠みの金子は二千兩、確に落手致して御座ります。

惡五　ソレ家來共車の儘に相渡せ。

奴四人　畏つて御座りまする。（ト車の二千兩をそこへ出す。）

○△そんならこれは私共が。

加茂　施行の金子受取れば、此の座に用なき加茂川法師、直樣お暇。

ト立ち上る袖を大淀姬捉へて。

大淀　法師待つた。（トこなし。）

加茂　スリヤアノ私に。

腰二　姬君樣のお傍へ、早う。

加茂　シテ又御用は。

大淀　サアその用と云ふはな。（ト合方になる。）アノそなたは聞けば琴の指南をしやるさうぢやが、今より高位の姬となるその身嗜みには琴の手を、コレ。（ト手を取る。）どうぞ指南を受けたいわいなう。

加茂　上意で御座れば此の上共。

大淀　そんならこれで師弟の契約、幸ひ、持參の盃で。ソレ下郎共。

奴五　ハツ心得ました。（ト大盃と樽を卸して。）スリヤ姬君樣には此の法師へ。

大淀　師弟の結び、それにわが身は。

と奴五不承々々に樽を持つて立ちかゝる。

奴五　それぢやと申して。

大淀　ハテ注ぎやいなう。

ト合方變つて盃を引受ける。奴五是非なく注ぐ。大淀姫盃を受けて一口に乾す。みな〳〵あきれ思入。

加茂川法師さゝれた盃を探り〳〵見て。

加茂　コリヤ此の大盃で、どうしてこれを。

腰元皆々　上意で御座んす。

加茂　上意と御座れば、是非なくも御意に從ひ。

ト盃を受け一口に飲む、大淀姫その手を捉へて。

大淀　法師待ちや。確にわが身は。

加茂　酒は禁物、大不得手、なれ共君の仰せと御座れば。

大淀　イヤ〳〵假にも師匠、大事のその身、その盃は。（ト盃を取つて又一ほしに乾す。）これで目出度なう。

ト加茂川法師へ寄添ふ。おりつ呆れて。

惡五　ヤ、、コリヤ姫君には。

皆々 腰元　どうやら味な。

りつ　いつの間にやら、いこう大酒に。

加茂　御馳走酒に長居は恐れ、法師はこれより。」

ト立ち上る、又法師の袖を扣へて。

大淀　師匠のそなた必ず共に。

加茂　ヤ。

大淀　サア腰元共は法師を伴ひ。

腰一　そんなら私共が。

腰二　サア姫君樣の御意。

ト兩人加茂川法師の手を取つて。

腰一　別當樣の奥の一間で、

加茂　アノ御指南を、

兩人　ゆるりと遊しませ。

加茂　ドリヤお詞に従ひ推参致しませう。

　　ト唄になり、法師を腰元の一二の両人連れて下手へ入る。後より住職同じく入る。

悪五　姫君へ御指南の法師を留め置くその間、施行のお金は其方共直様持参致してよからう。

○　御意に任せて受取、施行は車の儘、

△　積だるお金はずつしり載せて、

○　これさへ取れば。(ト両人顔見合せ。)

△　アコレ。

○　ドリヤ曳いて行かうか。

　　ト唄になり、(○△両人車を曳いて向うへ入る。大淀姫加茂川法師の跡見送つて居るこなし、悪五郎急度なつて。

悪五　時刻延ればこれより直に。

新吾　姫君様には、

岩倉　久次公のおもひもの、

りつ　そんなら娘は、

惡五　片時も早くお館へ。
岩倉　モシ姫君、コレ姫君。

ト是にて大淀姫喫驚して。

大淀　エヽ何ぢやいら、ぎやう〳〵しい。
惡五　サヽ直樣これより。

トやはり向うを見てゐる故。

コレサ御返答は。
大淀　サアその返事は。
岩倉　その御返答に。

ト兩人詰めるを。

大淀　いやぢやわいなう。
兩人　エヽ。
惡五　コレサ姫君、何故あつて久次公を嫌ひ給ふ、サヽその御返答によつて惡五郎が。
大淀　いやぢやによつて何處までも。

惡五　それでは武士が

岩倉　此の皺腹を兩人共。

大淀　切るなら勝手に切りやいなう。

惡五　エヽ。そんならあなたの心の內。

岩倉　割つてとつくり兩人へ。

大淀　そんなら割つて云はうかや。

岩倉　早う此の場で。

大淀　サア割つてと云はゞ。からじやわいなう。

トあたりの長煙管を取つて岩倉の頭を割る。これにて疵つく。喫驚して頭を抱へ乍ら。

岩倉　サア／＼割れたぞ／＼、ア、痛い／＼、コレ姫君なんでわしが此の頭を。

大淀　割つて云うたらそんなものぢやによつて、割つたそなたのそのつむり。

惡五　それでは此の場が。（トきつとなる。）

大淀　濟まぬというてどうならう。縱へ町人百姓でも好いた同志は兎も角も、好かぬ者には何處までも、天下の武將であらうとも、大名嫌ひ、窮屈な川だちは、川とやら、田舍で暮すが氣樂ぢ

やわいなう。

悪五　イヤ〳〵それでは濟ぬ、此の上は無理に引立て、久次公へ。奴共ソレ姫君を。

奴四人　心得ました。（ト二人宛大淀姫へかゝる。）

奴一　サア姫君、御家老樣の言付だ。

奴三人　とく〳〵これより。

ト大淀姫四人の奴が顏を見て。

大淀　これは又奴さんたちいかい御苦勞、コリヤ久次さんもその方達も、落つる所は皆同じ、いつそ男に持つならば、アノ我が身たちのやうな。

ト是にて奴四人いろ〳〵思入あつて悄げる。

奴二　アノ我が身たちのやうとは。

大淀　コレ〳〵こゝへおじや、（ト奴二の手を取つて、）下に居やいなう。コレわしも久吉樣といふ、家來なり親なりその後楯ある上は、迚も持つなら好いた男。（トこなし。）から見た所が、どれ〳〵も達者らしい男らしい、そして我が身たちは、窮屈な姫がやうなものは。

奴四人　好きますとも〳〵。

奴一　縱へこの首ころりといつても、男に生れた名聞に、

奴二　それ〳〵胴骨脊骨づだ〳〵にされても、

奴三　ちつとも厭はぬ、せめて一度、一度がお厭なら半分、

奴四　それ〳〵願うても叶はぬ事を、あの姫君の方から、

奴五　ヤイ〳〵わいらはよい星に當つたな、此の奴めも、ちと仲間へ。

大淀　サア〳〵遠慮はない、來やれ〳〵。

奴五　ネイ〳〵。（トこわ〴〵大淀姫が傍へ行く。）ハイ〳〵御用で御座りまするか。

大淀　サアそなたは中で一際目立つ男振、先刻からも云はう〳〵思うてゐたれど。マア此方へ寄りやいなう。

ト手を取るを、奴五顫へ乍ら思入。

サアからうなるが酒の一德、肴には私が氣に入る、その男は。

奴五人　その男は。

大淀　先づ第一に口の大きい。

トこれにて五人口を大きく開く。

奴五人　かうかな／＼。

大淀　目の大きな、ぎつと立つて何處もかも松の木のやうにして、しやんとして。

奴五人　かうかな／＼。（ト思入。）

大淀　鼻の下の長い男がきつい、（トいろ／＼あつて。）嬉ひぢやわいなう。

奴五人　エヽ。（ト喫驚り思入。）

大淀　サヽ用はない、次へ行きや／＼。

奴二　アノそんなら御用は。

奴五　エヽあんまり旨く持たによつて、こんな事があらうと思うた、とは云ふものゝ。

大淀　ハテ行けといふに。

奴五人　ネイヽヽヽ。

ト合方。これにて悄げて奥へ入る。

大淀　サア／＼これからは誰でも好いた男を、御家老様にしようか、又あちらの前髪さんがよからうか。

トいろ／＼こなし。

惡五　ヤア酒に心を亂しても、本性違はぬ姫が心底。(ト立ちよつて。)性根が付かぬか、但し又空生醉なら、いつそ身共が。

ト惡五郎拔きかけるを、新吾止めて。

新吾　アコレ何事も酒の科。

りつ　酒が醒めたるその上にて。

惡五　デモわれ〳〵が。(ト又立ちかゝる。)

大淀　縱へ醒めても久次樣はわたしや厭や、折角心よう醉うたに、またお前方がそのやうに、ドリヤ好い夢なと見ようかいなあ。

惡五　返す〳〵も不敵な女、その舌の根を、(ト拔かける。)

大淀　サア切らしやんせ、切らば忽ち主殺し、それ合點なら。サア切らしやんせ。

惡五　サアそれは。

大淀　サア〳〵切らぬか、テモマア阿呆な顏わいなう。

惡五　モウ料簡が。

ト寄るを突廻して横に寢る。又立ちかゝるを、りつ新吾止める、

りつ　アヽモシ娘ながらも大淀は、春永様の落胤。

新吾　久吉公の御養女なれば、取りも直さずこれ御主人。」

腰三　もしあやまちの有る時は。

腰元皆々　お身の上で御座りますぞえ。

ト惡五郎思入あつて。

惡五　いかさま、あやまちあらば後日の難儀。

岩倉　惡五郎樣には住職方へ。

惡五　然らば岩倉。

新岩　先づお出なされませう。

ト音樂になり、惡五郎先に新吾岩倉附添ひ下手へ入る。

りつ　テモみだらなる娘が身持、これがマア久吉公の御養女といはれうか。これにつけても賤しい腹にやどりし女と、皆さんの思惑も耻かしい、耻しう御座んすわいなう。

腰三　イエ〳〵それもやつぱり酒の科。

腰四　お目醒のあるそれまでは、やはりその儘、

腰五　あなた様にはあれなる木蔭、

腰八　咲き亂れたる糸櫻、御覽あるのもお氣ばらし。

りつ　成程皆さんの心遣ひ、もどくも反つて。とは云ふものゝ。」

腰元皆々　ハテマアあれへ。

りつ　ドレ行きませうわいなう。

トこれをきつかけにチヨンと張り打返す。茲に富本連中並び、前彈なしに歌がゝりの浄瑠璃になる。

〽まだな柳に春風吹いて、緑色添ふ彌生山。

ト此の間皆々下手へ入る。大淀姫は矢張寢入る。

〽天も花に窈窕たる姿も酒に仇名草、結ぶ假寢の手枕も一人は惜しき顔鳥の。

ト合方になり、向うより納所坊主甲乙、誂へのおまへ花と、その外様に入りさうなる物を、持つて出て來り、浄瑠璃。

〽間なくしばなく、ひよつこり〳〵、杖にでも坊主衣の棚や、魚のなまぐさい物も、こつそりと、しめじが原や淸水へ、二人連立ち歸り來て。

ト兩人よろしくあつて、本舞臺へ來り。

坊甲　なんとマア正覺坊、此の安い坊主には何がなるやら、寺に居れば直ぐ殺され、その間には幾度となう。

坊乙　それ〳〵ヤレ何を買つて來いの、かを買つて來いのと、ほんに足は擂子木坊主ぢや、ハヽヽ。

坊甲　ほんにその坊主といや、今來る道で和尚樣へ屆けてくれと云うて、賴れた此の書いた物は何であらうぞ。（ト半切へ書きし物を出す。）

坊乙　サアおれが思うには、てつきりそれは、よいすつぽんと鰻を上げたいから、お出なされと、大店か生淵から、云つて寄越したのであらう。

坊甲　但し和尚のおかごから。

坊乙　マア何しろ開いて見るがよいではないか。

坊甲　いかさまドレ〳〵。（ト開き見て。）何ぢや淨瑠璃名題更名披露の盃、上るり太夫富本豐前太夫、コリヤ三代目の豐前太夫が改名の。

坊乙　ドレ〳〵。ワキ富本大和太夫ワキ富本越太夫三味線何々、相勤まする役人岩井紫若坂東三津右衞門、コリヤどこか聞いたやうな名ぢやが。

坊甲　何をいふやら。市村羽左衞門、これもどうやら。

坊乙　コリヤ葺屋町で、此の上るりがあるによつて、見物にお出といふ事ぢや。
坊甲　さうであらう。（ト大淀姫を見て。）コレ〳〵見や、こゝに美しい振袖が。
坊乙　ほんにこりや癪でも起つたのか、目を眩されては寺の迷惑。
兩人　コレ女中やアい〳〵。

ト呼生ける。淨瑠璃。

〽大淀姫はまどろみし、夢徒に起されて、うつゝ他愛も生酔の。

ト大淀姫これにて目を覺す。

兩人　どうぢや氣が付いたか〳〵。
大淀　何ぢや氣が付いたか。オヽおかし、男も持たいで何で子を生むぞいなう。ソレ〳〵そなたの顏が七つある。コリヤおかしいハヽヽヽヽヽ。

ト無性に笑ふ。坊主乙思入。

坊乙　イヤ、飛んだ事をいふ女ぢや。
坊甲　こりや氣違ひぢやの〳〵。
大淀　なに、あの私を。

兩人　ハテ氣違ひぢやないかいの。

大淀　オヽ成程氣違ひぢや、彌生の末の季違ひぢや、

兩人　そりや何が。

〽春と夏とのそりや季違ひよ、笑ふ山邊に啼時鳥、つゝじ山吹卯の花新茶お釋迦さんまの御誕生。

ト銚子を以つて坊主乙の頭から酒を浴せる。坊主乙悔り。

坊乙　ヤア情ない、こりや一張羅を臺なし濡して。

ト酒を拭くこなし、大淀姫見て。

大淀　ホヽヽ濡れぬ先こそ露をも厭へ、コレ坊さん。

〽なに腹立てゝ口なしの花色衣、いつの間に墨の衣のエヽ憎らしい、ほれたほの字もほとけのほの字、變らぬ中と未來まで、二人添ふ氣はないかいな、コレ胴慾なとなぶられて。

〽悔り興もさめやらぬ、酒が云はすと、こなたは知らぬ。

ト此の文句にて大淀姫坊主乙を捕へて、いろ〳〵あるべし。

坊乙　イヤコリヤ怪しからぬ、只さへぢやのに、淨瑠璃で口說れるとは、今日が初てぢや。

坊甲　ニ、扨は、おむすは色氣違ひぢやな。

兩人　これ〳〵氣を付給へ、嫁入ぢや〳〵。

大淀　なに嫁入ぢや。

兩人　サア〳〵嫁入ぢやから、正氣になつたり〳〵。

大淀　ム、そりやアノ鼠の嫁入か、そなたも尾を振りや手先振りや。

〽花傘立傘よんやさ、廿日の前のお嫁入、仲人は誰ぞ、チウ太夫、吉日甲子待女郎、姉さん長持いつ來るニ、提灯點して今そこへ。

〽鐘がナア鳴るかナアエ、撞木がナア鳴るかナアエ、鐘とナア撞木のナアエ間が鳴るナアエ。

〽これそりや道中の雲を闇、同じ事なら朱雀の野邊を傘で角兵衛、逢ひたいが合點か、合點ぢやヤツサコレハサ押せ〳〵〳〵、オツト出口ぢやおろせ駕。

〽坊さんが〳〵醫者の眞似して小脇差、伽羅で樒の香を隱す、それでも涅槃の

床入に、ふられて念佛ぶつ〳〵と、小言八百チト嗜まんせ。

〽宵にや和讃で、夜中にや法華經、そんな小難しいこめんどうは捨て、戀の一筋色修行。

〽紋日々々を數へ〳〵て、そこで鉦うて、くわつし〳〵と打ちやいの、鐘は曉七つ起して別れを送る、けせんごまめ禿が振袖、惜しや筐の帛紗落した、アヽあつたら物をエ、中ちつくり、茶巾程、紅染にくゝして、ばら〳〵に唐梅唐松唐獅子を縫はせた。〽浮いた小歌の招〻よく。

ト手踊になる。

〽思ひ出すとは忘るゝからよ、思ひ出したり又忘れたり、酒と煙草で夜を明かす、辛氣辛苦の疳癪も、知らぬ煙管の八つ當り、よそで察して明烏かわい〳〵と告げ渡るションガエ。

トこれまで、よろしくあつて。

〽それに氣強い胴慾と、叩いつ打つに、こりや溜らぬ、御免々々と夕霞。

〽花の吹雪のちら〳〵、所體もしどけ生醉の、又もや顔に櫻草、御代の恵ぞいちじるき。

ト此のはやしの間、下手より腰元みな〳〵出て、此の體を見て支える間に、坊主甲乙下手へ逃げて入る。大淀姫腰元よろしくあつて、淨瑠璃の納りに又倒れる。これにてチョント 鳴物打上げ太夫連中を消す。下手よりおりつを止めて新吾出て來る。

新吾　コリヤ氣相して、姫君を。

りつ　サア迚も心の亂れし娘、大領樣の館へ行ても、母の育ての悪るさ故と、世の人々に笑はれなば反て家にも關はる事、それぢやによつて此の母が。

ト寄らうとするを、新吾止めて。

新吾　それぢやというて、現在此の場で。

りつ　母がかうして。

ト新吾を引退け、大淀姫の傍へ行く。三木之進出かゝり居て。

三木　やれ待て女、主人の胤たる大淀姫、逸まつて後悔するな。

りつ　エ。

ト思入。腰元みな／＼こなし。やはり音樂に成り、上の方より惡五郎先に、岩倉、奴みな／＼、出て居並ぶ。

三木　縱へその方の娘に致せ、亂は正しく春永公、殺せば主人を殺すも同然、滅多に刃物は當られまい。

りつ　スリヤ小田殿の亂故に、殺すにも殺されぬか。

惡五　成程止めたは尤なれど、放埒墮弱の姫の振舞。

岩倉　さうして姫の。

皆々　納りは。

三木　取りも直さず追放。

惡五　スリヤ此の場より。

敵皆々　追放とな。

トおりつこなし、大淀姫起上り。

大淀　そんなら此の身をよし／＼、それでは恰度私が望み、筑紫の果や東路を心の儘に歩いてなりと。イヤほんに願ひが叶うたわいなあ。

りつ　アレまだやつぱり心の亂れ、コリヤモウどうでも。（ト又寄らうとする。）

三木　ハテ扨意外な、追放しても小田家の落胤、めつたな事を。

奴五　それが譬へのお主と病ひ。

奴二　成程こいつは、

敵皆々　困りものだ。

惡五　いかさま尋常ならぬ姫が有樣、かやうな者に長居もいかゞ、住職方に用事もあれば。

岩倉　拙者も共々、

惡五　とは云へ此の場の、

三木　ハテお構ひなくとも、惡五郎殿、

惡五　片岡殿、家來參れ。

ト音樂になり、惡五郎先に岩倉奴六人附いて下手へ入る、ばた〳〵になり向うより侍走り出て。

侍　ハツ申上げまする。只今聚樂の舘に於て、久秋公に企ありと、久次公の傍若無人、此の事片岡此村へ知らせよ、とある園生の方の仰付で御座りまする。（ト云ひ捨てゝ入る。）

三木　扨は奥方園生の方にも、久次公をもてあぐみ給ふも尤、聞捨てならぬ聚樂の騷動、直樣こ

れより。

りつ　思へばほんに一日でも傅かれたる身の上を。詞交すもこれかぎり、今日こふ親子の。

三木　イヤ追放されしは姫の誤り、その代りには只今より主君のお手のかゝりしおこと、これより直様舘へお供。

りつ　そんなら此の身をお舘へ、それに引換へ娘の身の上。

三木　心癒れば又その時、まづそれまでは母君には。

りつ　それぢやというて。

三木　ハテ、母君のお立。

ト音楽三重になり、おりつ先に腰元附いて、後より三木之進大淀姫へ心殘して向うへ入る。大淀姫殘る。本釣鐘合方、櫻花ちら〳〵散る、大淀姫こなしあつて。

大淀　アイヤモウ入相、春を惜しめど散りて行く、人の無常も花吹雪、空に知られぬ心故さぞ疎ましう、母様の心の内のお歎も、よう推量はして居れど、ちつと願ひのある私、浮世の雲の晴るゝ迄、どうぞ許して下さりませ。（トりつが後を見て思入、靜に雨車。）オヽ花曇りかと思ふたら、これぞしりや春雨が。（トあたりを見て、）恰度幸ひ、（ト以前の△が持ち來りし、下駄傘をさして。）これぞし

ばしの雨やどり、追放の身は雨雲の空定めなき此の身の行方、これから直に宿坊の座敷はこゝ
の瀧つゞき、マ一度逢うて心のたけを。さうぢや〳〵。

トやはり雨車、本釣鐘謡への唄になり、大淀姫思入あつて傘をさし、瀧壺の流れを窺ひ東の歩みへかゝり、好きキッカケに此の道具じり〳〵と。

ぶん廻す

清水寺本坊奥座敷の場　本舞臺眞中に九尺の亭屋體屋根附床の間、兩方の袖建仁寺垣枝折戸上下に柳櫻の立木、日覆よりも同じく釣枝、舞臺前瀧の流やり水見事に山吹の盛り、此の道具綺麗にして都て本坊奥座敷の體よろしく。こゝに加茂川法師以前の形にて琴を前に置き、異風なる燈臺を照らし、琴を彈いてゐるこなし、此の道具に納る。

ト山吹の茂みより、蛙數多出て加茂川法師の琴へむらがる。此の間大淀姫花道よき程に留る。法師琴をやめて蛙の聲を窺ふこなし。唄切れて合方。大淀姫こなしあつて。

大淀　昔敦忠の山莊に、堰いれて落す瀧津瀨と、伊勢が詠ぜし音羽山、そのかみ歌もなつかしき、瀧の流れの此の奧庭、テモマアやさしい物好みぢやなア。

加茂　鳴鳩羽を拂つて花の開くを覺え、春草ひゞきて雨の來たるを知る、盲人が心の强記、世望を拂

ふ琴緒へ、集りきたる蛙の鳴音、律を亂して鄙聲なるは、ハテいぶかしい。

大淀　折に合うたる蛙の諸聲、聞けばやさしき、玉琴の音を止めしも、又一しほ。

加茂　無情の絃にその氣を感じ、

大淀　ひそかに蛙の音を立てしか、

加茂　琴の調べに、

大淀　友呼ぶ蛙、

加茂　ハテ風情ある、

兩人　有樣ぢやなア。

ト兩人心ごゝろの思入、又唄になり、大淀姫本舞臺へ來る。蛙やんで合方ばかり、大淀姫門口に立つてこなし、加茂川法師思入あつて。

加茂　蛙も忽ち聲を止めて、扨は誰か庭傳ひに來たと見える。

大淀　誰でもない、私ぢやわいなう。（ト内へ入る。）

加茂　さういふ聲は。

大淀　大淀ぢやわいなう。

加茂　オ、姫君樣、扨はおひとりで庭傳ひに。

大淀　サア最前約束して置いた、琴の指南もして欲しさ、まだその外にわらはが願ひ、幸ひ人も遠ざけたれば、誰に遠慮も此の奧庭、サアどうぞ叶へて下さんせいなア。

加茂　不束なれ共此の盲人、覺えた曲はなんなりとも、シテその外の御用とは。

大淀　サアその用は。

ト合方變つて大淀姫思入あつて、舞臺前の山吹を取つて、加茂川法師の傍へ持ち行く。

わらはが用は、これぢやわいなう。

加茂　ナニその御用は。（ト探り、山吹を取つて、こなしあつて。）こりやこれ、確か庭の山吹、心ありげな此の御用、七重八重花は咲けども山吹の。

大淀　實の一つだになきぞ悲しき。

加茂　その古歌をもて答へしは、確か田家の乙女が古事、それは內よりこれは又。

大淀　外より求めて此の奧庭、尋ねて來たもその歌の、實の一つだになきぞとは、例へて云はゞわらはが事、實の一つより、七重八重花が咲せて欲しいわいなう。

ト加茂川法師の手を持ち添へて、じつとこなし、法師こなしあつて。

加茂　ハヽヽ、どのやうな御用かと存じたら、盲人に似合はぬ御用事、迚も仇なる仇山吹。

大淀　そんなら、わらはが此の願ひは。

加茂　そのお返事は、七重八重より木のはしの、花も實もなき此の法師、落花再び枝に返らず。

　　　ト山吹を打ち付ける。

大淀　そりや又あんまり。（ト加茂川法師ずつと立つて行かうとするを止めて。）コレ、どうよくなその返事、どうぞわらはがいふ事を。

加茂　山吹の、實のしろ衣ぬしやたれ、問へど答へず口なしにして。御縁もあらば。（ト又行かうとする。）

大淀　ア、これ、すりやこれ程に願うても。

加茂　そこが木の端。

大淀　サアその木の端も、山吹の花咲きみのる仕やうがあるのに。

加茂　エ。そりや又どうして。

大淀　覺えがあるかや。

加茂　フウ。（ト思入、合方。）

大淀　ほんに思へば去年の秋、伏見の船の乗合に宵闇ながらその物越、確か何處ぞの御浪人と思うたお方の形格好、もの數云はずきつとして、ほんにいとしい殿御ぢやと、思へば交はす言葉さへ心の錠を鎖す時分、ついくらがりで恥かしい、そのうち佐田へその人は上つた後で、拾うたる千鳥の形の此の香爐、住所を聞かうもあたりの人目、ほいない別れを今日までも忘れた事は御座んせぬ。けふ清水でつく〴〵見れば見る程、その時の戀しい人にその儘なれど、盲人といひ形まで變つた姿のお前故、琴の稽古に人をよけ譯を聞かうと此の奧庭、傍で見る程違はぬ物腰、どういふ事で此のお姿、モシ譯も聞かせて下さんせいなア、とサアいふのは私が思ふ人、若しやお前がその時の。

加茂　成程聞けばその咄、世にはよう似た。

大淀　エ。

ト加茂川法師思入あつて、懷から千鳥の香爐のかたしを出して、大淀姫の持つたるかたかたとしつくり合せて。

加茂　これでは咄が。

大淀　しつくり合うた、疑ひもなき。

加茂　千鳥の香爐。

大淀　そんならやつぱり。

加茂　イヤサその人は浪人とやら、シテその人の顔形は。

大淀　サアその顔はやつぱりお前に、(ト繪姿を出して)どう見くらべても。

加茂　似て居ますかな。

大淀　サア此のやうにも似るものか。物腰恰好その人に生寫しと思へども、云ふにいはれぬ素性の相違、年さへ恰度似よりにて三十未滿のやさ男。

加茂　成程。

大淀　脊の高さが尋常、やせがたちで格好よく。

加茂　瘦がたち。フム。

大淀　色白にして鼻筋通り。

ト一々大淀姫の云ふ事聞いて加茂川法師思入。大淀姫繪姿を見てこなし。

加茂　さうして、あとは。

大淀　此の者は四海を横行する、盗人の張本石川五右衛門。(ト讀む。)

加茂　石川五右衛門。

大淀　サア此の五右衛門といふが。

加茂　そりや、おれが事だ。

ト眼を始てひらく、大淀姫これを見て後へベツタリ手を突く、木の頭。五右衛門思入、衣とれて好みの形、大淀姫五右衛門に見惚れるこなし。これをきざみによろしく。

拍子幕

聚樂御所の場　本舞臺高二重高欄付結構に仕立、向う金襖一面の御簾を掛け、都て聚樂御所の體。侍四人上下にて控へ、此の見得中の舞にて幕開く。

△　いづれも方にはお聞きありしか知らね共、我君名古屋御在陣の御留守、久次公には日頃の御短慮十倍增、

○　やゝともすれば、近習のものをお手討、もてあぐみたる御身持、

×　それ故諸大名御評議あつて、久次公を押込參らせ、

□　久秋公を御跡目と、その御評定を聞し召され、

△　兄を蔑にせし久秋、以後の見せしめ眞二つと、

○　只今奥殿は大騷動との事、何はともあれ穏ならざる館のけつこう。

×　何れも方にも、お手討の御用心が、肝腎で御座る。

ト早舞ばた／＼になり、奥より久次走り出るを、大名三人これを止め乍ら出る。侍四人はこれに恐れて逃げて入る。

久次　邪魔せずと、そこ退け／＼。

大一　これはあまり御短慮千萬、君のお怒り强き故、

大二　達つてとあれば、お身のお爲に相成りませぬ、

大三　篤と御賢慮めぐらされ、

皆々　まづ／＼お鎭り下されませう。

久次　默れ、この久次を欺き追放なしたる久秋を、四海の頭目と諸大名の評議、聞くと等しく我が無念、兄を騙かる弟久秋、打殺したるその上にて、汝等も眞二つ、早く久秋をこれへ出せ。

大四　その儀は、私ならぬ御母公の仰せ、

大一　名古屋表よりの御下地なれば、

大二　只々御心を鎭められい、

皆々　久次公。

久次　イヽヤ聞かぬ、こゝ放せ〱。

　ト振切るをみな〱支える。久次有合ふ刀懸脇息を打ちつける、皆々恐れる。此の間奥より久秋つか〱と出て。

久秋　豫て覺悟の此の久秋、イザ御存分に。

久次　好い覺悟、今が最期。

　ト刀を振上る。奥より三木之進上下衣裳にて、つか〱と出て久次を止める。

三木　我君には御短慮は。暫く〱。

久次　汝は片岡三木之進、何故あつて此の久次を。

三木　何故とは我君、チエヽあなたはなう。天が下の武將久吉公、四海一統に納め給ひし御仁德、智勇兼備の良將たる、その御公達にてありながら、國家を騷す御行跡、それにて天下の政治が立たうと思し召すか、久次公。（ト思入。）

久次　ムヽイヤ非義非道の政道する父久吉、現在兄の我をさし措き、弟に世を讓るとは、なんとこ

れでも義が立つか。

三木　イヤ恐れ乍ら不孝の目からは、情を知らぬ御母公共思召し給ふが、その義理も道も辨へ給ふわが君の、義理ある父君の仰を背き、なさぬ仲の久秋公を、何故殺害せうとはなされたな。

久次　ム、。（ト合方。）

三木　そのうとましいお心故、父君の心に叶はず、久秋公を武将に立てよとある御内意、元我君には園生の方の御爲には弟、御幼少より久吉公の御養子と成給ひ、我君の御寵愛これまでの御恩は須彌蒼海、しかし人となり給ひてよりお生付たる一徹短慮、その御心にては行末いかゞと御案じなさるる内も、此度我君名古屋御在陣のその日より、次第に募る非道の御行跡、若し久次公を武将に立てなば國家の騒ぎと諸所の評定、愈久秋公に四海の頭目と思ひの外の御身持放埒、これ則ち我身に科を拵へ、兄君に跡目を譲らんとする仁義の大將、それに引換へ強惡不道の久次公、天の御罰も今目前、サア此の上は御心をお改めあり善心に飜へられ、眞柴のお家を思し召さば、母君の御教訓お聞届け下されい。エ、淺間しいお心ぢやなア。

ト思入。久秋は久次が前に手を突き

久秋　申し兄上、此の上久秋はどのやうな目に逢ふとも、さら〳〵お恨みとは存じませぬ。お心を飜へ

久次　されば母人へお詫言。
久次　なんの詫言、今三木之進が一言にて、いよ〳〵心は鐵石、ナニ母人のいらざる諫言、そこ立たう。
ト三木之進を突退け、久秋に切つてかゝる、皆々支える。久次思入あつて久秋を追廻す。大名四人久秋を花道へ連れて行く。此の間始終早舞。向うより此村大江之助上下衣裳大小にてつか〳〵と出て。
大江　此村大江之助、只今出仕、君には先づ〳〵。（ト久秋を圍ひ、屹度見得にて止る。）
久次　此村大江之助、何故あつて妨げする。
大江　君辱しめらるゝ時は臣死す、久秋公の御名代、いざ此村がこの首を。
久次　望みとあらば、一討に。
ト切付けるを、大江之助止めて。
コリヤ手向ひか。
大江　眞柴大領久吉公の御公達、自らお手をおろされんとははしたなし、我君にはいざまづあれへ。
トみな〳〵となしあつて久次を押戻し、大江之助思入あつて本舞臺へ來る。
久次　こりや、久次を手込めにするか。

大江　あいやお怒を慰めん爲。

久次　なんと。

大江　それ誰かある、お息つぎを。

茶道　ハツ。

　ト茶碗にて久次が前へ持ち行く。久次氣を急き茶碗を取る。大江之助手早く刀を捥ぎ取る、久次にそれと寄るを皆々隔てる故、茶碗を打付けウムと思入、管絃に成る。

皆々　大江之助殿、この體は。

大江　三木之進殿へ一つのお願ひ、恐れ乍ら主君久次公のお身の上、御幼少の時分より生得御短慮、何卒御心を矯め直し四海の頭目になし奉らんと、二六時中の御諫言は耳に逆ひ、佞諂の舌頭に惑はされ、日々に長ずる惡逆無道、御母公のお怒、諸大名の歎聞く度毎に、此の大江之助が腹をずたずたに裂るゝ苦しみ、とあつて身退く心體なれ共今一應のお願ひ、あはれ久次公のお身の上、暫しが間此村めにお預けあるやう、御母公へおとりなし下さらば我が一命に換へて、善心になし奉らん、生々世々の此の身の面目、何卒貴殿の計ひにてよしなに此の義を願ひ奉る。

三木　いかにも貴殿の忠義に免じ、我君の御機嫌を計ふはいかゞなれど、助命を願ふ貴殿の心底、い

かにも拙者聞き届けたが、いよ／＼久次公の御心を、見事貴殿矯め直さば、君の御前はよしなに拙者が。

大江　すりや、お聞届け下されんとや。

三木　日數五十日がその間、此村大江之助へ久次公はお預け。

大江　エヽ有難う存じまする、ソレお乘物。

〇　ハツ。（ト乘物を下の方へ舁き据える。）

久次　ヤアいらざる大江が預り立、後で後悔するなよ。

久秋　只此の上は御本心にお成りなさるやう。

久次　エヽ見るもなか／＼穢しいわえ。（ト蹴飛す。）

久秋　こりや又あんまり。

久次　何を。

トきつとなるを、大江之助つか／＼と寄つて無理に久次を乘物の内へ押入れる。

三木　ア重きは忠義。

大江　輕きは一命。

久秋　必ずお心直るやう。

久次　いや飽くまでも。

ト乗物より出ようとする、大江之助支へて思入、此の時ばらりと網かゝる、皆々思入。

皆々　これは。

大一　こりや我君を。

ト寄るを大炊之助、ポント切る、見事に返る。

大江　久次公のお手討。

皆々　ヤ。

大江　乗物立てい。

ト刀を納める、木の頭、皆々よろしくあつて。

拍子幕

此村屋敷の場
南禪寺山門の場

二幕目

役名　石川五右衛門、此村大江之助、眞柴久次、同久秋、早川高景、室住主税
豊浦源吾、奴矢田平、大江之助奥方呉竹、侍女榊、傾城九重等。

此村屋敷の場　本舞臺三間の間二重舞臺、上の方塗骨障子家體、見附金襖、植込み橋の立木高札建てあり、幕の内より、奴一二三四の四人割竹を持ち立ちかゝり、傾城九重着流し扱帯の形にて眠り、四人これをうつゝ責めにして居る、矢田平二重舞臺に手桶を枕にして寢轉んでゐる。琴唄にて幕開く。

奴四人　九重殿、目を覺さつしやい。

ト割竹にて舞臺を叩く。九重びつくりして。

九重　申し殿さん、何處へ行かしやんすぞいなア。

奴四人　これさ九重殿、氣を付けさつしやい。

九重　うたゝ寢に戀しき人を見てしより、夢てふものをおどろかす、日頃床しい懷しいと思ふ故、うつゝともなう、殿さんに逢うたのは、夢であつたか、お懷しう御座んすなア。

奴一　なつかしいか床しいか知らないが、夜も晝も寢ずに責めろとお頭の言付故、眠つたい目をおつぴらいて此の張番、

奴二　これ此の通り高札に、九重殿を口說落したものには、御褒美とまでも久次公の高札。

奴三　なんでも御褒美を貰ふ、と思つての此の責。

奴四　この頃はお傾城故、こちとらが責めらるゝやうなものだ、俺はちつとそろ〳〵とやらかすから、賴むぞ〳〵。

奴一　イヤ又こいつ程能く寢たがる奴はない。したが關內が云ふ通り、こちとらも引入らるゝやうだ。代り〳〵にやらかしても大事あるまい。

奴二　オヽそれもよからう。此のお傾城も好い加減に得心して、拜んで寢たがよいのになア。

奴三　それに、こんな切ない目をせうより、久次公に從はうと云ふがよいのに、いけしぶとい。

奴四人　これさ目を覺さつしやい。（ト割竹にて又叩く。）

九重　知らぬわいなア。

ト此の時矢田平眼をさまし。

矢田　やれ〳〵ぐつたりとやらかした。コレ九重殿はまだ好い返事をしないか。おらが旦那大江之助

様の御主君久次公、その傾城に心をかけられ、口説いても〳〵得心せぬ故、怪我のないやうにうつつ責、これからは俺が代つて一責せめて得心させる。わいらはちつとの間、部屋へ行つて休息しろ〳〵。

奴二　何と云はつしやる、そんなら部屋へ行つて、

奴四　休息しろとか。

矢田　俺が預つた、皆行け〳〵。

奴四人　こいつは有難いわえ。

奴一　成程人の心といふものは知れたものだ、今迄無性に眠つたがつたが、今頭が休息しろと云はつしやれたれば、

奴三　目が覚めたか。

奴一　やつぱり眠いわ。

奴三人　何を云やアがる。

矢田　早く行きやれ〳〵。

奴四人　サア行かう〳〵。（ト四人、割竹を擔ぎ下手へ入る。）

矢田　コレ九重殿、此の間からの責苦、さぞ疲れたであらうが主命なれば是非がない。あいつらを部屋へやつたは、ちつとそなたを休まさう爲め、さあ誰も遠慮はない、ちつと横にでもならつしやい。

九重　矢田平殿の志嬉しう御座んす。思はぬ事にこなさん方まで苦勞をかけ、氣の毒で御座んすわいなア、胴慾な久次樣、現在弟御の久秋樣と言ひ交した、此の九重に無體の戀慕、あまつさへ久秋樣に逢はれぬやうになさるといふは、ほんにしんきな身の上ぢやなア。

矢田　尤もな悔み事だが、身を捨てゝこそ浮む瀬もありと云へば、そんな事を云はずとも、とつくりと思案をして見たが、よさゝうなものだ。

九重　イエ／＼どのやうな憂目に逢うても、久次樣のお心に從ふ事は厭ぢやわいなア。

ト奥にて。

久次　矢田平、九重が返事はどうぢや。

ト管絃になり、奥より久次壺折衣裳に出て來て、褥の上に直る。矢田平割竹を持つて。

矢田　イヤモウいろ／＼に口說けども、此の中から責に弱り、他愛もない寢言ばかり、一向せうどは御座りませぬ。

久次　ハテ扱てしぶとい女め。

矢田　いや片意地な女郎め、此の上はひつくゝして。

久次　いや／＼、あら立てゝは猶行かぬ。（ト割竹にて叩く。）

矢田　御意ぢや、目を覺さつしやい。

九重　こなさんの情でついとろ／＼と。

ト云はうとするを、矢田平割竹にて叩き紛らし。

矢田　こりや／＼又寢言か、久次公があれにお渡りなさるゝぞ、氣を確に持つしやい。

ト九重久次を見て。

九重　ほんに久次樣、浮川竹の賤しい此の身に、淺からぬおこゝろざし有難うござんすが、どういふ事やら、久秋さんとは二世の誓ひ、それに御無理なお前の戀路、ふつゝりと思ひ切つて、久秋さんに添はして下さんせいなア。

久次　役にも立たぬ心中立、その張の強いに猶惚れた、いやでもおうでも抱いて寢る、色よい返事はドゝどうぢや。

九重　縦へ命をとらるゝとも、厭ぢやわいなア。

久次　厭というてその儘で置かうか、矢田平打据ゑて返事をさせい、誰かある銚子持て。

ト管絃になり、奥より大江之助妻呉竹褶衣裳、大盃を三寳に乘せ、榊長柄の銚子を持ち出て。

呉竹　夫大江之助は軍書の稽古致し居りますれば、憚り乍ら呉竹御機嫌を伺ひまするやうに御座りまする。

榊　仰付られましたる九獻、いざ召上られませう。

久次　やい呉竹九重はいまだ色好い返事をせぬ故、これからは責を變へ、それを肴に一獻出さん、つげつげ。

榊　ハツ。(と灌ぐ。)

呉竹　九重殿そりや悪い合點、お心の懸つた久秋様を慕はずと、久次公のお心に叶ひさへすれば、榮耀榮華は心の儘に、ナウ矢田平。

矢田　左様で御座りまする。ツイうんとさへ云へば、我々迄も御褒美を戴き、そこら中がよい事だらけ、なんと思ひ變へて見る氣はないか。

久次　情を以てのうつゝ責も、不便さ餘つて憎さが百倍、これからは水責にせい。

矢田　成程、それが宜しう御座りませう。

呉竹　矢田平待ちや。申し久次公、それはあんまり短慮で御座りまする。そのやうな恐しい責苦を見せ、ひよつと怪我でもあつた時には詮ない事、木折に行かぬは戀の道。

榊　左樣で御座りまする、義理に迫れば靡くが女子。

呉竹　又女子は女子同士、遠慮なうとつくり譯を云うたなら、お心に從ふまいものでも御座りませぬ程に、九重殿はどうぞ私にお預けなされて下されませうならば、有難う存じまする。

久次　すりや。其方が九重を。

呉竹　口說落して上げませう。

久次　面白い、しかとそちに預けた程に、後方までに色よい返事を待つて居るぞよ。

九重　そんならどうでも。

呉竹　ハテ何事も呉竹が惡いやうにはせぬ程に、久次公にはマア奧へ、矢田平次へ行て休息せい。

矢田　ねい。

久次　呉竹、必ずともに。

呉竹　先づ入らせられませう。

ト唄になり、久次奧へ入る。矢田平は下手へ入る。九重は眠り居る、呉竹こなしあつて。

日頃からお心猛き久次公、若しやあの九重殿にあやまちあつては、反て夫の難儀にもならうかとお止め申すものゝ、所詮色よい返事はどうしてマア。（ト奥を見て思入。）ハテなんとしたものであらうなア。

ト唄になり、向うより久秋壺折衣裳の上へ簑を着て、笠をかざし庭下駄にて出て來り、切戸により内を窺ひ。

久秋　兄久次公を預り奉る此村大江が館の庭先、忍び來りし此の久秋、何卒九重に今一度逢ひたい爲に此の姿、兄久次の横戀慕にて難儀に遭うて居やるとの事、アヽこれどうぞ某が來た事を、（ト内を窺ひ。）そこに居やるは呉竹ぢやないか。

呉竹　さう仰やるは久秋樣。

ト切戸を開けて見る。九重思入。

九重　ヤア殿樣久秋樣、ようマア來て下さんしたなア。あなたにお別れ申してより、久次樣のお傍へ引付けられての無理口說、返事せぬ故うつゝ責、一寸まどろむその間も、あなたのお姿の前へ御座んすやうにあり〳〵と、見らるゝのを樂しみに思うて居たのに、好うマア來て下さんしたなア。

久秋　こりや〳〵聲が高い、某來りし事兄君へ知れてはいかゞ、九重が無事な樣子を見屆ければ、某が心も濟むといふもの、人目にかゝらぬうち歸館しませうわいの。

呉竹　そりやあんまり御遠慮深う御座りまする。何事も私に任せマア〳〵ゆるりと。

久秋　アイヤそれでは。

呉竹　ハテよいやうに致しますわいなア。

ト歸らうとする久秋を、呉竹押止める。てんつゝになり、向ようり女乞食、せうぶ皮の侍二人に、棒にて制され乍ら出て來る。

侍　下れ〳〵。

乞食　やかましいわな、わしや下るやうな婆アぢやないよ、何處迄も上る〳〵。

侍　下れ〳〵下らぬか〳〵。（ト云ひながら本舞臺へ來る。）

乞食　こゝはお庭先の切戸口か、こゝらで物申とやらかさうか。

侍　慮外者下らぬか〳〵。

呉竹　コリヤ〳〵侍共騷がしい、何事ぢや。

侍（一）　ヘイ御覽なされませい、かやうな怪しい婆めが、御門内へ斷りもなく通りまする故、われ〳〵

制しましたので御座りまする。
榊　ほんに見ればさもしい非人さうなが、なぜ御庭先へ來やつたのぢや。
乞食　なんだ此の女中はさもしいの非人のと、知れた事わしやア乞食だもの、その乞食が此村大江之助樣のお屋敷と知つて來たのだ、娘に逢ひたい〳〵。
榊　エヽむさい形をして慮外千萬な、御門外へやらぬか〳〵。
吳竹　殊に此村大江が屋敷と知つて、娘に逢ひたいとは合點が行かぬ、シテそちが娘といふは何者ぢや。
乞食　あい、わしが娘といふのは、久次樣とやらに請出されて、こゝの屋敷へ來てゐる九重が事さ。
榊　ナニ九重殿の母親とや。
九重　わたしが母さんとわえ。
乞食　ヤア九重か、懐かしかつた〳〵。

ト九重　捉へとなし、久秋乞食を突退け。

久秋　ヤア慮外な奴の、此の久秋が寵愛なす九重を捉へ、娘との一言、殊更某が目通りと云ひ、こゝ退さるまいか。

乞食　なんだ此の人は、立派な形をして俺が娘に俺が逢ふに、誰が何といふものか、ア、聞えた此方が、噂に聞いた久秋といふは、アノこなさまの事か、それなら俺が現在の聟だ、オ、俺アこなたの姑よ。

久秋　默れ慮外者め、久秋に向つて過言の一言、去は去りながらこの九重を娘との詞、九重こなた覺えがあるか。

九重　サイナわたしや幼い時から曲輪の奉公、かゝさま有りと聞きながら、御行方も知らず日頃逢ひたい逢ひたいと思つてゐたが、此のはゞさんが私がかゝさんなら、わたしや恥かしい、殿樣わたしや悲しう御座んすわいなア。

久秋　まことに幼より曲輪に勤めて、親の行方も知らぬとあれば、若しやこれなる非人の老女、そなたの實の母やらん、去りながらこりや老母、娘と申すに證據があるか。

乞食　證據がなうてかいの、現在の私が娘生れた月日を知つてゐる、これが證據さ。

久秋　シテその年月誕生日は。

乞食　年號は天正元年戊辰の十一月十日の生、幼名をそのと云うたであらうがの。

九重　ほんにそれに違ひはない、どうしてマアその譯が。

久秋　すりや年月日時に相違ないか。
九重　あいなア。
久秋　スリヤそなたは彼が娘に相違ないか、呉竹、榊。
呉柳　我君樣。

ト三人顏見る。

三人　ほい。
乞食　なんと違ひはあるまいが、乞食の娘は久秋殿の御簾中、これからは俺も國主の母だ、さう思つて下さいよ。
久秋　是非もなき此の場の樣子、こりや老女、そちが詞も相違あるまい、去り乍ら此の館へは久次公が御座ある故、此の儀お耳に入る時は某も九重も爲にならぬ、折を見合せ迎を遣はさん、マヽ今日は立歸るがよからう。
乞食　イヽヤ歸りますまい、口車にかゝつて歸るやうな乞食婆アぢやない。おらはこなたの姑だよ、孝行にして貰ふ。コレ娘、腹がへつた、飯でも喰はせろ、どりやゆつくりとお飯にでも有りつかふか。

ト舞臺にある褥の上へ坐はる。此の時久次上の障子屋體へ出かゝり窺ひ居る。九重は乞食に縋つて。

九重　これいなアかゝさん、お前はなう、常から賤しい私故有るまい事とは思はれねど、あんまり賤しいお前の姿、殊にあなたは何誰で御座んす、久吉公の御嫡子の久秋公を聟呼はり、お前に罰が當りますぞえ、マアこゝを降りて下さんせいな。

乞食　エヽやかましい賣女め、五つの年まで手鹽にかけたわれ、ふんばりに賣つたもうぬが果報、自體此のはゞあも玉の輿に乗りたい願ひ、それになんだ、不吉のほゑづら、コレ聟殿、親のわしが貴様に無心があるが聞いて下さるかな。

久秋　スリヤ某に、その方が。

乞食　無心というて外ではない、金なら僅二箱か三箱貰ひたいね、大將を聟に取つてこつちはちつと不足だが、金になつたら料簡次第、金ならたつた三千兩、取らせてやつて下ありませう。

ト思入。久秋九重こなし、久次出て來り。

久次　弟久秋。

久秋　ヤ兄上様。

久次　そちや乞食の娘と云ひ交はしたな。

久秋　スリヤ最前からの此の場の樣子。
久次　何もかもみんな聞いた、奴共來れ。
四人奴　はゝア。

ト奥より、以前の奴四人、後より矢田平出て來り、下手に控える。

久次　いかにも、久秋、九重、それなる老女に繩を打て。
御用で御座りまするかな。
四人奴　畏りました。
久秋　ぎやう〳〵しき兄上の御一言、何故あつて某に。
久次　繩かけるは天下の爲、武將の悴久秋が乞食の娘と緣組んでは世上の嘲、それ故に繩かけて桃山の舘へ引かせ、家老共の計ひ見るわ。
奴一　非人と緣組む久秋樣、
奴二　繩かけて引く、
四人奴　腕廻はせ。
呉竹　イヽヤさうは成りますまい。傾城は賤しいものと、初手から知れてあるからは、久秋公の科と

とは申されまい。

榊　殊に戀に上下の隔はないといふが、浮世の習ひ。

奴一　默らつせい、久秋公は四海の頭目と定りある御身をもつて。

奴三　非人と緣を組しつても、天下の掟が立ちまするか。

呉竹　サアそれは。

奴四人　サア〳〵。

皆々　なんと。

久次　面倒な繩を打て。

奴四人　腕廻はせ。

矢田　こりや奴共待て。

奴四　デモ久次公の、

奴四人　御意ぢやによつて。

矢田　久次公の御意であらうが、閻魔王の御意であらうが、部屋頭のおらが待てと云はゞ、マア待ちやれ。

奴四人　でも。

矢田　ハテ控へてうせぬか。（トこれにて四人控える。）

久次　矢田平、身が詞を背き、その方が止めしは。

矢田　憚り乍ら此の譯は、此の奴めにお預けなされませ。非人と緣組む久秋樣繩かけうと仰しやるが、そりやあなたお言葉が相違いたしまする。その譯と申すは、こゝに立てゝある高札をよもやお忘れはなさるまい。此のやうな高札を立て乍ら、お口說なされた久次公、こりやあなたから繩をかけずばなりますまい。

久次　なんと。

矢田　ハヽヽヽ一應も再應も下郎めがとつくりと、承はつたその上、繩をかけたなりと首はねなりと、遊ばしたがよくごはりまする。

久次　スリヤその方が此の實否を。

矢田　蛇の目を灰汁で洗つたやうに。

　　　裁いて見るか。

矢田　お目にかけませう。

呉竹　矢田平、どうぞ久秋樣の。

矢田　ハテよくごわります、下郎めがきつと捌いて見せませう、コリヤ九重殿のおふくろ、一寸お目にかかりたい。

乞食　あの私が事かエ。

矢田　いかにも。（ト合方。）

乞食　奴サア何の用だ。

矢田　こなさまが愈九重殿の實の親か。

乞食　知れた事、產みの母ぢやわいの。

矢田　シテそれは又何を證據に。

乞食　ハテ知れた事、娘が生れた年月日時。

矢田　知つて御座らば、今一應承はりたい。

乞食　ニ、しつツこい事、よいわ聞きたくば云うて聞かさう。年號は天正元年戊辰十一月十日卯の刻の誕生。

矢田　九重殿、あの通り覺えがあるか。

九重　さいなア、常に肌身放さぬ此の守袋。

ト懐を探す、守なき故いろ〳〵思入あつて。

矢田　どうぞさしつたか。

九重　ハテ心得ぬ大事にかけて、持つてゐた守袋が御座んせぬわいな。

矢田　何ぢや守袋が見えぬ。（ト乞食へ目をつけ。）有るまい〳〵、時に訊ねるは、九重殿には右の眦に黒子がある、それ知つてか。

乞食　ヤ。成程〳〵小い時には、いかう苦にした黒子ぢやが、成人すれば、そのやうに目に立たぬ物ぢやなう。

矢田　いかさま親子とて爭はれぬもの、目許なら口許なら九重殿に生寫しぢやハヽヽヽ、此のやうな形で御座ればこそ、衣裳立派にやらかしたら、ア、好い女房であらうわいな。

乞食　イヤモウそのやうに乘せられて云ふぢやないが、年には餘程ふけて見えるわいの。

矢田　ふけて見える〳〵。

乞食　ほんに此のやうにしみたれてゐればこそ、相手になり手が御座らぬが、わしや今年で恰度三十一に成るわいの。

矢田　なんだ三十一だ。
乞食　おいなう。
矢田　成程三十一位に見える、時に聞かうは、九重殿は天正元年の生れ、今年で恰度。
乞食　娘は十九。
矢田　そなたは今年が。
乞食　三十一。
矢田　十二の年に生んだ子か。
乞食　おいなう。（ト心付き、）やア。（トびつくりする。）
矢田　こゝな大騙りめが。
乞食　ヤイ奴め、九重が母御様を何で騙りとぬかすのぢや。
矢田　こりやヤイ。九重殿のお袋か、ハレ能う似たと乗せかけて付込めば、眞實と思つたうぬがその面、こりやヤイ九重殿に右のめじりに、黒子があると云ひなせば、小さい時は苦にしたが、大きうなれば目に立たぬ、と吐かしたが騙りの正銘、こりやうぬは仕事を拵へて、九重殿を連れて退かうといふ工みか、但しは外に加擔人があつてか、定めし、これにはれつきとした加擔人が

あらうがな。

　ト久次へ目をつけて思入。

久次　ム、そんなら九重が母と云うた老女は、僞りであつたか。

矢田　僞りも僞り、眞赤な嘘つき婆め、この美しいお方に、こんな親があつて、たまるものでごはりますか。

久秋　さりながら、かれが誕生年月まで、よツく知つたる此の老女。

矢田　その知つたるが不思議の一つ、正しくこいつが懐に。（ト乞食を引付けて守袋を引出す。）

乞食　それを。

　トかゝるを押へつけ。

矢田　覺えが御座るか。（ト九重へ投げやる。）

九重　ほんに、こりやわたしが失うた守ぢやわいな。

矢田　扨こそいつの間にやら、ちよろまかした、九重殿の母御とは、よう拵へ事しろいだな、ニ、盗人ばゝあめ。

乞食　こりやモウ堪らぬ。

ト逃出すを、矢田平引捕へ。

矢田　詮議がある、ぢつとしてうせろ。

奴四人　部屋頭出來ました。

矢田　コレ奴共、わいら此の婆めを引括れ。

奴四人　ハテ年寄だ、もう好い加減に。

矢田　ハテ括れと云ふに。

奴四人　オツト合點だ。

ト四人の奴乞食を棒縛りにする。此のうち矢田平高札を引抜き、その裏へそこにある硯箱の筆を取つて、手早に書き印す。

矢田　幸ひ此の高札の裏へ、こいつが惡事のあらましを、書き印したは直に捨札、命助けてやるのがまだしも、奴共こいつ門前からぼいまくれ。(ト高札を乞食の背中へ挿し突飛ばす。)

乞食　エヽいま〳〵しい、折角うまくいつたもの。(ト久次と顏見合せて。) よいわ、此の禮は奴めきつと云ふぞよ。

矢田　ナニ言分あるなら、いつでもうせろ、ソレ奴共ぼいまくれ。

奴四人　立てエゝ。

乞食　何の事だ、犬骨折つて、高見から見て居る事は御座るまいといふも、やつぱり負惜しみだ、歸るべい〳〵。

矢田　ドレ此の矢田平も、門まで送つてやるべいか。

乞食　何さ、それには及びませぬ。

奴四人　立てエゝ。

矢田　ドリヤ送つて來ようか。

ト唄になり、乞食先に四人の奴割竹を叩き立て、これについて矢田平後より悠々と向うへ入る。

久秋　思ひがけなき今の老女、九重が母と僞りしも正しく是には。（ト久次へ思入あつて。）イヤナニ兄上、某は奥へ參り、大江之助へ申し達する事も御座れば、あなたはこれに、ナニ呉竹案内致せ。

呉竹　はゝア。

ト久秋立つて行かうとする。

久次　久秋待て。

久秋　お止めありしは、御用かな。

久次　いかにも外ではない、これなる九重を、兄弟の誼だけにそちが口説いて、此の久次へ従はせろ。

久秋　スリヤ拙者めと云ひ交はせし、此の九重を兄者人が。

久次　取持つて色よい返事を。

九重　スリヤあのわたしを。

呉竹　兄上様が

久次　取持致せ。

久秋　その儀は。

久次　兄への孝行、我へ取持て。

久秋　ぢやと申して。

久次　詞を反くか。

二人　サア／＼／＼。

久次　なんと。

ト向うにて。

よび　上使。

久次　ナニ上使とや。

久秋　久秋これにあるもいかゞ、只今の一條九重へ申し聞かするその間、席を隔てゝ只今の御返事[illegible]

久次　然らば後まで有無の返事を。

久秋　久次殿。

久次　久秋、早う。

久秋　九重來い。

ト唄になり、久秋九重伴ついて奥へ入ると、又向うにて。

よび　上使。

ト皆々出迎ふ、大鼓謡になり、向うより早川高景上下衣裳、宝住主殿、豊岡源吾上下衣裳にて三寶に短冊附けたる梅の枝を載せ持つて出て來る。

久次　異國征伐に趣きし早川高景、上使とは。

高景　いかにも異國征伐へ加勢の爲、彼の地へ趣し所、さりがたき仔細にて、立歸りしも國家の爲、先は久次公には、御機嫌よき御尊顔を拝し、恐悦至極に存じ奉ります。

呉竹　御上使樣には、いざ先づあれへ、

皆々　お通り下されませう。

高景　主從の禮儀は格別、役目で御座れば上座仕る。

ト鳴物の切れにて舞臺へ來て、久次の前へ三寶を直し、上へ通り床几に掛る、主從源吾下に控える。

呉竹　これは高景樣には、御上使の御役目御苦勞に存じまする。夫大江之助お出迎ひ申しまする筈なれど、風邪に犯され引籠居りますれば、憚り乍ら妻の呉竹へ、御上使の趣、仰せ聞けられ下さりませう。

高景　その梅の一木を以て、久次公へ三ケ條のお咎。

久次　シテその仔細は。

ト管絃になる

高景　久しく四海穩ならず、上一人より下萬民干戈の聲に肝を冷す、然るに久吉齢傾く上は、久次を以て讓るべき跡目なれど、生得行跡あら／＼しく、殊には多病、こゝを以て久秋跡目たるべき旨を申出し、桃山宣下の折柄、法を害ひ禮を破る、これお咎の第一。

呉竹　憚り乍ら、私が存じまするには、兄君たる久次公、四海の跡目と、繼木の梅花四方に薫るが、順當かと存じまする。

久次　呉竹が云ふ通り兄を差し置き、弟が跡目に立つべきいはれなし、これでも予が狼藉な。

高景　左程順逆の辨へある御前が、異國より渡つたる謀叛人と、なぜ御加擔なされしな。

久次　何がなんと。

高景　證據と申すは纖目の御太刀、再三の御催促をいなみ、お渡しなきが慥な證據。

久次　サアそれは。

高景　此の三ケ條、きつと返答承り參れよと、高景を以ての上意。

トきつとなる、此の時下手にて。

大江　恐れ乍ら暫くお控へ下されませう。（ト管絃になり、下手より大江之助上下衣裳にて出て。）高景殿には御上使の役目御苦勞千萬、某昨夜から風邪に犯され、出迎ひ遲參の段、眞平御用捨下されい。只今あれにて承れば、主人久次へお咎の趣、仔細とくとは存ぜねど、あはれ此のお請の儀、仰せ聞られ下さりませうならば、有難う存じまする。

久次　スリヤ大江之助、予に代り三ケ條の、

呉竹　申開が御座りますかえ。

大江　いかにも、某以前は下郎たりしを、久吉公の御見立に預り、久次公の乳母役を仰付られ、莫

大の恩祿、いつぞや桃山に於て、園生の方のお怒を撫め、預り奉り立ち歸るその日より、心を碎く大江之助、これみな久吉公への御奉公、まつた只今の三ヶ條の申開仕らんと、これへ罷り出でましたるは、久次公への忠義かと存じまする。

高景　スリヤ其許が三ヶ條の申開を致さるゝとな。

大江　御苦勞乍ら、今一應御上使の趣、承りたう存じまする。

高景　上意。

ト管絃。

大江　ハアヽ。（ト平伏する。）

高景　桃山宣下の折柄、猥に踏込み、非道に跡目を立てんとせられし、これお咎の第一。

大江　元より久次公には他家よりお入りなされしとは申乍ら、兄君たれば跡目に立つが世の順道、併し乍ら生得御正直なる御生故、義理ある仲の久秋公を思召し、わざとお身持御放埒は、こりや我君の御仁心と存じまする。

高景　蘇秦張義が辯を以て飾るとも、遁れぬ證據は、異國より渡つたる謀叛人に、御加擔ありし、これ第二のお咎。

大江　こはぎやう／＼しき仰せ、それには又何ぞ、確な證據ばし御座るかな。

高景　證據と云ふは、世の取沙汰。

大江　世の取沙汰を以て證據とは、ちと久吉公には御似合なされぬかと存じまする。

高景　天に口なし人を以て言しむ、周南召南十五の國風、これみな證據になるではないか。

大江　それこそは唐人の戯事、これぞといふ證據なければ、謀叛とは申されまい。

高景　次條の證據は繼目の御太刀、再三の御催促を否みお渡しなきが、確かな證據。

大江　これとても先達、久吉公名古屋御發向の折柄、手づから讓り置かれし御太刀、例へば他の者如何程望めばとて、うかつにお渡しあるべき筈が御座らぬ。

高景　父母に背くも天地に背く、上意に背くはなんと不孝ではあるまいか。

大江　不孝と見せたは身退かん、右の手段。

高景　イヽやその言譯暗い／＼、眞實身退かん御所存ならば、外に御賢慮もあるべきに、何ぞや桃山に於て御母公を足下にかけ、人を人とも思はぬ行跡、刑罰三千、罪不孝より大なるはなしと、何とこれにも申譯があらうがな。

大江　イヤその儀に置きましては。

高景　言譯が御座るかな。
大江　サアその儀は。
兩人　サア〳〵〳〵。
高景　なんと〳〵。
大江　ホイ。（ト思入。）
高景　併し乍ら三ヶ條の申譯、理を非に曲げても久次公のお命を、助けうと思はるゝ貴殿の忠臣感じ入る。さりながら御母公を始め諸士の面々、日々の評議にも、縱へ諫言仕りたりとも、一旦得心にて、又候や惡心起るは必定、所詮助け置いては萬民の歎、切腹致させよとある久吉公の御內意、なりや叶はぬ趣と思召され、御最後の用意召されい。
久次　ヤア默れ高景、最前より虫を死して聞いてゐれば、さま〲の痴言、もう此の上は四海の頭目は此の久次と、立歸つて言ひ聞かせ、見るもなか〳〵穢しいわい。
ト三寳を蹴返す、管絃になり久次はついと奥へ入る。高景思入あつて、
高景　ヤア法外なる振舞、久吉公の上意なれば我君も同前、引括つて御殿へ引く。（ト行からとする。）
大江　ヤア〳〵暫く。（ト高景を止めて。）高景殿へ右の御願ひ。

高景　願ひとあるを聞き屆けぬも不仁の至り、シテその仔細は。

大江　呉竹、久秋公を伴ひ奥へ。

呉竹　畏りました。

ト呉竹奥へ入る。大江之助思入あつて。

大江　御苦勞乍ら、あれへ。

ト高景思入。大江之助右の梅の枝を持ち四邊を見廻し、高景の傍へ來て袂を捉へ梅の枝を見せる、誂への合方、高景梅に目を付けこなしあつて。

高景　役目は役目、朋友は朋友、願ひとあるがその仔細は。

大江　今日只今三ケ條の申譯立ち難く、殊には日數今日限り、是非にも及ばず切腹のお勸め申し、御首を給はらんが、何卒御上使のお情を持ちまして、貴殿御持參の此梅の一枝、其許の情にて無理に咲かす、無理に咲かす室の早咲き。

高景　久吉公の御賢慮は切つて捨てたる花の兄、無理に咲かすが手讀はいかに。

大江　こゝを切れと云はぬばかりの梅の花。

高景　いはぬばかりの梅の花。

大江　サアこゝを切れと云はぬばかりの、梅に例へし久次公の御身代。

高景　昔も例ある滿仲の臣下仲光が忠臣、又その仲光には幸村あり、久次公の御身代に立つべき幸村は。

大江　その身代は此の梅の幹。

高景　ヤ。

大江　サア花の身代、いはぬ心を推量あつて。

高景　ハヽア天晴なる花の身代、造花と知り乍ら手折つて歸るも武士の情、御臺所の御心底、汲みて知れとのその短冊。

ト大江之助梅の短冊を取り。

大江　忘れても汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水。

高景　六つの玉川のそのうち、高野の奥の玉川は大毒水、空海人の汲まんを悲しみ、忘れても汲みやしつらん、と毒ある事を知らせの一首。

大江　切腹させよとある、久吉公の嚴命、忘れても毒を飲むな、と園生の方の情の古歌。

高景　高野の奥に身を退き、剃髪染衣のお姿ともなし奉らば、それこそは優曇華の花の花、七寶の

玉の臺の玉川の水。

大江　流れは同じ忠義と情。

高景　染むる心の玉川か。

大江　二つの思案は奥の間にて。

高景　梅の返事。

大江　短冊の謎。

ト高景梅の枝を取上げ。

高景　こゝを切れと、云ばぬはかりの梅の花。

大江　高野の奥の玉川の水。

高景　とつくりと思案の召され。

ト唄になり、高景梅の枝を持ち奥へ入る。大江之助残り短册を見ていろ〳〵思入、下手より矢田平出で。

矢田　ヤレ、お旦那樣。

大江　ム、矢田平。

矢田　只今の樣子殘らず、承りまして御座りまする。久次公のお首を討つてお渡しあつては、お旦那がこれまでの。

大江　コリヤ〳〵そち達が知つた事ではない、控へてゐい〳〵。

矢田　憚り乍らかやうな時には膝とも談合、時の用には鼻かけの猿智慧でも、又お役に立つ事も御座りませう、是非久次公の御身の上は。

大江　まだ〳〵奥には上使高景もおいやる、痴けた事を。

矢田　スリヤどうあつても久次公の御首を。

大江　イヽヤ久次公の御首は討たぬ。

矢田　シテ御上使への申譯は。

大江　速に首討つて渡す。

矢田　どこかどぎ〳〵としたお詞、久次公の首は討たぬ。シテ御上使への申譯は首討つて渡す、あの大惡人の久次殿、此下郎めは何とも存じませねど、幼少より御養育に預り、親とも主ともあなたさまひとりを、力に致して居る此下郎、今久次殿のお首を討てば、あなたの日頃のお望が。サアすつぱりとお切りなされませ。

大江　なんと。

矢田　最前高景殿の詞、お受合なされし花の身代、大將人形と下主奴の一文首、お月様とすつぽん程違つても性根玉は劣りはせまい、是非奴めが首討つて、久次公のお身代。

大江　ハテ幼少より側近う、召仕うた者程あつて、健氣な詞、しかしもう身代には及ばぬわやい。

矢田　それでは旦那のお身の上、是非とも下郎が。

ト腹を切らうとするを、大江之助止めて。

大江　コリヤ死ぬるばかりを、忠義とは云はぬぞよ。

矢田　シテ御上使への御返答は。

大江　何事も。（ト思入。）

矢田　スリヤお旦那の御胸中に。

大江　ハテ花も實もある。

ト矢田平と云はうとして花柑子を見て。

花のかうじの薫りぢやなア。

ト唄になり、大江之助思入あつて行かうとするを、矢田平袖を捉えるを振切り奥へ入る。矢田平こな

しあつて。

矢田　お旦那の今のお詞、ハテどうしたものであらうぞ。あゝ儘よドリヤ部屋へいつて休息せうか。

ト行きかゝる。此の間障子屋體より高景窺ひ居て。

高景　名を聞いて又見直すや草の花。

ト矢田平振返り、又行かうとして。

コリヤ〳〵待て。

矢田　ハツあなたは、御上使高景様。

高景　用がある、これへ〳〵。

矢田　ねい。（ト際へ來て手を突く。）

高景　顏を上げい。

矢田　ハツ。（ト顏を上げる。）

高景　ハテすこやかな下郎ぢやよなア。

ト矢田平うつむく。

名はなんといふ。

矢田　下郎めは矢田平と申します。

高景　下郎の矢田平用はない、立て〳〵。

矢田　ねい。（ト行かうとする。）

高景　コリヤ〳〵待て。

矢田　ハツ。（ト又立ち戻る。）御用で御座りますかな。

高景　名はなんといふ。

矢田　下郎の矢田平。

高景　ハテ矢田平ぢやよなア。

ト唄になり障子をさす。矢田平あきれて。

矢田　何の事だ、そちが名は、下郎の矢田平、ハテ矢田平ぢやよなア、なんと合點が行かない。もしやわれを、ハテなア。

ト手を組み思案する。此間奥より榊手鍋を持つて九重を連れて出て來り。

榊　オヽそこに居やしやんすは矢田平殿、たつたひとり何してぢやぞいなア。

矢田　思案をしてゐます。

榊　こなさん思案してぢやらうが、私や九重さんにちつと用がある程に、あつちへいて下さんせ。

矢田　おれにあつちへ行けかい、オ、行かう〳〵、ドリヤ行くべいか。

ト合方になり、矢田平思入あつて向うへ入る。榊思入あつて。

榊　九重さん、そんなら今奥で云うた通り、久次樣へ從ふお心で御座んすかえ。

九重　皆さんのお志、今も久秋樣が惨たらしい、兄の心に從はずは、未來の緣を切ると云はしやんすによつて、わたしや覺悟きめてゐるわいなア。

榊　ハテ勤さしやんした程にもない、帶紐解かぬその先に、どうぞよい思案が有りさうなものぢやぞえ。

九重　久秋樣に誓を立てうとすれば、反て久次樣のお心に從はねばならぬ義理、わたしや惡緣と諦めて、久次樣のお心に從ひますわいなア。

榊　それはさうなれど、必ず短氣を出さしやんすな、私がよいやうにするわいなア。

ト始終合方にて、榊障子屋體の内へ蒲團を敷く、九重泣いてゐる。奧より吳竹久秋を連れて出る。

吳竹　榊殿、九重殿は愈々よいか。

榊　マアあいで御座りまする。

呉竹　そんなら今そこへ、久次様をやりまするが、面伏せでは。

ト火を吹き消す、久秋を蒲團の上へ乘せる。榊九重を連れて、双方へ囁き。

九重殿、いよ〳〵久次様のお心に從はしやんす心ぢやな。

九重　アイ〳〵。

ト泣いてゐる。久秋九重の手を取り引寄せる。九重ふり切るを又捉へる。

サアお心に從ひます程に、マア此お手を。（ト振放し。）さうぢや。

ト久秋の小刀にて死なうとするを、久秋止める。榊ちつと手燭を出す。九重びつくりして。

九重　ヤアあなたは久秋様。

呉竹　なんとよい久次様であらうがな。

九重　コリヤマア、どうした事で御座んすぞいなア。

呉竹　どうしたものか、お前の心を引き見る爲。

榊　鬼の來ぬ間に命の洗濯。

久秋　ちやつと禮を云やいなう。

九重　あんまりの事で、コリヤ夢では御座んせぬかえ。

呉竹　モシ早う、よい夢を見やしやんせ。

九重　オヽ嬉し。

ト久秋に抱付く、屛風を引廻す、奥にて。

久次　呉竹、榊どれにをる。

ト手燭を隠し出る、兩人驚き燭臺を吹き消す、久次手燭を差し出し。

不義者動くな。

ト屛風を引退ける、皆々思入。此間榊九重を連れて奥へ逃げ込む。

おのれ久秋　。

ト立ちかゝる、呉竹止めるを引退ける、立廻り、奥より高景つか〳〵と出て、梅の枝にて久次を散々に打つ、久次その手を捉へて。

高景、そちや主をなぜ打つた。

高景　イヽヤ臣下では御座らぬ。

久次　臣下でないとは。

高景　久吉公の上使に立つたるこの高景、今日一日は久吉公、花もの云はぬ梅の折檻、その御短慮が

お身の障り、四海の跡目に立つべき身が、かる〴〵しき御振舞、非道の働き、あまつさへ弟君久秋公を、御手討とは思ひも寄らず、大悪不道を矯め直す梅の折檻、父君の意見、なんと骨身に堪へましたか。（ト打つ。）

久次　ヤア諫言聞かぬ、主に刄向ふ高景、うぬ。

ト抜きかける、立廻り、この時大江之助無紋の上下白小袖にて、三寳に九寸五分短册を載せつか〳〵と出て、久次を隔てゝ思入、呉竹見て。

呉竹　ヤアこのお姿は。

大江　梅の身代、この仕合。

高景　スリヤ久次公になり替り、申譯の切腹よな。

呉竹　アノ我夫が。

大江　御上使には先づ〳〵。

ト高景上座へ直る。

久次　我に代つて。

大江　エヽこなたはなう。（ト合方。）そのお心を改めんと預り歸るその日より、色を變へ品を變へての

我が讒言、身請せられし傾城までを引入しも、少しはお心和がうかと思ふに違ふ此方の悪心。その傾城も久秋公の思ひもの、流れの身にも筋なき人には肌觸れず、操を破らぬ女の健氣、それに引替へ、此方には誰あらう三國無雙の名將と云はれ給ひし、眞柴大領久吉公の御名跡たる御身を以て、傾城遊女に劣りし魂、弟君久秋公には親兄の禮を重んじ、わざと放埒にて身退き、こなたに跡目を繼せんとのお心遣ひ、御母公には恨み深く、高野の奧に身を遁れ出家遁世の身となれよと、殺して生すお情の、仰も重きこの大江めも、此方故に命を捨てゝの御諫言、御弟君御家來迄身を捨て命を捨て心を碎き泣き悲しむは、みな此方ひとりの心から、これ程までに心を盡すが、此方の目には見えませぬか、是迄も科なきものゝ御手討の、それに繫がる親兄弟、此方に恨が掛るまいか有るまいか、その罪科を我身に受けての此切腹、斯く云へばとて大江之助、さら〳〵命は惜しまねど、同じ捨つる命ならば、につこと笑うて死にますわいの、菜此儘相果なば、誰有つて諫むる者もなく、一旦は大江之助の忠義に免じ、助け置かれんが、遂には君のお怒、母君の情の綱も切れ果てゝ、切腹で相濟まば未しも、六條河原の敷草に乗つて、骸は犬狼鳶や烏、烏の餌食にならつしやらうか、と思廻すは大江之助、死んでも眼は閉ぢませぬ、何卒御母公のお詞に從ひ、剃髮染衣の御身となつて下されいなう。

呉竹　忠義とは云ひ乍ら、切腹をなされずとも、外に思案は御座りませぬか、是と申すも久次様あなたのお心一つにて、夫の命の生死の境。（ト高景の傍へ來て、）申し高景様、御上使のお情で久次様のお身に障もなう、夫の命も恙なうなりますやうの、御思案は御座りませぬか。（ト高景默つてゐる。又大江之助の傍へ來て。）これ申し大江之助殿、いかに武士の習ぢやとて、腹切るとはあんまりな思切り、外に仕やうは御座りませぬか、モシ思案變へて下さりませいなア。

大江　ヤア未練な奴の、おのれも武士の妻でないか、めろ〳〵となに吠面、御上使の思召、控へてをらう。

呉竹　それでもあんまり。

大江　控へてをらう。

トきつと云ふ。呉竹思入あつて、久次の傍へ來て。

呉竹　アヽこんな大惡人様、云ふまいと思へども、夫を殺すもみんなあなたのお心から、なんぼ家來の罰ぢやとて、當るまいとも云はれませぬ、エヽ恨しいお主様、胴慾で御座りますわいなア。

久次　ヤア主に向つて雜言過言、詞が過ぎると、手は見せぬぞ。

呉竹　お手討が恐いとて、云ふ事云はずに置きませうか　いつそお手討に逢うて、死にたいわいなう、

久次　サア切つた〳〵、アノこゝな大悪人様。

ト久次に取りついて、いろ〳〵思入。

久次　ハテよい覺悟、予が詞に背くものは、縦へ父たる久吉でも、まづこの通りに。

ト呉竹を捕へて、一かせ切る。ア、と苦しむ。

久秋　ヤア呉竹を。

ト寄るを大江之助きつと思入、久次その刀を大江之助へさしつける。

大江　何卒御善心を。

久次　くどい事を。(ト又呉竹をゑぐる。)

大江　幾重にも御本心に。

ト呉竹苦しみ乍ら。

呉竹　エヽこなたはなう。

久次　こま事吐すな。(ト呉竹を切り殺し、止めをさして刀を納め。) 大江之助、さぞ不便であらうな。

大江　いかやうになされてなりと、御本心に。

久次　その方が諫言するか。

大炊　何卒御心を。

ト久次きつとなり大江之助を引付ける。久秋寄るを大江之助支えるこなし、久次大江之助を三寳にて散々に打つて。

久次　エヽうぬはナ、誠忠義を思はゞ予を四海の頭目に立つべき筈。この久次が短氣は、母の胎内を出るより、產付たる氣質、附燒刄で直らうか、時により折にふれ短慮の諫言ばかりにて、跡目の事は何處へやら、剃へ高野に上り、出家せよとは穢しい。よし〳〵、この上は館へ踏込み母を始め諸大名、我に背く奴原は、一々に蹴殺し、四海の跡目繼いで見せう。

大江　スリヤ、いかやうに御諫言を申しても。

久次　くどい〳〵、まづ久秋めを。

ト刀を拔く、大炊之助支える立廻にて。

大江　モウ是非に及ばぬ。

ト刀を拂ひ落し、九寸五分を久次が腹へ突込む。久秋驚き。

久秋　ヤア兄上樣を。

久次　エヽ口惜しや大江之助、主を殺す大罪人、軈て思ひ知らすぞよ。

大江　主を殺す大罪といふお心が付いたらば、何故親に刃向うお心を直しては下さらぬぞ。御臺所のお情も、高野の奥の玉川の、水の泡と成たる悪心、歌によそへし高野山も、切腹の場所になつたか、エヽ情ない御所存ぢやなア。（ト思入。）御主君を手に掛けし申譯、此村大江、此場を去らず冥途の御供。

ト刀に手をかけるを、高景止めて。

高景　逸られな大江之助殿、其許の心底、現在妻をも殺され、家を捨てその身を捨てゝの、忠義の程驚き入つた。久次公の御切腹は、己が罪おのれとせめる天命、此趣を立歸り、久吉公へ言上なし、高景能きに計はん、マア〱放し召され。（ト止めて、）大江殿、感心仕つた。暫く〱。（ト久次の疵口を見て。）悪逆なれど主人の別れ、是非もなきこの場の御最期。

ト思入あつて、久秋を引立て、花道の方へ行く。

久次公の御切腹、見屆けし上からは、高景もはやお暇申す。

久秋　兄君の亡骸は高野山へ取納めい、さはさりながら、兄上といひ呉竹まで、儚い最期も何の土。

高景　植ゑて見よ、花の育たぬ里もなし。

大江　心持こそ身はいやしけれ。

高景　然らば此儘。
大江　御上使御苦勞。
高景　さらば。

ト唄になり、久秋先に高景しづ〳〵向うへ入る。後合方、大江之助あたりを見廻し思入あつて。

大江　今日只今四海の武將は久次公、千秋萬歳お目出度う存じまする。
久次　心得ぬ大江之助、この久次を諫めし、始に似ざる恐悦の體は。
大江　四海を奪ふ、反逆の企。
久次　スリヤ、余が反逆の存念を、達する所存よな。
大江　恐れ乍ら忠義の道に二つはなし。
久次　それに又余を手にかけたるは。
大江　高景を欺かん爲。
久次　ヤヽ、なんと。
大江　心入あつて突込みし九寸五分、養生は家に傳はる良藥あり、切腹見屆け歸りし上は、猶も心の油斷を幸ひ、根組を堅むる君の大望。

久次　オヽ願しき忠義の程、久秋は手に足らず、父久吉を討ち亡し、四海の武將はこの久次。
大江　オヽ、天晴なる御一言、君一戰に及び給はゞ、敵幾萬人あるとても。
久次　物の數にて數ならず、采配取つて下知なさば。
大江　御勝利あらんは目のあたり、旗手に從ふ勇士の輩。しかし御旗は。
久次　心安かれ大江之助、先達盜み置たる瓢の旗。（ト懷より旗を出す。）
大江　ナニ瓢の御旗とや。（ト旗を取つて篤と見て笑む。）今日只今より、四海の武將は此村大江之助、日頃の大望大願成就なし忝い。

ト久次驚き。

久次　スリヤその方が反逆とな。
大江　いかにも、この旗を手に入れん爲ぢやはやい。
久次　ヤア〳〵シテおことが俗性は。
大江　語つて聞かさん、よつく聞け。

ト思入あつて床几にかゝり、大小入三味線の合方になる。

我は元來此日の本の者にあらず、大明國十二代の神宗皇帝の左將軍、宋蘇卿來藥といつし者たる

が、眞柴大領久吉に家領地を切りとられ、剰へ順南太子を擒慮に致され、無念骨髓に徹して止む事を得ず、何卒恨みを散ぜんと、心を盡すに暇なし、我唐土に於て、蘇友と云へる一人の子を儲け、乳人に預け此土に渡り、筑紫箱崎に世を忍ぶ内、又もや一人の女に語らひ、二人の子を儲く、唐と日本に三人の倅、又逢ふまでの印にと、蘭奢の一木を筐に殘し別れしが、蘇友今この日の本へ來りしと聞く。彼を守立て、四海の武將になさんは目前、又我に仕へし順喜觀と云へる臣一人、石川五右衞門と云ふ者と、心を合せ事を計るに、狼狽者の大領久吉、我忠義を誠と思つて、大錄を與へ、剰へ乳人役を云付け、ヤレ此村よ大江よと持囃すは、石を抱いて淵に入るの大愚、瓢の旗は其方が隱し持つと知つたる故、計略を以て我手に入れし上からは、この旗を破却なし、眞柴の家斷絕、重傷の久次所詮存命及びなき事、この上は其方が企も、わが大望の一つにして久吉を失はん、これを未來の土產となし、成佛なせよ眞柴久次。

久次　扨は此村大江とは、異國人にて有つたよな。これまでの誼み、汝に賴む、眞柴の滅亡、久吉久秋亡しくれよ、所詮叶はぬ我が負傷、國家の亂れが我への引導、必ず共に宋蘇卿。

大江　飽くまで根強きその一言、氣遣ひ致すな、この旗も我が手にあつて益なき品、未來の引導そちが最期の冥途の門火、燒き失ふが眞柴の滅亡。

ト有合ふ火鉢へ旗を投込む、煙硝火立つ、これにて遠寄せになる

ハテ心得ぬ遠寄せ、もしや此身の俗性を。

久次　イザ首討てや、宋蘇卿。

ト大江之助思入あつて、首を打ち落す。どんと頭を打つ。

大江　ハテいぶかしい。

ト血刀を拭ふ事よろしくあつて、拍子幕。どん〳〵にてつなぎ

引返す

本舞臺一面の淺黄幕、こゝに矢田平立身、奴四人對の四天にて鑓を持ち、矢田平を取り巻いて居る、此見得どんちやんにて幕開く。

四人　矢田平動くな。

矢田　こりやアうぬらは、此矢田平を何とする。

奴一　ヤアなんとするとは、汝が主人の大江之助こそ、大明の宋蘇卿、俗性知れたる上からは、

奴二　正しくうぬも異國の唐人、尋常に、

四人　腕廻せ。

矢田　小癪な奴等の、お旦那を始め我々を、異國人とは何を以て、りやうじしろぐと手は見せぬぞ。

奴一　面倒な、ソレ、

三人　やらぬはい。

　ト立廻りあつてきつと成る。此時下手にて。

主税　大明の順喜觀へ、早川高景が家臣室住主税、

源吾　豊浦源吾もこれにあり、

兩人　見參々々。

　トどんちやんになり、主税源吾上下脱ぎかけ凛々しき拵へ、弓矢と陣羽織を持ち、軍兵附添ひ出で來る。

矢田　ヤア心得ぬその一言、此下郎めを、順喜觀とは何をもつて。

主税　ホヽオ不審は尤、この家の主人、此村大江は大明の宋蘇卿、それに附添ふ順喜觀、汝が俗性見出さん爲に、お命を捨てられし久次公、

源吾　サア館の四方は十重二十重、取り捲く上は籠の鳥、遁れぬ所だ、白状致せ。

矢田　スリヤ久次が最期は、我々が大望を、見出さん爲の計略よな。

主税　云ふにや及ぶ、いつぞや異國征伐の兵船、難風に吹き流され、とある出島へ上りし砌、不思議に手に入る一つの碑の銘。

矢田　何が、なんと。

源吾　則ちその節主人に附添ふ我々が、寫し取たる陣羽織。（ト持つたる陣羽織の裏を見せ。）これ見よ、江北一株の枳とは、唐土に一人の倅を殘す、

主税　江南二株の橘とは、日本に二人の倅あり、

源吾　都て金銀をかけ扶桑に蔓るとは、唐土よりこの土へ渡り、この日の本を覆し、唐と日本の倅をば、世に立んとする謀叛の張本。

主税　此村大江が素性と云ふは、唐土の宋蘇卿、今一人の加擔人は、順喜觀といふ下郎の矢田平、御傷しくも久次公、天下の爲に御身を捨てしも、汝が俗性見出す計略、サア此上は、宋蘇卿矢田平諸共繩かける、なんと遁れは、

兩人　あるまいがな。

矢田　ヤア縱へ如何程申せばとて、この矢田平を異國人とは。

主税　まだ此上にあらがはゞ、

源吾　兩人來れ。

女乞榊　ハア、。

ト下手から女乞食、榊紅の鉢卷凛々しく、高札と長刀を持ち出で來り。

矢田　ヤアおのれは最前の乞食婆、今一人は腰元榊、證據なぞとは何を以て。

女乞　非人と成つて入込みしは、そちが素性を見出さん爲、久次公に頼まれて騙りで付込む惡計も、謀叛人を見出さう爲、最前そちが高札へ記し置きたる此文言、文字は日本通用なれど、筆法は大明の文徴明が流儀、まだ日本へ渡らぬ筆勢、これでも汝あらがうか。

唐織　腰元姿の妾こそ、小西が妻の唐織。

女乞　我とても高景樣の局役、最早遁れぬ異國人、

主税　きり〳〵この場で、

皆々　繩かゝれ。

矢田　扨は、とくから伏勢有つて、我々を見出さん計畫よな、エヽ殘念や、此上は一方を切拔け、宋蘇卿殿のお供せん、片端から觀念ひろげ。

ト切つてかゝる、みな〳〵立廻り、矢田半上の方の塀の內へ消える。皆々見て悔り思入。

主税　ヤ、、、いつの間にかは異國人。

源吾　ソレ者共踏込め。

皆々　ハツ。

ト皆々立ちかゝるゝ、此見得、一面に淺黃幕ふり落す、矢張どんちやんに成り、向うより軍兵出て、アリヤ／＼と云うて下手へ入る。知らせあつて此幕を切つて落す。

本舞臺眞中に九尺の寄屋體、唐木造り高欄附、東西唐の捿門作りの高塀、見越に芭蕉を植ゑ、正面の壁には鷹の掛物を掛け、青貝の押香爐香臺花指子を花生に生け、隨分結構に仕立て、爰に此村大江之助唐冠唐裝束の形にて、香を薰いて居る。三味線入の靜なる唐樂、遠寄交々にて道具留る。

大江　天なるかな命なるかな、日頃の大望一時に空しくなつたるか、エヽ口惜しやなア、今捧ぐる一香は我無念の心魂、わが子蘇友と合體なし、縱へば久吉鐵城の内に籠るとも、やはか、生首取らいで置かうか。思へば／＼殘念やなア。

ト思入、此のうち軍兵鎧を持ち窺ひ。

軍兵　覺悟。

ト突出すを、大江之助じろりと見て。

大江　燕雀なんぞ大鵬の心を知らんや、汝等が鉾先を以て、此宋蘇卿を突止めんとは、小癪な事を。

軍兵　遣らぬは。

ト突いて掛るを拂ひ退け、花生の花柑子を取て投げる。煙硝火立つて軍兵皆々うんと死ぬる。

大江　間近く聞ゆる鉦太鼓は、敵押寄すると覺えたり、イデ打破つて。イヤ〳〵運命盡きたる宋蘇卿、よしなき所に長居して、雜兵の手に掛り、死後の耻辱も殘念、速に腹切つて、我が子蘇友に此念を告げ知らさん、さうぢや。

ト四邊を見廻し思入、三味線誂への鳴物になり、鷹の掛地に心付いたる思入あつて、掛物を取つて。

徽宗皇帝名畫の鷹、其例なきにしもあらず、黄鶴仙人又は胡國の雁、日の本にては、天武天皇吉野の山にて名香を焚き、琴を彈じ給ひしかば、果して天人天降りし例あり、我が清血を以て蘇友が方へソレ。

ト劔を拔き腹へ突込む、矢張遠寄せ、大江之助苦しみ乍ら、机の袱紗を取て腹綿を引出し、右の袱紗に書置を書くことあつて。

南無諸天善神、我が無念、我が子蘇友へ告げて給べ、歸命頂禮〳〵〳〵。

ト腹綿を掛地へ打ちつける、どろ〳〵にて煙硝火立つて、掛物の鷹脱け出で、右の袱紗を咬へ花道へ飛び行く、ばた〳〵にて、向うより矢田平走り出て來て、右の鷹を花道にてきつと見て、大江之助の體

に驚き、本舞臺へ來て。

矢田　御主人樣。

大江　順喜觀、殘念なわやい

矢田　スリヤ御最期であつたか、ホヽホイ。(トこなしあつて、)順喜觀も追腹を。(ト腹を切らうとする。)

大江　ヤレ待て、今死ぬる命を長へ、我が子蘇友に、此意を告げ知らせよ。

矢田　御意では御座れど、幼少にてお別れ申し面體知らぬ蘇友樣。

大江　これを割符に尋ね得よ。(ト鷹の脫けたる掛物を渡す。)

矢田　こりやこれ白紙の掛地、扨は今飛び行きし白斑の鷹は、徽宗皇帝の名畫、此繪絹を脫け出て御大事を知らせしよな。

大江　それを割符に、

矢田　めぐり逢はゞ、

大江　かくと知らせよ。

矢田　お氣遣ひあられますするな、これを證據に巡り逢ひ、順南太子を奪返し、猿冠者が首引提げ、修羅の妄執晴させませう。

大江　出来した、行け。

矢田　ハツ。(ト行からとしてこなしあつて。)とは云ふものゝ。

大江　未練な奴なう。

ト思入、此時下手より主税、源吾出て来て。

主税　扨こそ謀反人の宋蘇卿、

源吾　最早叶はぬ覚悟なせ。

ト左右より大江之介にかゝる、立廻りあつて、両人を引付け思入。

矢田　今際の御最期、御介錯。

ト刀を振上げる、大江之助思入、これにて一面に緞帳降る。前へばたりと浅黄幕振落す、トどんちやんにて塀を引出し、好き處へ石の井筒を押出す、此内より矢田平、右の掛物を三尺手拭で包み是を背負ひ、抜刀にて出て四邊を窺ひ、井戸より釣瓶にて水を汲み上げ、これを飲んで向うへ行かうとする。向うより、奴四人梯子を持ちつか／＼と出て、矢田平にかゝる。これにて矢田平下手の方へ行き、四人を相手によろしく立廻りあつて、皆々トゞ向うへ逃げて入る。此時掛物落ちるを黒の忍び一人窺ひ出て、それを取り、逸散に向うへ入る。矢田平びつくりして。

矢田　ヤヽヽヽ、何者なれば大事の掛物、さうだ。

ト向うへ追馳け入る。矢張どんちやん、此塀を引いて取り、跳への鳴物になり淺黄幕を切つて落す。

南禪寺山門の場　本舞臺一面に山門の二重目の扉前、高欄垂木象鼻、極彩色の組物、山門の左右一面の櫻花ばかり、蹴込の所霞にて隱し上よりも釣枝の枝垂櫻下る、此高欄に凭れ、石川五右衛門百日鬘大褞袍にて煙草を喫んで、四方を眺めてゐる見得。靜なる禪の勤にて道具留る

五右　春の眺めは價千金とは小さい譬へ、五右衛門が爲には此價萬兩、最早日も西に傾き、眞に春の夕ぐれの櫻も一しほ〳〵、ハテうら〳〵かな眺めぢやなア。

ト どろ〳〵、トヒヨになり、以前の鷹向うより飛んで來て、山門の高欄に留る、五右衛門これを見て。

ハテ心得ぬ、此鷹がわれを恐れず、羽を休むるは、（ト屹度見て。）正しくこれは名畫の筆勢、しかも白斑。

ト思入あつて、鷹を押へ、右の袱紗を取る、鷹は飛んで行く、後を見送り、右の袱紗を開き見て。

コリヤこれ此村大江之助が手跡、血潮を以て認めしは、ハテ心得ぬ。（トよく〳〵見て、）何々、其方、某豫て諜し合せし通り、久次をおとりに四海を掌握と計りし處、却て、久次高景が計略に依つて年來の大望空しく、無念の最期を遂ぐるものなり。（ト驚き、）スリヤ此村大江は事顯はれしとや、生害かホイ。（ト思入、）死後に賴み置く一儀、某元は大明十二代神宗皇帝の臣下に

て宋蘇卿と云ひし者、（ト思入きつとなつて、）本國に一子を殘し、日本を覆さんと此土へ渡り、兄は計略に依つて人手に渡し、妹は女故足手纏ひと乳人に預け、唐と日本に三人の我が子、只心に懸るは唐土の兄、我を慕うて日本へ渡りしと聞けど、最期まで對面遂げず、此一子勇猛不敵の生付、筐に添へし蘭奢待といふ名香を證據に何卒尋ね出し、我が無念を語り力を合せ、久吉を討取りて修羅の妄執を晴させくれよ。（ト讀み終りいろ〳〵あつて、）スリヤ此村大江之助と云ひしは、我が父宋蘇卿にて有りしよな、ヤア〳〵知らぬ事とは云ひ乍ら殘念々々。（ト思入あつて、）我稚き時、風波を凌ぎ此土へ渡り、何卒父に對面遂げんとさ迷ふ中、明智光秀殿の養育に預り、成長して名も惟任左馬五郎と呼ぶ、然るに光秀春永父子を討取り、四海を掌握すると云へど僅三年、大領久吉が爲に滅され無念の御最期、その恩義を受けし我なれば光秀殿の弔合戰、久吉を討取らんと討死を止り、世を忍んで今石川五右衛門と名乘る處に、國で別れし實父宋蘇卿も久吉が爲に計らずも落命、無念に無念を重ぬる仇、返す〳〵も殘念なは是まで心を合せし大江殿を、父とも我を子とも知らで暮せし親子の心外、鷹の知せも無念の骨肉、父の筐の蘭奢待も親子の割符と所持せしに、死後の筐となつたるかチエ、、。（トほろりとして思入あつて。）併し久吉、父の無念に光秀殿の恨み、縱へ此身は油で煮られ肉はとろけ骨はいち〳〵砕く

るとも、此無念晴さいで置かうか、エヽ口惜しやなア。

トきつとなりよろしく見得、誂への鳴物になり。

此道具段々せり上げる、山門の下になる、兩袖瓦燈口廻廊の袖、山門の前に蓮鉢、こゝに眞柴久吉順禮にて管笠柄杓を持ち、矢立の筆にて山門の柱へ落書をしてゐる、前なる蓮鉢へ目をつけてゐる、此見得にて道具留る。

ト久吉手水鉢の際へ行き、五右衛門の水に映るを見て。

久吉　石川や濱の眞砂は盡くるとも。

ト五右衛門心得ぬこなしにて。

五右　何がなんと。

久吉　世に盗人の種は盡きまじ。

ト五右衛門屹度見降して。

五右　エイ。

ト小柄を手裏劍に打つ、久吉柄杓にて受止め。

久吉　順禮に御奉捨。

トきつと見上げる。兩人思入よろしく。

拍子幕

三幕目

桃山御所の場

役名　石川五右衞門、眞柴久吉、順觀太子實は小田小次丸、佐藤正淸、室住主稅、豐岡源吾、五右衞門母、大淀姬等。

桃山御所の場　本舞臺眞中に九尺の世話家體、向う暖簾口、佛壇、上の方障子窓、下の壁崩れる事、下の方一面に塗欄間、結構なる御簾御殿、左右に山吹の盛り、枝折戶、日覆より藤の釣枝、都て世話時代脊中合せの道具、爰に五右衞門母、絹やつし切織老母の拵、絲車にて絲を取つて居る、室住主稅上下衣裳にて老母が肩を揉んでゐる、此傍に葛籠を直し、奴が百萬遍の音頭を取り、大名岡人素袍股立にて珠數を持ち念佛申して居る、豐岡源吾七りんにて茶を沸して居る。てんつゝ調べにて幕開く。ト直に向うより、小新吾上下股立にて鍬を擔ぎ、五右衞門息順觀太子唐衣裳唐子の拵にて歌加留多の箱を持ち、奴關内袴羽織にて弓矢を持ち出て來る、後より矢田平やつし仕丁の拵に出て來り。

矢田　もし／＼それへお出なさるは、お侍様かお百姓様か存じませぬが、私は今日のお勅使世尊寺中納言様のお供、はや日も暮れまするに、お歸りが御座りませねば、何のやうな御馳走か、羨ましくお迎ひがてら、參りまして御座りまする、何卒お取次をお願ひ申しまする。

小新　いかにも／＼、お勅使お迎とあらば、身共が取次いで遣さう、したが少々用事もあれば片付次第に。

關内　マア／＼我々と一緒に來やれ。

矢田　それは有難うござりまする。

ト舞臺へ來り。

小新　賴まう／＼。

奴　どうれ。（ト門口を開ける。）

小新　エヽびつくりした。サア／＼こつちへ入つて待つがよい。

矢田　へイ／＼眞平御免なされませ。

ト皆々内へ入る、順觀太子上の方へ通る。

皆々　イヤア新公か、大分遲かつたな。

主源　コレ〳〵百萬遍はとうに濟んだわ。

小新　イヤそれは殘り多い、イヤモウ此子が道草で思はず遲參。ハツ〳〵お袋樣へ申上げます、主人申しまするには、今日何かお 志 御座ると聞き、早速久吉參りまする所なれど、俄にお勅使のお入やら、又春永公の御法事にて殊の外の取込、それ故名代として、それなる太子樣を差越しまする間、よろしくお詫申せ、との御口上で御座りまする。

母　これは〳〵いつに變らぬ久吉殿のお尋ね忝う御座る、取分け今日はお館の取込、何のお入にも及ばぬもの、太子殿を名代とは忝い〳〵、もう〳〵そのやうに、規帳面な主遇ひは廢して下されいの。それはさうと、そのお勅使樣とやら、何で館へ。

大一　サア四海の跡目とおなりなさるゝ、久秋公の御家督の御祝儀、

大二　確かお勅使の名は世尊寺中納言樣とやら、

大三　云はゞ天子樣の御名代、御饗應には山海の珍味、

大四　又その中で、春永公の御法事やらで、館は亂騒ぎ。

源吾　それは格別、その方は見馴れぬ者ぢやが、何用あつて此處へ。

矢田　へイ私めは世尊寺中納言のお供、もはや日も暮れかゝりまする故、お迎には參れどもどこがど

うやら知れませねば、只今貴方樣へお取次を、お願申したので御座ります。

主税　ハテナお供とあらば、その方ばかりで有るまいに、只一人此處へ、どうやらうろんな。

矢田　エ。

小新　イヤその方は、身が取次を致して遣す、控へてゐやれ〳〵。

矢田　ヘイヽ、（ト控える、此間順禮太子歌加留多を弄んでゐるを見て。）ハヽア見れば、こりやこれ結構な歌加留多、これはどうして。

關內　イヤ此歌加留多は忝くも當今樣が、御眞筆にお染めなされて、捕虜となりし順觀太子へ玩弄の爲下された大切な歌加留多、必ず共に麁末になされますな。

母　ほんに聞けば有難い歌加留多、帝樣さへそのやうに愛でさせ給ふ久吉殿、見るかげもない此婆をいつぞやから、此館へ連れて戻りしその日より、怠もなう日毎の見舞、どうやら嬉しいやうなれど、私が願ひは此館出なば尋ねる、サア日頃の尋ねが反てわしは。

小新　サア達て當家を身退くお心なら、主人の願を叶へた上。

母　何、願とは。

小新　我君以前は遠州にて、あなたの連合松下殿に奉公なせしその砌、判を押したる請狀手形、その

證文があるうちは、何處が何處まで主人の後室、又お返しならば他人向、それ故主人が只今迄尊敬なしたも、その請狀。
母　成程それは行綱殿常々持つて御座りしが、病死の後は氣も付かず、確か葛籠の裏張に。
小新　それさへ戻れば。
母　わしが願も。

ト此間順觀太子居眠り居て

順觀　長居長口みんねいしいやあん〳〵。
矢田　イヤアいかに唐人の子なればとて、あんまり分らぬその寢言。
母　どうしてそれは變つた事、分らぬは尤、今その子の云うたのは、長居して長咄いやぢや、眠いと云ふ事ぢやわいの。
矢田　お袋樣には大明言葉。
皆々　ようこそ御存じ。
母　エ。サア、これは行綱殿の心掛にて、常々覺えし大明言葉。
奴　成程それで分りましたが、大分我等も長居長口。これからは又酒でも飲まねば．イヤアン〳〵。

矢田　私は又お迎に。

小新　然らば、必ずあの請狀。

母　後方までにきつと誓約。

大名　これは牡丹餅、いかい御馳走。

小新　これに懲ずと。

皆々　ドレ開きませうか。

ト唄になり、順觀太子歌加留多の箱を持ち、皆々附いて奥へ入る。五右衛門の母殘る、合方。

母　ヤレ／＼マア窮屈でほつとしたわい。サア／＼これからはわしが氣儘に。〔ト糸車を片付け、佛壇へ一寸思入あつて。〕ほんに思へばその昔、大明國にて宋蘇卿殿とわりなき仲の二人の悴を儲け、程なく夫には此日の本へ渡りし故、一人の悴を殘し置き後を慕うて、妾にも渡り來れど知れざる日の本、悴を連れて兎や角とさ迷ふ間に、嘉平次殿我子の養育、それ故に此を包みて人知れず悴に語れば、その日より家出なしたるあの友市、我子の行方尋ねんにも、自由にならぬ今○身の上、今小新吾が話の樣子、葛籠の内に張つた請狀、渡した上で此身の落着ソレ／＼。

ト葛籠へ手をかける。此時上手の貝壁ばら／＼と破れて、内から手を出し葛籠を引込む。五右衛門の

母びつくりして。

ヤ、、葛籠を、誰やら。

ト捕へる。此時下の方より小新吾出て窺ふ、五右衛門の母は葛籠を抱えしまゝ壁の崩れへ引込まれる。

どんと暮六つの鐘。小新吾窺ひ寄つて。

小新　ヤ、、何か怪しい壁の内。

ト寄るを、此うち矢田平出て小新吾を止め。

矢田　イ、ヤ葛籠は確か鼠が。

小新　ヤアわれはさつきの仕丁だな、扨こそ〳〵一癖あると見た目は違はぬ、今日の勅使を幸に供の顔して入込む下郎、うぬも只の仕丁ではないわえ、サアきり〳〵と身許の白状しろ。

矢田　どうしてマア滅相な、畢竟勝手を知らねばこそ、あなたに頼つて来りしお館、怪しいものでは御座りませぬ。

小新　ヤアまざ〳〵しきその僞り、葛籠をかばふが不審の第一。

矢田　ぢやと申して。

小新　云はずばかうして。

トかゝる、立廻りに、矢田平懐より前幕の一軸を落す、小新吾取上げ。

扨こそ怪しい此一軸。

矢田　南無三、それ見られたら、うぬも生けては。

小新　小癪な事を。

ト兩人一寸立廻り、鳴物になり、好き見得にて早舞になり。

ぶん廻す

桃山御所の場　本舞臺三間の同本縁側附黒塗の上り高欄、正面金襖付竹の節黒塗の欄間御簾の上げおろし、左右一間の御簾を懸けし袖を後より飾り出す、舞臺下の方石の井筒、目覆より梅の釣枝、二重の眞中に菊桐紋を二本直し、管絃にて此道具納る。

トこゝに石川五右衛門束帯の形にて葛籠を脊負ひ、以前の歌加留多の箱を抱えたる奴を踏へてゐる、ちよつと立廻つてしやんと留る、ごんと本釣鐘誂への羯鼓入の鳴物になる。

五右　既に父の恩の高き事、天に譬へて須彌山に等しく、母は地になぞらへて、深き事蒼海の如し、その恩朝の霜と消え、せめては殘る一人の母なんなく奪ひ、心の雲晴れゆく月の冴え渡り、心耳を澄ます管絃の調子、殊に眼を悅ばす此夜櫻の勝景に、花盗人の名や立たん、實にも興あ

る詠めよなア。

ト思入。奴振解いて

奴　扨こそ脊負ひし葛籠の內、確にそれこそ。

ト持ちたる歌加留多の箱を舞臺へ投げ、そのまゝ拔きかけるを五右衞門ちやつと止めて

五右　落花狼籍。

ト奴うぬとかゝるを、しやんと止める、雨車、五右衞門空を見上げて。

奴が振れば降り來る春雨、四邊に人目のゆるさねば、軒端傳うて、暫しやどりを。

ト行きかゝる、此時向う揚幕の內にて。

久吉　お勅使待つた。

五右　なんと。

久吉　お手傘これに、奴の兵吉用意致してごはりまする。

トツヽカケのやうなる鳴物になり、五右衞門向うへ行きかゝると、向うより久吉奴の拵にて蛇の目の傘を持ち、つか〳〵と出て來り、五右衞門と行合ひ、ちよつと突廻して傘を開き、五右衞門にしやんとさしかけ、屹度きまつて兩人見得。これより大小の入たる行列三重になり、五右衞門久吉傘をさしかけしまゝ舞臺へ押して來り、兩人よろしく見得、五右衞門思入あつて。

五右　仕丁にあらぬ見馴れぬ匹夫、ヘヱ扨は館の遣はれ者。
久吉　二合半なる兵吉奴、大手下馬先玄關前草履取から運が向き、今降り來る天が下片手に握む傘の骨も、六十六本のその下蔭に身を寄せて、凌ぎ給はゞ靜謐の合羽もいらず豐かな春雨、心置きなく此傘、御持參あられよ御勅使樣。
五右　イヽヤいらない、そんな雨具を借りず共、廻り持ちなる天が下、やがてこつちの番傘と、大黑傘にさし換へる、人の雨より用心が、肝腎おのが身の代り。

ト此間久吉五右衞門をうかゞひ見て。

久吉　見交はす顏も裝束の姿變れど、確か以前は一つ鍋、おぬしは竹馬の友市だな。
五右　それよ、さりとは猿之助、そんならわれがその後に。
久吉　剃りこぼつたる奴の兵吉。
五右　それが猿とはほんに初めて。
久吉　知らぬ同士かなんぞのやうに。
五右　知らでうか〳〵入込む館。
久吉　捕へて見れば、

五右　同じ盗人。

兩人　こいつは呆れた、(ト兩人手を打つて。) 出會ぢやなア。

ト管絃。此間奴心付いて起き上り。

奴　扨こそ盗賊、大方石川。(ト立ゝる。)

久吉　ア、コリヤ〱なんのわいらが、それこそ蟻が富士をせゝるに。

奴　イヤモシ御前、それぢやアあなた盗人の贔屓を。

久吉　ヤイ〱何を麁相な、あなたは今日のお勅使樣、そのお勅使へ饗應の銚子土器持うと申せ。

奴　デモありや見す〱。

久吉　アこれ行けと申すに。

奴　ネイ〱。

ト管絃になり、奴五右衞門へ思入ありて下手へ入る。久吉後見送り。

久吉　ヤレ〱マア久振、サ、こちらへ〱。

五右　ドレそんならば。

ト五右衞門は上の方、久吉は下の方によろしく住ふ。

いかさま運は天といふが、ほんに猿めが天下殿、あの兵吉であらうとは。
久吉　サア我身ながら思ひも付かない、時におぬしは今もやつぱり。
五右　やめないの、日本國の寶の有りたけ、俺が物だと盗人の大將、世界にその名も隱れのない。
久吉　ハア、あの五右衛門か。
五右　さうよ。
久吉　ハテきつい出世な。マア〳〵何しろ達者で目出度い、思へばかうつ十二三で有つたなア。蓮葉殿へ手下になつて、やつとの事でお供の押込み。
五右　處が提灯は持たなんだな。
ト此時久吉いぜん奴が投げし歌かるたを見付け。
久吉　提灯と云へば、こりや順觀太子へ戯れながら、和朝の風儀を示さんと、御慈みに當今の遊されたる小倉の百首。
五右　あのそれがか。（ト取つて見る。）
久吉　どうしてこゝには。（ト思入。）
五右　何さ、今の奴がひつ抱へて。

久吉　すりやあの彼奴めが。
五右　あいつも盗人根性が有ると見えた。
久吉　その盗人の内弟子でも、互に子供のつい知らず。
五右　それよな毎晩働きから、歸つた所が車座の勝負は知らず、漸くとこんな加留多の差向ひ。
　　ト今の歌かるたを切り、久吉と我前へ撒き、久吉思はず知らず、並べ乍ら。
久吉　ほんに思へばその時分はうから〳〵と。（ト上の句を見て。）春過ぎて夏來にけらし白妙の。
　　ト五右衛門かるたへ手を掛ける。
五右　衣。一つで着換もないその猿之助が關白とは。しかし三本毛の足りないほんの猿丸。（ト取上げる。）
久吉　コリヤ此逢坂山に居城を構へ。
　　ト云ひ乍ら下の句へ手を掛ける、五右衛門押へて。
五右　どつこい逢つた。奥山に紅葉踏み分け。
久吉　啼く螢。
五右　ナニ螢が啼くものか。

久吉　啼かぬ螢も俺が威勢で、啼かせて見せるわ。
五右　あのおぬしが。
久吉　鹿でも猪でも違背なく。（ト上の句を取上げ。）啼くや霜夜のさむしろに。
五右　オットこゝにあつた。（ト取つて打付け、直に上の句を取上げ。）喜撰法師、我庵は都の辰巳鹿ぞ住む。
久吉　都の辰巳鹿も住む、その南禪寺の山門に。
五右　石川や濱の眞砂は盡くるとも。
久吉　世に盗人の。

ト手裏劍を打つ、五右衛門これを受止め、闘内此時窺ふ。

五右　や。
久吉　その場の返禮。
五右　そんならその時、

ト此間なる、此時ドント鐵砲の音、これに當つて門内苦しみ死ぬる。此途端に花道好き處へ大淀姫好みの形にて、鐵砲を持ち窺ひせり上る。

今の筒音は。

久吉　仰山らしい。
五右　鐵砲咄し。
久吉　友市よ。
五右　猿よ。
久吉　今宵は夜とも、
五右　ドレ、
兩人　話さうか。

ト誂への鳴物になり、花道山吹の茂みより大淀姫窺ひ、そろ〳〵と本舞臺へ來り、閒内が帶してゐる袋入の一腰を取る。此間五右衛門久吉餘念たく歌加留多を取ってゐて。

久吉　忍ぶれど色に出にけり我戀は。
五右　物や思ふと、人の來ぬ間に。

ト大淀姫へ腮にて思入。大淀姫心得一腰を拔きかける、ト千鳥の香を發す、これにて大淀姫一腰を捨て懷中を押へる。五右衛門久吉思入。大淀姫舞臺へ飛び降りる、久吉ソレと立つ、五右衛門入れ替って、三人よろしく屹度見得、合方變る。

久吉　我を忘れて餘念なく、危い目にぞ淡路島、

大淀　通ふ千鳥の啼く聲に、つい仕損じて本意なくも、

五右　幾度寢覺めの須磨の關守、

久吉　その關守の許なく、忍び込んだる女こそ、

大淀　噂に聞いてか不知火の、私や筑紫の爪琴といふ、

五右　ずつとすべたな强盜か、

久吉　イヤ此程迄養子とせし大淀姫が、

大淀　アイその姫君が勘當うけ、とう／＼盜賊、それ故に。

五右　盜みに來たか、

大淀　知れし事、

久吉　此首を。

ト五右衞門ぎつくり、大淀姫思入あつて。

大淀　サア養子の中は義理ある親、久離切られて他人の爪琴、戀しいお人へお前の首、取つて上げたさ今の仕儀、どうぞ誼みと思うてなら、私に切らせて下さんせいなア。

久吉　ム、そりやいと安い事身共が首、しかしやつても刃鐵が立つまい、ハテ既にころりといふ處

を、反てそちが懐中に所持せし千鳥の香爐が、音を發せし故仕損じたは天の佑ける眞柴久吉、どうして手に乘る子ではないわえへ、、、、。

五右　その廣言も今の時、千鳥の香爐を蜀紅の錦に包み置くならば、その願はといつた處が、後の祭か。

大淀　私もよもやと、そこ迄に氣の付かなんだは、盗人にまだ青いと見えたわいなア。（トこなし。）

久吉　いづれをいづれ、久吉が首を目掛ける盗賊の、さゝいな葛籠を盗みしは。

五右　イヽヤ盗まぬ此葛籠、こりやア松下嘉平次が持ち傳へたる所持の道具だ、云はゞ御子息友市が脊負つて行くのに何の言分。

久吉　ヘエ、扨は母親連子の男子、我が有付かぬその先に家出と聞きしが、スリヤそちが。

五右　さうとも知らず子供の朋輩、モウこれからは松下が養子の友市、下郎の兵吉請狀手形のあるうちは、よし天下でも天子でも、貧棒搖ぎもさしやアしないわ。

大淀　こつちも主の筋目ある小田春永の落胤、縱へ盗賊盗人でも、家來の久吉よもや手さしはなるまいがな。

久吉　ムヽ。（トつかえる。）

五右　その春永を主取りも、桶皮胴の使ひ先、養父の黄金横取りして。

久吉　サその黄金も、盗賊の不足はあるまい、鎧にて渡し申さば、請状を。

五右　ちつとさうも御座るまい、しかしおらア鎧は入らない、盗賊がなんの不用ナ。

久吉　さうであらうが、そこをひたすら、ヤア〳〵それなる鎧をこれへ。

ト奥にて。

主
源　畏つて御座りまする。

ト管絃になり、主税、源吾奥より鎧櫃を持つて出で來り、舞臺好き處へ直して。

源吾　御意に隨ひ、

主税　鎧をこれへ、

兩人　持參致して御座りまする。

五右　今更ほんの言譯に、塗も剝げたる古鎧、

大淀　定めしお胴もばら〳〵に、

五右　手數喰つた桶皮胴、きり〳〵持つて。

トあちらへ遣らうとして、蓋取れると、中より順親太子顏を出す。

久吉　小具足なれど順礼太子、コリヤ請取らずば成るまいがな。
五右　氣に入つた、桶皮胴のその代り、
大淀　そんなら、それを、
久吉　請取つたなら、此方も、
五右　いかにも請状返してやらう。（ト懐中より一札を出し。）親判請判脱かずにその儘。
久吉　確に落手、マアこれ迄は、（ト受取る。）
五右　何も云はざる、
大淀　聞かざる、
久吉　見ざるは助けて、
大淀　此まゝに、
五右　猿めが味を。
久吉　夜明けぬうちに、歸つてゆつくり、
五大　ヤ。
久吉　晝寢でもせいさ。

ト唄になり、久吉こなしあつて、主税源吾附添ひ奥へ入る。兩人殘つて思入。

五右　何はともあれ、思ひも寄らぬ順禮太子、我手へ送りし上からは。

大淀　片時も急ぎ隱家へ。

ト管絃になり、下手より矢田平出て來り。

矢田　お頭、氣遣ひさつしやるな、そりやア小鮒の源五郎が。

五右　出來した〱、一軸所持なす上からは。

矢田　しつかりと預りました、そんなら先へ。（ト鎧櫃を引抱える。）

大淀　ちつとも早う。

矢田　してこいな。

ト管絃になり、矢田平鎧櫃を持ち、逸散に向うへ走り入る。

大淀　サア此上は禁庭より、小田家へ預る、蛙丸の在所を早う、五右衛門殿。

五右　イヽヤ尋ぬる迄もない、そりやア疾くよりこれに帶して。

大淀　ナニあのお前が。

ト思入、此間葛籠をそつと開け、中より五右衛門の母出てこれを聞き。

母　蛙丸をば。

ト いふを五右衞門見て。

五右　その御不審理ながら、仔細は後にて何は差置き、事をなさんに大切なる此御劍、母人所持して、一先こゝを。（ト帶せし劔を母へ渡す。）

母　オ、氣遣ひ召るな、二品は母がしつかと預れば。心置きなう久吉の。妾はこれよりさうぢや。

ト 下の方の井戸の中へ飛込む、五右衞門思入。

五右　ヤ、、コレ母人。

ト 井戸の傍へ立寄ると、中より煙硝火パッと立つ、これにて遠寄せの頭を打込む。屹度なつて。

あの遠寄せは。

ト 思入。大淀姬も思入あつて。

大淀　御身を取捲く、敵の遠寄せ。

五右　ヤなんと。

ト 大淀姬懷中より竹鑓の切先を出し、直に脇腹へ突立てる。

ヤ、、何故あつて。

大淀　コレ光秀殿。（トシノ入の合方、やはり遠寄、大淀姫思入あつて。）身は百姓の孫ながら、父と云ふのも勿體なき桓武の御末の春永公、過ぎつる二條の沒落に紛失なせし蛙丸千鳥の香爐諸共に、行方知れねば繼目叶はず、在所いづくと漂ふ夜船、假の契に別れたる、其時落ちある香爐に、扨はと思ひ男の跡尋ぬる間に情ない、たつた一度の戯れに儲けし胤も女子の因果、世にあらせたく久吉殿へ密に賴み養女となりて、さいつ頃あの清水で見かけし故、確かそれぞと思ふたに違はぬ小田の蛙丸、それ見出さんとあられもない盜賊の名も我子の爲、順觀大子と今見えしが則ちお前の、サアあの子を世繼に立てたいばつかり、惡事を巧し家國を納め、父君殺せし敵の身寄武智左馬五郎といふ逆賊の、どうぞ命が助けたく、お前と我子のその爲に、心盡しをこれ申し、マア推量して下さんせいなあ。

ト苦しきこなし、此間五右衞門無念の思入あつて。

五右　エヽ口惜しい、父の無念と主人の怨敵、國の仇たる眞柴久吉、思ひ立つたる我存念、いらざる女が最後に弛み、何とてやはか止らうや。

大淀　ソレその一途なが猶恐しい、國の掟に淺間しい死を遂げるより、此場にて。

ト五右衞門立ちかゝるを、大淀姫止めて。

そりや憎からう道理ぢやが、其言譯の此鋒先、小栗栖村に光秀を土民の突きし竹鑓に、又もや小田の娘が生害、此で恨の心を晴し、現在子の爲善心になつて下され、何處迄も諫めて淸う。

　ト立上るを直に五右衞門その首をポンと打落す。遠寄、五右衞門思入あつてつか〳〵と花道の方へ行く、此間下の方より主税高股立鑓を持ち出で五右衞門を遮る。これにて又五右衞門上手へ來ると源吾同じ拵にて鑓を持つて支える、トゞ兩人一時に突いてかゝる、五右衞門立廻りあつて源吾たぢ〳〵と倒れる、五右衞門は二重舞臺へ上る、主税これを見て續いで來るを、五右衞門手早く刀を拔いて御簾の吊紐を切る、これにて御簾ばら〳〵と落ちて五右衞門を隱す、主税刀を拔いて追駈け二重へ上る、此時御簾の內より白刄出て主税を貫く、ハツと云うて苦しみトゞ兩手を御簾へ掛けたまゝ此御簾をちぎる、切れし心にてばたりと落ちる。內に五右衞門大百日にて血刀を提げ、好みの形にて立身、主税ポンと返る。五右衞門屹度見得。誂への鳴物になり思入、又遠寄、源吾心付き起き上つてかゝるを、一寸立廻りあつてトゞ源吾逃げて向うへ行く、五右衞門花道まで追駈け行く、此時奧にて。

久吉　ヤア〳〵武智左馬五郎、そこ一寸も動くまいぞ。

五右　なんと。

　トつゞみツヽカケになり、正面より久吉誂への形にて唐冠と團扇を持ち立身、下手より小新吾始め大名五人いづれも凛々しき形にて弓矢を持ち出て來る。五右衞門これを見て。

ヤア願ふ處の眞柴久吉、汝が首を。

トつか〳〵と舞臺へ立戻る、皆々隔てゝ。

皆々　小癪な事を。

久吉　へゝゝ、その方いか程逸ればとて、搦め捕らんは安けれど、汝が伜を助けんと孫を憐み松下の後室自害を遂げし上、小田の重寶二品を術なく渡せし恩賞に、そちをも助命なすからは實名あかして降參致せ。

五右　ヤア舌長なる猿冠者め、母自害なし二品を渡せしなぞと僞るとも降參いやだ、本名も武智左馬五郎といふより外、名乘る名は持たぬわ。

久吉　オゝその疑ひもたつた今、ヤア兩人早くその品持參なせ。

ト向う揚幕の内にて。

小正　畏つて御座ります。

トカケリになりゝ向うより順禮大子實は小田小次丸凛々しき形にて蛙丸を持ちゝ續いて矢田平實は佐藤正淸、千鳥の香爐を三方へ載せ持つて出て來り本舞臺へ來る。五右衞門これを見て。

五右　こりやアどうだ。

正淸　愚や五右衞門、片腕と賴みし矢田平に面體似たを幸に、彼奴を殺して一軸を證據となして、

小次　心を許させ手に入れたる某こそ、眞柴の忠臣佐藤正清、それのみならず汝が倅と僞りしも。
　　　それも今では小田の跡目の小次丸春孝、なんと膽が潰れたか。
奴　　奴も此度は實事師。
久吉　サア俗性を。
皆々　明すまいか。
五右　ム、扨は實正、母人にはあゝ殘念な、父が恨と亡君の仇を報んその爲に、計る〳〵と思ひしに、うぬらに反て計られたか。此上は何か包まん、此土へ渡つて松下の養子となつて、武智の臣下たる五郎光俊から强盜の張本石川五右衛門、眞は大明神宗の養臣左將軍宋蘇卿が一子、四百餘州を根城と定め、この日本を羽翼の下と、思ひ立つたる謀反の大鵬蘇友と呼ばれし豪傑だわ。
　　　サア此上は久吉と。
正清　ヤア毛唐人めが、及ばぬ望み、
春孝　心を改め、
皆々　降參なせエヽ。（ト詰寄る。）
久吉　ヤレ仰々しい皆控へい。いかに蘇友、君父の仇を報ぜんとは、敵ながらも頼しい、その忠孝に

めで、久吉が豫て手に入る、そちが實父宋蘇卿が唐冠團扇、これを汝へ與へ取らする。切ての
思出、この品を。（ト渡す。）

五右　スリヤ父の筐。

久吉　それにて後日に、はな〴〵しく。

五右　いかにも一反立別れ、勝負は重ねて。

皆々　先づ、それまでは。

五右　猿冠者ならぬ大領久吉。

久吉　蘇友にあらぬ石川五右衛門。

五右　方々さらば。

皆々　さらば。

ト打込みになり、皆々よろしく見得にて大詰。

幕

和田合戰女舞鶴（わだぐわつせんおんなまひづる）

和田合戰女舞鶴

序幕

藤澤入道館の場

板額門破の場

役名　藤澤入道安静、藤澤四郎、荏柄の平太、淺利の與市、城の九郎、齋姫、與市妻板額、腰元等。

藤澤入道館の場　本舞臺三間の間常足二重、向う一面の金襖、上手一間の屋體折廻し久宗張障子を建て、下手落間、網代塀、柴垣植込、都て藤澤入道館の體。こゝに腰元三人、眞中に縟脇息紙臺等直し居る。琴唄にて幕明く。

〽立歸る、佞者は賢者の紛れもの、慾と惡とにからまれし藤澤入道安静は、齋姫を預り參らせ、和田北條が確執の日々に募るを松ヶ谷、おのが館の奥御殿

かゝづく心に、一物の巧みあることそ道ならぬ、お側に附きし腰元はした、御用の隙はお仕着の人こと交る色話。

腰一　何と皆さん、齋姫君樣の御煩ひ、何がなお氣の晴るゝやうにと思へ共、朝夕のお膳さへ御進みなされず、只うつ／＼と物思ひ。

腰二　爲氏樣に惚れて御座る姫君を、北條殿や和田殿が固い顏で女房あらそひ、あなたの爲には大きな惡魔、それ故か此間はふら／＼と戀煩ひ、ひよんな事ではないかいの。

腰三　さいなう、此間はふら／＼とのお煩ひ、またその上に取り交ぜて、荏柄の平太がお姫樣に附文してしみしたゝるい文章、返事にほつとあぐんでお出なさるゝわいなう。

腰一　ほんにまア、あだいやらしいあのやうなむつけ男、誰が殿御に持たうぞいなう、男ひでりはしはせまいしホヽヽヽ。

〽折柄來るは荏柄の親族の九郎資國、昔細工の固造り乳人役の御病氣見舞、しかみし顏をにこ／＼と玄關より直ぐ通り。

ト此うち腰元二三は奥へ入る。腰元一は下へ降り出向ふ。鳴物中の舞になり城の九郎えんでん上下大小にて、すた／＼出て花道へ住ひ。

九郎　ホヽオ今日は御機嫌が好いやらして、女中方にもいろ〳〵と賑しい、九郎めが參つたと姫君へ申しておくりやれ。

腰一　テモ堅苦しい、每日の御見舞に、案內とは御遠慮深い。

九郎　イヤ〳〵さうでおりない、親しきに禮儀あり、御主人と云ひ、殊に女儀、直に通るは無禮の至り、是非に取次賴み申す。

腰一　テモ御遠慮なされず、まづ〳〵あれへ。

九郎　然らばそれへ參らうか。（トこれにて城の九郎舞臺へ來る。）

〽取次賴むとせちがな聲、洩れてや奧より齋姫君、めつきりとひと目に見ゆるおんやつれ、しめやかに立ち出で給ひ。

ト城の九郎下手に住ふ。奧より齋姫振袖にて、腰元二三手を取り、女小性二人附添ひ出て來り、褥の上に住ふ。腰元小性左右へ住ふ。九郎齋姫を見て平伏する。やはり琴唄合方にて。

齋姫　思はぬ人に思はれて思ふ戀路の叶はねば、我のみひとり身を焦し明くるも知らぬ自を、問ひ慰めんと老人の、行く日も來る日も厭はずに憂苦勞をしやるなう。

〽よゝとばかり打ち恨み、すねさせ給ふぞいたはしき、資國眉に皺を寄せ。

九郎　思はぬに思はれてエヽ聞えた、和田北條が事を悔みか、アヽきな〳〵と埒もない、そりや何を仰る、それを苦にして御座る故その御病氣、お心に入らねば此禿がどちらへもやりはしませぬ。誰なりと好いた男を持つしやれ、何誰の御意でもそこが緣づく、いやなと思ふ夫婦緣は打ちみしやいでも結ばぬものさ、又好き合ふといふ段には格別、拙者が姪の板額女には幼少にて二親に離れ、みなし兒になつたる故、我娘同然にもり育て成人した形を見れば、面はさのみ見苦しうも御座らねど、關取角力見るやうに大女房、力の強いばかりが取柄、それをサアお聞きなされい、鎌倉中で隠れのない風流男淺利の與市が戀女房、しかも中がよろしく當年十一になる市若とて男の子まで儲けました。こりやこれ互に陰陽和合致したと申すもの、お前樣にも充分に氣に入つた殿御を持たせ、かの和合を好くさせて若君をば見にやアならぬもの。ムヽヽハヽハヽイヤ落着いて御座りませう。

〽おかしみ交りに逆はず、機嫌取るうち勝手より。

ト九郎よろしくこなしある、此時向うより腰元四出で本舞臺へ來り。

腰四　ハツ申上げます、荏柄の平太胤長殿、尼君よりの御使者として、只今これへ、御出でゝ御座りまする。

九郎　ナニ悴が御使に參つたとや、あゝ幸ひ〳〵、お氣晴しにわつさりと浮世噺の輕口でも、云はせてお聞きなされませ。私がお傍に居ては窮屈で話も出來まい、聞きや入道も留守とやら奥へ參つて歸りを待受け、年寄同志は後生噺、昨日半分當てつけた、提婆が惡の耳こすり、すつけり云うていやがらし妙藥一服用ひてやらう。イヤ姫君後程お目にかゝりませう。

〽云ひ捨て一間に入りにけり。

と城の九郎は一禮して奥へ入る。

〽腰元共はさゝやき合ひ。

腰二　尼君樣よりお使とは、何と噓ではあるまいか。

腰三　ほんにそれも知れぬぞえ、またあなたへ何のかのと面惡い事云ひに來たのであらうわいなア。

腰一　それ〳〵どのみちお會ひなさるゝはいらぬもの、御氣色が惡いと噓云うて、平太めを勝手より追戻すが上分別、ナア申し姫君樣。

齋姫　イヤ〳〵僞りにもせよ、母樣の御意とあれば麁末にならず、縱へ平太が道ならぬ不義不屆を云はうとも、自が思案もあり皆何も構やんな、それ平太こゝへと云や。

腰四人　ハツ。

〽こゝへ通しやと宣ひ給ふ處へ、袴肩衣いためつけ御前掛りの實體なる、顏に似合はぬ色好み、したゝる目にて庭前へ通れば、いつよりいとゞ姫君は御詞やさしげに。

ト鳴物調べにて、向うより上下衣裳大小好みの通りにて出て、本舞臺へ來り下手に住ひて。

齋姫　ナニ母樣のお使とや、退儀々々近う寄りや、御口上か、但し又御文でも送り給ひしか。

平太　アイヤお使は御口上ばかり、さして變つた事も御座りませぬ、此度和田新左衛門北條の嫡男江間の太郎兩人より、お姫樣を達ての所望、何れも天下の大老なれば片手落の料簡も成り難しと、尼君にも御心を痛め給ひ、兎角姫が御心底次第どちらへなりとも、いやあいの御返事を承つて參れとの仰せ、ナ御嬉しう御座りませう、ア、御果報な方々から惚れられては、澤山行きたい方へツツト御座れ、サア片付けて御返事承りたう存じまする。

〽詞の無用なを聞き流し。

齋姫　テモ何事かと思ひしに結構なお使、わしや北條へも和田へもいや。

平太　さやうならば何方へ。

齋姫　ハテ何處とは、こなたにたんと。

平太　アノ惚れて御座ると仰しやるか。

齋姬　それ程よう知つて居乍ら、何の尋ねに來る事があるぞいの、とは云へ我が身には綱手と云ふ女房もあり、鎌倉では暮されまい、自を連れ都へ立退きや、どんな辛さも厭ひはせぬ、こつそり二人暮しては、どうぢやぞいなう〳〵。

〽やいの〳〵としなだれて、手を取り給へば振り放し。

平太　ハヽヽテモしら〳〵しい、取り掛けてごらうじても、滅多に深い所へ參らぬ、爲氏殿に首ツたけいきついて御座るのを知るまいと思召すか、我らに此家をそびき出させ、道からついと都の方、戀し床しの爲氏殿とこつそりとやらうでの、ハテマアさうはエヽ致すまい、腰元中も知つての通り、いつぞやから千本程送つた文、返事でさへ一度もなされぬお姬樣ぢやないか、それともほんぼんの御心なら、ちつと手附の緣結び、後とは云はずたつた今。

ト平太齋姬の振袖を捉へる、振拂ふ、平太むつとするこなし。

〽いだき付くを突放し。

齋姬　ヤイこゝな畜生め、和田北條が自を妻にせんとせり合ふさへ、慮外と思ひ口惜しきに、女房子を持ち乍ら、狀文送りて不義を言ひ掛け、剰へその雜言、疾より老中の耳にも入れ、憂目を

見する筈なれど、親資國が忠義に免じ、今迄胸をさすりしに、重々の不埒者、サアそこ立ちや
サア行きやエ、穢しい。

〽聲はしたなく睨めつけ、以ての外の御氣色にて、一間に入らせ給ひければ、
つきつきは口さがなく。

ト平太齋姫にしなだれるを、姫きつとして氣色を變へ、女小姓を從へ奥へツイと入る。平太あきれし證、腰元皆々こなしあつて。

腰二　御使を脇にして迚も及ばぬ色詮索、
腰一　當の槌が頰邊へやつて參つて、
腰三　よい氣味の、
腰四人　ハヽヽヽ。

〽どつと笑うて走り入る。

ト腰元は奥へ入る。平太はむつとして。

〽平太は無念、骨髓に貫くばかりの、目のいろにて。

平太　此上は是非もなや不忠不義とは言ひ乍ら、かく面恥かゝされて何面目に永へん、迚も死ぬべき

命なら戀ひ焦れたる齋姫、後に殘して余の人の果報させるも妬しい、和田北條も我とても變らぬ家來の望み事、一念徹さでおくべきか。

〽獨言して奥の間へ窺ひ〳〵。

ト平太きつと奥を見詰め見得、ツカ〳〵と奥へ入る、あと淨瑠璃オクリにて。

〽行くぞ不敵なる。程なく旦那のおかへり〳〵。

ト向うにて。

よび　旦那のおかへり。

〽下部が呼はる權柄、のつさ〳〵肩肱張つて立歸れば、嫡子四郎出向ひ。

ト序の舞になり、向うより藤澤入道長絹上下好みの形にて、供の侍附添ひ出て直に舞臺へ來る。奥より子息四郎上下大小にて出向ひ。

四郎　ホヽ、親人には未明より御他行、何方へ御越しなされた、最前より城の九郎も奥へ參つて待つ退屈、一寸お逢ひなされぬか。

入道　ムヽ、資國が參つたは毎日の病氣見舞、對面にも及ばず、それにつき其方に云ひ聞かし置く大事あり、近う。

四郎　へ、ツ。

ト替つた合方になり、入道こなしあつて。

入道　某謀て天下の望み、先將軍賴家の馬鹿者をそゝり上げ、まんまと阿呆に身を入れさせ、詰腹切らせしに、和田北條が安穩では大望成就思ひも寄らず、その節篤と工夫を廻し同士軍をさせんと思ひ、痴者の賴家が使者と僞り、一人の姬を兩人へ成人の後妻にせよと、汝と某云ひ入れ置きしに案の如く不和となり、遂には巧みの目度に落ち、こゝに弛みを付けまいと、今日も又さう／＼より北條が館へ立ち越へ、勘忍のならぬやうに毒氣を吹き掛け、その歸りに和田へも寄つて同じく中間け置きたれば、近日軍を始めるは必定、これ兩虎爭ふ時は一虎遂に亡ぶといふ謀、兩人さへ滅しなば、實朝殺すは手間隙入らず、その時こそは天下の世繼、後先に心を付けよ、合點か。

四郎　ハアヽ、恐れ乍らあつぱり妙計、いかさま心に懸るは彼奴等二人、手も濡さず滅すとは親は親だけの分別、天下の世繼となつたれば、西海を庭へ取込み富士の山を築山、獵すなどりは常のたのしみ、これも親人の御蔭、只々有難う存じまする。

〽山も見えざる高くゝり、うなづき合うて居る折柄、俄に騷ぐ奥の騷動、腰元

共聲々に。

ト バタ〳〵になり、奥より腰元二先に、侍二人臺の上に姫の死體を載せ出て、下手へ住ふ。

〽首なき死骸を、腰元共涙乍らに舁ぎ出る。

腰二　ハツ荏柄の平太胤長姫君樣に不義いひかけ、戀の叶はぬ意趣ばらし、御首を討つて立退きまして御座ります。

〽なく〳〵より、入道親子大に騷ぎ。

ト 入道親子びつくりこなしあつて。

入道　ヤ、、、ナニ姫を討取り平太が立退きしとや。

四郎　シテ親人にはいかゞなされまする。

入道　ア、、サ何はともあれ姫が死骸取り片付けい。

侍　ハツ。

ト 死體を侍に持たせて、腰元二引返し入る。

入道　スハ一大事出來せり、此の通り御所へも注進、諸大名へも觸れ知せよ、駈付ける武士改めて、荏柄が一家とあらば門外より追返せ、主殺しの一族異議に及はゞ打殺せ、四方の門固めい〳〵。

四郎　畏つて御座りまする。

入道　まだ／＼申し聞かす事こそあり。コレ。

　ト入道傍へ來いとこなし、四郎傍へ寄る、兩人囁き。

四郎　然らば親人。

入道　こりや。

　ト押へる、四郎あたりへこなし。

〽聲をばかりに呼はつて、上を下へと。

　ト兩人へあたりへこなし、屹度見得、早舞三重にて此道具。

ぶん廻す

同館表門の場　本舞臺眞中常足二重此上へ誂の大門を飾り附け、左右とも高塀、下方松の立木、同じく釣枝、都て入道館表門の體、どん／＼にてよろしく道具納まる。

〽返しけり。かくと聞くより淺利の與市、下部にかゝせし女乘物ぽつ立て／＼、眞一文字に駈け來り、門外に大音聲。

ト矢聲どん〳〵にて、淺利の與市上下衣裳大小にて先に立ち、侍に守刀を持たせ、後より下部門人に女乗物を擔がせ、向うより走り出で直に舞臺へ來り、乗物は下手へ置き與市は上手へ通りきつとして。

與市　荏柄の平太胤長姫を討ち奉り行方知れざるよし、徒黨の者詮議の爲評定の役人淺利の與市駈付けたり、早く門を開かれよ。

ト上手の塀より四郎顏を出し。

〽早く〳〵と呼はる聲、聞くとひとしく藤澤四郎、物見の塀にをどり出で。

四郎　ヤアならぬ〳〵、貴殿の內儀板額は荏柄とは從弟同志、主殺しの一類竹鋸の相伴人、館へ歸つて待つてけつかれ。

與市　オヽ汝等親子が性根に較べ、さうあらうと察せし故、目の前にて離別せん爲愚妻も共に召し連れたり、後日の證據にこれを見よ。女房板額それへ出よ。（ト乗物に向ひきつと云ふ。）

〽と呼び出せば。

板額　アイ。（ト駕の內にて返事あつて）

〽あいと返事はなよ竹の樋につまりし思ひにて、打ちしほれてぞ立ち出る。

トそれにて板額鶴の丸の附きし襠の衣裳にて、しほ〳〵と乗物より出で。

〽与市詞を押し鎮め。

与市 先達仔細語らんと思ひしかど、館には倅市若早や十一才の子心付き、別れを悲しむ不便を思ひ計つて様子も云はず、今聞く通り荏柄の親戚の九郎は汝が叔父、近き一家それを恐るゝではなけれども、評定の役儀を蒙り、其一列をはぶかれては武士道立たず、すつぱりと縁を切り、他人となつて平太が詮議、胸の鏡を磨く為暇をくれる、女房むごしとばし思ふなよ。

〽むごいとばし思ふなと、云ひ聞かすれば板額女、顔もあげずにしほ〳〵と道理に服す血の涙、只悲しくも手をつかへ。

板額 役儀に就てのお暇と事を分けての御詞、無理とはさら〳〵思はねど、かりそめならず十年に餘り子までなしたる夫婦仲、さつぱりと切れる縁を、マア暇やるとつい軽う、マアといふ字が後の楽、上は女御お后から下は内方裏嬶まで、夫に去られ何のその、まゝよと暮すは若い時、三十路も越しおかゝさまと慕ふ子を持つて、長い別れをする心。

〽ちつとゝやつとゝ思ひやり、料簡つけて見てたべと、泣きしほるれば。

与市 ヤア未練千萬、市若は我子粗末にせうか、常の性根に似合はぬ繰事、早く此場を立歸れ、ソ

レ暇の印。

へと投げ出す一腰、はつとばかりに胸せまり、前後不覺に見えにける、物見の上より四郎清近。

ト與市守刀を投げ出しやる、板額取つて愁ひのこなし、塀越にて四郎此體を見て。

四郎　ハヽヽ、好い仲の戀諍ひ、門前であぢやらるゝ、土佛の內儀も大力と聞きしに違ひ、きついめろ〳〵、其手で館へ入らうとはいつかな〳〵、內證の言合せ、うま〳〵喰ふ四郎ぢやないぞ。

與市　ヤア荏柄と他人になつたる某、是非通さずば此門一重打破つて通るが、通すまいか。

四郎　ム、破らるゝなら破つて見よ、理不盡に通るなら君へ對して狼籍者、反逆人も同然だぞ。ソレ者共討つて取れ。

大勢　ハヽア。（ト門の中にて皆々返事をする。）

へ呼はる聲に我討取らんと待ちかけたり、流石の與市も狼籍と上の聞えを憚りて寄り付かず、とやせんかくやと身をもかぎ、館を睨み拳を握り詮方もなき有樣を、見るに堪へ兼ね妻の板額、茲ぞ夫へ奉公と、淚拂うてすつくと立ち。

板額　オヽ去られた女房は三界に家なし、家がなければ主もなし、誰に憚り遠慮せん。

トきつとなりノリになる。

へ縦へ此門磐石にて堅めるとも、夫思ひの我念力やはか通ふさで置くべきか。と飛び掛つて尺に餘るを引抱へ、えんや〳〵と押す程に、すは[illegible]破らずなと數多の家來が柱に取付き、扉にひつき體を榱と押合ふたり、女もこゝを破らずば夫も我も顔汚し、一世一度の晴業と、惣身の力を兩腕に柳の腰も古木となし、搖り立たる欅門、四十五間の高塀も共にゆられてゆつさ〳〵瓦はばら〳〵、家根はふは〳〵不破の關屋の板庇、風にもまるゝ如くなり、四郎もあぐみ。

ト此うちノリにてよろしく身拵する事あつて、勇んで門を破らんとして與市と顏見合せ會釋して、二重へ上り門へ掛りゆさる。此うち四郎せゝら笑ひこなし、門の内にて皆々アリヤ〳〵の聲ある。板額門を押せども動かぬ故、片裸脱できつとなり鼻紙を門柱へ當てじり〳〵と押す、これにて屋根の瓦左右の高塀動く。これにて四郎ぶる〳〵して。

四郎　ア、これ〳〵與市殿々々々、御内儀の悪あがき、足の下までゆさつて來て、目を舞ふさうな。ア、これなう制して下され〳〵、見ぬ振とは胴慾ぢやわいなう。

〽頼めど詮なく是非もなくうんと一押し金剛力、礎土を掘り返し門も塀も一時にめり／＼くわつたりびつしやりと、おしに打たれて死ぬる人、こは叶はじと逃ぐる人、四郎も共に舌振ひ跡おそろしと逃げ入れば、板額はいそ／＼と、是ぞ夫の機嫌直し、何でも手柄と紋つくろひ。

ト板額よろしく門をこわし、きつと見得あつて、二重より下へ降り、しづ／＼と下手に控へ。

板額　イザ心ようお通りあれ、道開き致しまして御座ります。

〽自慢笑顔も思ひの外、淺利の與市はつたとねめつけ。

ト與市きつとなつて。

與市　ヤア推參な女め、門打破つて通るなら、おのれが力を頼むべきか、上へ對して狼藉の共に不覺の名を取らす、言語同斷不屆者。

〽叱りつけられ、がつくりと。

板額　どうしたら又御機嫌に入る事ぞいなア。

〽入る事ぞいのとどうと伏し、泣くより外の事ぞなき、折節奧より使の役人。

ト板額うれひのこなし、泣き伏し居る。これにて門の内よりバタ〳〵にて、菖蒲皮の侍出て、與市に向ひて。

侍　ハツ淺利殿へ、城の九郎殿御挨拶なされたしとの儀、はや〳〵お通りなされませう。

與市　ナニ荏柄が親の城の九郎が參つてゐるとな、それぞ好き詮議の手懸り案内致せ。

〽白砂蹴立て、一散に奥をさしてぞ駈り行く。

ト侍先に立ち與市行かゝる事ある、板額袖を捉へる、振拂ひきつとして門の内へ入る。

〽板額はつと胸せまり。

板額　資國殿は自が伯父、姪聟の我夫といかなる事が出來やうやら。

〽案じに騒ぐ折こそあれ、入道親子が下知として、門を破りし女め叩き伏せて生捕れと、熊手さすまた長柄を力に右往左往に押取捲き。

トどん〳〵にて門の内より、四郎先に立ち捕手人數六人花四天の形にて、鑓さすまた持ち出で來り、四郎こなしあつて。

四郎　ヤア〳〵板額。（トノリになる。）うぬが力の自慢顔、あかずの門をば腹太鼓、雷門の落ちるよな、ぐわら〳〵ぴつしやり破られては、筋金門でも金門でもにやんとも云はぬ猫の門、此では老門

しやうもない、うぬそのまゝに歸りなば一家一門祟が行く、討手に向ひし某を山門とも思はず
に、穴門ずつたるのほうづ門、身共が仁王門なればよし、イヤぢやなんぞともんすが最後、己
が命を虎御門もんもがいてももん叶はぬ、首を渡すか腕を廻すか、返答はサア〳〵南門〳〵。

〽南門々々〳〵としゝめいたり、板額ふつと吹き出し。

板額　シヤしほらしい青蟲めら、坊主憎めば袈裟とやら、一人二人は面倒な一度にかゝれ。

〽身繕ひして待ちかけたり。

四郎　エヽその舌の根を、ソレ者共。

皆々　ハアヽ。

トこれより謡へ太鼓入の鳴物になり、板額捕手を對手に面白き立廻りになる。

〽捕つたと寄るを右左、車返しに取つて投げ、又來る二人をひつ掴みじつと締
むれば、敵なくも此世の縁は切れにけり、まいて捕らんと突棒の、刺股足へ
くるまとぢ、しづんで兩手にしつかと取り、やらじと大勢取付くを、ゆすり
こぢらし振り拂ひ、又一振りふつて突き放せば、バラリ〳〵と。

ト立廻よろしくあつて、トゞ皆々かなはじと下手へ逃げて入る。板額追駈けんとするを四郎長刀にて打つてかゝる。四郎の長刀を取り一寸立廻りあつて屹度見得。三重どん〳〵にて、此道具。

ぶん廻す

本舞臺元の常足の道具へ戻る。

ト寄せ太鼓早めもやうの合方にて、下手より以前の捕手皆々、板額長刀にて追廻し出で來り、捕手はう〳〵にて下手へ逃げて入る。

〽みなちり〳〵に逃げ行けば。

ト長刀を投げ捨て。

板額　イデ此上は入道親子。

〽首引拔かんと駈込むを。

トきつとなつて上手へ行かんとする。此時奥にて。

與市　ヤレ板額、暫く待たれよ。

〽淺利の與市押止め。

ト與市奥より上下衣裳、小にて、三寶に九寸五分を載せ出て來り、思入あつて。

汝が伯父の資國大老中の評定極り、切腹を仰せ渡され、則ち某が介錯、最期の別れを惜しまれよ。

ト板額ハ、ア、と泣き伏す、與市は上手へ住ふ。

〽最期の別れを惜しめよといひかけられて、ハツトばかり吐胸の涙打交り、暫く佇む折柄に、城の九郎資國は子故に科を老の身の、麻上下に白無垢は冥途の道の晴扮裝、野邊の草葉の露よりも儚く消ゆる命ぞと、思ひあきらめ座に直る、淺利の與市切腹刀臺に置き。

ト此間侍四人切腹臺、白布四方華なぞ持ち出で、二重眞中へよろしく据える、直に侍は下手へ入る。
奥より城の九郎白無垢上下衣裳にて出で、切腹の座に坐る事、與市は威儀をつくろひ。

貴殿、子息平太と同罪を遁れ、武士の數に入つての切腹、太刀取の某まで何程か大悦、心靜に御用意なされい。

〽相述ぶれば、豫ての覺悟惡びれず、あの世へ急ぐ晴小袖、心靜に與市に向ひ。

九郎　ハア御苦勞千萬、因縁ある其許の御手にかゝり、冥途黄泉の道に趣くは老後の思ひ出、かへす

がへすも面目なき悴が積惡、主君の姫君に不義をいひかけ、御首討つて立退くとは、人情に外れし振舞、追付捕へられ御政法の竹鋸、見苦しい死を遂げ居るも、心柄とは云ひ乍ら切なき最期を遂げをらうと心に掛るはこれ一つ、又二つにはあれなる板額女、幼き時より孤兒となつたるを、伯父の役と某が手鹽にかけて育て上げ、貴殿の方へ嫁入させ子までなしたる甲斐もなく、飽きも飽かれもせぬ離別の悲しみ、さぞや口惜しからう本意なからう、取分け益なき女の力、人の憎みも受けうかと、そればかりが不便に御座る。ヤイ板額、伯父や夫のあるうちは人も恐れて避けて通る、かゝらう島のなき身には見侮つてゆるさぬぞ、必ず力を功に着な、十人力は百人の人數を以て叩き伏せ、百人力は萬人の軍勢を以て討つて取るやうに。

〽弱いに怪我はないものぞ。

今迄とは違ふぞよ、こりや短氣に命を失ふなよ。

〽子に云ひ聞す親よりも、深き御恩の有難さ、せきくる涙に聲顫ひ。

板額　謝りました、今迄はいかいお世話になり乍ら、愛想らしい事もならうお心傷める力業、此場になつてお命を助ける力もあらばこそ、君の怒りの一ひしぎ、かなはぬものは理法權とやら。

〽權と法とに我命、代りになしてたまはれと、口說き歎けば。

九郎　愚か〳〵、縱へ我子の業ならずとも、和田北條の爭ひに、某が預りし姫君を失ひ何言譯、只口惜しきは此家の主入道親子に一怨み、言ひ殘せしが殘念な。

ト愁ひのこなしにて、兩肌ぬぎ身拵へする。

〽奥を見やつて牙を嚙み、劒逆手に取るより早く、左の脇へさつくと突立て、右へきり〳〵と引廻す、ハツトばかりに板額が歎きと共に、淺利の與市苦痛をさせじと後へ廻り。

板額　伯父の敵は入道親子。

〽目に物を見せんと駈け行くを。

ト板額きつとして、奥へ行かうとするを、與市ねめ付けて。

與市　こりや待て、板額事荒立て、罪に罪を重ぬるか。

板額　それぢやというて。（トきつとして行かうとする。）

與市　達てと申さば、未來迄の夫婦の緣を立ち切らうか。

板額　またかいなア。

ト與市きつと云ふ、これにてしんきなこなしにて下手へ來り。

〽留るも禮儀、うつも孝。
ト與市肩衣をぬぐ。

與市　恩ある人は東極樂。
九郎　無意寂光の故郷へ。
板額　敢なく歸る老の身の、
與市　われは夫に捨てられて、
三人　定めなき世の、露しぐれ。

〽水の流れと人の身の、行方定めず別れゆく。
ト城の九郎は首を差延す、與市は太刀取して後へ廻る、板額は愁ひのこなしにて行きかけるを、捕手一人やらぬとかゝる、一寸立廻り板額首を掴む、これにて捕手目玉飛び出す、美事にこれを返す、三人よろしく愁ひのこなし、段切にて。

幕

二幕目

市若切腹の場

役名 淺利の與市、與市一子市若、源公曉、尼御前政子、與市妻板額、平太妻綱手、腰元玉の井、同初瀬等。

市若切腹の場　本舞臺三間の間高二重向う一面の金襖、上の方九尺の障子屋體暖簾口に笹龍膽の紋附し紫の幕張りあり、下手高塀にて見切りある、いつもの所に瓦葺き塀大門ミジ張り好みあり、此外に高塀後に高く、障子立切り同じく幕張ある事、下手よき所へ眞の鈎枝立木、こゝに腰元玉の井初瀬の兩人紅の梅椿の枝を持ち立合うてゐる、二重の上に〇局の拵にてこれを見てゐる。此見得よろしく、白拍子にて幕あく。

ト玉の井初瀬よろしく立廻りあつて、トゞ初瀬玉の井を散々に打ち。

初瀬　なんと玉(たま)の井殿(おゐどの)、打(う)つ程稽古(ほどけいこ)に身(み)が入(い)らうがの。

玉の　イヤモウ初瀬殿(はつせどの)はきついものになつたわいなう、わしらはとんと敵(かな)はぬわいなう。

〇　ほんに二人共(ふたりとも)その身(み)の難儀(なんぎ)、きようといものぢやわいの、尼君(あまぎみ)が荏柄(えがら)の妻(つま)をおかくまひなされた故(ゆゑ)、實朝樣(さねともさま)から數多(あまた)の軍勢(ぐんぜい)が向(む)かふとの沙汰(さた)、何(なん)でも負(ま)けては濟(す)まぬわいなア。

初瀬　それぢやに依つて、此のやうに稽古するのぢやわいなア。

玉の　今の手際では合點が行かぬ、こちらは、又日頃習ひました軍法の奥の手へ、命限りに逃込まうと思うてゐるわいの。

○　それ〳〵名ある武士と引組むより、可愛男と引組んで、死ぬる軍がして見たいわいなう。

兩人　何を云はしやんすぞいなう。

○　併し敵に後を見せるのは、女の身では大きな無作法、殊に身方には板額女、子まで生んだ大こんづよ、五萬や七萬の敵は空家で棒、頭で蠅、つい拜ますわいなう。

兩人　あれまだかいなう。ホヽヽヽ。

ト此時奥にて。

よび　申しお局樣、尼君樣が召しまする。

○　ハイ〳〵只今それへ參じまする。これ二人の衆よう稽古を勵んだがよいぞや。お前方の稽古の上達を、ドレ尼君樣へ申し上げうわいなう。

〽局は立つて入りにける。

ト局は立つて奥に入る。

王の　いつも乍ら、され事ばつかり。

初瀬　ほんにさうぢやわいなア。

〽話半へ荏柄の女房綱手といへど、便なき落目になつて氣もひがみ。

ト調べにて、奥より荏柄の平太女房綱手、襠衣裳にて出で來り。

綱手　これ／＼皆の衆、板額女ばかり力にして軍せうとは危い思案、めい／＼命を的にかけ討死せうとは思はずか、笑止な事ではあるわいなう。

〽笑止な事とさみしたる詞悟しと板額女、物見を出で。

ト板額蔦の丸の付きし模樣の襠、衣裳にて奥より出でよろしく住ひ。

板額　ホヽヽいさましき綱手殿のお詞、左程のそもじが何故に子まで引連れ、尼君を頼んでさもしい命乞ひ、實朝公には親御へ對して御違背もなされ兼ね、女房は兎も角、一子公曉は姫を殺した者の悴、首討つて渡せとの仰せ、此方では又ならぬとある仰せ、トヾ此騒動、まこと口惜い氣なら、公曉を先づ殺しその身も自害したがよい、兎角命は惜しいものナア。

綱手　イヤ板額樣、死ぬるを厭はぬ證據には、幾度かお暇申し上げても、お上には我娘を殺したる荏柄こそ科人なれ、そちたち親子は知らぬ事、かくまひしには思案があると奥深い御一言、死ぬ

るにも死なれぬ仕儀。

板額　ホヽ、その一言暗い〳〵、今にも討手攻め來らば、奥深い御思案があるというて濟みますか。

綱手　ハテその時は覺悟の前。

板額　サアその覺悟を今極め、一つ公曉が首打つて御親子の中を全うしや。

綱手　サアそれはナ。

板額　卑怯者めが。

綱手　サア。

兩人　サア〳〵。

板額　何とで御座んす。

〽つのめかなめのせり合が、洩れてや奥より御局駈出で。

ト此時奥より局出で、兩人に向ひこなしあつて。

○　尼君樣の御上意には板額樣には表を堅め、夜廻り嚴しく言付給へ、綱手樣にはまづ〳〵奥へ。

綱手　御上意とあれば參りませう、板額樣にはゆるりとこれに。

○　サアお出なさりませ。

〽皆引連れて入る影を、本意なげに打眺め。

ト これにて局先に綱手、玉の井、初瀬奥へ入る、板額見送り思入あつて。

板額 あんまりお上が慈悲過ぎて、思はぬ天下の騒ぎとなる、ア、まゝならぬ浮世ぢやナア。

〽一人恨みてゐる處へ、間近く聞ゆる人馬の音、列を構はぬ軍勢の鐘も太鼓も一時に、鬨をどつとぞ上げにけり。

ト これにてどんちやんの遠寄はげしくなる、向う揚幕の内にて子供大勢にて。

子供 エイ〳〵オ、。

ト板額伺うをきつと見て、思入あつて。

板額 ハテ心得ぬ鉦太鼓、扨は夜討にきはまつた、さうぢや〳〵。

ト板額思入あつて、下手の物見の内へ入る。

〽扨は夜討と板額女物見に上る、そのうちに松火提燈星の如く、先に進むは佐々木の末子綱若丸、土肥の實千代、二陣は千葉の祐若胤若、とんぼう頭も打交り、十一以上の子供の聲。

ト此淨瑠璃のうち、鳴物遠寄にて、向う揚幕より、先に軍兵二人笹龍膽の紋付し高張を持ち、二八松

火を持ち、それに續いて綱若丸、實千代、詰若、胤若等いづれも凛々しき軍の形にて、後から軍兵四人同じく松火を持ち、高張をかざし從ふ、此人數花道へ程なく住ふ。やはりどんちやんにて。

綱若　荏柄が一子公曉が首取りに來た、こゝ開けよ〳〵。

實千　開けぬは畢竟弱虫よ、こちらが恐いか、笑へ〳〵。

皆々　エイ〳〵オ、〳〵。

笑へ〳〵と罵つたり、板額しぜんと心づき。

ト板額下手の物見の障子をあけ、雪洞にてそれを見てこなしあつて。

板額　天下の法と御親子の禮儀の程を思召し、子供を以て敵討か。

へ實に尤感心々々〳〵、定めて我子の市若も人數に加はり居るべしと、明りにすかし差し覗きあれかこれかと見廻せど、似た姿なき不思議さに、物見より聲をかけ。

ト此うち市若丸はゐぬかと尋ねる思入、手雪洞にていろ〳〵と見る事あつて、子供たちに向ひ、

これ〳〵子供衆へ物問ふ、淺利の與市の一子市若丸といふものが、その中にゐるなら一寸呼出して下されや。

〽頼めば先なる佐々木の綱若。

綱若　その市若はおれと友達、來しなに誘ひに寄つたれど厭ぢやというて、見えなんだ。

皆々　此中には居ぬわいなう。

板額　アイ子供衆とした事が、此おばを欺さうと思うて好い加減な事ばかり、此のやうな事には一番がけに來る筈ぢや、ハヽア母に甘へて市若も同じやうに隱れてぢやナ。

ト雪洞のあかりにて額を見せ、いろ〳〵思入あつて。

それかゝさまぢや〳〵、コレてんがうせずと顔見せてたもいなう、エヽモ親の心子知らずと、母の思ふやうにもない、これいなう、何處にゐるぞいなう、市若いなう〳〵。

ト雪洞にていろ〳〵あたりを尋ねるこなし、花道の子供は皆々思入あつて物見へこなし。

祐若　これ〳〵そのやうに呼しやつても、市若はこゝにはゐぬわいなう。

胤若　おいらも誘ひに寄つたけれども、軍は恐いものぢや故、後から行かうの。

實千　留守ぢやのと尻込みして、えゝおぢやらぬ、あんな腰拔は今から友達仲間へいれまいぞや。

皆々　合點ぢや〳〵。

ト板額これを聞いて、扨はと愁ひのこなし。

〽そしる我子の噂をば、聞く親の身は胸迫り、暫詞もなかりしが。

ト氣を換へ思入あつて、子供に同ひ。

板額　イヤナウ子供衆總體夜討といふ者は、人の寢入込みへ押寄せて、欺して討つ故卑怯の軍、それを知つて市若も來ぬ者でがなあらう、ヤ、其方衆も手柄がしたくば、明日夜があけて、ア、いつも朝飯を喰べる時分に皆御座れ、その時は此伯母が取持つて手柄さしてやらう程に、今夜は去んで寢んねさんせや、オ、かしこい子達ぢや、賢い〱。

〽我子の來ぬが不思議さに、あてなき事を引延す思ひは親の因果かや、寄手は何の差別もなく。

賓千　夜する軍が卑怯なら、明日夜があけたらそのまゝ來よう。

子一　その時手柄をさして下されや。

子二　伯母樣、手柄をわしにもや。

子三　イヤおれにもさして下されや。

皆々　エイ〱オヽ。

〽せり合頼み、頑是なく鉦や太鼓を叩き立て、一先陣をば退きにける。板額後

を打眺め。

ト矢張りどんちゃんにて子供達皆々引返して向うへ入る。板額こなしあつて。

板額 伯母でなき身を伯母にして手柄賴むに、市若は何として來ぬ事ぞ、縱へ我子は臆病でも父が勵しおこす筈、持病の虫でも起りしか、母のない子とあやまかし、養ひ過ぎて病は出ぬか、心許ない事ぢやなア。

〽心許なや氣遣ひと顏見ぬうちの物思ひ、案事に障事押立てゝ。

トこなしあつて、物見の障子立て切る、鳴物一つ鉦あつて。

〽暫く時を移すうち、程なく一子市若丸十歲の初陣に、着たる鎧は錦革鍬形打つたる兜を着し、弓矢たばさみ、門前に大音あげ。

トやはりぢやん〱になり、向うより市若鎧兜を着し、弓矢をかい込み凜々しき形にて、つか〱と出て、花道に止りこなしあつてノリになる。

市若 淺利の與市が一子市若丸公曉が首受取らんと、拔駈したる證據の一矢これを見よ。(ト矢をつがひて、) エイ 。(門の柱へ射てきつと見得。)

〽これを軍の血祭とよつぴいて、ひやうと門柱に三寸ばかり射込みしは、健氣

にも又しほらしゝ。

ト市若舞臺へ來る。

〽我子と聞くより板額女、門押開き飛んで出で。

ト板額これを聞き、奥より出で門を開き、市若にこなしあつて。

板額　ヤレ市若おぢやつたか、待ち兼ねました、ほんにまア能う來てたもつたなう。〽よう來た事ぢやと嬉しさに、そゞろになれば市若も。

板額　サア〳〵こちへ入りや〳〵。

ト板額市若の草鞋解き、介錯して内へ入る。

市若　かゝさま久しう逢はぬ故、逢ひたかつたわいなう。

板額　ム、逢ひたいは道理〳〵、自も別れてより片時忘るゝ隙もなう、最前友達に尋ねし時軍は嫌ひの逃げてのと、惡口聞くと猶の事大體案じる事ぢやない、マア何として遲かつたぞいなう。

市若　さればいなう、脇々へは觸があつたれど、わしは父樣がお下なされてから、そちには公曉が首取る役、あつぱれ手柄して來いと、くれ〴〵との言付、わしにばかり手柄さし、名を上げさして下されや。

〽名を上げさして下されと、身勝手云うにうちうなづき。

板額　オヽ好ういやつた。そなたに手柄させいで誰にさそう。ムヽテモさすがは生んだ子、淺利の與市殿の種程ある、心なら武士振ならこんな凛々しい子を誰が生んだしらん、そしてマア此鎧誰が物好みで誰が着せた、兜を猪首へ着せたのは父樣であらうがの。

〽おし廻し捻じ廻し。

ト捨臺詞にて市若を譽め、いろ〳〵と市若を見て。

これ市若、なぜ兜の緒を結んでおきやらぬ、解けて居るぞや。

市若　イヤこれはかゝさまに逢うたれば、結んで貰へとの父樣の吩咐。

板額　ナニわしに結んで貰へとか、ハア聞えた。一旦は武士の義理に迫り、夫婦の縁は切つたれども、人知れず思ひ暮す折あらば、忍べしのびの思ひの糸、結べ結ばうと云ふ心、サア〳〵結んでやりませう。

〽縁起を祝うてしつかりと結ぶ拍子に、忍びの緒ふつと切れて落ちたるは、心ありげに見えにけり、はつと思ひし母親より、市若猶も氣にかけて。

ト忍びの緒結ぶとて、緒切れる事あつて、心遣ひのこなし。

市若　申しかゝさま、軍に立つて討死する者は、忍びの緒を切るとある、わしや討死をするのかや、こゝへ死にゝ來てかいなう。

トあはれなるこなし、板額も愁ひのこなしあつて。

〽おろ／＼涙を打消して。

板額　オヽ此子はけうとい、そんな氣にかゝる事云はぬもの、高の知れた家柄が倅、ひねり殺せばとて苦のない事、主を殺した者の子が、遲かれ早かれ遁れぬ命、尼君へ申上げ、こなたに首を討してやろ、紐も母が付直し丈夫にしてやりませう。

〽こちらへ御座れと手を引いて、門内さして入海の浪の憐れや打紐の、切れしを後の思ひとも、知らで親子は勇み立ち、伴ひ一間に入りにける。

ト此うち、板額市若へ奥へ行けとこなし、市若勇み立ち二重へ上る、板額も後につき二重へ上り、餘念なく市若に見とれる、トヾ市若きつとして入る、それを捨臺詞にて褒める事、懷より扇を出し泣き乍ら、板額も入る。

〽子を捨てる藪はあれども、身を捨てる藪はなしとの譬へ、身につまされて淺利の與市、市若を討手とは深き所存も、有明の月も心も掻曇る　思ひの絲に引

かされて門前近く來りしが、後先見廻し館を眺め。

ト時の鐘にて、向うより與市野袴ぶつさき羽織、黒の忍びよき好みの拵にて、龕燈提灯を持ち忍び頭巾を冠り窺ひ出て來り。

へあれが物見、これがお座敷、内の首尾を窺ふは恰度このへん此あたり、塀の方にぞ身を寄せて耳をすませる折柄に、尼君荏柄が妻子を引連れ表間近く出給へば、よき幸と板額女一間を出で手を支え。

ト與市は門前の立石に腰をかけ内の様子を窺ひゐる、此時奥より政子紫の衣頭巾を冠りし好みの形にて、綱手、公曉壺折の衣裳にて出て、後より板額出て、皆々よろしく住ふ。板額は尼君の前へ手を付き、こなしあつて。

板額　尼君様へ申上げます、實朝公より討手と見せたるは十一以上の子供の軍勢、これ孝心の道を立て給ふ我君の御心、それに敵對公曉をお渡しないは、あんまり親甲斐の我儘、急ぎ首討つてお渡しあらば、法も立ち道も立つ双方のお心休め、私にお任せ下されなば、有難う存じまする。

へ貰ひかけたる心根は、子にさす手柄の種なりし、尼君お目に涙を浮め。

ト政子思入あつて。

政子　こなたの夫淺利の與市仔細何も云はぬよの、一旦の口留を用ひ連添ふ者にも語らぬとは天晴の侍、かくなるからは何を隱さう、あの公曉は荏柄の平太が倅とは僞り、眞は先將軍賴家公の一子善哉丸ぢやわいの。

板額　スリヤ何と仰る、その公曉は御妾腹に出來たお子。

政子　オイナウ自が心のさもしさ察してたも。（ト合方になり。）出家にするとて乳母諸共、鶴ケ岡の別當へ預け置きたれども、實朝に子のなき故、もしもの時は跡目にもと、思付いたが此子の因果、人のそしりを憚り、其方の連合與市と綱手の夫平太とを賴み、密に奪ひ取つて貰うたれども、別當の詮議嚴しく、當座凌ぎと荏柄に預け、平太夫婦の子と云はして今の難儀、その譯云はゞ、尼の身で出家落した天罰と云はるゝも恥しく、共に自害と覺悟する、心の內の悲しさを推量してたもひなう。

〽推量しやとしやくり上げ、かこち給へば綱手も共に。

綱手　イヤア我子ならば、何故にこれまで助け置きませう、板額樣疑ひはらして下さりませいなア。

〽言譯聞く板額が胸はがつくり、くり返し。

板額　アノ申し、そんなら夫淺利の與市、公曉は賴家樣のお胤といふ事を。夫には。

政子　知つてゐるとも〳〵、與市は手車賣とやらになり、平太は鳥賣箱に入れて、戻つてたもつたわいの。

板額　そんならアノ、ハ、ア。

〽はつとばかりに板額は夫が掛けておこしたる忍びの糸の判じ物、解けて胸をば苦しめり、與市も表に打悄れ、嘸女房が何かの事思合せば胸せまり、我を恨みん不便やなア、聲をも立てず忍泣き、公曉君はおとなしく。

ト此うち板額樣子聞いてびつくりこなし、始終聞いて扨は與市が差圖にて市井身代とのこなしある。門口に與市愁ひのこなしある、二重の三人も愁ひのこなし。

若君　我命終るは厭はねども、共にとある母樣の御命が助けたい、好きに賴むぞこれ板額。

〽よきに賴むと一言が、身に堪へたる其の上に、尼君近く立寄り給ひ。

政子　人は五十を定命といふに、六十路を越し乍ら、一人の孫を先立てゝなに永へん、夜明まで最後の念佛、それまでに此子が助かる筋あらば。

〽尼が命は終るとも助けてたもや板額、くれ〳〵重き重荷をば仰せはいなとも

云ひ兼ねる、詞のうちに若君や、綱手引連れしほ〳〵と、佛間をさして入り給ふ、御心根ぞいぢらしき、後に殘りし板額が涙の顏をふりあげて。

ト政子板額に賴む事あつて、政子若哉丸綱手奥へ入る、板額は愁ひのこなしあつて。

板額　ア、聞えぬぞや我夫、公曉を賴家樣の御胤といふ事、知つてならなぜ打明けて下されぬ、可愛さうに市若を討手といふて、忍びの緒を切りかけて母に結んで貰へとは、わしに切れとの事なるか、御身代といふ事も虫が知らして、最前も母樣わしは討死をするのかいの、と氣にかけしを、今思へば神の告。

〽とも知らず餘所の子のはな〳〵しいのを見るにつけ、此市若は何故遲い、來さうなものと死ぬる子を待ち兼ねたのは何事ぞ、殺しに寄越すと知つてなら、待つまいものをとしやくり上げ、歎けば夫は塀の外。

與市　忠義ならずは何故に願ひ好んでおこさうぞ、父樣手柄をして來うと、勇み進んで出た時のあれが心を推量せよ。

ト門の外にて與市愁ひのこなしよろしくあつて。

〽切めてマ一度逢ひたさに、表まで忍んで來たわいやいと、涙くり出すばかりなり、市若かくと知らばこそ、一間をそろ〳〵忍び出で。

ト市若出て來り、板額の傍へ來り。

市若　申し母樣、よき吉左右有るかと、最前より待つてゐれども音もせず、友達衆が來ぬうちに手柄をさして、父樣に褒めさして下されいなう。

〽殺すと知らぬあどなさを、見るに母親せきのぼす、涙を忠義に思ひかへ。

板額　成程々々、末代に名を殘す、大きな手柄をさせませう。

ト是にて市若を下に据ゑ、板額傍へ寄添ひ。

イヤナニ市若、武士の子は何時知れず、もしやそなたが平太が子の公曉で、君より討手が來りなば、どうせうと思やるぞ。

市若　ハテそれは知れた事、主を殺した者の子と、指さしに逢ふよりも、潔よう切腹して、流石は武士といはるゝ氣。

板額　あの腹切つてか。

市若　アイ。

板額　あの腹をや。

〽腹をといふに、しやくり出す涙を飲込み飲込んで、顏打眺め。

オヽそなたならさうあらう、そのいさましい心なら、手柄したいは道理々々、さりながら此形では公曉が油斷せず、鎧も脱ぎ常の形で、あの一間に隱れ居て、母が詞を掛けたらば、父の心に叶ふやう、天晴手柄して見せや。

〽して見しやいのと鎧の紐解くも涙に結ぼれて、死出の晴着の錦革脱せば下に白無垢を着せて越したは、胴慾な憎い夫と恨みをば來て泣く夫は塀の外、我は忠義の男氣もまさかの時はえ討つまい、強い女ぢや討つさうな殺すさうなと延び上り、見附の石へ駈上り塀に手をかけ羽根あらば飛んで入りたや顏見たやと、覺悟の上の覺悟にも堪へ兼ねたるばかりなり、板額涙の色かくし。

ト此うち市若の鎧を脱せる事こなしあつていさめる。門の外には與市内の體を窺ひて、石に上り中をば覗き見て愁ひのこなし、板額は市若の傍へ寄り。

これ市若、モシ今も云ふ通り、あの一間に忍び居て、縱へどのやうな事あつても、呼び出す迄來やんなや、手柄さして父樣は愚か、鎌倉中の武士に鏡と云うて褒めさそう、母に任しや、合

點か。

〽母に任しやと押入れて立切る一間を最期場と、あきらめ兼ねし涙の袖絞り乍らに、あたりなる灯消して廻りしを、尼君綱手は我君を後に圍ひ腰刀、おのれ我子を引入れて手柄さすとは心得ずと、身を堅めたる女の一途、外には與市が内の音鎮つたるに不思議立て、耳聳てし四方八方、板額そろ〳〵くらがりを足音かくし表の方、板間を強くぐわた〳〵入來る音に踏みならし、トそろ〳〵と戻つて一間の傍へ、さあらぬ體にて聲に角立て。

トこなしあつて市若を上手家體へ入れて、障子越に市若の樣子を窺ひ、雪洞の灯を消してあたりに心を付け、着てゐる襠を脱ぎ二重の段へ敷きそつと下へ降り、思入あつて板間をばた〳〵と音をさせ、そつと襠の上を通り二重へ上り、ばた〳〵と音させる、塀の外には與市窺ひ居る、上手家體には市若樣子を聞いてゐる、板額は人來る體に物音さして。

誰ぢや、それへ見えしは何者ぢや、何ぢや。（ト思入あつて。）ナニ荏柄の平太とや、シヤア正しく汝、姫君の仇遁さぬやらぬ。

〽遁さぬやらぬと立上る、何を目當か詰めかくる、尼君綱手はまことかと差覗

けども、人影のないとは知らず、市若が一間の内に聞耳の、外には與市が身拵へ、何れも樣子を窺へば、猶も詞を逆立てヽ。

ト獨りにていろ〳〵足音さしてこなしある。

ナニ〳〵平太、何といやる、此板額に密に云ふ事がある、オヽ聞かう、サアどうぢややヽ、何といふ、あの市若を取返しに來た、イヤ〳〵そりやならぬ、尤そちが子なれども藁の上からわしが貰ひ、與市殿と二人して育て上げたるこつちの者、今になつて戻せとは、アレまだしつこい、これ、これ〳〵此方は現在主殺し、その主殺しの子といふとの、コレ市若は腹を切らねばならぬわいなう、最前も公曉と打語つたらどうするぞと、云うたれば潔う腹切つて流石は武士と云はるゝと云うたぞや、二人の親に褒められうと思ひ死ぬるは條、可愛さうに取返へさずと置いて下され、アレまだ一間を目がけ氣相して、何ぢや踏込み取返す、サア取返へさるゝなら美事取返して見よ。イヤ何處へ、イヤならぬ、どつこいならぬ。

ト獨りにていろ〳〵平太居る體にて、物音さして爭ふやうなこなし。

〽どつこいさうはと、一人して二人の物音足音を、與市は女が手にかけて討つに討たれず、腹切らす謀よと推しても、尼君綱手は不思議さに心を配る、

一間には不便や市若うろ〳〵と、扨は我身は主殺しの、荏柄の平太が子なるとや、淺間しや悲しやと立ては泣き居ては泣き、詮方もなく座を占めて。

と此うち市若障子越にて愁ひをふくみ、板額の方を見たきこなし、又平太の子と聞き口惜しきこなし、トヾ泣き落すこと。

市若　南無阿彌陀佛。

〽と差添を拔くより早く脇腹へ、ぐつとさせばパッとちる、障子にうつる血煙を見るより母は狂氣の如く。

ト市若は當惑して、小刀を拔き腹へ突き立てる、板額ハット泣き落し。

板額　ヤレ腹切つたか、出來した〳〵。

〽駈寄る音に、淺利も半亂、尼君綱手もこはいかにと、灯差出し、見れば敢なや市若が、切なき息をほつとつき。

ト板額駈寄つて市若を抱き、政子、綱手は公曉を抱き奥より出て來りよろしく住ふ。愁ひのこなし。

市若　ナウ母様、今迄私はほんの子と思うてゐたが、よう聞けば荏柄殿の子なるよし、主を殺した者

の子が、助からうやうはなし、潔う死にまする、手柄もせずに死にをつた、と父様がお叱りなら。

〽よう詫事して下されや。

縦へ荏柄の子であらうと、やつぱりお前や與市様を親と思うてゐる程に、子ぢやと思うて一遍の。

〽御回向頼み上げまする、云ふに母親はりさく思ひ。

板額　ヤレそなたをば父上が手柄せよとてよこされしは、公暁様は先將軍の御子、御身代に立てよと心をこめし忍びの緒、切るに切られず討ち兼ねて一人死んで貰ひたさ、何の荏柄が子であらうぞ、與市殿と私が仲のほんのほんのほんのほんの子ぢや、そなた一人死ぬるとの、尼君様や若君の御命の代り、手柄も手柄、大きな手柄、潔う死んでたもや。や、や、何の因果で武士の。

〽子と生れて來た事ぢやぞいナウ〱

ト門の外與市愁ひのこなしにて。

與市　コレ市若父も來てゐるぞ、臨終生念南無阿彌陀佛。

〽唱ふる聲の通じてや、いまはになつて目を開き。

ト市若突廻して苦しみ乍ら。

市若　そんなら荏柄が子でもなく、死ぬるも手柄になりますか。

板額　オイナウ。

市若　嬉しう御座る、母様さらば。

〽さらばで御座ると、敢なくも息引取れば、表も内も思はずはつと泣倒れ、前後不覺の涙なり、綱手も覺悟の座を占めて。

ト此うち市若は引廻して、咽喉笛を突通しどつと倒る、板額ハツト泣落す。綱手は思入あつて懐刀を出し自害しようとする、政子その手を止めて。

綱手　かゝる歎も我夫の惡事故、さうぢや。

〽自害と見えければ、尼君すりより刃物捥ぎ取り。

政子　そちが誠の心あらば夫荏柄が行方を尋ね、姫が敵を討つて得させよ。市若への追善には我愛着の心を離れ、再び公曉出家させ、後世弔はするは此通り。

〽後世弔はせんと、若君の御髻を押切り給ひ。

ト政子公曉の懐劍を拔放し髪を切拂ふ。

綱手に從ひ此家を立退き、いかなる僧をも師と頼めよ。

へ見放し給ふ若君は、成人の後公曉のよみをそのまゝ聲に替へ、公曉法師と名乘しは此幼子の事なりし。

トめい〳〵愁ひのこなしあつて。

へ夜も早や過ぎて明方の、又も寄せ來る鬨の聲、板額是非なく涙ながら死骸の首を討ち落し、悲しさかくし聲張り上げ。

トこれにて遠寄を打込む、板額思入あつて市若の側にて首を打落す、市若の袖を切りこれへ首を包みしづ〳〵下へ降り。

板額　尼君がかくまひたまひたる、荏柄が一子公曉が首討つてお渡し申す、受取人はお通りあれや。

へ大門開けば、淺利の與市こゝぞと涙押拂ひ。

與市　ホヽホいしくも致されたり、則ちこれに市若丸の首受取る役控へたり。

トそれにて黒の羽織を脱ぐ、下に肩衣を着込み上下の形になる、板額與市顔合せこなしあつて、内へ入り、上手へ與市住ふ。

へしづ〳〵と通り上座に直り。

ト板額市若の首を包み、與市の前へ持つて行き兩人顏見合せ愁ひのこなし、與市心付き涙を拭ひ睨みつける、これにて引分るゝこなし。

先君淺利と申合せ、倅市若を討手に起せしは我寸志、イヤサ公曉が首受取る役目。

へ我子の名をば名乘るも追善、尼君不便と回向の稱名、供養は若君法の旅、綱手諸共館をば出るも思ひ見る思ひ、親と親とは式法に我子の首を受取り渡し。

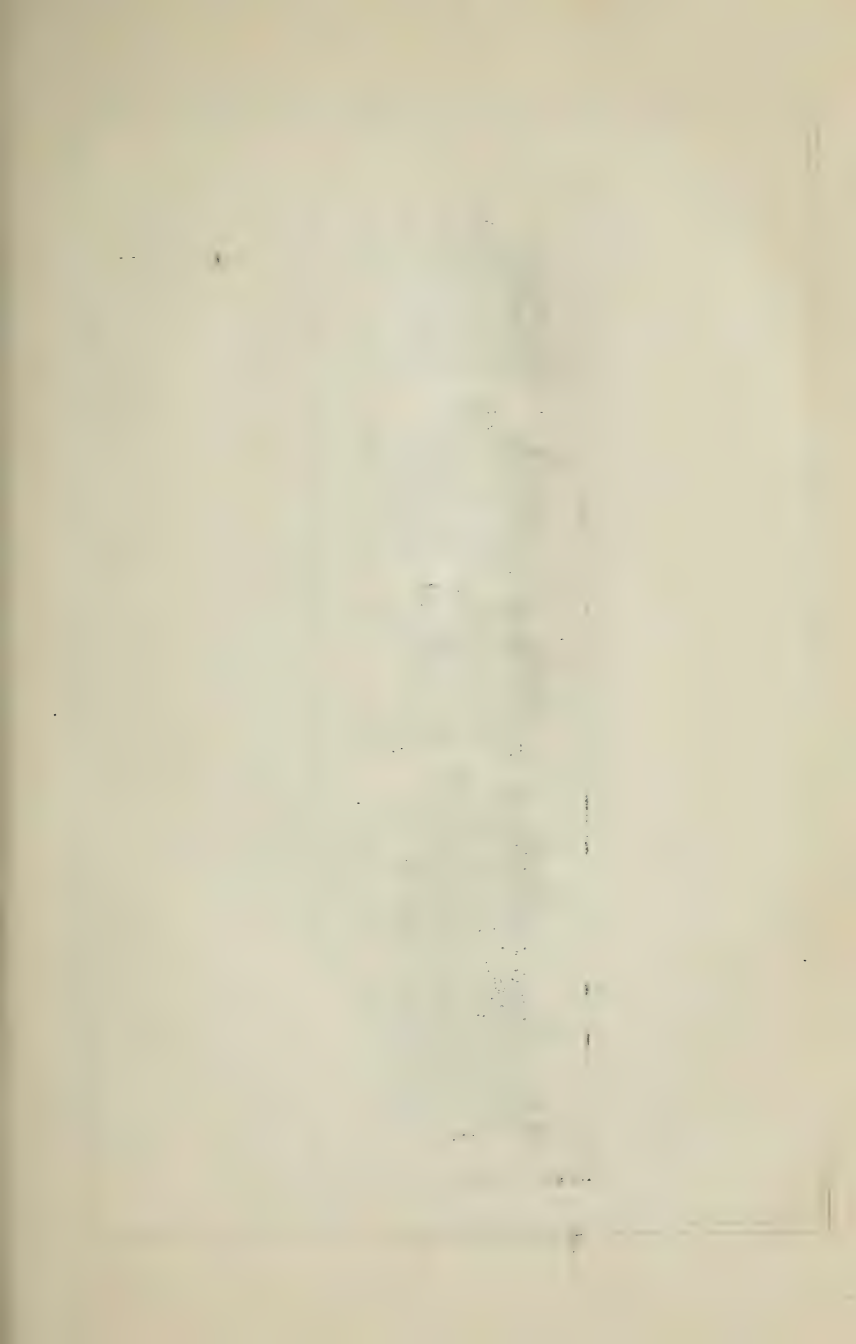
板額　いかひ御苦勞。

へ御苦勞の聲も涙に顫ひ出し、わつと歎けばハヽ、ハッと禮儀に隱す涙の袖、縋れば拂ふ哀別離苦、會者定離ぞと振り切つて、是非もなく〳〵引別れ、御館さして立歸る。

ト與市は首を抱へ、板額は名殘惜しきこなし、二重の上に尼君政子、綱手、公曉を守護して愁ひのこなし、よろしくあつて、段切にて。

幕

織合襤褸錦
おりあはせつゞれのにしき

織合襤褸錦

上の巻

春藤邸正月元旦の場

役名　春藤治郎右衛門、同治兵衛、同新七、同助太夫、奴與五郎、同半助、須藤六郎右衛門、彦坂甚六、信田源吾、小川勘之丞、細野十兵衛、森傳藏、鎌田瀬左衛門、治郎右衛門女房お春、妹お六、腰元おしげ、おまき等。

春藤治郎右衛門邸の場　造物三間の間二重舞臺、下手の方一間の床の間具足櫃を飾り、之れに鏡餅を供へあり、眞中にまいら戸の押入向ふの壁切拔の仕掛、次に納戸口、橋がかり門口注連飾りあり、よろしく幕開く。

ト信田源吾熨斗目上下にて奴を供に連れ出て。

奴　頼まう。

内より　どうれ。

源吾　信田源吾、年頭のお禮申す。

内々　忝う御座ります、お入りなされませう。

ト源吾入る、鎌田瀬左衛門熨斗目上下、奴を連れて出る。

瀬左　賴まう。

内々　どうれ。

瀬左　鎌田瀬左衛門、年頭のお禮申しまする。

内々　忝う御座りまする、お入りなされませう。

ト瀬左衛門入る、細野十兵衛、森傳藏上下にて奴を連れ出る。

十兵　賴まのう。

内々　どうれ。

十兵　細野十兵衛、

傳藏　森傳藏、年頭のお祝申しまする。

内々　忝う御座ります、先づお入りなされませう。

ト小川勘之丞奴連れ出る、春藤新七上下にて奴連れ出て。

新七　小川勘之丞殿で御座りますか。

勘之　春藤新七殿で御座りますか。

新七　先づ今日は。

兩人　お目出度御座ります。

ト源吾出て來り。

源吾　これは新七、勘之丞殿で御座りますか、今日はお目出度御座りまする。

兩人　お互で御座りまする。

源吾　毎年々々正月になりますれば、四方山の人心迄がはつきりと春めきまするが、わけて此春は賑賑しい元朝で御座りまする。

新七　仰る通り、今日の朔日は賑々しい筈で御座りまする、年々に年越が冬ある事もあれば、正月半にも御座りまするが、當年は正月朔日が年越なれば、此正月は冬を去る本春の朔日と申すもので御座りまする。

勘之　いかさま正月の朔日に、年越と申すは、稀な事で御座りまする。

源吾　左樣で御座りまする。

勘之　新七殿には日頃お好きぢや程に、定めて目出度い發句をなされたで御座りませう。

新七　成程、私の親共が好きで御座りまするに依つて、隱居の娛みと存じまして、春の發句いたしました。

勘之　定めて出來まして御座りませう、チト拜見致したう御座りまするの。

新七　幸ひ是に御座る、お目にかけませう。

　ト鼻紙の間より色紙を出し勘之丞へ渡す、此時紙の間より文落つる、是を知らず、勘之丞色紙を見て。

勘之　今年よりほめられに出る福壽草、ハア面白い事で御座りまする。

新七　何と御座りませうやら。

源吾　新七殿や勘之丞殿は常々俳諧前句附をなさるが、お娛みで御座りませう、チト春永に敎へさつしやつて下さりませい。

新七　お話し申しませうとも。

勘之　御兩人共にこれに御座りませ。

新七　勘之丞殿にはどれへの御禮で御座りまする。

勘之　其許樣へ。

新七　然らばお出に及びませぬ、兄治郎右衛門儀は未明より禮に罷出まして御座る、私がこれでお祝は受取まして御座ります る。

勘之　デモ御隠居助太夫様へお禮申して參りませう。

源吾　勘之丞殿、新七殿がこれでお禮を受けさつしやるならば、御隠居助太夫様へのお祝は御無用になされませう。

勘之　何故で御座りまする。

源吾　最前私がお祝に參つたれば、よう禮に來たと仰つて酒を強ゐられて、かやうに顔も赤うなりまする、かう申しまするうちにも胸がだく〳〵して、まだ餘程禮も殘つて御座りますれど、此醉やうでは勤まりますまいと存じまする、こなたもお出なされたら、恰度今のやうな目に逢はつしやるで御座らう。

勘之　私は下戸なり、それは氣の毒なもので御座りまする。

新七　イヤ〳〵お禮はこれで受けまして御座りまする。

勘之　然らば隠居様、治郎右衛門様へもよろしう頼み存じまする。

新七　畏りまして御座りまする。

新七　永日御意得ませう。

兩人　然らばお暇申しませう。

ト勘之丞源吾橋懸へ入る、新七門の内へ入る。彦坂甚六熨斗目上下にて奴半助を連れ出て。

甚六　半助々々、何處も禮を取落しやせぬかな。

半助　イヤ悉くお禮は濟みまして御座りまする。

甚六　安田源太夫殿へ禮に行つたな。

半助　左樣で御座りまする。

甚六　まづそれもよしと、武部庄右衛門殿へも行たと、あれへもこゝもよしと。（ト獨りうなづき歩き乍ら云ふ、フト最前の狀を見て拾ひ合點の行かぬこなしあつて。　そりやこそからあらうと思うたてや。

ト之を讀み思案のこなし、十兵衛瀨左衛門傳七出て。

瀨左　彦坂甚六殿で御座りますか、先づ今日は、

傳十　お目出度御座りまする。

三人　永日御意得ませう。（ト行かうとする。）

甚六　イヤこれ〳〵お三人共に待つしやれ。

三人　御用で御座りますか。

甚六　チトいづれもへ內々の事に就て、急に御相談申す事が御座る。先づお下に御座れ。

三人　內々の事に就てとは。

ト甚六四邊を見て。

甚六　御存じの通り、いづれもの組頭須藤六郎右衛門儀は、拙者が妹六を女房にくれいとお賴みで御座つたが、妹が事は御存じの通り、兄妹共春藤治郎右衛門方へかゝり罷り在りまするなれば、早速の御返事はエ、仕るまいが、身に餘り大慶な儀で御座る、成程女房に差上げ仕るで御座らうと申した故、私も六郎右衛門のお取持を以て、二百五十石御知行殿樣より下さるるとあつて、當月中にもお目見得が相濟む筈で御座る、拙者をかやうにお取立なし下さるゝ、六郎右衛門の御心底は、妹お六を御所望故からの事で御座る、時に此文體を御覽じ。

ト文を見せる、三人見る事あつて。

さうした事で御座るに依つて、手延べに致しては、いつまでも事が濟みませぬ、今日は當國の氏神八幡宮惠方に當りまして御座れば、參詣群集を幸に日頃各々謀合した通り、これ。（と囁き。）から致さうと思ふが何と御座らう。

瀬左　仰るまでもない儀で御座りまする、六郎右衛門殿の儀は我々お組頭の儀で御座る、先日組下殘らず御自分樣六郎右衛門殿の前で申した通り、一命かけましてありますれば、變じまする儀はさら／＼御座りませぬ、ナウいづれもさうぢや御座らぬか。

十兵　お頭の儀に就て、組下の者一人も變じまする者は御座らぬ。

甚六　エ、それはお頼もしい、然らば八幡へ御座つて只今の通りになさる事に及んだらば、甚六が出て捌きまする、サア／＼御座れ／＼。

三人　心得ました。

甚六　これ／＼無人數では心許ない、心の會つた衆中、今二三人も語らうて御座れ／＼。

三人　左樣仕つたら、お暇申す。（ト三人走り入る。）

甚六　半助そちや、六郎右衛門屋敷へ參つて、あらかた今の通り話してそれへ參りませうか、これへお出なさるゝかと云うて來い、日頃云ふ通り大事の事だ、他言すな。

半助　畏りました。

ト半助入る。甚六向うへ入らうとする所へ、新七出てそこらうろ／＼尋ねるこなし。

甚六　新七殿ぢやないか。

新七　甚六殿。

甚六　此方はなんぞ落して尋ねるのか。

新七　いゝえ何も落しは致しませぬが、ハテ面妖な。（ト云ひながら尋ねに向うへ入る。）

甚六　これ〳〵人が物を云ふに聞捨にして。

ト ぼやき乍ら内へ入る。須藤六郎右衛門奴を連れ出て。

六郎　甚六は屋敷にゐらるゝな、好いわ、治郎右衛門方へ禮に參り、序に甚六に逢はう、案内せえ。

奴　物まう。

内ゟ　どうれ。

六郎　須藤六郎右衛門、年頭の御禮を申しまする。

内ゟ　忝う御座りまする。お入りなされませう。

ト六郎右衛門内へ入る、治郎右衛門出る、奴、若徒先へ廻つて。

若徒　旦那のお歸り。

ト治郎右衛門つと入る。奥よりお春出る、治郎右衛門庭より袴を脱ぐ。

お春　お歸りなされましたか、お袴はこゝへ來てお脱ぎなされませ。

治郎　どこで脱いでも大事ない事を、エヽ醉つたぞ〳〵、奧覺悟しやれ、俺ばかり醉倒れはせぬぞ、俺が倒れるからは、親父樣もそなたもお六も新七も治兵衞も安堵では置かぬぞ、覺悟せい覺悟せい。

ト袴を脱いで下にへたる。お春氣味惡き顏して。

お春　何をわつけもない事を仰る、正月早々から醉倒れるの、覺悟せいのと、そんな事は正月早々に云はぬもので御座りますわいなア。

治郎　ハテ、氣にかけるは〳〵。（ト横に寐る。）

お春　又氣にかけまいものかいなア、アヽそれ〳〵お着物お着換なされませ。

治郎　大事ない〳〵、始末するな〳〵。

お春　ハテ始末するのでは御座りませぬ、皺が寄ると見苦しいに依つてゞ御座りまする、サアこれお着換なされませ。

治郎　どりや〳〵仕送り殿の御機嫌に入るやうに、さらばわんぽうを脱がうか。

お春　アヽうちで、また〳〵。

ト耳をふさぐ、治郎右衞門笑ふ。

よつぽどの事云はしやんせ。

治郎　ハテわんぽうぢやに依つて。

お春　まだかいなア。

治郎　わんぽうが何が氣にかゝる。

お春　サアお前の云はしやんす、それはなア。

治郎　それはとは。

お春　アヽもう好う御座んすわいの。

ト此間に着物を着換へる。

治郎　ハヽヽ女と云ふものは別してもない事を氣にかけるものぢや、殿樣より五百石の知行頂戴して居るは何の爲ぢや、まさかの時はお馬の先にて討死するは武士の習ひ、武士の命と云ふものは、今日あつて明日を知らぬものぢや、馬鹿ナ、嗜みやれ。

お春　サアそれはさうで御座りますけれ共、常は格別年の始殊に年越、死ぬるしの字も云はぬもので御座んす、昔物語に富豪な酒屋があつたげに御座りまする、此亭主が物祝してしの字までを嫌うたげに御座ります、それを意地の悪い者憎がつて、四百四拾四文が酒を買ひに行たげに御

座りまする、亭主がその錢はなんぼあると問うたれば、その女房が發明なもので三百百に三十十文三文一文が酒を買ひに來たと云うたれば、亭主が悦んでその錢の價よりたんと酒をやつたげに御座りまする、それから其酒屋が富貴したといふ話が御座りまする、サア物は祝ひからぢや、不祝儀な事は云はぬが好う御座りますわいなア。

附郎　尤も〳〵、云ふまい〳〵。

お春　強いお前は醉ひようで御座りまするが、どこでそのやうにお上りなされましたイなア。

治郎　何處といふ事はないぢや、今朝未明に禮に出てお城へ上つて殿の禮を了うて、それより御家老白山四郎兵衛殿へお禮に行たれば、能くこそ早々の禮至極執着に、サア〳〵盃というて闘より俺が手を取つて、なんぞ腰拔か行倒者を引擦るやうに、四疊半の小座敷へ俺を佛奕す見たやうにして置いて、四合入程の大盃で二つ續けて飲んだぢや、その上に始終無理の云ひたい程云うて、もう一つ飲んだぢや、餘り見事ぢや三獻では數が惡い、四獻と云はるゝに依つて、是を飲みまするると、治郎此場で死にまするると云へば、死ぬる、面白い殺す〳〵、イヤ殺す氣ならば死んでも退けうと、四合入に四杯續けて飲んだぢや。

ト此間お春氣の毒がり、聞きともない思入。

お春　それよりその場を命からがら助かり、信田四五右衛門へ禮に行たれば暫く強ひられ、四の宮志津馬で始終強ひ殺されて、志田支伯でとうとう止めをさゝれて了うた。
お春　エ、聞きともないない、私が嫌がる程意地惡う云ひ並べさしやんす、拜みまする、仰つて下さりまするな。
治郎　あやまつたあやまつた、兎角物を申すまい、死んだやうにして居ませう。
お春　まだいな。

ト治郎右衛門笑うてゐる。

治郎　もし旦那殿、チトお前に談合する事が御座りまするわいなア。
お春　ホウ改つた、何事ぢや、承らうらう。
治郎　ハテじやらじやら仰らずと、ちつと改つた事で御座りますわいなア。
お春　ぢつとして承らう、何ぢやぢや。
治郎　イヤ餘の事でも御座んせぬ、妹のお六が事で御座りまする。
お春　六が何とした。
治郎　今日お前が出やしやんした後で、御隱居樣の仰る事には、どうした緣ぢやゝら只妹のお六

が不便でならぬ、外へ緣付させて人の氣兼をさせる事が可愛い、モウ脊丈も延びて居るものゝ事ぢや、幸ひ治郎右衞門が弟治兵衞まだ女房を持たずにゐる事ぢやに依つて、どうぞ治兵衞と夫婦にしたい程に、治郎右衞門にも此通りをいうて、親助太夫が一生の願ひぢや、身共は年寄りの事なれば明日をも知れぬ命ぢや、俺が生甲斐の間に夫婦にしたい程に、どうぞさうしてたもるやうに治郎右衞門に云うてたもと、きついお頼みで御座りまする、お前は何と思召す、モウ片時も早う治郎右衞門の返事をきかしてくれい、と云うてゞ御座りますわいなア。

治郎　ハテ何事かと思うたれば、そりや畢竟似合しい仲ぢや、互に相應なる事なれば俺も滿足ぢやが、それとも親父樣も我身も俺も一の事と思うてゐるにしても、お六も若いもの治兵衞も若いが互に、あの人ならば男に持ちたいと、お六が外に思付きがないでもなし、又治兵衞めも何處その娘抔と深う云ひ交してゐると、云ふやうな事があるまいものでもないに依つて、二人の心入れを聞いてからでなくば、なんぼ親ぢやと云うても、畏りましたと確に返事はならぬが、又どこぞお六と治兵衞と氣味合な事もあるやうでもあるか、そなた知らぬか。

お春　サアそこで御座りまする、それは隱居樣へ妹が頼んだ事と思はれます。

治郎　ヤ氣味合があるか。

お春　どうかは知らねども、治兵衛樣が隱居樣やお前へ見舞に毎日來てゞ御座んすと、四方山の話の間にもちよろ〳〵と氣を付けて見れば、互に、お六は治兵衛樣を尻目で見る、又治兵衛樣もお六を尻目で見さんす、ありや内證で氣味合のあつた尻目で御座りますわいなア。

治郎　その尻目はどういふ尻目ぢや、尻目も尻目によるぞや。

お春　サアそれはお六が治兵衛樣を見る尻目は、此樣致しますわいなア。

ト尻目遣をする、治郎右衛門大事さうに見る。

治郎　どれからうか。（トおかしい尻目遣して見せる。）

お春　アイ。

治郎　此尻目の遣ひやうは、仲の惡い言分のある仲ぢやないかの。」

お春　イヱまだそれより一所へ、うざ〳〵と目立たぬやうに傍へ寄つて、抓つたり抓られたり致しますわいな。

治郎　ハヽヽ、それは氣味合過ぎてゐる仲ぢや、ハテさういふ事ならどうなりとも。

お春　さうして御隱居樣の仰るには、治郎右衛門さへ合點しやつたら、幸ひ今夜は年越ぢや、今宵のうち祝言をさせたいというてゞ御座んす。

治郎　今宵年越ぢやに依つて、祝言して夏が祝ひにしたいとか。
お春　アイ。
治郎　隱居ではない太鼓持ぢやの、さうして治兵衞は逮に來たか。
お春　まだで御座りまする。
治郎　治兵衞が來たら知らしや、その次手にさうして仕舞ふ。
お春　そんなら隱居樣へもさう申しますぞえ。
治郎　オヽさういや、俺もちつと寢にやならぬ、枕たも。
お春　アイ〱そんなら一時も早ういうて、御隱居樣を悦ばしませう。
治郎　云うておぢや〱。

ト　お春奧へ入る、治郎右衞門は寐轉ぶ、バタ〱にて向うよりお六走り出でこける、後よりおまきおしげ走り出て。

しげ　これ〱こゝにお六樣のこけてぢや、目を廻しやんしたさうな。
まき　これはいかな事、お六樣々々々々。

ト　呼びかける、お六氣がつく。

兩人　お六樣、氣が付きましたか。

お六　オヽ氣が付いた〳〵、後から今の者が追わへて來ぬかや。

しげ　イエ〳〵今のやつらは參りませぬ。

お六　さうしてこゝは何處ぢやの。

しげ　こゝは、（ト四邊を見て。）お悦びなされませ、こちの屋敷の前で御座りまする。

お六　ほんになう、アヽ嬉しや、與五平や權八は後にゐるか、そこへ來ぬかの。

まき　イヽエ二人ながら見えませぬ。

お六　可愛や、怪我をせねばよいがなう。

しげ　お前樣にさへ怪我がなければよう御座りまする。

まき　モウあの衆の事は大事ありませぬ、サアマアお入りなされませ。

ト皆々内へ入る。ばた〳〵にて向うより與五平踏まれ叩かれたる風にて、脇差を脊にさし走り出で。

與五　アヽ嬉しや、こりやこちの旦那の屋敷ぢや、なんと今のやつらこゝまで來て見ろ、こゝへうせたら眞二つに。（ト脇差を拔からうとして腰を撫で、）南無三、八百五十で買うた脇差をほつかい捨てた、人の脇差を盗むと云ふやうな卑怯な事があるものか。（ト云ひ乍ら脊中が突張る故撫でゝ見て。）

あるわい、アノ麁相者めが。

ト云ひ乍ら入る。内より慌しくお春出て。

お春　申し〳〵ちやつと起きて下さんせ〳〵。

治郎　何ぢやいの、寢入端を。（ト云ひ乍ら起る。）

お春　何ぢやどころぢや御座りませぬ、お六が狼籍者に逢ひまして御座りまする。

治郎　朔日早々に何處へ行て、狼籍者に逢うたぞ。

お春　されば今日はお朔日なり年越ぢやに依つて、八幡樣が惠方に當ると云うて年詣に御隱居樣がやつてゞ御座んした、その下向の道で狼籍者に逢ひましたげに御座りまする。

治郎　八幡の下向の道で狼籍者に。（ト刀を提げ立たうとする。）

お春　イエ〳〵モウお六は戻りまして御座りまする。

治郎　戻つて居るか。

お春　アイ。

治郎　疵でも付きはせぬか。

お春　イエ〳〵疵は何處にも見えませぬが、肩息になつて番所で寢て居ります。

治郎　附いていたものを呼びやれ。

トおしげ、おまき兩人出る。

治郎　わいら二人が供をしたか。

兩人　ハイ。

治郎　誰なりとも男共を附けてなぜやらぬぞ、あの群衆の中へ嗜みやれ。

お春　イヤ權八と與五平を附けてやりまして御座ります。

治郎　二人のやつらが付いて行たか、たわけ共めが。

しげ　イエ／＼權八殿も與五平殿も如才は御座りませぬ、働かしやつたといふもので御座ります。

治郎　どうした事の狼籍者ぢやぞ。

お春　お叱りなさるのではない程に、こゝへ出て有りやうに云やいの。

治郎　二人ながら大事ない、こゝへ來い／＼。

兩人　ハイ。（ト兩人寄る。）

治郎　どうぢや／＼、どうした事ぢや。

しげ　お供致して參りまして下向致しまする所に、年詣の參詣群衆の中に脊の高い侍が五六人、お

六様の後になり先になり致しまするに依つて、これは合點の行かぬ奴等ぢやと思うて、權八殿にも與五平殿にも構はしやんな〳〵というて、氣を付けては居りましたけれど、何分喧嘩を仕かける風に見えまするに依つて、そつと駕を取りましてお六様を乘せて、お怪我があると悪いとさう〳〵駕の兩脇に附添うて、新道繩手まで參りましたれば、モウ參詣の參り下向も薄らぎましたを幸ひと思ひをつて、それからの狼藉で御座りまする。

お春　その時の與五平や權八はきよろりとしてをつたか。

まき　イエ〳〵おのれは合點の行かぬ奴等ぢや、さつきにからの慮外は赦して置くに、モウ勘忍がならぬと云うて、權八殿が駕に取付いてゐる奴をひつ摑へて。

治郎　出來た、投げたか。

まき　投げられまして御座りました。

しげ　所を與五平殿が朋輩を投げさしては、旦那へ立たぬと云うて、その投げた奴の首筋をひつ摑まへて、與五平殿も。

治郎　投げたか〳〵。

しげ　イヽエ投げられてゞ御座りました。

まき　それから五六人の奴等がその駕を舁いで、お六樣を連れて行かうとする、その間に與五平權八殿が起上つて、すらりと拔いてかゝられましたれば、駕を下に置くを幸にお六樣が駕からお逃げなさるゝによつて、私共も一緖に逃げ歸りまして御座りまする。

治郎　さうして權八や與五平は後にゐるか。

しげ　ハイ二人ながら後に殘つてゞ御座りました。

お春　お聞きなされたか、此やうに憎い暴れ者は御座りませぬぞえ、御家老中へ申上げて屹度御詮議したが好う御座りませう、憎い奴等ぢや御座りませぬか。

治郎　サアよいてや、こりやその暴れ者の顏を見知つてゐぬか。

まき　頰冠をして居りましたに依つて、顏は碌に存じませぬ。

治郎　紋所などを見覺えては戻らなんだか。

しげ　五六人の奴等、皆無紋のものを着てをりまして御座りまする。

治郎　頰冠をして、無紋のものを着てゐたとな。

お春　いえ／＼あんまり憎い事で御座ります、急に申上げたがよう御座ります。

治郎　ハテよいてや。

お春　よいてや處ぢや御座りませぬわいな。
治郎　サア大方知れてあるテ。
お春　大方知れてあるとは、何者で御座りまするえ。
治郎　ハテ不粋な者ぢや、十が十なら今のぢやわいなア。
お春　今のはとはえ。
治郎　ハテ扨今のぢやわいの。
お春　今のとはえ。
治郎　ハテ扨呑込みの悪い、我身や身が耳へは入らぬけれど、内證ではそれ、今のがもさくつてをるわサ、お六が事を。
お春　ア、そんなら今ので御座りますか。
治郎　思ふやうにならぬ故、お前追從め等を語らうて、理不盡にナウぢやわいの。
お春　そんなら憎い事で御座りますテナア。
治郎　よいてや身共が思案があるわい。
お春　そんな事なら、今のを急にしたが好う御座ります。

治郎　合點ぢや〳〵、こりや二人共に人が問ふともまゝよ、知らぬ分にしてをれ、今日の事は沙汰なしに致せ、合點か。

しま　畏りまして御座りまする。

ト内より甚六出て。

甚六　ハア次郎右衛門様、お歸りなされたか。

治郎　最早罷り歸つたぢや。

甚六　須藤六郎右衛門殿、お禮に見えまして御座る。

治郎　六郎右衛門殿の禮に見えたか。

甚六　左様で御座りまする。

ト内より六郎右衛門出て。

六郎　治郎右衛門殿、年頭のお禮を申しまする。

治郎　これは〳〵忝う存じまする、女房共袴を。

六郎　これは〳〵慇懃な、やはりそのまゝ〳〵。

治郎　でも餘り不禮儀で御座る。

六郎　それは近頃迷惑に存じまする。
治郎　然らばお許され。
六郎　これは〳〵お堅い。
治郎　サア〳〵マアお通りなされ。

ト六郎右衛門上へ通る、お春蓬莱を持つて出る。

お春　まづ蓬莱でお祝ひ申しませう、
治郎　まづ殿様．御家老や其許にも、目出度う御越年珍重に存じまする。
六郎　御意の通り、殿にも御家老中にも其許御隠居御一家中、御越年珍重に存じまする。
治郎　最前お禮に伺候致したれども、出さつしやれたとあつて御意得ませなんだ。
六郎　これは．近頃遠路で御座るに忝う存じまする。
お春　六郎右衛門様には御案内も御座りませなんだが、遠うから手前屋敷へお出で御座りましたか。
六郎　されば〳〵疾くより參つたれども、治郎右衛門殿御留守で御內證に御意得まするも、無禮と存じて甚六殿の部屋へ參り、暫く話して居りまして御座る。
お春　甚六殿の部屋でお話しなされて御座りましたか。

六郎　成程。

甚六　治郎右衛門殿にお目にかゝつて、お話なされたい事がちよつとあつて、手前部屋にお待ちなされて御座つたサ。

お春　これはいかな事。

治郎　扨年始で御座りまする、慮外申しませう。

六郎　頂戴いたしませう。

ト盃をさす、六郎右衛門も飲んで戻す、お春酌をする、互に正月の挨拶あつて治郎右衛門盃戴く、お春ちよつとつぐ。

治郎　ハテ一つ注ぎやいなう。

お春　下地があるぢや御座りませぬかいなア。

六郎　イヤ／＼下地があるならいらぬもので御座る、酒飲みと云ふものは酔伏しますると前後を知らず寝入るもので御座る、と云ても大事の年越ぢや、コリや御内證のが御尤々々

治郎　ハヽヽヽ。（ト笑ふ。）

六郎　治郎右殿御内證ちと話申したい事が御座るが、なんと致しませうた。

お春　六郎右衛門様の改つた、何事で御座りまするな。

治郎　お話しなされたい。とは何事で御座る。

六郎　ちと申し談じたい儀で御座る、甚六殿御自分仰つて下されまいか、手前申さうかの。

甚六　よい序で御座る、こなた様仰つたが好う御座りませう。

治郎　なんとやら。仰り悪さうに御座るが、何事で御座るな。

六郎　何とやら申すも氣の毒、申さぬも氣の毒、拙者が身分の儀で御座る、御存じの通り無妻で居りまする。毎度一家共が武士と云ふものは、妻がなうては子孫の繁昌がない、殊に御知行の御恩が送られぬ程に、たつて女房を持つやうに、と勸められまして御座れども、さしてこれを一生の女房にと思ふ女も御座らぬ、時に御夫婦へお話申度と申すは、甚六殿の。

お春　ア、申し〳〵六郎右衛門様妹お六が事なら、仰つて下さりまするな、成程お六がお目に入りまして、貴方の奥に進ぜますれば一家も廣うなりますれども、御覽うじたとは違うて不調法者で御座りますれば、去るのいなすのと申す事が、末で御座りましては、結句好い仲が惡うなるやうなもので御座ります。依つて畏りました進上致しませうと申す事は、エヽ申しませぬ、治郎右衛門返事致されまするとあつても此通りで御座ります、治郎右衛門が進ぜまする事が、

なりませぬと申せば、どうやら角が立つて悪う御座りませう、依つて私が女子の鼻の先と、ホヽヽお六が事ならば。お話は御無用で御座りまする。

六郎　成程その不調法な所が手前の望みで御座りまする、武士の女房は律義の世間を見ぬ親の懐子と申すが好く御座りまする。それが手前の望みで御座りまする。

お春　今申しまする通り、お請合はエヽ申しませぬ、仰つて下さりますな。

六郎　サアそこをどうぞ。

お春　ハテまだ仰りまするわいなア。

六郎　スリヤ眞實成りませぬかな。

お春　ハイマアさうで御座りまする。

六郎　治郎右衛門殿も、御内證の御心底と同事かな。

治郎　成程。

六郎　あの必定。

治郎　なか〳〵。

ト六郎右衛門思案して。

六郎　甚六殿イヤサ甚六こりやどうで御座る、お身は此六郎右衛門が武士を捨てさせるか、今治郎右衛門殿御内證の仰られたる事をお身も聞いてゐるであらうが、元此お六の事は手前が云ひ出した事ぢやないぞや、霜月廿日過にお身が身共の屋敷へ話しに來た時に、お手前が云ふ事には、妹お六を縁付ける事を、治郎右衛門いろ〳〵と世話なされます、治郎右衛門言分には、何卒須藤六郎右衛門殿へ進上致したいが、嫁入する娘を押付賣にもならずと、壁訴訟のやうに云はれますると、身が屋敷でお身は云つたわサ、それは近頃過分なそれともに内證を聞いて下され、治郎右衛門殿その心底ならば貰ふまいものでもない、と云うたれば畏りました尋ぬるに及ばぬ事ながら、今一應篤と申しまして御返事致しませうといつて、又々その後日も忘れぬ極月十三日の夜、お手前身の屋敷に來て愈々此方に替る事は御座らぬ、治郎右衛門夫婦殊の外悦びますると、お身云つたぢやないか。それ故表向よりと思うて今日云ひ出して、治郎右衛門殿御内證の今云はれた事を聞いて、面目ないと云はうかこれがどう納るものぢや、六郎右衛門武士が立たぬ、お身達のやうな浪人とは違ふぞ、何と納めうと思はるゝぞ。

甚六　六郎右衛門様、それはチトお詞が餘りまする、浪人では御座れども作州に居りました時分は、小地も持つてをりました甚六で御座る、今奉公人ぢや浪人ぢやと申して、武士の性根に替る事

は御座らぬ。

六郎　現にこれ程變る事があらうか、治郎右衛門殿合點の上は、お六が兄甚六の云ふ事ぢやに依つて、一家共へも此儀話したれば、ヤレ目出度事とあつて早や樽肴を送りくるゝやうな仕合せ、又御念頃な御家老中へもお話し申したその上に、これが違つて六郎右衛門が顔を何處にさし出さるゝぞ、過言なれども六百五十石申請けし弓大將ぢや、千も萬もいらぬ六郎右衛門が武士の立つやうにしやれ、武士が立たぬとお身を打殺して切腹までの事ぢや、サア武士を立ちやれ、甚六。

甚六　今申す通り甚六も侍で御座る、立つ事も立たぬ事もお六を此方の女房に進ぜさへすれば、掛り合はない筈の事。（ト云うて次郎右衛門の方に向き）治郎右衛門殿、成程これまで身共が口で申した事ぢや、高が身共が妹の事ぢやに依つて、六郎右衛門殿の頼みは遣はさるゝ前日にでも、此方へ申しても、相濟む事と思うて、今迄云はずにをつた、サアよろしう六郎右衛門殿へ御返事なされて下され、すりや双方共に立つといふもの、治郎右衛門殿、よろしう返事をなされて下され。

治郎　六が儀は、兄弟の儘にも妹聟の拙者が儘にもなりませぬ、と申すは三年以前六が兩親より親許太夫が子に貰ひ置きまして、六は親共の娘で御座る、眞實の子よりも不便がりまする、又うち

うすと親共が契約致した事もあるやうに承つた、何分縁のない事と思召して下され。

六郎　サア甚六、六郎右衛門が武士の立つやうに仕やれ、どうぢや。

甚六　治郎右衛門殿、イヤ治郎右、兄弟のまゝにならぬとは妹は子も同前兄は親、此甚六がお身を立て治郎右衛門殿よろしう返事をしやれと、無事を思ひ事を美しう思うて云へば、人を馬鹿にしてエヽ但し妹めも此甚六もお身にかゝつてをるに依つて侮つての事か、そりや武士でないそのむさい性根のお身にかゝつてをるやうな甚六でない、大事の妹のお六ぢやに依つて、腰元茶の間同然に思はせる事はならぬ、モウお六も身共もお身にかくまはれぬ、妹を取返して俺が方から縁に付ける、兄親のする事を何者がぐつとでも云ひ人があらう、何誰なりともぐつとでも云うて見たがよい。

ト治郎右衛門大に笑ふ。

イヤおかしらもない事を、長笑ひを。

六郎　サア甚六、武士を立ぬか。

甚六　立てませう、千も萬も入りませぬ、お六を連れて參つて、此方へ直に手渡し致さう、お受取なされませう。

トつゝと立って奥へ行かうとするを、お春止めて。

お春　これ甚六殿、此方は何處へ行かつしやる。

甚六　妹を連れて來て、六郎右衛門殿へ女房にやるが、何とした。

お春　待たしやんせ、こなさんは人には格別、連合治郎右衛門殿へ向けては、さう云はれる義理ぢやあるまいがの。

甚六　兄親が妹を何處へやらうが、どうせうが俺が心任せ、又どいつでも妨げすると打放す、妹を六郎右衛門殿へやらねば、身共が詞が反古になる、甚六が武士が立たぬ、退け。

ト突き退け少く揉み合ふ事、治郎右衛門寄って甚六を一寸と當てる、ウンと云うてひるむ。

こりや當てたな、モウ堪忍がならぬ。（ト治郎右衛門の傍へ寄って、）治郎右衛門當てたな、武士のむさい、甚六が云ふ事が虫に入らずば、なぜ腰の物では云はぬ、町人等の喧嘩かなんどのやうに見苦しい卑怯な、又此甚六は口先では云はぬ、これで云ふ／＼、（ト刀を拔き前に置き、治郎右衛門の鼻の先へふり廻して、）慮外ながらこれで云ふ、人の云ふ事これで聞く、妹の事ぢやに依つて治郎右衛門から／＼ぢやと云はぬと云うて言分があるか、治郎右衛門々々と立つて居れば方途もない、六郎右衛門殿であらうが穢多非人の所であらうが俺が心任せ、又心任せになるま

いと云つて見たがよい、ムヽ聞く氣ぢやオヽ慮外ながらずんと聞く氣ぢや。（ト刀をつた取り下に置いたりして。）そちらの返事に依つて一家の誼、品に依つたら料簡してやらう、又料簡を受ける事もないといつて見たがよい、サア〱手短にお六は兄親の儘にはさせぬならぬと、サアサア云つて見たがよい。承るぢや、これで承るぢや。

ト此間治郎右衛門框を喰つてゐる。

治郎　六郎右衛門殿、其許の武士は拙者が立てませう。

甚六　さうならうぢや。

六郎　どうして立てさつしやる。

治郎　此甚六に上下を着せまして、しかも日中に其許は勿論御一家中の庭へ、犬匐ひに匐はせまして詫させませう、然れば、其許の御一分は立つと申すもの、それを腹癒せになされて御料簡なされて下さりませ、彼めを四つんばひに匐はせませうわサ。

甚六　何ぢや俺を犬つくばひに匐はさう、モウ堪忍がならぬ、サア今が最期ぢや覺悟はよいか、斷つて置いたぞ、それでよいか、たつた今ぢや今が最期ぢや。（トゆするこなしあつて。）ヤア何奴も止めな、イヤサ止めてくれ、いや止めな。

トいろ〳〵こなしある、お春捕へて

お春　待たつしやれ。

甚六　イヤ待たぬ〳〵止めな〳〵。（トいろ〳〵こなしある。）

お春　これ兄樣、甚六殿。

甚六　こいつが男の心意氣をするな、不幸者めが。

お春　イヽヤ止めてやるが、こなさんの爲ぢや。

甚六　爲ぢや。

お春　これこなたは私が止めてやるが嬉しからうがの、サア云うて見さつしやれ、こなたを止めずに捨て置くと、義理にでも切りにかゝらにやならぬぞや、こなたのやうな五人三人苦にするお人ぢやないぞや、治郎右衛門殿は今此方が刀を拔いてびう〳〵さつしやるけれど、見向きもせずに榧を喰つてゐさつしやるわいの、それ程に人に性根を見拔かれるといふ事がある事か、私や先刻から見てゐても、何處ぞが血を分けた事ぢやに依つて、連合の手前面目なうてならぬわいの、さういふ心ぢやに依つて、親達に勘當受け行方なうなつてしまつた後で、親達は去年と一昨年に死んであつたわいなう、臨終の時もお六や私への遺言に、必ず甚六を兄と思ふな兄弟の

緣をすれば、そち達に恥を與へる奴ぢや程に、と息引取るまで、その事を云うてゞあつたわいの。連合治郎右衞門殿は私に隱して方々尋ねて詮議さつしやれたれば、伊勢街道で切つて人間の沓履物持つ事か、馬の沓を持つて坂は照る〳〵というて、此方は步いてゐたぢやないか、それを密に此屋敷へ連れて來て、此やうに着飾り大小は誰が蔭で此方さすぞ、ほんに親よりも恩のある大事の治郎右衞門殿ぢやぞや、恩を着て恩を知らぬは畜生ぢや、犬ぢやわいなう、まだ犬は主を知り恩を知つて尾を振るわいなう。

ト泣く、甚六はいろ〳〵こなしあつて、ハアと大きに泣く。

甚六　ワア〳〵。一言もない、謝つた〳〵、ひよつと口が辷つてお六が事を、六郎右衞門殿へ嘘をいうた、その嘘が剝げて身が熱うなつて來たに依つて、大恩を着た治郎右衞門殿へ慮外を云うた、成程俺は人間ではない畜生ぢや、ほんに惡いと云うて俺がやうな惡い者があらうか、よしよし思ひ廻して見れば、我身に愛想もこそも盡き果てた。(ト治郎右衞門の傍へ寄つて)治郎右衞門樣重々あやまり入りました、あなたの手討に逢ひたうは存ずれども、須藤殿のお手に掛らねば、六郎右衞門殿の御一分が立ちませぬ、何事も兄弟の妹に免じて御料簡なされて下され。六郎右衞門殿御一分が立ちますまい程に、拙者をいかやうともなされ、御一分を立てさつしや

れて下され、お恨みとは存じませぬ。

六郎　蓄生人非人と思うて料簡すれば、身が武士が立たぬ、これへ直れ、料簡ないぞ。

ト甚六肌脱ぎ前へ直る、六郎右衛門刀を持ち立かゝる。新七向うより走り出て來り。

新七　兄者人、まだ何にも樣子はお聞きなされませぬか。

治郎　何ぢや何ぢや。

新七　幸ひ六郎右衛門樣にもお聞きなされませう、若黨權八が八幡宮へ惠方詣致しました所、六郎右衛門殿の組下鎌田瀨左衛門殿と口論致し、相果てまして御座りまする。

治郎　ナニ六郎右衛門殿の組下瀨左衛門と、權八めが口論して、八幡の道にて相果てたか。

新七　左樣で御座ります。

治郎　組下瀨左衛門とな。

ト六郎右衛門と甚六顏見合せる。

女房共聞いたか、權八めは出來しをつた、シテ對手瀨左衛門は何と致した。

新七　所の者共狼籍者というて打据ゑまして縛り置いて、只今お上へ檢分願に參りましたれば、お上より兄治兵衛へ仰付られまして御座る、恰度そこに私居り合せ、樣子承りまして御座ります

る故、早速お知らせ申して御座りまする。

治郎　出來した／＼、外の衆中へ檢分仰付られても、身共が家來の仕出した事なれば、嫌でもその場所へ立合はねばならぬ事ぢや、奧、供の用意云付けやれ。

お春　畏りました、それ行てさういや。

しま　ハイ。（ト兩人奧へ入る。）

治郎　羽織寄越しやれ。

お春　アイ／＼。（ト羽織を出して來て着せる。）

六郎　新七殿、愈々手前組下鎌田瀨左衞門で御座るな。

新七　成程さやう承りまして御座りまする。

六郎　ハアヽヽ。治郎右衞門殿お暇申す。（ト行かうとする。）

治郎　待つしやれ、お歸りなさるか。

六郎　對手は組下鎌田瀨左衞門と御座れば、その場所へ參られにやなりませぬ。

治郎　同じ道ぢや、同道仕らう。

六郎　イヤ／＼拙者は急に參らにやなりませぬ。（ト云ひ捨てヽ走り向うへ入る。）

治郎　これ〳〵一緒に參らう、これさ〳〵

ト此問甚六いろ〳〵こなしあつて。

甚六　ハテ權八め、好い奴であつたに、ハテサテ可愛い事を。（ト云ひ乍ら行かうとする。）

治郎　甚六待ちやれ、お身は何處へ行く。

甚六　手前が屋敷の權八が口論致したと御座る、聞き遁しにはなりませぬ、せめて死骸なりとも片付けてやりませう。

治郎　ハテ親切な事ぢやなう、それ甚六、あれへお行きやつたら、直に何處へなりとも行たがよい、これこゝに金子の有合せが八九兩もあらう、これを路銀にしてどつちへなりともふけつたがよい。又必ず近國にうろたへてをるまいぞ、尋ね出されて獄門が物は見え透いてあるぞ、又他國へ行ても今迄の性根が止ねば磔に懸るぞや、隨分嗜んだがよい、ア、どう見ても磔獄門の相がこゝらにぶら〳〵してある、これ生きてゐる獄門が見たくば、あれ甚六が面を見いサ、ハ、ハ、、、。

甚六　治郎右衛門一旦は恩を着てゐるお手前ぢやに依つて、堪忍せうと思へどもこればかりは堪忍ならぬ、此金を路銀にしてふけれ、獄門ぢやの磔ぢやのと何でいふ、獄門磔にかゝる因緣を聞

かう。

治郎　云はずともそりやそちが心に覺えがあらう、俺が云ふにや及ばぬ

甚六　イヤ覺えてはない、われが口から聞かう、サア云へ。

治郎　云はぬ。

甚六　云はぬとて云はずに置かうか、これで打据ゑて聞かうわい。

ト打ちにかゝる、一寸立廻りあつて甚六を取つて押へ。

治郎　磔獄門の因緣を云うて聞かさうか。（ト甚六を叩き伏せ又引立て）こりや、家來權八めが鎌田瀨左衞門と喧嘩は、六郎右衞門とわれとが企んだ事であらうがな、お六を六郎右衞門が所望すれども、この治郎右衞門が呑込まぬと察して、八幡參詣を幸と組下の者に吩咐けて、誰とも知れず奪うて行つたにせうとしたれど、權八めがきかぬ性根の奴で、お六を助けん爲めの仕合、なんと返答があるか大盜人の恩知らずめが、最前女房が云ふ通り馬子になり下つてをつたを、女房の恥は治郎右衞門が恥と思うて屋敷へ呼び入れる折柄、たつて女房が無用にして下されと云つたれど、血を分けた兄弟の事ぢやに依つて、心の內では悅びもするであらうと、女房には甚六を俺が家來にして使ふ、そち達が兄ではない、給金の極め仕着を着せて奉公人、請狀を取

つて俺が家中ぢやと、夫婦の中にも義理を立て、ならぬを屋敷へ呼込んだはやい、こゝにある
が見せうか、うぬ主に慮外をし手向ひするおのれぢやに依つて、磔の相があると云うたが、
何と出して見せうか返答があるか〳〵。（ト叩き据ゑ。）大盗人めが。

甚六　理に迫められては返答は御座らぬが、六郎右衛門と一緒に成つて鎌田瀬左衛門と權八とを口論
させたと仰るが聞えぬ、只今六郎右衛門これへ連れて來て、一緒か一緒でないかお目にかけ
う、大勢と仕組んで六を奪ひ取る心があらば最前の出入も御座らぬ、追付心底お目に掛けう。

ト外へ出るを。

治郎　これ〳〵路銀にしやれ。

甚六　六郎右衛門を連れて來て、その上で路銀貰ふ筋たらば貰ふサ。（ト金を投ふる眞似して持つて入る。）

治郎　大盗人共めが二人目配せをして、こゝを二人ながら駈出しては、モウ闇には及ぶまじ何處ぞに
待伏して、此治郎右衛門を仕舞うて取らうと云ふ事か、己等ばかり悧巧なやうに、世間の人間
をかいつまんだやうに思うてをる、智恵なし共めが。

お春　アノあなたの御座る所に、待伏をかいな。

治郎　オヽサモウ斯くの通りお上まで露顯した事なれば、折好くば身共を討つて逐電する心ぢや、見

え透いてある事ぢやわいの。

お春　それでも今性悪が言分では、あながち六郎右衛門と一緒とも聞えませぬが。

治郎　エヽ旨い事を云ふものぢや、ソレ今俺がそこへ投げた金がやはりそこにあれば、萬に一つ六郎右衛門と一緒でない事でない事もあらう、又その金がなくば一緒ぢや、提灯の灯で見やれサ。

（ト提灯にて方々を探す。）ないか〳〵。

侍　何にも御座りませぬ。

治郎　ハア一緒々々、奥、行つて來うぞ。

お春　エヽそんなら、今の奴等が待伏して居るのぢや、御座りませぬかいなア。

治郎　ハテ馬鹿な、目があるわいの、留守能くしやれ。

ト云うて供を連れて向うへ入る。暮六つの鐘鳴る。

お春　モウ日が暮れた、どんな事にかゝつて大事の年越の夜、これ〳〵惠方棚へも燈明上げや。

皆々　畏りました。

ト皆々入る、厄拂出る。

厄拂　厄拂ひませう、厄拂ひませう、お厄拂ひませう〳〵。

ト云ひ乍ら四五人出る。お六内より出る、おまき行燈持つて出る。

まき　これ厄拂、よう念入れて拂うてたもこ

厄拂　畏りました、やアら目出度やな〳〵。

ト厄拂うて、厄拂皆々入る。

まき　お六樣、お前も厄拂しなされませんか。

お六　いかさまどうやらおかしい正月ぢや、拂はうはいなう。

ト此うち甚六六郎右衞門頬冠して出て窺ふ。

まき　さうなされませ。

ト此時内より。

しげ　おまき殿〳〵御用があるぞや。

まき　アイ〳〵。

お六　姉樣の用があるさうな、行きや〳〵。

まき　ハイ。（ト入る。）

六郎　厄拂ひませう、お厄拂ひませう。（ト聲を變へて云ふ。）

お六　これ厄拂ひ、念入れて能う拂うてたも。

六郎[illegible]ハイ〳〵やアら目出度いな〳〵、此方の御壽命申さば鶴は千年龜は萬年。

　　ト云ひ乍らお六の手を取つて外へ引出さうとする、お六恟りして。

お六　あれ〳〵何ぢやいな〳〵。

六郎　やかましい〳〵。

お六　ヤア兄さん、六郎右衞門樣。

六郎　聲が高い。

甚六　やかましう云ふと是ぢやぞ。（ト刀のそりを打つ。）

お六　お前方はあられもない形で。（ト顫ふ。）

六郎　戀故の厄拂ぢや。

甚六　われを連れに來たのぢや、こゝへ來い。

六郎　こゝへおぢや。

お六　アイ。（トいろ〳〵こなしある、お六行燈を持ち後へ寄る。）

甚六　聲を立てると打殺すぞ。

六郎　殺さぬ、こゝへおぢや。

ト此時お六灯を吹消す、これにて暗闇になる、兩人お六を捕へやうとするこなし、いろいろあつて、此うちお六外へ拔け出て向うへ走り入る、跡に兩人いろ〳〵こなしある、内より助太夫手燭を持つて出て。

助太　何者ぢや、何奴ぢや。

ト兩人びつくりして隱れるを見て

ヤア須藤六郎右衞門、わりや甚六か。

ト云ふうち手燭を切落し、助太夫を一かせ切る、これより立廻りあつて、助太夫椽の下へ落ちる。兩人助太夫を尋ねるこなしあつて、六郎右衞門甚六を押へる。

甚六　俺ぢや〳〵。

トいろ〳〵おかしみある、此の間奥より新七出て來り。

新七　合點の行かぬ盜人めらぢやなア、灯を持つて來い。

ト此間六郎右衞門新七に切付けるを、一寸立廻りあつて六郎右衞門向うへ逃げて入る。

どつこい。

ト追駈け向うへ入る。跡に甚六うろたへゐる、奥よりお春出て盜人と思ひ捕へようとする、甚六まい

ら戸を開け入る所を、戸にて詰める、それより一寸立廻りあつて、甚六を戸の内へ入れ錠前を下す。

お春　女共々々、盗人を捕へたぞ、ちよつと來い〳〵。

ト内より皆々出て來り。

皆々　エヽ、盗人を捕へなされましたか。

ト口々に云ひ乍、枡に豆を入れ持ち出る。

お春　此まいら戸の内へ入れて、錠を下して置いた。

三人　さてもお手柄々々々々。

ト此間向うより治郎右衛門戻り來る。

侍　旦那のお歸り。

お春　それお歸りなされたぞ、お歸なされましたか。

治郎　歸つた〳〵。

お春　權八はなんと仕りまして御座りまする、死にきつて居りましたかえ。

治郎　イヤまだ虫の息がした、身共が行つて權八々々と云つたれば、目を明いてじろりと見て直に落入りをつた。

お春　可愛や。

治郎　瀬左衛門めは六郎右衛門に頼まれた事を有様に白状しをつたテ、故に直様牢へひき、六郎右衛門甚六はお尋ねぢや・權八が死骸は直に貰うて寺へ遣はした。ア丶不便や好い性根の奴であつたが、佛壇へ香でも焚いて回向しやれ。隱居へ隱さうぞ。

お春　アイ〳〵、それ我身達は水も手向けたり、香も盛つたりしや。

三人　アイ〳〵いとしや〳〵。(ト入る。)

お春　今年はマア何とした、あなたのお出なされた後へ、盜人が入りましたわいな。

治郎　さうして取り逃がしたか。

お春　イエ〳〵よう逃しませうかいな、此まいら戸の中へ入れて、ぴんと錠を下して置きました。

治郎　出來した〳〵、テモ憎い奴ぢや引出しや、打殺して了ふ。

お春　ア丶そりやマア三ケ日過ぎてからの事に、なされたが好う御座ります、何も盜まれたと申すではなし、助けてやつたが好う御座ります。

治郎　いかさま憎い奴なれど、權八めが功德の爲に今夜中物思ひさして、追放して了うたがまし、顏はどのやうな奴ぢや。

お春　暗がりなり、又頰冠してをつたさうに御座りまする。

治郎　いかさま顏は隱して居さうなものぢや、ハテ憎い奴ぢや。

ト云ふうち助太夫椽の下にうめく。

誰かうめくぢやないか。

お春　ハイ何處ぢや存じません。

治郎　待ちや、ヤアうめき聲が、隱居の聲によう似たが。

ト此間お春行燈にて助太夫を見付けて。

お春　ヤア隱居樣で御座ります、ヤア切られてゐるわいなア。

治郎　どれ、ヤア親父樣ぢや。（トびつくりして。）これ申し親父樣、治郎右衛門で御座りまする、性根をお付けなされませ。

お春　申し、お春で御座りまする。

助太　治郎右衛門お春、エヽ無念な。

治郎　申し〳〵、氣を確にお持ちなされ、疵は急所を離れて御座りまする、養生のなる疵で御座ります。

お春　申し隱居樣、貴方を何者が此やうに致しまして御座りまする。

治郎　何者が此やうに致しました、それをたつた一言仰つて下さりませ。

助太　最前暗がりにて、餘り心得ぬ樣子ぢやに依つて、手燭を持つて出て見たれば、須藤六郎右衞門めが。

治郎　スリヤ須藤六郎右衞門めが。

ト治郎右衞門こなしあつて思案する、お春こなしあつて。

お春　こりや家來共、隱居樣を六郎右衞門が討つて立退いたぞ、手分して追駈けい。

治郎　ハテ扨やかましい、マア待て。

お春　テモ敵と知れた奴を取り逃しては。

治郎　さればサ家來の者共は親父樣の子か孫か、家來共に首尾好う六郎右衞門を討終らせて、此治郎右衞門が親への孝行になるか、馬鹿な事を、六郎右衞門と知れたれば、是程滿足な事はないがや。

ト助太夫ウントうごめく、兩人傍へ寄り。

申し〱お氣の弱い、養生のなる傷で御座りまする、性根を確にお持ちなされませい。

お春　申しお心を確にお持ちなされませ、養生はなりますといな、ほんにこりや養生の叶ひなさろ筈で御座りますかえ。

ト治郎右衞門顏を振る、兩人ほろりと泣く。

治郎　此傷で養生がならいでか。
助太　治郎右衞門々々々々々々。
治郎　ハツこれにをりまする。
助太　治兵衞を呼びにやつてたも。
治郎　畏りました、誰ぞ家來を呼やれ。
皆々　出やつしやれ、御用があるぞや。

ト與五平出る。

治郎　こりや治兵衞がお役所から歸つて居やう程に、チトいひたい事がある、今われと一緒に來やれと云つて來い。
與五　畏りました。（ト與五平入る。）
治郎　親父樣、治兵衞を呼びに遣しまして御座る、追付け、イヤ參りまする。

助太　オヽ嬉しうおぢやる、お春。

お春　アイ〱こゝに居りまする。

助太　そなたに今日頼んだ事、治郎右衛門へ云うて終つたか。

お春　申しました。

助太　治郎右衛門若い者の事ぢやに依つて、有るまい事でもない、互に目なしぢや、どうで俺や此傷で命はない程に、俺が息のある間に、治兵衛とお六と祝言の杯をさして、夫婦にしてくりやれ、これが身共の一生の願ぢや、頼みます。

治郎　お氣遣ひなされますな、夫婦の杯を、只今させまする程に、お心を確にお持ちなされて下されされ。

助太　アヽ嬉しい、兄の彦坂甚六めと須藤六郎右衛門と一つになつて、六を女房にとさま〲無法な事を吐かす樣子を聞いた、己等が望が叶はぬとあつて、能くも兩人して此の通りにしろいた、六郎右衛門めは六郎右衛門とも思ふが、恩知らずの畜生め萬事治郎右衛門の恩を忘れて、治郎右衛門、六郎右衛門より先甚六めを一番に討つて手向けてくりやれ、頼む。（トヌウント延る。）

お春　申し御隱居樣、兄甚六は頰冠をしてをりましたか。

助太　両人共に頰冠りして、面は隠して居たれども、とくと詞を交した。

治郎　頰冠を。

ト治郎右衛門お春顔見合せ、まいら戸の方を見て、お春つかつかと立つて。

お春　恩知らずの畜生め。（ト行かうとするを。）

治郎　待て。

お春　隠居様の目の前で、あいつを八裂にせねば、どうも私が心が済みませぬ。

治郎　甚六は今は殺されぬ。

お春　私が手にかけ殺さにや、どうも私が立ちませぬ、殊に御遺言を背きまする。

治郎　甚六を討つて捨てよとの遺言は、反古にせぬが、今甚六を殺すと大事の御遺言に背くがや。

お春　とはな。

治郎　死期の頼ぢや、治兵衛とお六を夫婦にしてくれいとのお頼み、今甚六を引出し殺す場所へ、治兵衛が来て右の様子を聞けば、なんぼ腐り合ふたる仲でも、親の敵はお六の兄と思はゞ、義理にでも夫婦になるまいと云ふは定、すりや治兵衛がお六と夫婦にならずば遺言を背き、又甚六を目の前で切つて見せたら、ヤレ嬉しやと心が緩まば直に御臨終、目の前で盃をさせ一くれ

いと仰る御遺言にも背くがや。甚六は籠の内の鳥、何時討たうとも儘の事ぢや、治兵衛と六
と夫婦の盃をさせた上で、成程討さう程に先づ待て。

お春　必ずそんなならアノどう畜生、私に切らして下さりませや。

と泣く。與五平戻り來り。

與五　治兵衛様、只今お出で御座りまする。

治郎　來るか〳〵、これ何の氣もない顔して居にやならぬぞ、蒲團持て來い。

皆々　アイ〳〵。

ト蒲團を持ち來り、助太夫を助け起して着せる。

治郎　親父様、治兵衛が只今參りまして、此體を見ましたらば祝言の杯どころでは御座りませぬ
故、暫くの間いつもの通りになされて下さりませ。

ト助太夫うなづく。

女共、わいらもさう心得てゐい。

ト向うより治兵衛お六を連れて出て來り。

治兵　兄者人、只今はお人で御座りました。お役所より歸りました所で御座りました故、直に參りま

した。

治郎　オヽ大儀々々、そちは六ぢやないか。

お六　アイ。

治郎　いつの間に治兵衛方へ行つたぞ。

お六　先刻、六郎右衛門殿と兄甚六殿とが、私を捉へ何處へやら連れて行かうと云うて、捕へやうとしましたに依つて、ちやつと逃げて治兵衛樣の所へ行きまして御座りまする。

治郎　けはしい所で治兵衛が屋敷とは、よう氣が付いて行たなア。

治兵　定めて屋敷にも尋ねてゞあらう程に、私が連れて行から氣遣ひさつしやるなと云うて、同道致しまして御座ります。

治郎　ヤレ氣の毒に、同道しやつてなう。

治兵　何か御用が御座るとあつて、お人で御座りましたが。

治郎　オヽ親父樣が、そなたに云ひたい事があると仰つて、それで其方を。

治兵　ありや親父樣ぢや御座りませぬか。

治郎　オヽ。

治兵　何となされましたかな。

治郎　イヤ病氣が起つて、女共が腰を擦つてゐるのぢや。

治兵　ハイそれは氣の毒な事で御座ります、私に仰るは何事で御座ります、お問ひなされてくだされ。

治郎　成程々々。（ト助太夫の傍へ行き。）申し親父樣、治兵衛が參りましたが最前仰りました事を、私が申しませうかお前樣仰りまするか、ハア／＼エ、私申しませうか、女房共蓬萊を持つておぢや。扨かうぢや、親父樣がそなたに無心がある。

治兵　ハテ改りました、何事で御座りまするな。

治郎　お六もそこへ出やれ、二人への無心ぢや、必ず云うた跡で二人共に腹を立てゝたもんな、無心といへば餘の儀でもない、お六が身分の事ぢや、必ず腹は立てゝたもんなや、親父樣が娘のお六を、幸ひ治兵衛に女房もなし氣に入るまいけれど、何卒女房に持つてくれまいか、幸ひ今宵は年越、夫婦の杯をしてくれるやうに仰るに依つて、氣に染まぬ事かは知らねども、そなたに此事云うてくれとのお賴みぢや。

ト此時助太夫折々うめくを治郎右衛門云ひ消すこなし。

お六　治兵衛様聞かしやんしたか、何の事かと思うたら、思ひ掛けない結構な事のやうな事で御座んす、隠居様のお頼みぢや程に氣に入らずとも、勘忍して女房に持つて下さんしたら、嬉しさうなやうなものゝやうに御座んす。

治兵　イヤモウ氣に入る事もいらぬ事も、親人の御意で御座る、どうなりとも致してよくば、いかやうなりとも。仕りまするで御座りまする。

治郎　ヤレ嬉しや、そんなら直に此蓬萊で夫婦の杯してたも、これ〳〵親父様へさう云や。

お春　アイ〳〵申し隠居様、あなたのお頼み通り、二人共に合點致させ、祝言の杯を致しまする。

ト助太夫うめく。

ハイ〳〵。

治兵　親父様はきつう病氣が、惱みまするさうに御座りまするな。

治郎　イヤうめく程嬉しがらしやるのぢや、扨と祝言の杯は女房の方から飲んでさすものぢや、お六飲んで治兵衛へさしやれ。

お六　アイ〳〵。

治郎　サア奧、酌ぢや〳〵。

ト始終お春悲しきこなし、治郎右衛門心遣ひのこなし。

お春　目出度い酌ぢや、いたしませう。

ト此うち始終助太夫うめく、お春治郎右衛門紛らす。

お六　隱居樣、きつう疝氣が痛むさうな、私が擦つて上げませう、いつも私が擦りや、ツイ癒りまする。

治郎　待ちや／＼、祝言の杯する迄は、病人の傍へ寄らぬ者ぢや、疝氣といふが延喜が惡い。

お春　サアちやつと杯して了やいの。

お六　アイ／＼姉さん、慮外に御座んす。

治郎　いつもはならずと、一つ／＼。

ト お六飲んで治兵衛へ差しきこなしにてさす、治兵衛戴く。

三國一ぢや、聟になりすました。

ト お六盃を戴く、助太夫うめく、治郎右衛門傍にある枡の豆をうつて。

福は內、鬼や外／＼／＼。

ト お六飲む、助太夫大にうめく。

福は内、鬼や外〳〵。

お春　これ申し御臨終ぢや、ちやつと御座んせいな〳〵。

ト治兵衛お六びつくりして傍へ寄る。

治兵　ヤア親父様は。

ト傍へ寄り泣く。新七戻り来り。

新七　合點の行かぬ、何れも様。

ト傍へ寄り、助太夫の有様を見てびつくりする。

治兵　申し兄者人、何者が親父様をあの如く致しまして御座る、御存じないか。

新七　宵に盗人が入りまして御座る、心得ぬ盗人と存じぼつかけ参つたが、その盗人の仕業か外に討つて立退いた者が御座りまするか。

治兵　此方は御存じないか。

ト兩人急いて云ふ。

治郎　親父様を討つて立退いた奴は、須藤六郎右衛門彦坂甚六兩人ぢやわいやい。

治兵　ナニ須藤六郎右衛門。

新七　彦坂甚六。

治郎　いかにも。

と治兵衛新七兩人駈け出す、治郎右衛門兩人を捉へ一寸揉み會ひ、よろしく留めて。

待て〳〵。

兩人　お放しなされ。（ト又行かうとする。）

治兵　敵は兩人と知れたを、待てと留めさつしやるは、おくれさつしやれたか、此方腰が脫けたか、但し狼狽へさつしやれたか。

治郎　治郎右衛門うろたへぬが、我達がうろたへてをるわえ。

治兵　此治兵衛が敵を討ちに出るが、何がうろたへた。

治郎　武士の命は數代御知行の御恩を送らんが爲、主人へ奉つた命、首尾能く敵を討ち了せればよけれども、返討に討れた時には何の命で、殿へ御恩を送るぞ、親の敵討は云はゞ私事、そちと身共は分家して別に御知行を戴いてゐる身ぢやぞよ、部屋住みの新七とは違つて居るが、イヤ思慮のない。

ト治兵衛新七顏見合し、無念のこなしにて泣く。

道理ぢや〳〵、氣遣致すな、敵を討たすが、御家老中まで申上げてお暇を願はにやならぬ、兩人とも用意しやれ、奥、金子の有るたけこれへ出しやれ。

お春　畏りました。（ト手筥を持ち來る。）

治郎　此二百兩は宿に殘し置き、治兵衞此百五十兩懐中しやれ。

治兵　畏りました。

治郎　敵討のお許を受けてお暇が出たらば、兄弟三人共に直ぐその場より出立する程にさう心得さつしやれ、定めて親父樣死骸を御見屆けに、何誰かお出なさるゝであらう程に取亂して、家中の者に笑はれぬやうにしやれ、御檢分相濟んだらば御死骸は土葬になりとも、火葬になりともお身が勝手にしやれ。

ト愁ひのこなしにて云ふ、皆々泣く。

お春　何れをさして、如何程のお暇をお願ひなされまするな。

治郎　先づ過分にお暇も願はれまい、百日のお暇を願うて見ようさ。

お六　百日過ぎたら百日目には、お三人共お歸りなされますかえ。

治郎　百日の間に敵を首尾能く討ち本意を遂げなば立歸る、若し又廻り合はぬとて重ねてお願はなら

ぬ、本意を遂げる迄は兄弟二人別れ〳〵になつて、五年七年かゝるとも敵の首引提げねば國へ
とては歸る所存はないわサ。

お六　姉樣、聞かしやんしたか。

ト泣く、お春も泣かうとするを。

治郎　大事の目出度い門出ぢやぞ、見苦しい。

ト蓮茶にて暇乞の盃よろしく、お六飲んで治兵衞へさすを。

治兵　お六待ちや。（ト止めて。）去つた、夫婦でないぞ。緣切つたぞ。

お六　エ、。

治兵　敵の妹を女房に持つては、此治兵衞ばかりか兄者人まで笑はすと云ふもの、互に好いたれば
こそ、親兄に隱して夫婦の契約したれども、今聞やる通りの譯ぢやに依つて、恨みに思うてた
もんな、敵の妹を知つて女房に持つてはゐられぬわいの。

お六　ハア、、。（トうろ〳〵して泣く。）

お春　お六道理ぢや、祝言の杯も濟むや濟まぬに去られては悲しい筈ぢや、定めて生きてゐる氣は
あるまいなう。

お六　アイ死にたう御座んす。（ト泣く。）

お春　出來しやつた、殺してやろ、我身を殺して、直にその刀で姉も死ぬる、其方一人は殺さぬ、覺悟はよいか。（ト胸倉を取つてお六を突からうとする。）

治郎　ヤレ待て、我達は何で死ぬる。

お春　現在敵に血筋を引いたる、私等なれば。

治郎　待て〳〵、そりや我身達の料簡が違うた。

治　春　何と仰しやります。

治郎　甚六は其方達が兄弟ではないぞや。

春　六　エヽ。

治郎　去年の三月から三年給金三十兩に相定め、仕着きせての奉公人、甚六は治郎右衞門が若徒、奉公人の請狀これを見よ。（ト證文を出し錢を兩手に持つて。）此錢くるゝ程にその甚六めをな、いづく何方に隱れ忍んでをらうと儘よ、孝心を見せい。

ト錢を投ふる、お春お六取つて。

お春　兄弟でないと云ふ印に、奉公人請狀を貰うたれば、

お六　甚六は家來も同然。

お春　目當は押入。

ト　お六に目交ぜして、一時に鐺にて突く、押入を開ける、内の壁が切抜いてある。

春六　これは。

治郎　何と治兵衛、アノ心底見たか、彼等が心底どうぢや、惡いか。

治兵　御尤もで御座ります。

治郎　尤もならば、ツイ女房と云うてやれ。

ト飲んでお六へさす、お春酌をする。

治兵　女房、サヽ暇乞の杯。

お六　エヽ嬉しう御座んす、とは云ふものゝ今日別れては、いつか又。

治郎　ハテ未練な事を。

お春　此上はたゞ目出度い便を。

治新　やがて吉左右。

お春　もうお立遊ばすかいなア。

ト治郎右衞門空を見て。

治郎　もはや明方。

ト内にて鷄啼く。

治兵　アリヤ八聲の鷄、

治新　夜明けぬ内に。

治郎　寢ぐらを離れる鳥の羽ばたき。

治新　ナニ鳥とは。

治郎　ハテ友を離れし阿呆鳥め。

ト治兵衞庭の松へ手裏劍を打つと、侍一人飛降りて新七にかゝるを見事に投げる。

出來た〳〵。

ト又かゝるを。

治兵　門出の血祭。（ト拔打に切る。）

治郎　サ行きやれ。

ト三人向へ行かうとするを。

お春　お三人待つた。

ト お春勝栗を紙に包み、水引を掛け、お六も同じく持つて出る。

治郎　イヤこりや能く氣が付きました。目出度うかちぐり。

ト お六治兵衛の方へ寄り添ふとするを、治郎右衛門引廻し、お春治郎右衛門の方へ寄らうするを同じく引廻し、よろしくこなし。

行きやれ〳〵。

ト 三人向うへ入る、舞臺の兩人跡を見送る、此見得よろしく。

柏子幕

下の巻

大晏寺堤の場

役名　春藤治郎右衛門、同治兵衛。同新七、高市武右衛門、同庄之助、加村宇

田右衞門、須藤六郎右衞門、彥坂甚六、奴官兵衞、同元助、七墓詣りの坊主等。

大晏寺堤三昧の場　造物一面高二重の土手、上に非人小屋、傍に石の竈に土の釜爆けある、前は砂舞臺にて、能きところに松の立木仕掛あり、空より松の釣枝、都て大晏寺堤の體。合方にて幕明く。

ト奴官兵衞、元助箱提灯を持ち出で來り、一つ鉦合方になり。

元助　官兵衞か。

官兵　元助か。

元助　何と見付出したか。

官兵　イヤサ知れないサ、わりやどうだ。

元助　今晝居つた處を尋ねたれども居らぬ、まだ詮議せぬは此堤ぢや、三昧のあたりを能く詮議して見よう。

官兵　心得た。

ト兩人方々を尋ねるこなし。

元助、此堤に非人小屋があるサ。（ト小聲にて云ふ。）

元助　どれ／＼。

官兵　やかましく云ふな、どぶさつてをるさうな、聲が高いと目を明いて、旦那へ知らす間に合點が行かぬと思うて、ふけりをりや惡い、默れ／＼。

ト囁き合ひ、靜に小屋の傍へ寄り、莚の間より覗き見てこちらへ來り。

旦那へ云つた非人めはあいつぢや。

官兵　お知らせ申さう、來い。

ト兩人連立ち入る。是より床の淨瑠璃になり。

〽急ぎ行く。春藤治郎右衛門兄弟は、首尾能う殿のお暇賜り、須藤彦坂を尋ねかね、國々廻る年月も早や二年、貯に事缺ねども膝と非人に奈良坂や、寒風に身も郡山大晏寺の三昧に、藁の假屋のかりそめに二月餘忍び居て、大和一國はじ／＼まで心を盡し身を碎き、敵を覗ふぞ健氣なる。梢離れてうたゝなく浮れ烏の音につれ、立歸る新七が、小屋の藁戸に打ちしはぶき。

ト此淨瑠璃にて、向うより新七は提灯と德利を持ち出で來り、四邊を窺ひ見て。

新七　申し／＼兄者人今歸りました、申し兄者人。

ト小屋の内にて。

治郎　ム、誰ぢや。

新七　イヤ私で御座りまする、新七めで御座りまする。

治郎　新七か今戻りやつたか。

新七　宵から早う御寢なりましたな。

治郎　日暮れては來るし、獨淋しさにツイとろ〳〵と寢たさうな、シテモウ何時ぢや。

新七　まだ初夜半、四つになりませぬ。

治郎　ム、それでは一時半寢た、ドレ茶を沸してのまさうか。

新七　私が焚きつけませう。

治郎　イヤ〳〵釜も竈も知らぬ處へ直して置いた、アハヽヽヽ。

〽と立上る、髮はおどろに延び亂れ、顏は髭むし身は苔むし、思ひやつるゝ兄弟が身の有樣ぞ憐れなる。石のへついに土の釜落葉枯枝さしくべる、竹の火箸に火せゝりして。

ト是にて小屋の内より、治郎右衞門非人の拵にて出で、竈の下を焚付ける。

シテ今日は何處を廻りやつた。

新七　ハイ今日は木津の方から新在家の方へ参りまして、思はず夜に入りまして御座りまする。兄者人此大和にも二月餘りの滯留致し、兄弟三人が詮議致しますれども、今に敵の有所とても知れませぬ、若しその内に萬一敵が病死せば、誰を敵と覘ひませうと思ひ過しが致されまする。（ト泣く。）

治郎　ハテ扨やくたいもない事を、討たす、討たすわいなう。

新七　それでも是程までに、兄弟三人の者が心を盡くしまするに。（ト又泣く。）

治郎　ハテ延喜の惡い、そのやうに云うてどうなるものぞ、こればかりは力業には行かぬ、そのやうに思うて病やなどしたらどうせうと思ふテ、ア、討たす此兄が討たすわいの、又此敵討ち了ふせねば、世界に神も佛もないと云ふものぢや、案じやるな／＼、さうかきたくるやうに思うたとて、木やりには行かぬサアよい、俺が討たす泣きやるない、なう。

新七　アイ／＼。

　と治郎右衛門茶を汲み。

治郎　サア一口飲みやれ、虫を鎭めやれ、ア、氣の弱い若者ぢや。

新七　イヤ茶よりは是を燗にしてお上りなされませぬか、木津の町で買うて參りました。（ト徳利を出

す。)

治郎　ドレ何ぢや、オ、諸白かこりや能う氣が付きました、忝い〳〵先づ荒神様へお初穗を。(ト立たうとして。)アイタ、、、こりや寝酒に仕ませう。

新七　何となされましたか。

治郎　此中から腰より下が痛んで難儀をするテ。

新七　擦りませうか。(ト擦らうとする。)

治郎　イヤ〳〵觸るな〳〵、手が觸ると猶痛いアイタ、、、。こりや何ぢやわい風の滯りぢやわい。

新七　風でも身内を痛めまするもので御座りまするかな。

治郎　さればいの風引いても、其當座に早速追ひ出せばかうはならぬが、何が打捨つて置いた故、そこで年々の風が滯つて、古い風と新しい風が一緒になつて、アイタ、、、。

新七　又そのやうな事なら、何故仰つて下さりません、貴方のお身にもしもの事があつたら、治兵衞殿や私はどう致しませうぞ。(ト泣聲にて。)

治郎　アレ云ふと、そのやうに苦にするわいの。

新七　テモ隱す事によりまする、アノ何ぞ藥が上げたいものぢやが。

治郎　ハテ氣遣ひな病ぢやない、敗毒散二三帖飮めば早速直る、明日郡山の町へ行きやつたらば、敗毒散四五服買うて來てくりやれ。

新七　さやうならば、今行つて買うて參りませう。

治郎　何處へ行て。

新七　郡山の町へ參りまして。

治郎　ハテ途方もない事を、百二三十町もある處を夜々中物騷な、河原を越えて譯もない翌の事〱。

新七　イエ〱藥を飮んで直りまするなら、一時も早う上りましたらよう御座ります、走つて行てツイ買うて參りませう。

治郎　ハテ翌の事にしやいの。

新七　イエ翌まではどうも待たれませぬ。(ト小提灯をともし。)

治郎　エヽ云へばそれぢやに依つて、是非とも行くか。

新七　アイツイ行て參りませう。

治郎　さう云ひ出したら行かにや聞くまい、そんなら序に小さい藥罐、生姜も買うてたもれ。

新七　ハイ〱。(ト行かうとするを。)

治郎　ア、これ〳〵。

新七　まだ御用が御座りまするか。（ト後へ戻る。）

治郎　金やらうか。

新七　イヤ此中貰ひましたのが殘つて御座ります。

治郎　ハテ始末をやるな、それ石高な程に怪我せぬやうに行きやれ、ア、明日の事にしてくれいで。

新七　では行て參りませう。

治郎　オ、早う戻つてたもれや。

　　ト新七そろ〳〵花道へ行く。

ソレ急いで石に躓いてこけやるな、怪我してくれるな。

　　ト新七立止り、ほろりと思入あつて向うへ入る。

ホ、跡で案じるのに。（ト跡を見送りほろりとなしあつて。）ア、兄弟は持つべき者ぢや過分な、兄は弟を力にし弟は兄を力としてゐる、その俺が病、氣遣ふも尤、しかし行戻り五里程の道、此暗いのに何者が身に引受けて行てくれうぞ、兄弟なればこそ、是に付けても國にをる女房やお六は、今日は敵の首打つて戻るか、翌は本意を遂げて歸るかと待ちに待つて、モウ此や

うに音信のないは若し返討に逢うたかと、尼法師とも樣を變へ出た日を命日として、弔うて泣いてをるであらう可愛や。(トほろりと思入あって。)ハヽヽヽ、譯もない事、思ひ出して云うた程にのハヽヽヽ、結句治兵衞や新七が聞いて居ねばこそ好けれ、あいつらが聞いたらば、兄貴は愚痴な事いふわろぢやと、笑ひをる事であらう、ハヽヽア、ヽ譯もない事思ひ出して、アヽしかし此治兵衞は何をしてゐる事ぢや、それあれらが戻るまでかうしても居られまい、どりや一寢入せうか、釜の下も消して家主に叱られぬやう。(ト椀に湯を汲み火を消す事あって。)ドリヤ。(ト立って。)アイタヽヽヽ、これではまさかの時役に立つまいが。(ト刀を拔きいろ〳〵となしあって。)アイタヽヽヽ、アヽ新七が案じるも尤かい。(ト莚を冠り。)我家へ尻から入る榮螺とは俺ぢやテ。

〽と獨言、藁引結ぶ夢結ぶ、露も結べば、置霜の嵐を防ぐ、蓑引掛け伏家にてそは入りにける。

ト治郎右衞門小屋の內へ入る、一つ鐘鳴る。

〽士の心を志と讀ませ、士の口を吉と讀む、それには背く宇田右衞門、高市武右衞門一子庄之助諸共、大晏寺の堤傳ひ三昧近く立止り。

ト是にて向うより宇田右衞門、高市武右衞門、同庄之助、家來大勢連れて箱提灯を持ち出で來る。

宇田　官兵衞、此堤ぢやないか。

官兵　成程、これで御座ります。

宇田　庄之助殿、道々も申す通り身共が先づ輪袈裟を試した後、桶するを打放して見たが好う御座る、今迄ちよこ／＼試して見られたか。

武右　イヤ悴がさして居りまする兩腰共、伯父の讓りで數多試しました腰の物で御座れ共、あの者が試しまするは始てゞ御座ります。

庄之　仰せの如く遊ばした後、腕なりと股なりとも袈裟にかけられ、腕試しが致したう存じまする。

宇田　家來共、ヤイ非人めがふせつてをるか見て參れ。

奴〇　畏つて御座りまする。（ト奴〇小屋の傍に窺ひ寄る。）他愛もなうふせつて居りまする。

宇田　ナニ武右衞門殿、すつぱりと乘るか乘らぬか、お目に掛けう、お出なされ、家來提灯持て。

奴△　ハツ。

ト宇田右衞門ツカ／＼行かうとするを。

武右　イヤ／＼待て／＼、イヤお待ちなされ。（ト止めて。）非人では御座れ共生あるもの、殊に科もな

い奴の儀で御座る、互に貴殿と拙者詞の論じ合ひが非人めの不仕合と申すもの、寢込を討役すは餘りな儀で御座る、引起して得心させ、經陀羅尼の一遍も稱へさせての儀になされたが、能う御座らう。

宇田　こりや御尤、家來共、武右衛門殿の家來もあれへ行て、非人めをこれへ引起せ。

皆々　畏りました。（ト皆々小屋の兩方へ立ちかゝり。）

官兵　非人め御用がある。

皆々　出ませい〳〵。

トこれにて治郎右衛門びつくりして小屋より出て、ツカ〳〵と砂場へ降りる。

治郎　非人めに御用とあつてお召しなさるゝ、先づ各々樣方は何誰樣でござりまする、各々方は。

宇田　それ尋ねて何にする、非人め用がある。

奴皆々　それへ出をらう。

治郎　へイ。

宇田　出をらう。

治郎　へイ。

奴皆々　出ませい。
治郎　へイ。
宇田　出をらう。
治郎　へイ。
奴皆々　出ませい。
治郎　へイ。
宇田　出をらう、〱〱。
奴皆々　出ませい〱〱〱。
武右　こりや〱口々に云うて狼狽さすか。非人そちに無心がある。
治郎　見ますればお歴々様、此非人めに御無心と御座りまするは、如何やうな儀で御座りまするな。
武右　夜中に我々これへ参つたは、非人そちにチト無心があつての事サ。
治郎　非人めが、身に叶ひました事で、御座りませうならば。
宇田　ずんと叶ふ事ぢや。
治郎　へイ。

武右　聞いてくれるぢやまで、その無心と云ふは。
宇田　體が貰ひたい。
治郎　エヽ。
武右　今宵此御方と詞の論じ合にて、試さねばならぬ刀がある、寢込を試すは安けれども、得心の上と思うて呼出した、非人そちが體を貰うたぞよ。
治郎　これは思ひがけもない、さりとては思ひ掛けもない、イヤモ非人の儀で御座りますれば、のたれ死もするやつと思し召しての儀で御座りませうが、私めも腹からの非人でも御座りませぬ、一家一門は皆歷々、かやうな形に成下りましても、今一度元の人間に立歸りたいと、朝夕神佛を祈らぬ日とても御座りませぬ、命が惜しう御座りまする、又左樣な大事のお道具で非人めがやうな體を御試しなされましては、お刀の穢れとこそなりませうとも、いづれ譽にはなりませぬ、こゝの所を御料簡なされてお助けなされて下さりませうならば有難うござりまする、モウのたれ死致しまする迄も、たゞ命が惜しう御座りまする、どうぞお助けなされて下さりませうならば有難う御座りまする。（ト拜んで泣く。）
庄之　段々樣子を聞けば不便な儀、是非試さいでなりませずば、近々お仕置者もあると聞けば、非人

が命はお助けなされて遣はされませ。

宇田　ハテ氣の弱い、一家一門にも見限られる奴、碌な奴ぢや御座らぬ、寢込を打殺すは安けれども、念佛の一遍も唱へさせうと思へば、付上りのしたどう乞食めが、これへ出をらう、家來共それ引立てい。

奴皆々　ハツ。

ト皆々かゝるを見事に投げる。

宇田　イヤ慮外な奴の、手向ひか〳〵。

ト刀の反打ち詰めかける、治郎右衞門後すさりして急度と椽へ。

治郎　ア、、たつた一言申度い事が御座ります、暫くお待ち下さりませう。

宇田　イヤ慮外な奴の。

ト家來と立廻りある。

武右　イヤ〳〵お待ちなされ、非人めは何やらたゞ一言申度と申しまする、暫く〳〵ヤイ非人め、おのれ呑込みの悪い奴ぢやぞよ、斯の通り大勢の者がおつとり捲いたれば遁るゝとて逃がさうか、今の如く手向ひすれば、ナ付く料簡も付かぬやうになるがや、サア謝れ〳〵謝つたか〳〵。

治郎　重々謝りまして御座りまする。

武右　謝つてをりまする、先づ〳〵お控へなされ。

ト宇田右衛門呟き、後へ寄る。

治郎　ヤイ非人、今聞けばたつた一言願ひがあるとやら、サアその云ひたいと云ふ事聞くまで、此方に卒爾は存じない、これへ出てその願を云へサ。

治郎　お願と申して餘の儀でも御座りませぬ。

宇田　命の願なら叶はぬぞ。

治郎　成程命さし上げませうが、こゝを恐れ乍お聞きなされて下さりませう。私めは大切な望みのある身分で御座りまする、此望みさへ叶ひまして御座りませうならば、此方よりお屋敷まで直に此骸をお試しなされませと差上げませう程に、暫くの間非人めが命は、お助けなされて下さりませうならば有難う御座りまする。

武右　ム、われがその大切な望みといふは敵打ぢやな。

治郎　イヤさやうな。

武右　イヤサ隠すな非人、武士も及ばぬ今の働き、八相の構へ眼をすかさず、こだてを取り、すはと

云はゞ一方を切り破るべき身の構へは、柳生の極意奥義を極めながら、只ひたすらの詫言は願ひ叶ようまでの非人と見た、サア敵討であらうがな。

治郎　ヘイ。（ト傍へ目を配り。）御目立ちまする上からは、包みませうやうは御座りませぬ、必ず御他言は御無用、成程私は親の敵を覘ひまするもので御座りまする。

武右　ム、さう見ゆる／＼。

宇田　ハ、、、大盗人め、敵討とさへ言へば陣の小口もまぬがるゝ習ひと偽り者めが、眞實敵を覘ふ者が、見ればおのれ刃物たいした物は勿論、小刀一本持つても居らず、敵に出合ひ何をもつて本意を遂げるか、こゝな大盗人めが。

治郎　御不審は御尤、非人の身で御座りますれば、人に目立ちまするを憚り、此竹杖に仕込み置きまして御座りまする。

宇田　どれ抜いて見せい。

治郎　イヤ御覧じまするには及びませぬ。

宇田　見せぬは偽り、そりや家來共。

奴皆々　捕つた。

ト奴四人つか〳〵と行く、治郎右衞門二人を投退け、竹杖の刀を拔く、皆々びつくりして後へ飛退く。

治郎　青井下坂二つの胴に敷腕、へゝゝ親重代で御座りまする。

宇田　どれ。

ト寄らうとするを、治郎右衞門刀を持替へ。

治郎　それから御覽じませ、敵に逢ひまする事、いつ何時か知れませぬ故、豫て寢刄も合せ置きまして御座りまする、刀の切味心許なう思し召さば、御家來の内何誰なりとも、へゝゝよつく切れまする、ずんと切れまする、へゝゝ敵討に相違御座らぬ、料簡して侍早く歸りやれ。

宇田　シテその敵の名は何と。

武右　イヤ〳〵その儀はお尋ね御無用になされい。

宇田　そりや又何故で御座る。

武右　あの如く非人とまでなつて、身を思ひ心を盡し覗ふ程の者が、お尋ねなされたとて有樣に申さうか、押してお尋ねあらば僞りを申さう、その僞りをお聞きなされ、扨はさうかと仰るも、何とやら馬鹿々々しう存じまする。

宇田　ム、。

武右　（ト武右衛門刀の傍へ行き見るこなし、いろ／＼あつて。）ハヽア見事々々、刀お納め下されい。

ト治郎右衛門腰の手拭にて刀を拭き、鞘の砂を拂ひそろ／＼さすこなし、武右衛門向うへ出て中腰になり。

左様な御大望あるお侍とも存ぜず、最前よりの慮外の段眞平御免下されう。

治郎　結構なる御挨拶に預りまする。

宇田　拙者とてもあやまり入りまして御座りまする。

治郎　これは／＼。

武右　我人知行を頂戴し大小を横へますれば、武士ぢや侍ぢやと存ずれども、武士の中にも御自分様のやうなもあるものか、ハテ扨／＼。

宇田　敵をお覘ひなさるゝ御自分御一人で御座りますか。外に御兄弟助太刀等をなさるゝ方も御座りまするか。

治郎　イヤ兄弟も御座りませず、外に助太刀も御座らず、拙者只一人して、覘ひまする敵で御座りまする。

武右　是は近頃侮い難い儀で御座れ共、是に少々持合せ御座りまするが何卒御用立たう存じまする。

治郎　これは近頃御親切な、國を出ますする時分に、少々金子も用意致して御座りまする。

武右　左樣の身になつて、お覘ひなさるゝその敵が、當地に居りますといふやうな儀かな。

治郎　此國に影を隱し居りまする樣子、先日承りまして御座る故、當地へ參りまして詮議致しますれども、未に知れませぬ。又去る人の申しまするに、丹州に居るとの風聞仕る故、明日は丹州の方へ立越えませうと存じまする。

庄之　明日丹州へお越しなれば、當地の名殘も今宵一夜、これに御座つては夜長い折から、風烈しう冷えましては大事のお身のお病にもなりませう、手前屋敷にて一夜を明かし、お立ち下さいませうならば、悦ばしう存じまする。

治郎　これは〳〵、御自分樣の御子息で御座りまするかな。

武右　悴めで御座ります。

治郎　ハテ扨御發明御成人の後は御立身で御座りませう。

武右　アレ御褒美のお詞に預つて、悦べ〳〵。

治郎　イヤモ此身になりまして御座れば、寒風霜雪も厭ひませぬ、今晩の御禮は本意を遂げまして、ゆる〳〵お禮申しあげませう。

武右　態と御家名は承りませぬ、目出度く御本意を御遂げなされたらば、此浮世日本に隠れ御座るまい、蔭ながら承り悦び申しまするで御座らう。

治郎　これは結構な御挨拶で御座りまする。

宇田　武士はお互で御座る、拙者御本意を遂げさつしやるやう、神佛を祈りませう。

治郎　忝う存ずる。

宇田　もう歸らうでは御座らぬか。

治郎　御座りまするか。

武宇　さらばで御座ります。

ト皆々立ち、奴一人〳〵目禮して、皆々向うへ入る。治郎右衛門後を見送り、胸をさすり刀を戴き元の提へ上りこなしあつて。

治郎　ホヽヤレ〳〵恐しや〳〵、扨も危い目に逢はうとした、結局跡で胸が躍る、こゝでこそ胸のをどりを止めるはこれぢやテ。（ト德利より酒を飲むこなし。）なんぼうか無理を云ふとて、非人の命くれいといふやうな無理があるものか、一人の侍居たればこそ、一人の赤面なやつのやうな意地悪う物を云ふ奴はない、ヤレ〳〵恐しや〳〵、それはさうと新七は戻つてくれんか、しか

し往戻り餘程の道、まだ歸るには間もあらう、又治兵衛はまだ戻らんか、二人の歸りまでどりや寢て待たうか。（トよろしく捨臺詞にて。）これと云ふも此刀のお蔭、此刀がなければ今時分は

オヽ恐しや〳〵。

トいろ〳〵よろしくあつて、小屋の内へ入り寢ると、七幕廻りの坊主出て念佛を唱へ入ると、向うより宇田右衛門火繩を振り出る。後より須藤六郎右衛門甚六頬冠して出て來る。互に窺き合ひ、宇田右衛門小屋を教へる、硫黄に火を灯し小屋の間より覗き、さうぢやといふこなしあつて、顏に泥を塗り拔身を小屋の中へ突込む。ばた〳〵にて小屋の内より、治郎右衛門すはうになり出て、土手より轉げ落ち、三方へ別れ屹度見得よろしくあつて。

何奴なれば寢込へ踏込み、身共を殺さうとは何奴ぢや。扨は最前來た侍よな、武士に似合はぬ道理を聞分け歸り乍ら、寢込を踏込み欺討とは卑怯な奴め、それともかやうに申すがお腹が立たうならば御勘忍なされて下されい。右申す通り大切な命で御座る、御料簡なされてお助けなされて下されい、お侍樣〳〵々、申し〳〵。

ト此聲にて六郎右衛門甚六の兩人切りかける、これよりくらがりの立廻あつて、右立廻のうちいろいろ思入あつて、六郎右衛門甚六の兩人も傷を負ふ。明六つの鐘鳴る。

宇田　こりや東が白む、モウくたばつた、人影の見えぬうち、サア來い。

ト宇田右衞門、六郎右衞門甚六の兩人を肩にかけ入る、治郎右衞門起上り。

治郎　卑怯者、トヾメをさゝぬか。返せ〳〵。

トたち〳〵と寄り、松の木を人と思ひ一刀に切落し、技を見てウント延び倒れる。こゝへ治兵衞小提灯をともし出で來る、又新七戻り來り。

新七　治兵衞殿か。

治兵　新七か。何ぢや、こゝらは糊が大分。

新七　合點の行かぬ。

ト兩人小屋の内を見て。

兄者人、小屋の内に治郎右衞門殿が御座りませぬ。

治兵　ヤア小屋の内に糊が、そこらを尋ねや。

新七　次郎右衞門殿々〳〵々〳〵々々々々。

治兵　兄者人々〳〵々々、

ト兩人そこを呼び廻る。

新七　ヤア兄者人が。

治兵　どれ。治郎右衞門殿々〳〵々〳〵々々々々、（ト呼びいける。）これ兄者人、治兵衞めで御座りまする。

新七　新七で御座りまする。

治兵　こりや何者が、かやうに致した、性根をつけさつしやれ。

新七　新七で御座りまする。

治郎　治兵衞、新七、エヽ遲かつたわいやい。（ト泣いてゐる。）

治兵　申し〳〵、疵は僅ぢや、性根を確に持つしやつて下されいなう。

新七　お前を、何者がかやうに致しました。樣子仰つて下さりませ。

治郎　今夜四つ時分に侍雨人に家來七八人連れてこれへうせて、試す刀がある身共が體を試すくれいと云ふ、身に望みあるもので御座ると、さま〴〵詫事したれば、今一人の侍料簡强いもので、一方を撫め歸つた、その後寢込へ仕かけ斯くの通り、これより外に何も覺えない、エヽ無念な。

治兵　これ〳〵、その宵にうせた侍の名は、御存じないか。

七新　申し、これ〳〵。

トロ々にいふ所へ、武右衞門庄之助奴四人提重を持ち出で來り。

武右　その堤に小屋があらう、篤と見い〳〵。

奴一　畏りました、成程これに御座りまする。

武右　どりや。

　　ト奴は提灯を向うへ出す。新七後より窺ひ寄る。

治兵　その方は宵に來た侍か。

武右　いかにも。

治新　覺悟せい。（ト兩人切つてかゝる。）

武右　待て、れうじすな、われ達は何者なれば狼藉致す。

治兵　そちは宵にこれへ參つたであらうがな。

武右　成程宵にこれへ參つたが、何とした。

治新　ぢやに依つて。（ト又切りかけるを。）

武右　待て、全く其方達に近付でなければ、遁さぬやらぬ云はるゝ覺えはないが、先づわれ達は何者ぢや。

治兵　宵にそちが狼籍を云ひかけた、此小家の非人が兄弟共ぢや。

武右　ム。（ト見て。）見ればいやしからぬ者共、盗賊とも思はれず、その非人の兄弟共なれば、身共

に又やらぬとは。

武右　その非人を何故寝込へ仕かけて、あの如く手にかけたぞ、兄の敵覚えがあらう。

ト又切りかけるを。

武右　お待ちやれ、非人殿には討たれたとな。

治新　いかにも。

武右　どれ。（ト武右衛門つか〳〵と行かうとする。）

治新　兄の敵、覚悟。

ト又切りかかり一寸立廻ある。

奴皆々　主人に刃向ふと許さぬぞ。

ト立廻ある。

武右　待ちやれ、逸るまいぞ。（ト大小を投出し。）皆の者聊爾致すな、控へてをれ。成程御身達の推量の通り、宵の程朋輩共と刀の論にて、此所へ同道にて参りしが、大望ある御方と承り聞届け立かへり、武士たる身は相互ひ、忰に御舎兄の盃を頂戴致させ、武士の冥利にあやからせたく、手づから一酒一瓢を調へ参りし所、御舎兄は討たれさつしやつたとな、斯く申すが疑は

しくば、いかやうとも心任せに致されよ。

治兵　その見事な一言、合點が行かぬ。

治郎　マア〱治兵衞新七、そのお侍には必ず聊爾すな、危い命助つたもそのお侍の陰ぢや。お禮申せ。

武右　ヤアまだ正氣があるか。

ト新七治兵衞武右衞門の傍へ寄り。

治兵　左様とも存じませず、心の急くまゝ慮外の段御免下さりませう。

武右　ちつとも苦しう御座らぬ、ハテ今少し早くばかやうにさせまいもの、何奴の爲業。

ト治郎右衞門へ立掛り、疵を見、脈を見て。

これ〱疵は數ケ所なれども、悉く急所を離れて御座る、養生が叶ひまする、只今より手前が屋敷へ同道致し、疵養生をさせまして御本意を遂げさせまする、拙者がお力になりまする程に、御氣遣なされまするな。

治兵　其許様をお賴み申しまする、何卒お力におなり下さりませうならば、忝う存じまする。

武右　シテ當所に御逗留は、何ぞ手掛でもあつての儀かな。

治兵　覘ひまする敵が、此郡山の家中にかくまはれ居りまする樣子、承りましての逗留で御座りまする。

武右　郡山の家中とは。しテそのかくまうてをる者の名は。

治兵　敵をかくまいゐられまするは、加村宇田右衞門殿と申しまする。

武右　ナニ加村宇田右衞門とな。

治兵　いかにも。

武右　すりや。（ト向うを見込み刀の反りを打ち。）エヽ人外めが、扨は最前敵討の次第を聞いて、兩人の奴に此儀を知らせ返討にうせたな、寢込を仕かけ返討にするか、卑怯者人非人めが。御兄弟の覘はつしやる敵は、須藤六郞右衞門、彥坂甚六と申さぬか。

治兵　なか／＼。

武右　最前同道致したが加村宇田右衞門、即ち兩人共にかくまひ居りまするてや。

治兵　ヤア何卒御自分樣を賴み上げまする、本意を遂げさせ下さりませうならば、生々世々の御恩忝う存じまする。

武右　此高市武右衞門が本意を遂げさせまするサ。

治新　エヽ忝い。（ト拜む。）

治兵　申しこれ兄者人、敵を討して遣らうと仰る。

新七　氣を確にお持ちなされて下され。

ト兩人治郎右衛門の傍へ行き引起して云ふ。治郎右衛門ぐにや〳〵となる。

治新　ハアヽヽ。

ト武右衛門傍へ行き、印籠より氣付を出し治郎右衛門に呑し。

武右　お名は何と申しまする。

治兵　治郎右衛門と申しまする。

武兵　これ治郎右衛門殿、疵は淺い、氣を確にお持ちなされ。

ト呼びいけ、氣が付かぬ故氣を替へ、兩人に囁き奴にも云ひ含めこなしあつて、

やアそれへ逃ぐるは須藤六郎右衛門、彦坂甚六、卑怯者待て。

治兵　春藤治郎右衛門が弟治兵衛。

新七　同苗新七、返せ戻せ。

トこれにて治郎右衛門起上り。

治郎　須藤六郎右衞門、彦坂甚六返せ〳〵。

ト一間程行きこける、武右衞門兩人に又云へといふこなし。

治新　須藤六郎右衞門、彦坂甚六卑怯者返せ。

奴々　戻せ。

治郎　須藤六郎右衞門、彦坂甚六卑怯者。

皆々　返せ戻せ〳〵。

トこれにて六郎右衞門甚六こわ〳〵乍立戻り、武右衞門の提灯を叩き消し、うぬ覺悟せと切つてかゝる。武右衞門主從刀のそりうち、居合腰になり後退り構へる事。治郎右衞門、治兵衞、新七うぬと勢ひ込んで打つてかゝる、くらがりの立廻、トゞ須藤彦坂相討してへたる。治郎右衞門手負乍よろぼひ〳〵止めをさし、トゞ松の木に行當り呼吸を打ち血潮山流れ落入る。皆合點の行かぬ思入、すかし見る。

〽あはれはかなく。

幕

菅原傳授手習鑑
すがはらでんじゅてならひかゞみ

菅原傳授手習鑑

大序　大内山の場

役名　齋世の君、菅丞相、判官代照國、藤原時平、三好清行、左中辨希世、春藤玄番、唐僧天蘭敬、伊豫の内侍等。

大内山の場　本舞臺三間の間高足塗高欄階段翠簾を卷上げある、向う正面の翠簾上げおろしあり左右狐格子、都て内裏の道具、眞中二疊臺に齋世の君壺折衣裳にて床几にかゝり、上の方時平、後に清行、下の方菅丞相、後に希世控へ居る、何れも冠裝束參内の體、上の方階下に照國龍神卷にて控へ、下に白張烏帽子の衞士四人居並び、天王立にて幕明く。ト東西の掛聲あり。

〽蒼々たる姑射の松、化して婥約の美人と顯はれ、珊々たる羅浮山の梅、夢に清麗の佳人となる、皆是擬議して變化をなす、豈誠の木精ならんや、唐土ば

かりか日の本にも人を以て名付くるに、松と呼び梅といひ、或は櫻に准ふれば、花にも情天満大自在天神の御自愛ありし御神詠、末世に傳へて有難し。此神いまだ人臣にましまず時、菅原の道眞と申し奉り、文學に達し、筆道の奥義を極め給へば、才學智徳兼備はり、右大臣に推任あり、權威に溷る左大臣藤原時平に座を列ね、菅丞相と敬はれ、君を守護し奉らる・延喜の御代ぞ豊なる。然るに主上此程より御風の心地とて、病ふの床に臥給ふ。天顔を伺ひ奉らんと、御弟宮無品齊世の君、參内の御供には院の廳の官人判官代照國、階下に伺候仕れば、席を正して丞相に打向はせ給ひ。

齊世　今朝院參致せし所、法皇仰せあるやうは、當今の御惱日を追つて快然ならず、急ぎ齊世に參内し龍顔を拜し、御様子有りの儘に告げ知せよと、別當判官代を相添へらるゝ、御容體いかゞ渡らせ給ふらん。

ト　菅丞相正笏あり。

丞相　さして御變りもなく候、悉くは道眞にお尋ねあらんよりは、直に天氣を伺ひ給へ。

齋世　然らば左樣に致さん。

ヘ時平にも挨拶あり、常寧殿に入り給ふ。

ト正面の御簾卷上げ、齋世の君悠々と此内へ入る、御簾を下す。

ヘかゝる所へ式部省の下司　春藤玄番の允友景罷り出で、庭上に頭を下げ。

ト此うち臺の入たる檠になり、向うより玄番侍烏帽子龍神卷の形にて出て來る、後より仕丁三人、枝珊瑚珠、虎の皮、其外唐物絹各々臺に載せ持出で來り、好き所に置き控える。

玄番　此度渤海國より來朝せし唐僧天蘭敬が願ひは、唐土の徽宗皇帝當今の聖德を傳へ聞き、何卒御姿を繪に寫し歸國せよ、其繪を則ち日本の帝と思ひ、對面せんとの望につき、數々の贈物則ち是に。

ト仕丁銘々唐物を好き所に飾る。

ヘ庭上に飾らすれば、菅丞相聞給ひ。

丞相　コハ珍らかなる唐僧が願ひ、當今延喜の帝聖王にて在す事隱れなく、御姿を拜せんと唐の帝の望みは、實に我國の譽なれ共、折惡しく天子の御惱、有りの儘に云聞せ、音物も、唐僧も唐土へ歸されんや、時平の料簡ましますか。

ヘ と仰せに冠打振りて。

時平　さうではない道眞、御病氣と申し聞しても、よも誠に思ふまじ、延喜の帝は聖王でも跛か、啞か缺唇か、𤸇か、天皇らしうない形故、病氣と云ふは間に合せといはるゝは日本の疵、面倒な事いはさんよりは、御形代を拵へ天皇と僞つて、唐僧に拜さすれば、何事なら事は濟む、誰彼と云はんより、此時平が代りを勤め、袞龍の御衣を着し天子に成つて對面せん。

ヘ 一口に云放す、謀叛の萠ぞ恐しき、判官代照國階下にずつと寄り。

ト時平思入。判官代階下にずつと寄つて控へ。

照國　事新しき嚴命、唐土の天蘭敬は時平公の御姿を寫しには參るまじ、眥上つて頤廣く顴骨高き延喜の帝、唐僧がよも呑込むまい、神武以來獨の惡王武烈天皇の名代ならば、時平公が屈竟。當今の御代とは鹿を馬との出損ひ、ハゝゝゝ。

ヘ 御無用と嘲笑ふ。

時平　ヤア舌長し照國、退去りをらふ。ヤア〳〵天蘭敬を内裏へ伴ひ、天子には此時平用意せん。

ヘ 立つ所を菅丞相とゞめ給ひ。

丞相　時平の御望は天子の爲め、御形代とはさる事なれ共、若も彼僧相人にて、君臣の相を能く見るな

らば、王孫にあらぬ臣下と知るべし、その時いかゞ仕らん。

ヘ理屈に時平行當れば、三好の清行進み出で。

清行　菅丞相の言葉とも覺えず、彼坊主を相人とは餘りな先ぐり、念に念が入り過ぎる、左中辨希世殿さうぢや御座らぬか。

丞相　イヤコレ念に念を入れてさへ、過失仕落はあるならひ、假初ならぬ唐土人へ、御對面の事なれば、輕々しくは計はれず。

ヘ暫しが間御思案有り。

所詮天子の御代、人臣は成難し、幸ひ御同腹の御弟宮齊世の君を、今日一日の天子と仰ぎ、御姿繪を唐土まで傳へて耻ぢぬ御粧ひ、此儀いかゞで御座らうな。

ヘ理に叶ふ、詞に違ふ時平が謀計、目と目を三好の清行も、口あんぐりと開き居たる。玉簾深き一間より、伊豫の内侍立出で給ひ。

ト内侍白無垢、誂の緋袴の形にて檜扇を持ち出で來り。

内侍　勅諚。兩臣の御爭ひ、我君詳しく聞し召れ、朕が代りは齊世の君と直々の勅諚にて、只今御衣を召替へ給ふ、此由申傳へよ、との勅にて候なり。

〽内侍は奥へ入り給ふ。

ト内侍は云捨て奥へ入る。

〽時平は俄にむつと顔、輝國が悦喜の眉、開く扉は日花門、玄番の允が案内にて、渤海國の僧天蘭敬、倭朝にかはる衣の衫、庭に覆ひて畏る。

ト此うち唐樂のやうなる鳴物になり、向うより天蘭敬鼠衣唐僧の拵にて沓を穿き、如意を持ち出て來り、花道中程に平伏する。

時平　ム、唐土の僧天蘭敬とは、汝よな、龍顔を寫し奉らんとの願ひ、叶ふは汝が身の大慶、有難く存じ奉れ。

ト天蘭敬はつと思入。此時奥にて。

呼び　出御。

〽警蹕の聲諸共に、高々と御簾巻上ぐる其内には、弟宮齋世の君金巾子の冠を正し、御粧爽かに見え給ふ、實に王孫の印とて、唐僧始め列座の官人あつと平伏敬へり、天蘭敬よくよく拜し奉り。

ト此うち正面の御簾巻上る、内に齋世の君金冠白衣にて笏を持ち、二疊臺に直る。

天蘭 ハ、ア天晴聖主候や、我國の徽宗皇帝慕はるゝも理なり、三十二相備つて云はんかたなき御形、勿體なくも僕が筆に寫し奉らん。

ヘ用意の繪絹硯箱、檜の木の燒筆さら〳〵と、眉のかゝり額際、見ては寫し書いては拜し、御笏の持せやう、御衣の召振違ひなく、即席書の速さ、顏輝が子孫か凡ならぬ畫筆の妙を顯はせり。判官代は差心得、捧物取納むれば。

ト此文句のうち仕丁唐机に筆墨硯を揃へ、天蘭敬の前に置く、天蘭敬は筆を取つて淨瑠璃一杯に繪姿を認める。

丞相 重ねて俸祿賜てんぞ、一先退去あつて然るべし。

ヘ道眞の下知を請繼ぐ春藤玄番、お暇申させ、唐僧を伴ひてこそ。

ト天蘭 思入有つて、姿繪を寫し持ち向うへ入る。

ヘ退出す。歸るを待つて時平大臣、玉座に馳け寄り、齋世の君の肩摑んで引摺出し、御衣も冠もかなぐり〳〵。

ト時平齋世の君を二疊臺より引摺し、笏にて冠を打落し、裝束を引取り、

時平 唐人が歸つたれば、暫くも着せては置かれぬ、九位でもない無位無官に着せた裝束、此冠穢

れた同然、内裏に置かず我が預かる、今日の次第は右大臣奏聞せられよ、身は退出罷歸る。

〽罷歸ると、御衣冠奪取て行んとす、道眞立て引取給ひ。

丞相 聊爾なり時平、勅もなき御衣冠、私に持歸り、過て謀叛の名を取給ふや。

〽何心なく身の爲を、云はるる身には胸に釘、頭ゆがめて閉口す、齋世の君菅丞相に向はせ給ひ。

齋世 天子次いでの勅諚には、老幼不定極りなし、何時しらぬ世の中に、名ばかり殘すは其身の爲、道を殘すは末世の爲、妙を得たる筆の道、傳ふべき總領は女子なれば是非に及ばず、幼ければ弟の菅秀才にも傳ふまじ、弟子數多ある菅丞相、器量を擇みて筆道の奧義を授け、長き世の寶とせよ。

〽仰の中に左中辨、宮の前へずつと出で。

希世 菅丞相の弟子の中、位といひ器用といひ、希世に上越す手書はなし、幸ひ是にて傳授あれ、と御申附下さるべし。

〽言はせも敢ず、菅丞相莞爾と打笑み。

丞相　内裏に在る時は我朋輩、筆法は我弟子なれば、此道において師匠を差置き、我儘の願ひ致さ
れな。

〽誠の詞、嚴々と襟を繕ひ、勅答には。

有難き君の惠、我筆法の大事には、神代の文字を傳ふる故、七日の齋、七座の幣、神道加持に唐倭、文字は何萬何千にも、我筆道に漏しはなし、それ共知らず此處彼處に、手習ふ子供も皆我弟子、今日より私宅に閉籠り、擇出して器量の弟子に筆道傳授申すべし。

〽宣ふ詞は、今の世に傳へて殘る筆道の、道の御名に顯はれて、眞なるかな誠なる、君が御代こそ。

ト此文句のうちより下り羽になり、時平階下へ降りて來る、玄蕃沓を參らする、丞相同じく階下へ降りる、照國沓を直す、齋世の君、淸行、希世、何れも立身、時平丞相式禮有つて左右へ別れ、淨瑠璃送りにて兩方へ行き懸り、時平振返りづか〳〵と丞相の方へ來る、照國此中を隔てゝ急度なる、三重早下り羽にてよろしく。

幕

二幕目　加茂堤の場

役名　齋世の君、舍人櫻丸、三好淸行、仕丁四郎又、仕丁九郎又、苅屋姬、櫻丸女房八重等。

京都加茂堤の場　本舞臺三間の間一面の松並木、一體加茂堤の景色、こゝに御所車を直しあり、後の方に片蓋の御所車二挺引据ゑて、仕丁○□壹升樽にて、茶碗酒を飲み居る見得。宮神樂にて幕明く。

○　サア〱九郎又、われから始めろ〱。

□　イヤ〱手前から、始めろ〱。

○　イヤ〱われから。□（ト一杯飲んで。）

□　何とから茶碗で引かけて、加茂堤から野天を見廻した景色といふものは、喜見城であらうがな。

○　併し御供待の間を見ての茶碗酒、舍人が身には喜見城とは云ふものゝ主がなければよからうテ、時に四郎又、われが主の時平公、短氣者でも根が大鵬、名代に見えた淸行殿は、氣の短い

□　癖に根が根性が悪い、こんな所を見付けられるなよ。

□　コリヤさういやるな、菅丞相樣の名代に來た齋世殿こそ、大邪人といふ者だ、蓼喰ふ虫も好々と、あのやうな人を弟子にしたり、代參によこさつしやる菅相丞樣のお心が知りたいわエ。

○　イヤそりや、わいらが小さい料簡とは違ふぞえ。

□　マアその割にして、もう一つ飲め〳〵。(ト又酒を飲み乍ら)それはさうと、齋世の宮樣もお參りなされたが、手休めに此櫻丸は來さうなものだ。

ト神樂になり、下手より櫻丸白張烏帽子にて出で來り。

櫻丸　オヽ二人ながら、こゝにか。

兩人　櫻丸か、今も今とて、おぬしが事を云つてゐた。

櫻丸　見ればゆつくり酒盛で樂しむな、併し御神事も早や半過ぎ、呼立られぬうち行つたらよからうぞよ。

○　櫻丸、乙な事を云ふな、御神事が濟んだら、宮樣からお立であらう、それにまた手前こゝへ何しに來た。

櫻丸　イヤサそれは。オヽそれ〳〵、こちの宮樣は神司の方で御休息ある故、お立の程が知れぬ、此

方衆の乘せて來た御名代衆は、禁庭の御用があるとて、立騷いで御座つたが、油斷して又叱られうぞエ。

□　成程役なしの宮樣と、時平公のお目鑑で、御用の多い清行樣とは違ふ、何時お立ちになるか知れない。

櫻丸　さうとも〳〵。

兩人　そんなら早く行かずばなるまい。

櫻丸　早く行きやれ〳〵。

ト神樂により、○の四郎又、□の九郎又下手へ入る。櫻丸後見送り。

一杯參つて、うまい奴の。

〽獨言して相圖の手拍子、招けば招かれ戀草の、露踏み分けて十五六、被の風の優しさは、菅相丞の御娘苅屋姫とて色も香も、文は父御の御家柄、口說き落して宮樣に逢せませんと、跡につく供は八重とて花めきし、櫻丸が自慢の女房、先へ廻りて。

ト向うより、刈屋姫振袖の形被衣を着て、後より八重附いて出で來り、舞臺へ來て。

八重　こちの人、首尾はどうで御座んすえ。

櫻丸　よいとも〳〵大極上、お姫様ようお越し遊ばしました、何もお恥しい事は御座りませぬ、見返り本尊より尊い御面相、さらばお逢せ申しませう。

〽車の御簾を引上れば、齋世の宮は面悔げに、姫は猶しも顔見合せ、につと笑うて袖覆ふ。

ト櫻丸寄つて、車の御簾を上る。内に齋世の君壺折衣裳、中啓を持つてゐる。齋世の君顔見合せ思入ある。

何と女房共、こゝらが下々と違うて、輕卒な事もさせられまいし、エ、これ、ならう事なら、ちつとの間眞暗にして上げましたいなア。

八重　何のいなア、晝でもお二人のお首尾、調えるは、あの。

ト思入にて車を拵へる。櫻丸それと呑込み。

櫻丸　ハテ素早い奴ではあるぞ、そんならあの御車の内で。

ト云はうとするを、八重これと押へ、あつちへ行けといふこなし、櫻丸呑込み。

そんなら、我らは暫しの中、ドリヤ休息致さうか。

〽木蔭へ入れば。

ト櫻丸下手へ入る。

八重　それ〳〵、こんな時には男は邪魔、サア〳〵姫君樣、モウ誰にも御遠慮は御座りませぬ、何たりと仰りたい事が御座りますなら、サア早う仰れや〳〵。

〽突きやられても今更に、嬉し耻し初戀の、いろはにほさへ口籠る。

ト苅屋姫耻しきこなし、八重思入あつて。

エヽ埒のあかぬ、そのやうに耻しがつてお出なされては、春の日もつい暮れますぞエ、誰しも始は覺えのある事、櫻丸はあつちへ參りました、私は此通りこちら向いて、かう耳を塞いでをりますから、サア早うなんなりと仰れ〳〵。

〽兩手を耳に、人目よけても、雛鳥の初音耻らふ風情なり。

苅屋　千束の文のお返事に、首尾あらばとのおんすさみ、有難いやら嬉しいやら、今日の首尾を待ち兼ねて、お叱り受けに參りましたわいなう。

齋世　櫻丸がいかい世話、文見る度にいやまさり、逢ひたかつたに能うこそ〳〵、爰は所もたゝす川。嘸春風で寒う御座らう。

〽仰せは姫の身にこたへ、春風よりも戀風の、ぞつと身にしむばかりなり。車の蔭より櫻丸ぬつと首出し。

ト櫻丸うしろへ出て來り。

櫻丸　コリヤ女房、何をうつかり、我身を抓つて人の痛さといふ事を知らぬか、おりや先刻にから齒痒うて〳〵、コレ宮樣もお寒からうと御意なされてぢやないか、サア氣轉きかして早う〳〵。

八重　ほんになア、オヽ寒うなつた、コリヤどうもならぬ、オヽ寒い〳〵、姫君樣も嘸川風でお寒う御座りませう、その風ふせぎはオヽ幸ひ〳〵、アノ御車の內、憚り乍らちつとの間お貸しなされて下さりませ。

苅屋　それぢやというて、どうやら勿體ない。

八重　ハテ御遠慮遊ばすも事によります、惡は延べよ据膳は急げと申しますわいなア、サア早う〳〵。

ト苅屋姫を車の內へ入れる。

〽是非に〳〵と、無理やりにいろを咲せる車の室、八重が氣轉と知られけり。

櫻丸　さらば閉籠仕らう。

ト御所車の簾を降す、三味線入の宮神樂になり、八重四邊を窺ひ、櫻丸車の前にしやんと坐り、番を

してゐる。車の内にて。

齋世　苅屋姫殿、苦しうない、もそつとこちらへ。

苅屋　神詣の御車では、罰は當りは致しませぬかいなア。

トこれを聞き、御簾の間より内を覗いて見るおかしみ、八重は矢張門邊へ心を付けてゐる　此事よい程に櫻丸八重に抱付き。

櫻丸　コリヤモウ堪らぬ。

ト八重びつくりして。

八重　エヽモウお前もたしなんだがよいわいなア。

櫻丸　これがどう嗜まるゝものぢや、隣きびしうてひよんな寳を儲けたわい。（ト又抱付く。）

八重　エヽモウ大きな聲で聞えるわいなア。

櫻丸　聞えても大事ない、こつちが聞えれば、あつちも聞える。

八重　それぢやと云うて、人が見るわいなア。

櫻丸　人が見ても大事ない、おれがものを、おれが。

八重　それぢやと云うて、人が來れば惡いわいなア。

ト云ひつゝ寄添ひ、櫻丸が襟へ手をかける、櫻丸こなし、八重袖を覆うて口を吸ふ。此時車の牛モウ
と鳴く、兩人これにびつくり飛び退き

櫻丸　ハア、、牛殿もうらやましいと見えるわい、さりながらそなたの働き出來しやつた／＼。

八重　さいなア、お前の心付けしやんした通り、内裏上臈の形になつて行て、櫻丸が女房八重で御座りますと申上げたれば、あなたも待遠うでお出なされたやら、八重かようおぢやつた。モウ行こうと仰つて、腰元衆を待たして置いて、裏道から忍んでお出なされたわいなア。

櫻丸　さうであらう／＼、此中から手輦して、菅丞相樣が筆法傳授に取籠つて御座るを幸ひ、御臺樣へは神參りと願はせ、お供の衆へは口薬、ぱつ／＼と水撒くやうに飲して置いた。ほんにその水で思ひ出した、お手水の水が入らうぞよ。

八重　なんのマア、何のおぼこのお二人樣。

櫻丸　ハテ甘いやつではあり、お手水所か、悪うしたらコリヤ御行水が入らうも知れぬぞよ。

八重　そんなら水がなければなるまい、オヽ幸ひ／＼あの川水を汲んで來ようわいナ。

ト行かうとする。

櫻丸　アヽコリヤ／＼、此頃の雨上りで堤がすべる、大事のそなたに怪我をさせては、晩からおれが

不自由なわい。

八重　又てんがうばつかり、というて外に水はなし。

櫻丸　幸ひ〳〵、あの神前の水汲んでおぢや。

八重　成程々々、あの神前の水。（ト思入。）お前もマアたしなましやんせ、お二人樣は、ナ、それ、それに、マア神前の水が、使はるゝものかいなア勿體ない。

櫻丸　イヤモウちつとも大事ない、ハテ王は十善、神は九善、その王樣の弟御なりや、九善かたしぢや、汲んでおぢや。

ト八重呑込んで。

八重　アイ〳〵そんなら私や汲んでこう。

櫻丸　水も洩らさぬ、

八重　女夫と、

櫻丸　女夫、

八重　こちの人、

櫻丸　かゝぢや、大儀、

八重　なんのいなア。
〽神前さして汲みに行く。
ト八重は向うへ入る。櫻丸殘る。
〽跡は氣休め一休みと、思ふ所へ三善の淸行、官人仕丁に十手持たせ、裝束卷上げ駈け來り。
ト向うより三好淸行、指貫裝束の形にて出て來る、後より仕丁四人附いて出で來り、舞臺へ來て。

淸行　ヤアそれにをるは櫻丸、おのれ最前齋世の君を、奉幣も濟まぬうち連れ退いたとの風聞、何處へ供した、サア有樣にぬかしをらう。
〽せちがひかゝれば。

櫻丸　イヽヤ存ぜぬ、下々として上の事、そつちをとつくとお尋ねなされい。

淸行　ヤアぬかすまい、豫ておのれが取持にて物臭い事聞いてゐる、取分け今日は御惱平癒の神いさめ、その場所へ來て不淨があると、親王でも宮樣でも屹度捕へて罪に行ふ、有樣にぬかさずば、引捕へて拷問する、それ者共、繩打て。

仕丁四人　やらぬは。（ト取卷く。）

〽下知の下、おつ取巻くを身構へし。

櫻丸　ム、ハ、、ハ、、知らぬと云うたら金輪際、奈落の底から天まで知らぬ、聊爾さるゝかたつぱし、下手のお鞠の蹴て／＼蹴踏む、足の鹽梅見せうか。

〽ぐつと踏出す兩足は、顔に似合はぬ古木なり。

清行　コリヤ下郎めが味をやる、最前から見る處、車の內に人こそあれ、御簾引斷つて檢めよ。

仕丁四人　心得ました。

〽立寄る所を、首筋摑み投げ退け／＼。

ト皆々掛る、櫻丸立廻あつて、皆々を投退け車を圍ひ急度なつて。

櫻丸　車は舍人が預りもの、命があらば寄つて見よ。

清行　小癪な、そりや。

ト四人櫻丸にかゝるを立廻り。

〽かゝるを蹴飛し反ね飛し、十手捩取るかたつぱし、薙立て／＼追うて行く。

トよろしく立廻りトヾ清行始め皆々逃げて入る、櫻丸も跡を追うて向うへ入る。

〽その間に宮と姫君は、人に見られて叶はじと、車の內より飛び降り／＼、流

石若氣の一筋に、遁れて旅のかり衣、いづくともなく落給ふ。

ト車の内より齋世の君苅屋姫が手をとり出て、思入あつて東の口へかゝり入る、清行一人出て來り、車を見て。

清行　南無三寶見違へたか、舍人めが戻つたら大抵ではあるまい、それ〳〵。

ト向うへ行かうとして思入あつて下手へ入る。

〽下道さして逃ぐる跡、間もなく驅來る櫻丸、御二方見えねにびつくり、車を見れば宮の書置。

ト櫻丸足早に戻つて來り、車を見てびつくり四邊を見廻し、扇を取上げ見て、

櫻丸　なに〳〵見付けられて、辱をうけふより立退く。ヤ、スリヤお二方はオヽホイ。

〽はつと驚き、胸は板。

イデ追付いてお供せん。それ。

〽驅行く向うへ、女房八重。

ト逸散に櫻丸花道へかゝる、向うより八重手桶を提げ出で來り。

八重　サアモシお手水汲んで參りましたわいなア。

櫻丸　ヤアお手水處か、淸行めが車の內詮議せんと參りし故、見付られじとお二方は、何處へかお立退なされたわ。

〽びつくりぐわつたり水桶落し。

ト八重びつくりして手桶を取落し、箍刎ねて壞れる。

八重　シテマアこなさんいづこへ御座んす。

櫻丸　何處へどころか、元姫君は菅家の御養子、實母は河內土師の里菅丞相の伯母君、先此方へ志し、跡を慕ひ奉る。汝はこの御車を宮の御所へ引いて行け、捨て置いては後日の咎め。

八重　それ〳〵お前の姿に此身を扮し。

〽どれ白張と受取つて。

ト八重櫻丸が白帳を受取つて肩に引かけ。

跡案じずとも、ちつとも早う。

櫻丸　合點だ。

〽白砂蹴立て、飛ぶが如くに駈り行く。

ト櫻丸逸散に向うへ入る。

〽八重はやがて夫の姿、白張肩に引掛けて、車の牛を引直し、させいほうせい精一杯、引けども遅き牛の足。

八重　エ、どんくさい。

〽後から押せば車もくる〳〵と、廻る月日は不成就日か、お二人様のくろ日か、夫の爲には十方暮、鬼宿車を押かけて、天赦天一天上のお首尾もよかれ神よしと、祈る心は八專の黑日に間日の斑牛、追立てゝこそ。

トよろしく三重にて

幕

三幕目

筆法傳授の場

役名　菅丞相、一子菅秀才、武部源藏、粟柄太郎、左中辨希世、三善淸行、荒嶋主税、菅丞相の御臺園生の方、局水無瀨、腰元勝野等。

筆法傳授の場　本舞臺一面の平舞臺、向う一面金襖、上下共松戸の出入、欄間組物の彩色、揚幕の所杉戸の出入、舞臺花道共一面高麗縁を敷き詰め、都て菅原館の體。こゝに左中辨希世冠装束にて机に掛り手習をしてゐる見得、幕明く。

〽上根と、稽古と、好きと、三つの中好きこそ物の上手とは、藝道修業教への金言、公務の暇明暮に好ませ給へる道眞公、堂上堂下はいふに及ばず、武家町人に至るまで、風儀を慕ふ御門人數も限りもなき中に、左中辨の希世手習稽古ふる兄弟子、今度筆法御傳授はさし詰我等に極まりしと、勝手覺えし御殿の眞中、朝の宵から机を直し、煙草よ茶よと呼立る、聲も屆かぬ奥勤、女中頭は聞咎め。

ト希世怠屈の體にて頻に手を打つ、下手より局水無瀬女臈稽古装束にて出て來り、後より腰元勝野附いて出る。

水無　これ、お次に誰も居やらぬかいなう、希世樣の御用があるとお呼びなさるゝ、早う誰ぞおぢやいなう。

希世　これは〳〵お局の水無瀬女臈か、手の皮のしりつく程叩くをも知らぬ顏でゐるは、ムウ聞え

た、誰一人顏出しせぬは、毎日來るを面倒がり、言合せて此おれさまに鼻明すのぢやナア、今日で七日此手習、おれが爲ばかりぢやない、御子息の菅秀才は年弱七つ、傳授所へ行かぬによつて、此希世傳授して、菅秀才の成人以後身共から又傳授する、さすれば主の奉公も同じ事、はい／＼と云うて廻る筈ぢや、總じて此方の吩咐が生温いから起る事ぢやぞや。

水無　これ勝野、よう心得や、そなた衆の不調法は局が迷惑、何事を仰らうともあい／＼との、それ合點か、モシ希世樣、ほんにさうぢや御座りませぬかいなア。

ト水無瀨よろしく思入にて云ふ。

希世　成程さうとも／＼、よい料簡ぢや、毎日々々氣を詰るも菅原家の爲、今日も又淸書お目に掛けてたもれ、局、頼むぞや／＼。

水無　イエ／＼今日はお容されて下さりませ。

希世　容せとはそりやなぜ／＼。

水無　サア幾度、お目に掛けましても、我君丞相樣のお氣に入りませぬは、お前の業では御座りませぬ、私がお取次のしやうの惡さで御座りませう、手がはりに今日は勝野そなたが御前へ。

希世　ア、イヤ／＼、さうはならぬわいなう、筆法傳授も神道の秘密事、アレ學問所の注連が目に見

えぬか、油濃い女子どうしてやらるゝものでない、コレサ昨日までは氣に入らずと、此清書は又格別、筆先に肉を持たせ、天晴骨髓を書き得たれば傳授はずる／＼、これのつきつて行てたもいなう。

〽頼むに是非なく立つて行く。

ト希世頻に賴む故、水無瀨不承々々清書を持つて、上手松戸の内へ入る。希世跡見送り。

これ勝野、局の今云はれた、あい／＼を合點か。

勝野　アイ心得て居りますわいなア。

希世　エヽ忝い、四邊に人目もなし、福德の三年目、屏風の蔭でツイちよこ／＼、頼む／＼。

ト希世いやらしき思入にて、勝野によりかゝるを突退け。

勝野　エヽあだいやらしい無禮な事なさると、聲を立てますが合點かえ。

希世　オヽ合點ぢや、聲を立てるが恐いとて、しかけた戀人、コリヤ叶へてくれさつしやい。

ト無理に勝野に迫るを、いやがるこなしにて。

勝野　あれ／＼、申し／＼。（ト大きく云ふ。）

希世　コリヤ申しとは誰に申すのぢや。

勝野　アイ御臺様や、若君様へ。

∧申し／＼といふ聲のもれ聞えてや、菅丞相の御臺所、若君の御手を引き立ち出で給へば、希世は仰天。

ト奥より御臺所、若君、菅秀才の手を引いて出て來る。希世びつくりして

希世　これは／＼悪い所へ能うこそお出でござる、何がはや、勝野の癪の療治を頼まれ、取りにかゝつてこの仕合せ、御臺にも御存の如く、萬能に達せし某、世に希な器用者とあつて、希世と付けたは親共が自慢の名、其例は此若君、年よりは御發明、菅秀才と呼び給ふも、秀はひいづる才は才智の才を取つて、菅家の公達菅秀才、あら／＼いはれかくの如く、われは餘り器用過ぎ、取損うて按摩のしだら、御臺所の思召が。

御臺　ア、モウ／＼其言譯には及びませぬわいなア、日頃の行儀知つて居ります、そんな疑ひ何のいな。

∧物に障らぬ御挨拶。

希世　ヤレ／＼それ聞いて落付いて御座る、今のしだらに序ながら、お尋ね申す事が御座る、御息女の苅屋姫齋世の君とにやほやした世間の取沙汰、今日で七日相詰め居るに、御所には何の沙汰

もなく虛說かと存ずれば、苅屋姫の御殿は明家、御詮議もなされぬは、こりや親御達も御合點の上の、駈落で御座りますかな。

〽問はるゝ辛さ、御臺所も暫し返事もなかりしが。

御臺　隱しても隱されぬ、さがなき人の口の端に、かゝるも是非なき苅屋姫、齋世の君は猶もつて大切なお身の上、互に忍ぶ戀路の車、廻り逢瀨もそこ〳〵に、事顯はれしを耻かしく思し召れ、御所へお歸りなされぬもの、とあつて常の御方ならねば、宮樣附々の人々がそれなりけりにして置くまい。又此方の娘の事は希世樣も知つての通り、ほんの母樣は河內の國土師村の覺壽樣とて、連合の爲には伯母御樣、菅秀才を儲けぬ先、乞請けて養子娘、此御所へは戻られず、伯母樣方と心付き、自が內證で尋ねに人を遣しましたわいの、此一落は今日が日まで、わざと父御に知らせませぬ、それも何故、勅諚にて筆法傳授七日の中、參內止めて取籠らせ給へば、世の取沙汰は何にも知らず、傳授も過ぎて聞き給はゞ、嘸やびつくりし給はん、彼方此方を思ひやる心を推量して下され。

〽心を推量してたべと、案じ給ふぞ理なる、內玄關の奏者番、一間此方に畏り。

ト此時下手より侍一人出で來り。

侍　申上げまする。

御臺　何事ぢや。

侍　先年お館に相勤めし武部源藏定胤、尋ね参れとの仰に因り、此間より所々方々と吟味致して、やう／＼只今夫婦一緒に参上致して御座りまする、これへ通しませうや、いかゞ計ひませう。

御臺　オヽ待ち兼ねし源藏夫婦、早々これへ参れと云や。

侍　畏つて御座りまする。（ト侍向うへ入る。）

御臺　コレ菅秀才、源藏に逢ふ間、こゝに居ては氣が盡きやう、勝野を連れて奥へ行て、機嫌能う遊ばつしやれ。希世樣にも暫しが間。

希世　成程こゝにゐてお邪魔なら、所[illegible]を仕ろで御座らう。

ヘ所[illegible]はらんと續いて。

ト　おくりにて菅秀才、勝野を連れ、希世も附いて奥へ入る。

ヘ奥に入りにけり、人知れず思ひ初しが、主親の不興を受ける種となり、夫婦が二世の契より、三世の御恩辨へぬ不義より御所を追出され、さむい暮しを素浪人、尾羽打枯し武部源藏、今日のお召は心の優曇華、開く襖の内外まで

勝手は今に忘れねど、身の誤りに氣おくれし、膝もわな〳〵伺ひ足、御臺の御座を見るよりも、ハツト畏れて飛びしさり蹲りたるばかりなり。

ト此文句にて　揚幕杉戸をあけ、源藏木綿布子の上へ麻上下の形、後より戸浪絹やつし抱帶にて出て来り、花道よきところに平伏する。

御臺　ヤア珍しい源藏夫婦、連合の氣に背き、此御所を出やつたを數ふればもう四年、日頃人を捨て給はず慈悲深い程きつさもきつい、思ひ切つてはいかな事見返らぬ夫のお心、叶はぬ事と思ひの外、源藏に參れとある御用の樣子、何かは知らぬが氣遣ひな事ではあるまい、定めて吉左右。

源藏　ハツ、ハア、。

御臺　ほんに自が云ふ事ばかり、嘸待ち兼ねてお出なさらう、源藏夫婦が參りしと、誰ぞ奥へ知らせ申しや。サア〳〵二人共に顏を上げ近う寄りや、これいなう遠慮には及ばぬ、近う〳〵年月の浪人住居、浮世が苦になつてか、昔の面影何處へやら、源藏が着てゐるはあら〳〵しい下々の着物、戸浪はそれに引替へて小袖の縫箔、遉に女子の嗜か、二人の中に子も出來たか、どうぢやぞいなう。

〽問はれて戸浪は有難涙。

戸浪　冥加至極もないお詞、主人のお目をくらませし罰が當つて苦勞の世渡り、夫婦の着替も一つ賣り、二つも三つも朝夕の煙の代になり果てゝ、やう〳〵殘せし此小袖は、御臺樣の下されし御恩を忘れぬ筐殘り、髪の飾の鼈甲もいつかは粹の引櫛と、變り果たる共稼ぎ、連合は布子の上の麻上下も今日一日の損料借、ア、おはもじ、お上に御存じない事まで。

〽身の恥顯はす錆刀、今日まで人手に渡さぬ武士の冥加。

源藏　ハツ女房が申上げまする通り、此態になりたれば、一しほ昔の不義放埓、思ひ廻せば御主人の罰、悔むに詮なき仕合で御座ります。

〽夫婦諸共おろ〳〵涙、折柄局は奥より立出で。

ト此時水無瀬奥より出て來り。

水無　御學問所へ召しまするは源藏殿只一人、御用濟んでお手なるまで、御臺樣にもお出はならぬと仰られて御座りまする。

御臺　成程〳〵心得た、源藏は局と同道、戸浪は自と一緒に奥へおぢや。

〽戸浪はこちへと入り給ふ。

ト御臺先に戸浪附いて入る

水無　サア源藏殿、かうお出なされませ。

へ只今御前へ召出さるゝ、源藏が身の嬉しさ怯さ、歩む疊の長廊下、しづ〳〵。

ト送りにて、水無瀬先に源藏立つを道具替りの知らせ、木なしにて道具逆に廻はす、上手の棲都て杉戸廊下の心にて、源藏は廻るに從ひ上手へ歩む。

本舞臺三間の間平舞臺、向う金銀梅の大形の襖、下の方折廻し誂への杉戸、上の方定式高二重より一尺程高き九尺の屋體、正面下手の兩方簾あげおろし、うしろ上手共金襖出入、同じく欄間、花道揚幕より舞臺まで高欄をせり上げる、よろしく道具納る。

ト水無瀬先に源藏御殿の内を見廻し乍ら、よろしく本舞臺へ來て。

水無　源藏殿、暫くこれにお控へなされい。（ト上手へ入る。）

へ暫くあつて、御座の間のこなたより、局は仰せ承り、常に變りし白木の机、恭しく捧げ出れば、ハアハツト畏れ敬ふ源藏が、五體の汗は布子を通し、肩衣絞るばかりなり。

ト此文句にて、水無瀬簾の傍により、ハア〳〵と答へて、簾の内より白木の机、これに手本、筆、墨、硯、料紙を乗せてあるのを持ち出し、目八分に捧げてそこへ出し。

水無　源藏殿、我君丞相様の仰には、さり難き仔細あつて、源藏が行方を尋ねしに、住所定ならず、やう〳〵昨日在所を求め、今日館へ來る事滿足とのお言葉、尚源藏儀幼少より我膝許に奉公し、天性好いたる筆の道、好きに上り習ふに覺え古き弟子共を追退け、適手書になるべしと思ひの外、主從の緣まで切つて賤しき風體との事、定めし筆取る事も忘れつらんとの仰られで御座りまする。

ト仰に源藏手を支へ。

源藏　局の今のお詞は、我君の御諚を承るも同然、御返答申すも憚りながら、前髪立の時分よりお傍近う召仕はれ、手を書く事は藝の司、書けよ習へと御意なされ、御奉公の間々書き覺えたと申すも慮外、蚯蚓ののたくつたやうに書く手でも、藝は身を助けるとやら、浪人の家業に鳴瀧村で子供を集め、手習指南仕り、今日まで夫婦が命も筆先に助けられ、淸書の直し字、毎日書けども上らぬ手跡、お尋ねに預る程身の不器用と御勘當、悔むに詮方なき仕合、御推量なされて下さりませ。

ト水無瀬これを聞いて簾屋臺へ向ひ。

水無　我君様、源藏がお答へお聞き遊したか。ハツ〳〵畏りました。(ト此方へ來り。)子供に指南致すとは賤しからざる世の營み、筆の冥加、藝の德、申す所に僞りなくば手跡も變らじ、改むるに及ばねどもこゝにて書かせ、道眞の所存は後にて云ひ聞さん、認め置たる眞字と假名、詩歌を手本に寫して見よ、との仰出されで御座りまする。

源藏　ナニ其手本を此所にて認めよとの、仰出されで御座りまするか。

水無　いかにも左樣で御座りまする。

源藏　アヽ拙者めに、エヽ有難い。

〽ハアハツト先へは出ず後ずさり、志根惡の左中辨物蔭よりずつと出で。

ト奥より希世出て來り。

希世　コリヤ源藏、樣子はあれにて殘らず聞いた、そちも堅固で目出度なう。

ト横柄顏にて云ふ、源藏思入にて。

源藏　これは希世樣、先は變らせなう大慶至極に存じまする。

希世　アヽイヤ其挨拶は聞きたくない、師匠の指圖は兎も角も辭退申して出る筈が、兩手を突いて目

をきるくし、蟇の所作がらするは書いても見ようと思ふ氣か、ヤア箆太い叶はぬ事ぢやぞ。

源藏　ハア御馴染とあつて忝い、希世樣のお詞に一つも違はぬ役に立たず、併し身の分際を顧ぬ源藏めでも御座りませぬ、只今これにて書けとあるお手本、書いて可いやら惡いやら跡先の樣子も存ぜず、四年以來在所住居、くさ墨に三文筆、書出しや反古の裏に書くならば場打もせまい、其結構な机に墨、筆、大鷹檀紙の位に負け一字一點いかな〳〵。

希世　そりや好い料簡ぢや、いかぬと知つて何故立たぬ。

源藏　サアそこで御座りまする。

希世　何處ぢやテ。

源藏　御勘當の私、御意に甘へた身の願ひ、お執成し頼み上げまする。

希世　ムウそれで聞えた、詫言はしてやらうが今はならぬ、といふ其仔細引つまんで話して聞かさう。此度帝の仰には存命不定の世の中、生死の道には老若差別はなけれ共、マア年寄から死ぬるが順道、菅丞相は當年五十二、天命を知るといふ齡も過ぎ、寄年を惜ませ給ひ、唐迄譽むる菅原の一流、是迄傳授の弟子もなし、一代限で絕やすは殘念、手を撰んで傳授せよと、仰を承けられ七日の潔齋、殊の外お取込ぢや、濟んでから願うてやらう。

源藏　ハア様子段々承れば、御大慶な勅諚。

希世　サア其勅諚も大慶も云はずとも知れた事、サア早く歸れ／＼。

ト希世源藏を突出しにかゝる、此うち水無瀬簾屋臺の内より呼るゝこなしにて、ハツ／＼と答へて、こなたへ來り。

水無　イヤお立ちなされまするな、源藏殿、仰付られました我君のお手本、只今それにてお認めなされい。

〽聞くより武部が身の大慶、希世は偏執むしやくしや腹、立寄る源藏睨みつけ。

希世　ヤイわりや、兄弟子に遠慮もせず、書うと思うて出しやばるか。

源藏　お笑ひあつても恥しからず。

希世　そんならそちが。

源藏　御意で御座れば。

希世　書いて見る氣か。

源藏　いかにも左様。

希世　ハテサテ篦太い。

源藏　御免なされて下さりませう。

へ御免なれと机にかゝり、手本を取つて押戴き、心憶せず摺る墨の、色も匂ひも薫ばしき、筆の冥加ぞ有難き。希世傍へ擦り寄つて。

ト此文句にて源藏机にかゝり、墨を擦り、筆をしめし清書を書きにかゝる。

希世　コリヤわれがやうな横着者は、手本の上を透寫し其手目は身がさせぬ、趾と頭はかき次第、身のざまの趾頬を、わりや何共思はぬか、褞袍の上に汚袴、貧乏寺の講中奉加場の帳附に其儘、無縁法界を書くなよ。

へ惡口たら〳〵いひちらし、怪我の振にて机を動かし、肘に觸つて邪魔するも構はず咎めず、手本の詩歌心よく書き終ふせ、机も共に御前へ直し、退つて頭をさげ居たる。

源藏　お局、御前へよろしう。

水無　畏りました。我君様には只今これへお出あつて、此清書を御覽なされんとの仰出され、源藏殿には御不興の身の上なれば、御前には叶ひませぬ、此席をお立なされい。

源藏　そりや御不興故にお目見得は。

水無　叶ひませぬ、お立ちなされませ。」

源藏　そんなら、どうあつても、御前へは。」

希世　ソリヤ見たか、勘當の身の上、菅丞相の御目通りは叶はぬ、それだによて先刻から立て〳〵と云ふに、いけ情の強い奴だ、サア〳〵お目見得はならぬ、お次へ立て〳〵。

源藏　ヘイ。

〽是非もなく〳〵立ち上り、お次の間にぞ控へ居る。

水無　我君樣。源藏が淸書御覽遊ばされませ。

〽局はかくと申上げ、一間の簾卷上ぐれば、恭しく注連引延え、天性柔和の御粧ひ欣然として座し給ふ、凡人ならざる御有樣、尊くも又有難し。

ト此文句にて、屋體の簾卷上げると、菅丞相直折衣裳にて床几にかゝり居る。希世、水無瀨平伏する。

〽菅丞相は淸書を取上げ給ひ、

丞相　鑽レ沙草只三分計。跨レ樹霞纔半段餘。これは我作れる詩歌、きのふこそ年は暮しが春霞、春日の山に早や立ちにけり。これは又人丸の詠歌、いづれも早春の心を讀み適へり、假名と云ひ眞字と云ひ、これに勝れし筆や有ん。

〽出來したり〳〵。

惣じて筆の傳授といつぱ、永字八法、筆格の十六點、名をそれ〴〵に云ふに及ばず、皆人々の知る所、菅原の一流は心を傳ふる神道口傳、七日も滿つる今日只今、神慮にも叶ひし源藏オ、見事々々、出來したなア。

〽御悦び限りなし。

水無　恐れながら申上げまする、筆法御傳授遊ばされまする上は、御勘當も御赦され、前に變らぬ御家來で御座りませうな。

丞相　ヤア局、何を云ふ。傳授は傳授、勘當は勘當、格別の御沙汰なれば、不屆なる源藏なれども、能書なれば捨て置れず、私の意趣は意趣、筆は筆の道を立つる、道眞が心の潔白、叡聞に達しても依怙とは思し召れまい。希世にも嫌はれな。勘當は前の如く主でなし家來でなし、かつて對面叶はぬぞ。

〽鋭き御聲、杉戸の外に源藏が、肝に燒鉄さゝるゝ心地、道理を分けての御意なれ共、傳授は外へ遊ばされ、勘當御免と泣き詫ぶる。聞耳立てゝ左中辨。

希世　コリヤ源藏が杉戸の蔭で歎くも道理、勘當を赦されねば所詮御目見得は叶はず、傳授しても規模がない、彼が願ひも、希世が望も立つやうの料簡は、傳授と勘當かへ〴〵にして遣はされたら、よささうな物のやうに。

〽存じまするといふ折柄、當番の諸太夫罷出で。

ト向うより侍一人走り出で來り。

侍　申上げまする。

希世　何事ぢや。

侍　俄の御用これある間、只今參内遊ばされよ、と瀧口の官人參られて御座りまする。

丞相　ナニ只今參内致せとな、七日の齋過ぎざる中、御用とは何事、隨身仕丁の用意いたせ。

〽裝束の間に入給ふ。

ト菅丞相簾屋臺の内へ入る、二重の御簾を降し。

〽後に希世が不興顏。

希世　何の事ぢや、折角傳授受けうと、此間から身を愼み喰ひたいものもえゝ喰はず、飮みたいものもえゝ飮まず、爲たい事もえゝせず、御殿へ詰めて夜も晝も書いて〳〵書き詰めた甲斐もな

く、傳授はうま〳〵源藏にしてとられ、これがほんの百日の說法、後は云はずとまア知れた事
ハヽヽ。
〽參內と聞し召し立出で給ふ御臺所、裲に戸浪を押隱し、人目包むも餘所乍
ら、お顏をせめて拜ませんと、心遣ひは希世の手前。

ト此文句のうち、奧より御臺裲の下に戸浪を隱し、菅秀才の手を引き出で來り。

御臺　傳授の樣子承れば、希世樣、お前には嘸殘多う思召しませう、仕合は源藏、さりながら勘
當は赦りぬげな、館の出入も今日限り、彼方此方を思ひやり、御參內を見送りがてら、それで
の、合點か。
〽それで〳〵と、裲の下を知らする御目遣ひ、夫婦は重々お情の身にしみ渡る
忝涙。

ト靜なる下り羽になり、戸浪裲の下に隱れ乍ら、最早お入かと奧を見やるこなし、希世杉戸の前へ立
ちふさがり、兩手を廣げ裝束を引張り、杉戸の立付をふさぐこなし。

呼び　參內。

希世　ならぬぞ〳〵、杉戸の立合から覗く事はならぬぞ、源藏覗いて丞相のお目障りになると勘當の

上塗だぞ、これさ、杉戸へ嚙り付いた、覗く事はならぬぞ／＼。

呼び　參內。

ト希世杉戸の立合あちこちへ立廻り、塞いで邪魔をするこなし。

ヘ束帶氣高き菅丞相、一間の內より立出で給ひ。

トよき程に下り羽早めになり、御簾を卷上げる、菅相丞衣冠裝束の形にて出る。

丞相　源藏は能書なれども、勘當致し置たれば我目通りは叶はぬ、さりながら神慮に叶ひし者なれば、神道秘文傳授の一卷、その方が手づから源藏に與へよ。

ト菅秀才に傳授の一卷を渡す、希世欲しさうにいろ／＼あつて、杉戸の傍へ來て。

希世　あれ聞いたか、御勘當の源藏なれば、直に御傳授は叶はぬわい、內玄關へでも廻つてをれ、エエ、うぢ／＼してゐると、反つて其方が身の上ぢやぞ、どれいつそ身共が引張り出して。

ト杉戸の方へ行くを御臺よろしく止める。

御臺　イヤ希世樣、あらけなく仕給ふな、三世の緣の切目ぢやもの、立たぬも理、泣くも道理、涙とゞめて御暇乞。

ト杉戸の[illegible]と襠の下へと、それ／＼心遣ひある。此うち太刀持の舍人一人出で、下手杉戸の前に控へ

居る。
〽それぞと推し給へども、知らず顔にて立出で給ふ。何としてかは召されたる、
御冠の自ら落つるを、御手に受けとめ給ひ。
ト菅丞相のつけたる冠、仕掛にて落ちるを裝束の袖にてうけとめる。

丞相 物に障らず脫けたるは、ムヽ。
〽ハアはつとばかりにお氣がゝり。

御臺 イヤそれは願ひ叶はず落淚致す、落は落つると讀むなれば、其驗でかな御座りませう。

丞相 イヤ〱左にてはよもあらじ、參內の後知る事、源藏早く歸されよ。
〽冠正して。

呼び 參內。
〽參內ある。
ト下り羽になり、相丞先に舍人後より悠々と附添ひ、希世舍人の後より隨ひて楊幕へ入ると、此うち杉戸をあけ、源藏伺ひ出て向うを見て思入。戸浪も襠の下をまろび出て思入。
〽御勘當の身の悲しさは、行くに行かれず伸上り、見やり見送る御後かげ、御

簾にさへられ衝立の邪魔になるのも天罰と、五體を投伏し男泣き、戸浪が悔みは夫の百倍。

戸浪　こちの人、こなたは御前のお詞がかゝつて身の冥加、同じ科でも女は罪は深いといふ、どうしたいはれで何故深い、御臺樣の後に隱れて、あんぢりとお顏も拜まぬ私の心、あゝ鈍な女子に生れたわいなア。

〽御臺のお傍も憚りなく、果し涙ぞ。

御臺　イザ菅秀才、その一卷を源藏へお遣しなされ。

菅秀　源藏近う寄つて受取れ。

〽源藏に給はりける、末世に傳へて寺子屋の敬ひ申し奉る、因縁かくとぞ知られける。希世のさ〳〵立戻り。

希世　ヤア源藏を歸されぬは、御臺所御油斷〳〵、一刻も早くぼいまくれと仰付られた。サアそこを少し身が料簡、その代りには傳授の卷物、讀んで見る望みはないが、筆の冥加にあやかる爲ちよつと戴かせてはくれまいか。

源藏　大切なこの傳授の一卷を。

希世　せめて一寸拜みたい、源藏賴む〳〵。

〽引たくり逃出すを、引ずり戻してかづき投げ、傳授の一卷取返し。

ト此文句の中、希世一卷を奪ひ駈出すを、源藏追駈け立廻にて一卷を取返し。

源藏　これをおのれがしてやらうで、直垂の羽繕ひ、晝鳶の兀頂め、びく共せばぶち殺すぞ。

ト柄に手をかけて思入。

御臺　コレ源藏、聊爾しやんな、戸浪過失のないやうにしやいなう。

戸浪　ハイ〳〵こちの人、滅多な事さしやんすな、御臺様のお詞が。

源藏　エヽコレおのれをナ、御臺様のお詞がかゝらねば、たつた一討。

ト希世身を縮め。

希世　これあやまつた、赦してくれ〳〵。

源藏　只助けるも殘念な、寺子屋が折檻の机は、こいつが責道具、女房こゝへ持つて來い。

〽取るより早く、背中に机大げなし、兩手を引張る机の脚、裝束の紐引しごき、
雁字搦みに括り付け。

ト此文句にて戸浪机を持つて來り、源藏希世を押伏せ、文句の通りに裝束にて括付け。

源藏　盜みひろいだ師匠の躾、竹篦のかはり扇の親骨、面に見せしめひいつかせん。

ト扇にて打据ゑ、引捉へて突飛ばす。

希世　エヽいま〳〵しい源藏め、よくこんな目に逢はしやアがつたナ、しつかい公家のかまぼこを見るやうだわ、エヽうぬテア。

源藏　言分あるか。

希世　あやまつたよ。

〽痛さも無念も命の替り、耻を背負うて歸りける。源藏夫婦手を支へ。

ト希世はら〳〵向うへ入る。

源藏　禁庭の樣子承り歸りたく存ずれ共、長居は恐れ、御臺樣。

戸浪　此上ながら女夫が事、お見捨てなされて下さりまするな。

御臺　オヽそれは氣遣ひしやんな、今行くといふを聞捨てに、せめて一夜と云はれもせぬ、命が物種緣も盡ずは又逢ふ事もあらうわいの。

源藏　左樣御座らば、御臺樣。

御臺　二人共もう行きやるか。

兩人　ハツ。もうお暇いたしまする。

〽戸浪が涙長汐に、乾く間もなき袖の海、見る目いぢらし夫婦が姿、なく〳〵御門を。

ト一重にて、源藏戸浪小腰をかゞめ、御臺に辭儀して振返り〳〵向うへ入る。御臺跡を見送り奥へ入る。時の太鼓にて此道具。

ぶん廻す

菅原館門外の場　本舞臺三間の間上の方へ寄せて大門、左右とも一面築地の高塀、都て菅原館門外の體よろしく道具止る。

〽出て行く、源藏と引違へ立歸る栗柄太郎、青息吐息門の並木に足躓き、かつぱと轉げて起きる間も。

ト栗柄太郎向うより駈け來り。

栗柄　待れぬ〳〵〳〵侍衆、御大事が起つて來た、咎の樣子は何かは知らず、使の廳の官人共

丞相様を取逃し、鐵棒割竹あれ〳〵こゝへ、御臺様へ此様子を申上げておくりやれ〳〵。

ヘ館の騷動、門外には鐵棒打振り警固の役人、輿にも召させ奉らず、菅丞相の前後を圍み、先へ進むは時平の加擔人三善の清行、門外に立はだかり。

ト花道より三善清行出て來る、後より菅丞相指貫ばかりにて出て來り、これに荒島主税大小上下の形高股立にて附き、その外掛烏帽子、半素袍の侍大勢付いて出て來る。

清行　斎世の君苅屋姫加茂堤より行方知れず、仔細詮議なされし所、親王を位につけ娘を后に立てんとする、菅丞相が兼ての企み、その罪遠島と相極り、流罪の場所は追ての沙汰、それまでは押込め置く、出口々々の大貫鎹、門の警護は身が家來荒島主税に申付けるぞ。

主税　畏つて御座ります。

ヘ呼ばる聲を聞くつらさ、御臺は警固の人目を耻ぢず、走り寄つて。

ト門の内より御臺走り出で、菅丞相に取付く。

御臺　道眞公、コリヤアマアどうした事で御座りまするぞいなう、齋の間の事、姫が身の上御存じない分疏はなぜなされぬ、科もない身を左遷との仰は聞えぬ、恨めしう存じまするわいなア。

ヘ歎き給へば心を勵し。

丞相　ヤア愚々、道眞虛命蒙れ共、君を恨み奉らず、漸く齢傾きし臣が拙なき筆跡まで、惜ませ給ふ傳授の勅諚、昨日までは叡慮に叶ひ、今日は逆鱗蒙る共、皆天命のなす所、先程冠の落ちたるは、殿上の札を削られ、無位無官の身となる知らせ、今更悔む道眞ならず、そこ退きめされ。

〽御臺を遠ざけ給ひける。希世は道より取つて返し。

ト向うより希世出で來る。

希世　清行殿御苦勞千萬、この和郎の樣子承り、弟子の方から師匠をあげ、向後頼むは時平公、管丞相と一つでない執成し、よろしく賴み入りまする。

清行　氣遣あられな、呑込んだ、作法の通り、管丞相内へ追込み門を打て。

主稅　畏つて御座りまする、立つせい。（ト割竹を持つて立掛る。）

希世　これ〳〵待つて、その役目、希世が代つて仕る。（ト割竹を取つて。）これ謀叛人賊、今までとは四邊が違ふ、時平公へ宗旨を替へた手見世の働き、割竹一つ喰はつしやい。（ト立ちかゝる。）

栗柄　イヽヤさうはさせまい。（ト希世を捕へ突飛す。）

希世　ヤア下主の慮外者、自滅したうて出しやばつたな。

栗柄　ハレヤレ知れてある下主呼はり、此方の口から慮外とは腸がよれ返る、その割竹を振上げて誰を打つたのだ。
希世　知れた事、謀叛人の此和郎を。
栗柄　ヤア謀叛とは誰を謀叛、御恩を忘れし人非人、管丞相にはお構ひなくとも、おのれに罰を栗柄太郎が當てゝやらう。
丞相　太郎待て。
栗柄　ム、。
〽飛びかゝる栗柄太郎、御手をさしのべ引寄給ひ。
丞相　ヤアこざかしき汝が振舞、勅諚に依つてかくなる道眞、希世は扨置き、其外へも手向ひするは上への恐れ、汝は勿論館の者共、我詞を用ひずば、七生までの勘當せうか。
栗柄　ちやと申して。
丞相　控へてをらぬか。
栗柄　ヘイいめエましいなア。
〽聞いて希世が恐氣も抜け。

希世　コリヤ太郎して見ぬかいヤイ、頬桁ばかりの腕なしめ、こゝな業さらしめが。

栗柄　何を。

〽のさばる無念堪へる太郎、是非も情も荒島主税、官人原に追立られ、すご／＼館に入給ふ、御有樣こそ悼はしき。サア／＼用意の大貫鎹、表と裏へ手分の人數、築地の穴門、樋の口まで、暫時の間に打付しは、物忌はしく見えにける。

ト荒島主税侍立ちかゝり、青竹にて門を閉ぢ方々を打付ける、仕掛にてよろしくあるべし。

清行　サテよい氣味な、出口々々の締もよいが、築地の家根を越さうも知れぬ、主税萬端油斷をするな、暮に及べば、希世殿歸宅いたさうでは御座らぬか。

希世　いかさま御同道仕らう。

〽築地の蔭に待ち居たる武部源藏ぬつと出で、希世を一當て悶絶させ、周章る清行相伴投げ。

ト下の方より源藏戸浪出て來り、文句の通り希世を當て、三善清行を投げる。

主税　狼藉者だ、引括れ。

〽殺せ縛れと犇めいたり、武部は戸浪に指添渡し、寄らば切んづ勢ひなり、希

世はやう〳〵人心地立上つて。

希世　ヤアうぬは源藏め、一度ならず二度ならず、酷い目に逢したな、うぬがする狼藉は管丞相がさせたに成つて、流罪の仕置が死罪にならうも知れぬぞ。

源藏　ハヽヽ女房、あれ聞け、物覺えのない拔作め、傳授は受けても勘當は赦りぬ此源藏、さすれば身共に主人はない、栗柄太郎は主持で、おのれめをさいなまず、堪へてゐるがかわゆさに、名代に投げてやつた、名代ついでに片端からどいつもこいつも撫切りだ、うぬら一々覺悟なせ。

希世　こしやくな事を、それ打殺せ。

侍大勢　動くな。

源藏　何を。

〽女房諸共拔放し、めつたなぐりの太刀風に、小糠侍鍛屑公家吹立てられて散失せけり。

ト此文句にて侍大勢源藏戸浪にかゝる、一寸立廻あつて源藏みな〳〵を追廻し下手へ入る、希世築地の蔭より出で、戸浪を捕へ可笑味の立廻よろしく。

へ敵なければ立歸る、時節も幸ひ黄昏時、門の扉をとん〳〵〳〵、と叩けば内より咎むる聲。

ト源藏引返して希世を追ひ込み、門の扉を叩く。

栗柄　誰だ〳〵。

源藏　その聲は聞覺えた栗柄太郎か。

栗柄　さいふは武部源藏殿か。

源藏　殿どころかい若い者、油斷して居る所でない、扉の釘付踏破り、御主人方の御供し此場を退くは安けれど、おことが今も聞く通り、仁義を守る道眞公、とあつて讒者の計ひにて、お家の斷絶覺束なし、御幼少の御若君をこつそり夫婦が預り奉らん、所存を立てるは栗柄太郎、若君を築地の上から。

栗柄　出來た〳〵源藏殿、お上へ云つては得心あるまい、盗み出すがお家の爲。

源藏　さうぢや〳〵よい料簡、一刻一歩も早や退きたし、頼む〳〵。

へ頼む〳〵と云ふ間もなく、築地の上から心の早咲き、勝色見せたる花の容顏。

ト栗柄太郎菅秀才を抱いて築地の上へ出す。

栗柄　大事の若君、お怪我のないやう。

源藏　オ心得た。

〽心得高き築地の屋根、軒に手届く心も届く、若君受取り抱降し、外と內とに忠臣二人、胸は開けど開かぬ御門、荒島主税目早く見付け。

ト下手の方より荒島主税出で來り。

主税　ヤア盗人の隙は有れど、守人の隙はない、宵覗きを手引する內と外との相盗めら、菅秀才を盗んだ、此行注をする、待つてをれ。

源藏　ヤア何處へ〳〵、おのれをやつてよいものか、荒島主税覺悟なせ。

〽討つてかゝれば拔合せ、切結び切ほどき追つ返しつ二人が勝負、屋根の上から見てゐる栗柄、棧敷正面眞向二つ、破れて命は荒島主税。

栗柄　止めに及ばぬ切捨々々。

〽危い場所を盗人夫婦、行末榮ゆる菅秀才。

若君賴む夫婦の衆。

戸浪　舘の父君母君を。

源藏　頼むぞ栗柄。

栗柄　ハヽア、心得た。

〽互に頼み頼まるゝ、忠義々々を書傳ふる筆の傳授は、寺小屋が、一藝一能名も高き人の手本となりにけり。

ト戸浪菅秀才を背負ひ、源藏附いて向うへ入る、栗柄築地の上に引張りの見得よろしく段切にて。

幕

四幕目

河內國土師里の場

役名　菅丞相、判官代照國、土師の兵衞、宿彌太郎、贋迎ひ彌藤次、仲間宅內
老母覺壽、立田の前、苅屋姫、腰元等。

土師里道明寺の場　本舞臺三間の間高足二重舞臺、見つけ襖、上の方折廻し引拔障子屋體、舞臺上

の方植込泉水、いつもの所に枝折戸萩垣、河内の郡領館の體。こゝに慶元○□△松の島臺をこしらへ居る見得。琴唄にて幕明く。

ト三人よろしくあつて。

○　サア〳〵これで出來上りぢやあるまいかい。

□　成程そなたは立花の心がある故、此松の木振りが一しほぢやわいなア。

△　それはなア、日頃からのその嗜み、それ故後室樣のお見立、コリヤきついものぢやわいなア。

○　これはしたり大概になぶらしやんせいなア。それはさうとあの御逗留のお客樣も、明日は愈々お立遊ばすさうぢやわいなア。

□　ほんにそれなればあの美しいお姫樣も、あなたと一緒にお立ちなさるゝのかいなア。

○　なんのいなア、あなたは苅屋姫樣と云うて、道眞樣の姫君樣ではあれど、なんぢやゝらお目通りへは叶はぬとやら云ふ事。

△　それ〳〵一體親御樣は流罪とやらで、遠い島へお出なさるゝを、あの後室樣のお願ひで、此程の逗留ぢやわいの。

□　それはマアお氣の毒な事、それにまた何でこの島臺は入る事ぢやぞいなア。

△ ハテそれも後室様の、深い思召しのあつての事で御座んせう。

○ それはさうとその島臺、早うお上へ、テア小菊殿。

△ ほんにそれ〳〵、ちつとも早う差上げさしやんせ。

□ そんなら一緒に、サア御座んせ。

〽云ひつゝ奥へ入りにける。

ト辰元三人、島臺を持ち奥へ入る。

〽立田の前は船場にて、思はず逢うたる苅屋姫、密に伴ひ歸れども、家來も多くは知らぬがち、隠し置きたる小座敷の襖をそつと押開き。

ト二重舞臺の襖を開け、立田の前は苅屋姫を伴ひ出で來り。

立田 嘸淋しからう、精も盡きやう、顔見に來たいは山々なれど、さりとては何やかや用事の多さ、母様のお傍離されねば得参らぬ、今が好い隙、誰も來ぬ氣晴しに、サアこゝへ。

〽心遣ひも兄弟の、姉の情を苅屋姫、一間を出る目は涙。

ト兩人好き所へ直り。

苅屋 齋世様に別れてより、段々お世話に預る上、父上様にお目にかゝり切めて不孝の申譯、それも

叶ぬものたらばと、我身の覺悟極めても、產の母樣覺壽樣、今の母樣都の弟、親王樣の御事は猶しも忘れぬ得忘れぬ、心を推量して下さりませ。

へ嘆けば共に涙ぐみ。

立田　悲しいは道理々々、丞相樣に逢はぬとて、短氣な事等かんまへて思ひ出しても下さんすな。母樣のお願　立つて此屋敷に御逗留、どうぞ首尾を見繕ひ母樣のお耳へ入れ、お指圖受けて餘所ながらと、口むしりかけて見たればナ、こちの思うた坪へは行かず母樣の堅苦しさ、お果なされた郡領樣に少しも變らぬ行儀作法、我產んだ子でも人に遣れば、先こそ親なれ此方は他人、それを親ぢやの樣ぢやと思ふは、町人百姓の譯をば知らぬ子に甘さと、幸先惡い訴訟もならず、外の事に云ひ紛らし、其場は濟んでも始終が濟まぬ、お宿申すも今日で三日、しけ凪も吹き晴れて下り日和に直つたと、船場からの注進故、今宵八つがお立とて、輝國殿の旅宿より知らせに依つてお立の用意、今やなんどと思ひの外、手詰になつたがどうしてよからう、膝共談合これ泣かずと、善い智慧出して下さんせ。

へとつをいつの胸算用、後にすつくと宿禰太郎。

ト奥から宿禰太郎着流し大小にて出で來り。

宿禰　よい分別者これにあり。

立田　ヤア太郎樣、いつの間に。

宿禰　ム、いつの間とは、これ立田、連添ふ男の目をぬいて、こつそりと取込んで、だいそれた身の上話、苅屋姫はそなたが妹、藁の上から養子の仔細、知つては居れど京と河内、武家と公家とは位も格別、菅丞相の伯母風吹かし聟めかしても、いつかなめかれぬ位負け、名ばかり聞いて逢うたは今、てんと御器量、齋世とやら樣とやらが、うつゝ樣にならしやつたも道理ぢや〳〵、姫の顏見ぬ先は、おれが楊貴妃ぢやと思うたが、較べて見れば無楊貴妃、其方の名も替へねばならぬ。

立田　そりや又何とエ。

宿禰　ハテ知れた事、お次の前、

立田　ホヽすは〳〵と出放題、母樣へも隱してゐる、此譯何とも云はしやんすなよ。

宿禰　それは氣遣し給ふべからず、明日のお立知らされし輝國の旅宿へ參り、此間御逗留中心遣ひの禮云つて、いよ〳〵刻限相違なく、一番鷄の鳴くのが相圖、中合に行て來いと覺壽の吟附、只今參る道でよい思案が出たら、戻つて云はうお次の前。

立田　アレまだぢやら／＼囀業口。

宿禰　オツト閉口、ドレ行てかうか。

　　〽表の方へ出て行く。

　　ト宿禰太郎向うへ入る。

苅屋　あなたがお前のお連合、身の事に取紛れ御挨拶も申しませぬ。

　　〽跡を見やりて苅屋姫。

立田　ア、これ挨拶はいつでも成る事、こちの願ひは延されぬ。（ト思入。）オ、それ／＼所詮母様に云うたとて埒があかぬは知れてある、連合も留守、母様もお傍に御座らぬ折柄なれば、お前を私が連れていて、叱られうがどうならうが、跡はまゝいな、マア此方へ。

　　〽姫の手を取る後から。

　　ト奥の襖をあけ、覺壽杖を持つて出で來り。

覺壽　不孝者どつちへ行く。

　　〽襖がらりと母の覺壽、杖振り上げて飛びかゝるを、立田はハツと抱き止め。

　　ト覺壽杖振上げて立ちかゝる、立田の前止めて。

立田　お前にあけて云はなんだ、隱したお腹が立つならば、此立田打ちも叩きもなされませ、此中も宣はぬか、人に遣れば我子でない、と仰つての折檻は母様とも覺えませぬ、丞相樣の御秘藏姫、杖棒當てゝよいものか、サア自を〳〵。

苅屋　イヤお前に科はない、不孝な自打ち給へ。〽姫に代つて身を厭はず。

〽立田を押しやる杖の下。

立田　イヤ〳〵お前は打されぬ。

苅屋　イヽヤ自を。

立田　イヤ私を。

苅屋　お打ちなされて、

兩人　下さりませ。

〽折檻の杖を爭ふ姉妹思ひ、老母は猶も怒りの顏色。

覺壽　コリヤ立田、おりや他人には折檻せぬ、養子にやつた丞相殿はおれが爲には甥の殿、子にやつた姫は甥孫、親も容さぬ淫して、大事の〳〵甥の殿、流され給ふは誰が業、憎うて〳〵コ

レ此杖折るゝ程擲かねば、丞相殿へ言譯立たぬ、六十に餘つて白髪頭、連合に別れた時剃る
をそらさぬ立田の前、尼になつては便りがないと留められて、法名ばかり覺壽と呼ば
れ、邪魔に思うた此白髪、今日といふ今日役に立つ、頭を剃つて衣を着れば、打擲の杖は持れ
ぬわい、儕杖望む立田から。

〽走り寄つて丁々〳〵、打るゝ姉妹、打つ母も共に涙の荒折檻。

ト覺壽兩人を杖にて打擲する、上の障子屋體の內にて。

丞相　コレ〳〵伯母御前、卒爾の折檻し給ふな、齋世の君の御不便ある、娘に疵ばしつけ給ふな、父
を床しと慕ひ來る、苅屋姫に對面せん。

〽障子の內より、丞相の御聲高く聞ゆるにぞ、老母は杖をからりと打捨て、わ
つと叫んで伏轉び、暫し答へもなかりしが。

覺壽　產の親の打擲は養ひ親へ立つる義理、養ひ親の慈悲心は產の親へ立つる義理、甘き詞も打擲も
子に迷うたる親心、逢うてやろとは、姫よりも母がよろこび詞には盡されぬ、苅屋姫は結構な
親もつた。

〽持つた〳〵と目に持つた涙の限り、聲限り、二人の娘は何事もお慈悲〳〵と

ばかりにて、泣くより外の事ぞなき。

これなう、爰から禮を云はうより、來いとあらばイザ傍へ。

〽隔の襖押開くれば、菅丞相は見え給はず、逗留の中造られし主の姿の木像ばかり。

ト上の障子を掲け、内に木像据ゑてあり、三人びつくり思入。

〽こはそもいかにと苅屋姫。

苅屋　逢うてやらうと宣ひしは、母樣の折檻を止めん爲、兎に角不孝な自故お逢なされて下されぬか、今物を仰つたは父上に違ひはないに、木で造りし父上樣が但しは物を宣ひしか、又は何處ぞへ隱れてか。

〽立つて見、居て見、うろ／＼と。

覺壽　騷しや苅屋姫、丞相の逗留中御馳走は奥座敷、こゝへは餘程間數も隔り、先程聲の掛つた時こゝへはどうして御座つた、と思ひ乍ら嬉しさに辨へなく見れば此木像ばかり、序ながら苅屋姫話して聞さう、逗留中主の形描いてなりとも作つてなりとも、伯母が筐に下されと願うた日から取かゝり、初手に出來たは打破り捨て、二度目に作り立られしを同じくこれも打碎き、三度

目にこの木像造上げて仰るには、前の二つは形ばかり、勢魂もなき木偶人、これは又丞相が魂殘す筐とて下されし主の姿、物を云ふまいとも云はれず、帝への恐れあれば逢たうても逢れぬ親子、木とな思ひそ。

〽苅屋姫。

もの仰つた父上に逢やつて、さぞ嬉しかろ、母も本望遂げましたわいの。

〽親子三人よろこびの中へのさ〳〵立歸る、太郎が爺親土師の兵衛。

ト向うより土師の兵衛上下衣裳大小にて、後より宿禰太郎附添ひ出で來り、舞臺へ來て。

兵衛　覺壽これにおはするか、お客人のお立も明朝、出立の拵へさぞ取込み、役に立ずとお見舞申し、手傳でも仕らうと參りかけに、照國殿の旅宿へもちよつと付屆、悴が幸ひをり合せ用意も大方出來たと聞き先は大慶、兎角するうちもう暮相、一先歸つてお立の時分また參るのも老足なれば、お邪魔ながらこれにをらう、心遣ひなし下されな。

覺壽　兵衛殿の義理々々しい、嫁子の處は内同然、斷りに及ぶ事か、用事があらば遠慮なく仰つたがよいわいの、刻限まではこれ立田そなたの部屋にお寢間を取りや、兵衛殿御休息お目に掛りませう。

〽嫁を連立ち入り給へば、跡は親子が小聲になり。

ト覺壽苅屋姫を伴ひ、立田附いて奧へ入る、跡に兵衞太郎兩人殘り。

兵衞　コリヤ道々謀し合した通り、太郎ぬかるな。

宿禰　氣遣ひなさるな、親人御座りませ。

〽奧と部屋とへ別れゆく。

ト兩人矢張奧へ入る。

〽座敷々々は燭臺照らし、今宵限りの御奔走、とり〲騷ぐばかりなり、土師の兵衞は一間よりそつと拔出で、前栽の勝手覺えし切戸口、錠捻切つて押開けば、外から相圖の挾箱、差出す中間、徒士、若黨。

ト舞臺へ燭臺を出す、奧より兵衞窺ひ〲出で來り、柴折戸を開けて相圖すると、下の方より侍二人中間一人挾箱を持つて出で來り、兵衞に渡す。

兵衞　コリヤ、イ言付けた人數の裝束、丞相を迎ひのはり輿、すはと云ふ時間に合せよ。

侍　心得ました。

兵衞　行け〲。

侍　ハッ。

へ家來共先へ歸し、挾箱引かかへ、月影洩るゝ木の間〳〵、うろ〳〵窺ふ同腹中。

ト侍中間つか〳〵と入る、奥より宿禰太郎出で來り。

宿禰　親人お首尾は、件の物は參りしか。

兵衛　忰氣遣ひするな、コリヤ此中に計略の彼の一物、大事の談合こゝへ〳〵。

ト兩人舞臺の上の方へ行く、兵衛太郎に囁く。

へコヽへ〳〵と大庭の池の邊で囁く親子、宵から素振に氣を付けて宿禰太郎に目放しせず、立田の前が物蔭より、聞くとも知らず、宿禰太郎。

ト此うち奥より立田の前出かゝり、二重舞臺に窺ひ居る。

宿禰　先程お聞きなさるゝ通り、判官代照國迎ひに參るは八つの上刻、時平公よりお頼みの菅丞相を殺す工面、贋物仕立て迎ひと僞り、受取つて途中でぐつとは云ふものゝ、一番鷄のうたはねば、姑の片意地名殘惜んで渡すまい、八つ鷄の鳴かぬ先に宵鳴する鷄、これに御座るか。

へ挾箱より鷄出し。

オヽ皮膚のよい白相國、とかうするうちもう夜半、一調子張上げ存分に唱うてくれ、一聲聞かねば落着かぬ、親人何故鳴きませぬ。

兵衛　イヤその分では鳴かぬ筈、宵鳴は天然自然、極めては鳴かぬもの、それを鳴かすが秘密事、大竹の中へ熱湯を入れ、その上にとまらすれば陽氣廻るを時節と心得時をつくる、留竹も挾箱に入れて來た、臺子の湯もたぎつてあらう、釜口そつと取つて來い。

宿禰　オヽ取つて來るは安い事、しかし湯をしかけても鳴かぬ時は。

兵衛　ハテ拗い、鳴かぬ時は又分別。

〽親子が奸計、南無三寶一大事、先へ廻つて母様へお知らせ申して。イヤさうしてはイヤ云はいでは、またこちらが云うては、あちらがこちらがと迷ひし胸を撫で降ろし、

ト此文句のうち立田の前思入。

立田　宿禰様、太郎様はいづくに。

〽尋ねる聲にはつと二人が狽忙仰天、鷄隠す挾箱、あたふた締めてさあらぬ風情。

ト兩人びつくりして、鷄を挾箱に入れ、さあらぬ體にて。

宿禰　ヤヤ事々しう呼び立つるは、何ぞ急な用でもあるか、さもない事なら無遠慮千萬、親人もこの宿禰も肝に堪へてびつくりしたわい。

〽云ふ顏つく〴〵打眺め。

立田　お前方のびつくりより、私にびつくりさゝしやんした、聞えませぬ連合舅君、聟迎ひを拵へて菅丞相樣を殺さうとは、あなたに何ぞ恨みがあるか。

〽但しは時平に頼まれしか。欲には馴染の女房も捨て、母樣の義理も思はずか。

お前は捨つる心でも、わしや得捨てぬ太郎樣、これ申し親仁樣思ひ留つて下さりませ。

〽舅を拜み夫を拜み、聲も得立てぬ貞女の思ひ、涙操を現せり、兵衛は宿禰に眼くばせし。

兵衛　イヤハヤ眞身の意見に逢うて、親も悴も面目ない、向後心を改むれば、嫁女此事聞流しに。

立田　ア、勿體ない、聞流さいでよいものか、御得心とあるからは、此世ばかりか未來まで變らぬ夫婦舅君、まだ如月の餘寒も烈し、巨燵に膚を温め、酒一つ上げたいサアお出なされませ。

ト奥の方へ行きかける。

兵衛　それそこを。
〽先に立田が。
ト兵衛太郎に切れと知らせる
〽心得太郎が後袈裟、肩先四五寸切られながら、振返つて掴み付き。
ト太郎背後より抜打に立田の前を切りさげる、立田思入。
立田　エ、これ人でなし卑怯者。一人の手にも足らぬもの、欺し殺すが本望か、女の義理を立過し、
エ、悔しや無念やなア。
〽罵る聲。
宿禰　おとぼね立てな。
〽と宿禰が下着、褄先口へ押込み捻伏せ、肝先ぐつと一抉り、兵衛は前後に心を配り。
ト太郎立田の口へ褄先を押込み、捻伏せて止めをさす、此間兵衛四邊へ氣を付ける思入。
兵衛　悴、息は絶えたか〳〵。
宿禰　氣遣ひめさるな、只今止め。

ト血刀を拭ひ鞘に納め。

兵衛　扨て此死骸は。

問ふに及ばぬ此大池、骸を浮さぬ手ごろの石、袂や帶にくゝり添へ、深みへやれ。

宿禰　合點だ。

〽二人して投込む死體は紅の、血しほに染まる池までも、立田が名をや流すらん。

ト兩人庭の石を拾ひ、立田の前の懷袂へ押込み、池の中へ投込む。

宿禰　これ親人、これはこれでよいが、濟ぬは鷄、臺子の湯を取つて參らう。

兵衛　太郎もうそれには及ばぬ、鳴すしやうは身共に任せ。

〽武士の嗜む懷中松明、手ばしかく點し立て　池の中へ明りを見せ、挾箱の蓋仰向け　鷄を上に乘せ、浮める池の水の面、刀の鐺差延す、腕一杯に押遣れば、動かぬ水も夜嵐に、立つや小浪のうねりにつれ、半段ばかり流れ行く。

ト兵衛懷中より松明を出し、燭臺の灯にて火を移し、松明を差出し、挾箱の蓋に鷄を乘せたるを刀の鞘にて突出す、太郎思入。

宿禰　親人何をなさるゝ、挾箱の蓋を船にして、子供のする業おとなげない、あれが何の役に立ちますハヽヽヽ。

兵衛　ム、譯を知らずば云うて聞さう。惣別淵川へ沈んで知れぬ死骸は、鶏を船に乗せて尋ぬれば其死骸の在る所で時を作る、鶏の一徳思ひ出し、池へ沈めた立田が死骸、今一役に立てゝ見る、うまい手番拍子までが直つて來た、あれ〳〵太郎、羽ばたきするは死骸の上か。

ト これにて鶏時を作る模様。

そりやこそ鳴いたは、東天紅。

宿禰　ありやまたうたふは〳〵。

ト所々にて鶏鳴く。

〽八つにもならぬ宵鳴の、聲さへかへる春の夜や、庭木の塒に羽たゝきして、一鶏鳴けば萬鶏うたふ、函谷關の關の戸も、開く心地に親子の悦び。

兵衛　これから急ぐは菅丞相迎ひの拵へ、心が急くちつとも早く。

〽兵衛は出てゆく切戸口、宿禰太郎は巧みの仕殘し、だめを閉して入りにけり。

ト兵衛先に、宿禰太郎思入あつて向へ入る。

〽早や刻限ぞと御膳の拵へ、銚子、土器、熨斗、昆布、腰元に島臺持たせ、伯母御座敷へ出給ひ。

ト奥より腰元三人、長柄の銚子三寶土器熨斗昆布、松の島臺を持出で來る、後より覺壽出で來り。

覺壽　百日千夜留めたりとも、別るゝ時は變らぬ辛さ、此上賴むは御免の勅諚、歸洛を松の此島臺、行末祝ふ熨斗昆布。

〽菅丞相も此間心遣ひの御一禮、互に盡きぬ御名殘、宿禰太郎罷出で。

ト太郎出で來る、後より官人四人白木のはり輿を持ち、彌藤次龍神[illegible]侍烏帽子中啓を持ち出で來り、門口に控える、太郎内へ入つて。

宿禰　お立の刻限、早や、門前まで迎ひの官人、判官代照國は路次の用心辻固め、只今旅宿を立出され、輿舁の官人に譜代の家來を相添へられ、只今これへ參上仕る。はり輿これへ。

皆々　ハアヽ。

〽あやしのはり輿舁き入れて、時刻移るとせり立つる、菅丞相は悠々と大廣間より出させ給ひ、輿に召すまで見送る老母、人前作つてにこ〳〵と、泣かぬ別れな哀れなる。

ト輿を舞臺へ舁き入れる、菅丞相はこれに乘り、太郎附いて向うへ入る。

〽宿禰太郎も御見立、門送りして立歸り。

ト太郎は直に立戻り來る事よろしく。

覺壽　ヤレ／＼嬉しや／＼仕舞が付いた、覺壽樣もお氣安め、寢間へ御座つて。

覺壽　イヤ寢たうても寢られぬわいの。

宿禰　ハア寢られぬとはお氣色でも。

覺壽　アレまだいの、客を立てゝ嬉しいと、一道な聟殿の悦び、一つ屋敷に居ながらの、暇乞も得せいで、苅屋姫が悲しからう、人の逢ふのもけなりかろ、とかけ構はぬ立田さへ、それでわざと呼出さなんだが、機嫌よう立たしやつたを悦びには何故來ぬぞ、誰ぞ行つて見ておぢや。

腰元皆々　畏りました。（ト奥へ入る。）

〽云ふにきよろつく宿禰太郎、腰元共は立戻り。

ト奥より腰元直に出で來り。

○　立田樣のお部屋から、奥のお座敷をお尋ね申しましたれど、

□　奥にお出遊ばすは、苅屋姫樣只お一人、

△　立田様はお出なされませぬ。

覺壽　なんぢや居ぬ、内を離れて何處へ行きやらう、今一度見ておぢや。

腰元皆々　畏りました。

ト又奥へ入る、太郎思入あつて。

宿禰　ソレ中間共、立田の在所詮議々々。

ト此時下手にて。

中間皆々　ハア、。

〽座敷の隅々かくれ／＼、尋ね／＼と吟味の嚴しさ、提灯てんでに若徒中間、いくたりあつても行届かぬ、花壇築山手分して尋ぬる奥の池の端、芝に濡つた生血を見付け。

ト下手の方より中間宅内箱提灯を持ち、後より同じく中間皆々箱提灯を持ち出で來り、そこらを尋ねる事よろしくあつて、宅内池の芝を汚す生血を見付け。

宅内　まて／＼／＼、一番待つて貰はうかい。（トノリになり）一つ灯影ですかして見れば、二つ不思議、三つ見付けた、四つ夜更けて。

〽館の騷動、

五つ一體合點が行かぬ、六つ胸騷ぎ、七つ何であろ、八つ奴が、九つ此池へ、十で飛込まうか。

中間皆々 飛込め〳〵。

〽池を探せと聲々に、水心得た奴共、飛込み〳〵水底より、擔ぎ上げたる立田が死體。

トみな〳〵捨臺詞にて、宅内池へ飛込み、立田の死骸を引上げる、皆々驚く。太郎思入。

〽驚き騷ぐ其中に。太郎は鼻も動かさず。

宿禰 殺した奴は内にあらう、詮議濟むまで門打つて、家來共動かすな。

〽わめき散せば、母覺壽姫もかしこへ轉び出で。

ト奥より苅屋姫出で來り、そのまゝ立田の前に取付き。

苅屋 これ誰人の仕業ぞや、先からお顏を見なんだは、伯母樣のお傍にと、思ひ設けぬ此死骸、父上には生別れ。お前には死別れ、時もかはらず日もかはらず、悲しさ辛さ一時にかゝる例しもある事かいの。

〽老母に取付き悔泣き。

覺壽　オヽ、道理々々、そなたはおれが傍にとおもひ、おれはそなたの傍に居ると、思ひ違ひが娘の不運、母が因果でおぢやるわいの。

〽かつぱと伏して正體なし、太郎は傍へ立寄つて。

宿禰　涙は死人の爲にはならぬ、女房共への追善には、殺した奴をひつぱり切、是にて詮議仕らん。

〽縁端に大胡座。

男女に限らず家來のやつばら、片端から詮議する、マアとつ付にをる宅內め、身が前へずつと出をらう。

宅內　ネイ〳〵。

〽ないと御前へかつゝくばい。

人は知らず、拙者めにお疑ひはござない筈、お死骸を取上げた、御褒美を下されうで一番にお呼出し、忝い儀でごはりまするでごはります。

宿禰　ヤアまが〳〵しい、褒美とは横着者め、立田が死骸池に在るを、おのれはどうして知りをつた、サアそれ吐せ。

宅内　イヤ尻も頭も見やう筈はござりませぬ、池の深みへ芝から傳うた血を證據に。

宿禰　ヤア吐すな、提灯の灯明で、それがそれと、知れるものか、うぬが殺して沈めた池、外の者がどうして知らう、血の分では言譯立たぬ。

宅内　これはお旦那無理おつしやる、言譯立たうが立つまいが、池が血へ流れ込んだ、その外は存じませぬ。

宿禰　ヤア池が血へ流れたとは、血迷うて何ほざく、きやつ、詮議場で水喰はせ白狀さする、それ引立てろ。

〽宿禰も續いて立つ所を、老母押止め。

覺壽　イヤ責めるには及ばぬ、詞のてんぐ、嬉しや娘の敵が知れた。

宿禰　ハア責めなとは天晴お目高、科極つた罪人、女房共へ手向る成敗、大袈裟に打放す、腕を左右へ引張れ。

覺壽　イヤこれ成敗は常の科人、袈裟に切つては只一思ひ、苦痛させねば腹が癒ぬ、娘の敵、初太刀は此母、あとは聟殿、刀を借りる。

〽甲斐々々しくも裾引上げ、向う目當は奴にあらず、油斷太郎が弓手の筋骨、

突込む刀に宅内は命拾うて逃げて行く。

ト覺壽身拵して、太郎の刀を取つて油斷を見濟し、太郎の脇腹へ突込む。

〽宿禰太郎は急所をさゝれ、もがき苦しむ息の下。

宿禰　身共に何の科あつて、あのこゝな老耄めが。

覺壽　ヤア覺えないとは云さぬ〱、我科を人に塗り、成敗をして見せだて、精はせ折つた下着の褄先切れてある、其切れは、コリヤ立田が口に聲立てさせぬ無理殺し、齒を嚙み締め放さぬ褄先、切つた事を打忘れ、おのれが科をおのれが顯はす極重惡人、死骸の前で敵を取る、母が娘へ手向の刀、肝先に堪へたか。

〽大の男を仕とめる老母、流石河内郡領の、武藝の筐殘されし、後室とこそ知られけれ。

ト此時向うより菖蒲皮の侍走り出で來り。

侍　申上まする、判官代照國、只今これへお出で御座りまする。

〽家來が申すに、老母は驚き。

覺壽　丞相は先程お立、誰を迎ひに、心得ぬ事ながら、此方へ通しませい。

侍　ハツ。（ト引返して入る。）

覺壽　苅屋姫は奥へ行きや、こいつはきつと苦痛をさせる。

ヘ刀をそのまゝ、體押退け、出迎へば、照國も早や入來り。

ト覺壽出て迎ふ。向うより判官代照國宿禰家侍烏帽子中啓を持ち出で來り。

照國　お迎ひの刻限、御用意能くば、早やお立あられませう。

ヘ申す詞の先折つて。

覺壽　イヤこれ照國殿、何仰る、丞相の迎ひに足下の家來が先程見え、請取つて歸られたは、もう一時も先の事。

照國　ヤアこれ／＼伯母御、身が家來に渡したとは、旁々以て心得ず、鷄鳴の聲に刻限計り、只今鳴いた旅宿の鷄、八つに參る迎ひの約束、家來と云うが、眞に身共が參つた迚、刻限も來らず鷄も鳴かぬ先、渡したと云うては濟むまい、船がゝりのその間、伯母御に逢すは、此照國が情の脇捨、今日の今になつて名殘は一倍、島へはやらぬ渡したと云へばそれで濟むと、鼻の先の女子の料簡、丞相の仇にこそなれ爲にならぬ、僞りな申されそ。

覺壽　イヤ僞りは申されぬ、時ならず鳴いた鷄の聲、そこへ御座つた迎ひの衆、渡したに違ひはないが、請取

らぬと仰るので、娘が最期、聟があの態、思合せばさつきに來たは僞迎ひではあるまいか。

照國　これ伯母御、內の騷動、死人のある上、僞迎ひうそではあるまい、讒者共の所爲であらう、一時違へば三里の後れ、追付いて取戻さん。

〽せきにせいて駈出す照國。

トツカ〳〵と花道の方へ行きかける、上の障子屋體の內にて。

丞相　ヤア〳〵判官、先づ待れよ、道眞はこれにあり。

〽一間より出給ふ、覺壽はびつくり。

ト障子引取る、內に菅丞相床几にかゝりゐる、覺壽びつくりして。

覺壽　さつきに別れた菅丞相、そこにはどうして。

〽どうしてと不審の立つも道理なり、判官照國打笑ひ。

照國　ぬけ〳〵とした伯母御の僞り、暫時の仰天、丞相これに在しませば、照國が安堵〳〵、見え渡つた此御難儀、譯も聞きたし力になつて進ぜたけれど、私ならぬ警護の役目、早や刻限も移りぬれば、イザお立あつて然るべう存じまする。

ト此時向うよりまた侍一人走り出で來り。

侍　ハツ先程の警固の役人、又候只今御門前まで參られまして御座りまする。

覺壽　何ぢや警固が、ハテよい所へ戻られた、噓つかぬ覺壽が證據、これへ通し照國殿へ見せませう。

ト侍入る。

照國　イヤ身が名を僞つた贋役人、直に逢うては惡かるべし、忍んで樣子を窺はん、丞相には先づ。

〽丞相諸共一間の障時、引立て内に隱れ居る。

ト上の障子をさす、照國奥へ入る、向うより彌藤次先に、以前のはり輿を擔ぎ警固の人數出で來り、舞臺へ來て下の方へ輿を据える。

〽輿に先立つ警固の大聲。

彌藤　これ老母、照國の名代とけ侮ずり、とてもない物身共に渡し、よくぬつぺりとさゝれたの。

覺壽　これは迷惑、丞相を請取りながら、とでもないとはなに仰る。

彌藤　アレまだぬつぺり、丞相は丞相でも、木で造つたはこつちにはいらぬ、天にあれば天丞相、地にあれば地丞相、さんげ〳〵六根清淨、どうせう〳〵、かうせう〳〵、肉付の菅丞相替へる氣で持つて來た。木造はこりやこゝに。

へ云ふに覺壽は心付き、エヽ忝い、扨は魂を籠められし、木像であつたかい、猶も證據を見届けんと、心の悦び押隱し。

覺壽　コリヤ此方が言分合點が行かぬ、その木像見せさつしやれ。

彌藤　オヽしやちこばつた荒木作り、サア今見せう。

へ明る戸の、輿に召たは、木像ならぬ優美の姿、菅丞相につこと笑うて立出給へば、警護はぎよつと呆れ顏、覺壽も逢ひし心當、障子の内と今見る姿、心どきまぎ疑ひながら。

ト彌藤次輿の戸を明ける、内より菅丞相すつと立出る、みな〳〵びつくり思入。

覺壽　オヽよう戻して下さつた、確に伯母が請取ました。

ト立寄るを、彌藤次支へて。

彌藤　ヤア何處へ〳〵、そりやならぬ。ならぬとは云ふものゝ、連れて歸つて見たのは木像、すりかへられたと氣が付いて、かへに戻つたこゝではほんの菅丞相、おれが目の惡いのか、但し見所によつて變るのか、ハテ面妖な。

覺壽　變らうが變るまいが、戻された菅丞相、イザ此方へ。

へ立寄る覺壽。

彌藤　ヤア箆太い事を。

へ突飛し、丞相を又輿に乗せ、戸を引立て家來に向ひ。

ト覺壽を突退し、菅丞相を輿に乗せ。

コリヤわいらも樣子を見る通り、いかにしても怪しい事共、此分では歸られず、念の爲家搜しする、者共踏込め。

ト彌藤次立かゝり、みな〳〵はつと詰寄る。

へ踏込む先に、宿禰太郎半死半生のたうつ苦しみ。

ト彌藤次太郎を見付け。

南無三寶、太郎樣が切られて後座る。（ト思はずうしろの兵衛の仕丁へ向ひ。）モシ〳〵お旦那、太郎樣だ〳〵。

へ呼ぶ聲に警固の中から、親兵衛、前後も更に辨へず、走り寄つて引起し。

ト警護の中より、兵衛白張烏帽子官人の形にて出で來り。

兵衛　コリヤ倅、此深手はどいつが所爲、相手を知らせい〳〵。

〽相手を知らせと、氣をせいたり。

覺壽　これ兵衛殿、相手は姑、オヽわしが手にかけた。

兵衛　ヤア婿を手にかけ、落着自慢、何科あつて、身が悴を。

覺壽　ヤアとぼけさしやんな婭殿、そいつが立田を殺した時、そなたも手傳ひしやらうがの、娘の敵切つたが何と、贋迎ひの棟梁殿、なにもかも顯れし時、さつぱりというた〳〵。

兵衛　エヽ殘念な、悴めが出世を思ひ、時平公に一味して、菅丞相を殺さん爲、鷄に宵鳴させ十を九つしおふせた兵衛が方便、腐れ婆に嗅ぎ出されたか、悴が敵覺悟しろげ。

〽飛びかゝるを、さはさせじと、判官照國小蔭より顯れ出で、覺壽をかこうて突立たり。

ト兵衛覺壽にかゝる、此時照國奥より出て來て支える。

ヤアどなたが出てもびくともせぬ、兵衛が計のやぶれかぶれ、死物狂ひの働き見よ。

〽切つて掛ればかひくゞり、持たる刀踏落し、きゝ腕摑んで引繰返し、足下に踏付け大音あげ。

照國　ヤア照國が家來共、贋役人をひつくゝれ。

彌藤　ヤア照國が家來共、贋役人をひつくゝれ。

仕丁の一　モシ／＼、贋役人はあなたで御座ります。

彌藤　ヤア、これは。

〽くゝれ／＼といふ聲に、始めの擬勢ぬけ／＼と、一人も殘らず逃失せたり。

ト彌藤次始め、警固の輿かきみな／＼逃げて入る。

〽覺壽はとつかは輿の戸を、あくる間さぞやお氣づまりと、内を見ればこはいかに、筐の木像又びつくり、これはいかにと立歸り、こなたの障子押明くれば。

ト覺壽輿の戸をあける、内に木像入れてある、これを見て思入、また上の障子をあける、内に菅丞相坐してゐる。

丞相　ヤア伯母御必ず騒がせ給ふな。（ト出で來り、よき所へ住ふ。）

〽こゝでもびつくり、かしこでもびつくり／＼に、心の迷ひ。

覺壽　どちらがどうぢやゝ照國殿、目利なされて下され。

〽問はるゝ人も問ふ人も、あきれ果たるばかりなり、丞相重ねて。

丞相　照國の迎ひ遲參故、睡む共なく暫時の間、物騒しく聞えし故、窺ひ見れば兵衛が奸計、太郎が

所爲、立田の前は儚き最期、是非もなし、伯母御の心底さこそ〳〵、道具これへ來らずば、かかる歎きもあるまじきに。

〽いまさら悔みの御涙。

覺壽 イヤ娘が命百人にも換へ難き大事の御身、怪我過失のなかつたを、悅びこそすれ、何の泣から、なんの〳〵。

〽云ふ目に涙。

ト覺壽思入あつて。

ナウ照國殿、悪事の元は其兵衛、此世の暇を早う〳〵、太郎も共に。

〽立寄つて髻引上げ。

丞相の堅固の有様、己親子に見せたが本望、娘が恨みも晴つらん。

〽刀を拔けば息絶えたり。

ト宿禰太郎に突立し刀を引拔く、これにて太郎落入る。

エヽ憎いながらも不便な死態、有爲轉變の世の習ひ、娘が最期も此刀、母が罪業消滅の白髮も同じく此刀。

〽取直す手に髻拂ひ。

ト覺壽は持つたる刀にて、髪を切る。

初孫を見るまでと、貯ひ過した恥白髪、孫は得見いで憂目を見る、娘が菩提逆縁ながら、弔ふ此尼、種々因縁而求佛道、南無阿彌陀佛。

〽唱ふれば、菅丞相も唱名の、聲も涙に回向ある、判官照國大に感じ。

照國　伯母御前に先とられ、後にさがつた鈍が成敗、强慾非道の皺頭。

ト照國兵衞の首を打落す。

〽水もたまらず打落す。覺壽は木像抱きかゝえ、菅丞相の右手の方、御座を並べて直し置き。

ト覺壽木像を丞相の左の方へ直し。

覺壽　兵衞親子が奸計も顯はれ、何もかも納りしは、此木像の不思議の働き、かゝる例も。

〽ある事か。

丞相　いやとよ、最前も云ふ如く、匹夫々々が奸計も顯はれ、我急難を遁れしも、暫時の睡眠前後は知らず、木に彫み、筆に畫く、例は本朝名高き繪師、巨勢の金岡が書いたる馬は、夜な〳〵出

て、萩の戸の萩を喰ふ。

〽唐土にも名畫の譽。

呉道子が墨繪の雲龍。

〽雨を降せし例もあり。

また神の尊像木佛などの、人の命に代らせ給ふ例は、數へ盡されず、道眞が三度まで造り直せし物なれば、木にも魂備はつて、我を助けしものならん。讒者の爲に罪せられ、身は荒磯の。

〽島守と、朽果つる後の世まで、筐と思し召されよと、仰せは外に荒木の天神、河内の土師村道明寺に、殘る威德ぞ有難き。照國四方を打眺め。

照國　思はざる儀に隙取り、夜も明離れ候へば、お立あつて然るべし。

〽又改まる暇乞。

覺壽　伯母が寸志の餞別せん、用意のものをこなたへ。

〽苅屋姫の上着の小袖、かけたる伏籠諸共に、御傍近く取直させ。

ト奧より腰元三人、苅屋姫の小袖かけたる伏籠を持出で、よき所へ直す。

波風あらき舟枕、餘寒を凌がせ申さん爲、伯母が心をたきしめた、小袖を島まで召るゝやう」

に、照國殿お世話ながら。

〽頼みまするとありければ。

照國　これはよろしき進ぜ物、とまの香防ぐとめ木の小袖、家來に持せ参らせん。

〽立寄り、伏籠に手をかくる、丞相しばしと止め給ひ。

丞相　アヽイヤ御恩を厚く籠め給ふ、伏籠にかけし此小袖、中なる香はきかねども、銘は大方伏屋か刈屋、伯母御前より道眞が申請くる女子の小袖、我身には合はぬ筈、身幅も狭き罪人が只このまゝにお預け申す。我子袖と思し召し、立田の前が追善の佛事も共に。

〽伯母御前の心を悟る御詞、骨身に堪へ忍び兼ね、思はずはつと聲立てゝ、歎くに扨はと照國も、心を感じ萎れ入る。

覺壽　泣いたは結句あの子の爲、別れに一寸只一目、伯母が願ひを叶へてたべ。

〽立寄る袖を引きとゞめ。

丞相　お年故のそら耳か、今鳴いたは慥に鶏、あの聲は子鳥の音、子鳥が鳴けば親鳥も。

〽鳴けば生ある習ひぞと、心の歎きを隱歌。

鳴けばこそ別れを急げ、鷄の音の、聞えぬ里のあかつきもがな。

へと詠じ捨て、名殘は盡きず、お暇、と立出で給ふ、御詠歌より、今此里に鷄なく、羽たゝきもせぬ世の中や、伏籠の内を洩れ出づる、姫の思ひは羽ぬけ鳥、前後左右をかこまれて、父は元より籠の鳥、雲井のむかし忍ばるゝ、左遷の身の御歎き、夜は明ぬれど心の闇路、照すは法の御誓ひ、道明らけき寺の名も、道明寺とて今も猶、榮えまします御神の、生けるが如き御姿、こゝに殘れる物語、盡きぬ思ひにせきかねる、涙の玉の木槵樹、珠數の數々くりかへし、歎きの聲に只一目、見返り給ふ御容顔、これぞ此世の別れとは、知らで別るゝ別れなり。

ト此うち丞相立ちあがり行かうとする。苅屋姫おづ／＼出で、丞相の袂を控える、振拂つて二重より下へ降る。又苅屋姫前へ出る事よろしく、双方憂ひの思入、苅屋姫ハッと泣落す。丞相花道へかゝる、ふりかへり／＼みな／＼顏見合せよろしく、丞相向うへ入る、段切にて。

幕

ト幕外鳴物になり、照國悠々と向うへ入る。あと、シャギリ。

五幕目

吉田社車曳の場

役名　左大臣藤原時平、舍人松王丸、同杉王丸、同梅王丸、同櫻丸、鐵棒引
雜式、仕丁大勢。

吉田社鳥居前の場　本舞臺三間の間向う壹面の淺黃幕朱の玉垣、上の方吉田社と書たる額を掛けたる大鳥居、左右松の大樹、日覆より同じく釣枝、玉垣の向う所々に片ぶたの石燈籠、宮神樂に二幕あく。

〽鳥の雛の巢に放れ、魚陸に上るとは、浪人の身の喩種、菅丞相の舍人梅王丸、主君流罪なされてより、都の事共取賄ひ、御臺のお行方尋ねんと、笠ふかゞと深緣、土手の並木にさしかゝれば、向うからも深編笠、我に違はぬ其扮裝、互にそれぞと近く寄り。

ト此うち向うより、梅王浪人者の拵へ、大小深編笠にて出で來り、上手より櫻丸同じ拵へにて出で來り、直に舞臺へ來り、互に入替り。

櫻丸　梅王か。

梅王　櫻丸か。ヤレそちに逢ひたかつた。

櫻丸　話す事あり。

梅王　聞く事あり。

　　へ兄弟木陰に笠かたむけ。

まづさし當つて問ひたいは、其方はいつぞや加茂堤より、宮姫君の御跡慕ひ尋ね行きしと、女房八重の物語、何とお二方に尋ね逢うたか。

櫻丸　いかにも道にて追付き奉り、管丞相御流罪と聞くより、御對面なさしめ奉らんと、安井の岸まで御供せしが、御對面は叶はず。照國殿の計ひにて、御歸洛願ひの妨げと、御二方の御縁も切れ、姫君には土師村なる伯母君の方へお預けあり、また齋世の君樣は、法皇の御所へ供奉し奉り、事治りしと云ひながら、計らぬはわが身の上、冥加に叶ひお車を引く、其有難い事打忘れ、賤しい身にて戀の取持、遂には御身の仇となり、宮御謀叛と讒言の種を拵へ、御恩を請けたる菅丞相樣流罪にならせ給ひしも、皆櫻丸がなす業と思へば胸も張裂く如く、今日や切腹、あすや命捨ふか、と思ひ詰めは詰めたれど、佐太におはする一人の親人、今年七十の賀

を祝ひ、兄弟三人嫁三人、並べて見ると當春から悦び勇みおはするに、我一人缺けるなら、不孝の上に不孝の罪、せめて御祝儀祝うた上と、詮なき命今日までも永へる面目なさ、推量あれや梅王丸。

〽拳を握り齒を喰ひしばり、先非を悔たるその有様、梅王も理と暫し詞もなかりける。

梅王　オヽ道理〳〵、我迚も主君流罪に逢ひ給ふ上は、都に留る筈なけれど、御舘沒落以後、御臺様のお行方知れず、先づ此方を尋ねうか、筑紫の配所へ行うか、と右つ左つ心は逸れど、其方が の云ふ如く、年寄つた親人の七十の賀の祝ひも此月、是も心にかゝる故、思はず延引、互に思ひは須彌大海。是非もなき世の有様ぢやなア。

〽兄弟顔を見合して、涙催す折柄に。

雜式　先退いて片寄れ〳〵。

ト雜式鐵棒を引き出で來り、これにて兩人思入あつて。

梅王　どなたのお通りで御座りまする。

雜式　本院の左大臣時平公、吉田へ御參詣、出しやばつて鐵棒喰ふな。

〽言捨てゝこそ急ぎ行く。

トよろしく鐵棒を引いて向うへ入る。梅王思入あつて。

梅王　何と聞いたか、櫻丸。

ト兩人よろしく編笠を取つてノリになり。

齋世の君、菅丞相憂目に逢した時平の大臣、存分言はうぢやあるまいか。

梅丸　成程々々、よい所へ出喰した、梅王抜るな。

〽兄弟道の左右に別れ、尻引褰げ身構へし、今や來ると待ち居たる。

ト此時上手にて。

大勢　ハイホウ。

〽程なく轟く車の音、商人旅人も道をよぎる、時平の大臣が路次の行粧、さながら天子の御幸の如く、隨身青侍前後に列し、大路せましと輾らせたり。兩人木蔭を飛んで出で。

ト好き時分より、中通り殘らず若衆大勢、仕丁の形ハイホウと聲して、上手より御所車を牛に引かせ出る、後より杉王白張烏帽子にて附添ひ出で來る。兩人思入あつて。

兩人　車やらぬ。

〽と立ちふさがる。

トこれにて杉王兩人を見て。

杉王　ヤア何者かと思へば、松王が兄弟の梅王丸と櫻丸、ア、聞えた、主に放れ扶持に放れ、氣が違つての狼籍か、但しは又この車、時平公と知つてとめたか、知らいでとめたか、返答次第用捨はせぬぞ。

〽白張の袖まくり上げ、掴みひしがん其勢ひ、梅王丸冷笑ひ。

梅王　へエ、云ふな／＼、氣も違はねば此車、見違へもせぬ時平の大臣。

櫻丸　齋世の君、菅相丞、讒言によつて御沈落、其無念骨髓に徹し忘られず、出逢ふ所が百年目と、思ひ設けし今日只今、櫻丸と。

梅王　此梅王。牛に手馴し牛追竹、位自慢で喰ひ肥つた時平公のしりこぶら、二つ三つ、五六百喰はさねば堪忍ならぬ。

櫻丸　云はれぬ主の肩持ち顔、

梅王　出しやばつて怪我まうくるな。

杉王　ヤア法に過ぎた慮外者、それひつくゝれ。

〽供の侍聲々に、前後左右に追取り巻く、兄弟は事ともせず、取つては投げ、掴んでは投げ、踏付け〳〵投付くれば、傍に近付く者もなし、松王焦つて。

ト是にて松王白張かす烏帽子長柄を持ち、大勢を分け出で來る、此間兩人へ仕丁二人宛よろしくかゝるを捩退す、此時三人一時の見得。松王思入あつて。

松王　ヤア命知らずの暴れ者、何れもにはお構ひあるな、御主人のお目通り、御奉公は今此時、兄弟一つでないといふ、忠義の働き、お目にかけふ、コリヤやい松王が引掛けた此車、止らるゝものなら止めて見ろエヽ。

〽鼻づら取つて、引出す車。

櫻丸　櫻丸と、

梅王　梅王丸、こゝになくばいざ知らず、

櫻丸　一寸なりと、

梅王　五分なりと、

兩人　やつて見ろエゝ。

〽兩人轅に手をかけて、エイ〳〵〳〵押戻せば、牛も四足を立兼ねて、後へ〳〵とすさり行く。松王車の後へ廻り、兩手をかけて力足、やらんやらじの爭ひは、世にもまれなる三つ子の舍人、互に劣らぬ主思ひ、命限り、根限り、やつゝ戻しつ、引合ふ車、大地は藥研と掘穿ち、土ににへ込む車の轍。

ト此間三人車へ手をかけ、引合ふ事、アリヤ〳〵の聲よろしくあつて、

ヤア面倒な畜生め。

〽靷を放せば、逸散に牛は離れてかけり行く。

ト車の牛を兩人して放す、これにて牛は下手に入る。

〽車の内ゆるぐと見えしが、御簾も飾も踏折り〳〵踏破り、顯はれ出たる時平の大臣。

トながしになり、車の御簾を四方へ踏破り、時平金冠白衣裝束笏を持ち、車の上に立身、急度見得。

〽金巾子の冠を着し、天子にかはらぬ其粧ひ、赫々たる面色にて。

時平　ヤア牛扶持喰ふ青蠅めら、轅にとまつて邪魔しろがば、轍にかけて敷殺せエゝ。

梅王　ヤアさいふ大臣を、

兩人　敷殺さん。

〽二人が力に車を宙だめ、引くりかへすを返されじ、と捻合ふ松王、右へ押せば左へ押し、上げつおろしつ二三度四五度、こゝを先途と揉合しは、祭りの神輿に異ならず、時平は上より金剛力、どうと踏んだる其響き、車も心木も粉微塵、碎けし轅を銘々ひつ提げ、大臣を打んと振り上ぐる。

時平　ヤア時平に向ひ推參なり。

〽くわつと睨みし眼の光、千世界の千日月、一度に照すが如くなり、流の梅王櫻丸思はず後へたぢ〳〵〳〵、五體すくんで働かず、無念々々とばかりなり。

ト此うち兩人轅を取り上げ、時平に向つてかゝる、轅を振上げるのが、大どろ〳〵になり、兩人五體のすくみしこなし、持たる轅を舞臺へ打ちつけ、無念の思入。松王思入あつて。

松王　何と、我君の御威勢見たか、此上に手向ひすれば、お目通りで一討ちやぞ。

ト きつと思入、時平こなしあつて。

時平　ヤレ待て、松王、金巾子の冠を着すれば、天子同然、太政大臣となつて、天下の政を執り行ふ時平が眼前、血をあらすは社參の穢れ、助け僧いやつなれども、下郎に似合はぬ松王が働

き、忠義に冤じて助けてくれる、命冥加な蛆虫めら。

〽あたりを睨んで立つたりけり。

松王　わいらはよい兄弟を持つて、二人共に仕合者、命拾うて有難い忝いと三拜ひろげ。

〽云はれて兩人くはつとせきあげ。

櫻丸　ヤアおのれにも言分あれども、親人の七十の賀。祝儀濟むまで、ナウ梅王。

梅王　オヽ其上では、松の枝々へし折つて、敵の根を斷ち、葉を枯らすわエヽ。

松王　そりや此松王とても同じ事、親父殿の賀を祝うた跡で、梅も、櫻も、落花微塵、足元の明い中はやく歸れ。

兩人　ヤア歸るを、おのれに習ふか。

松王　何を。

〽詰め寄り〳〵兄弟三人、互に殘す意趣意恨。

時平　早く車を轟かせよエヽ。

トさらしになり、三人大まくしに立廻り、車の心木へ手をかける、これをキッカケに時平を乗せたる儘能き所まで突きよる。アリヤ〳〵の聲、眞中に松王、左右に梅王櫻丸、三人よろしく引張りの見得、

下り羽になりよろしく。

幕

六幕目　白太夫賀の祝の場

役名　白太夫、梅王丸、松王丸、櫻丸、堤畑十作、梅王女房春、松王女房千代、櫻丸女房八重。

佐太村白太夫内の場　本舞臺三間の間中足の二重藁葺屋體、竹の本椽付、上の方一間の障子屋體、この前上寄りに四ツ目垣結廻したる松梅櫻の立木、此傍に米三俵積みあり、正面上手へ寄せて佛壇、地袋、戸棚、眞中暖簾口、下手鼠壁、いつもの所竹簀戸、この外後へ下つて草井戸、藪疊、都て佐太村白太夫内の體。こゝに親父白太夫竹箒熊手を持ち庭を掃除してゐる見得。在郷唄にて幕明く。

ト直に淨瑠璃になり。

〽春先は、在々の鋤鍬までも樂々と、遊びがちなる一農、一番村で年古き、人に知れし四郎九郎、律義一遍取得にて、菅丞相の御領分、佐太に手輕な下

屋敷、お庭の掃除承り、松、梅、櫻、御愛樹に培へ水の養ひも、根が農の
鍬仕事、我身の老木厭ひなく、幹を肥しの百姓業、畑の世話より氣樂なり、
堤畑の十作が鍬打ちかたげ、門口から。

十作　四郎九郎殿、内にかな。

　ト ずつと入る、白太夫見付けて

白太　コリヤ十作、畑へか。

十作　イヤ今仕舞うて戻つたりや、嚊が云ふには、何やら目出度い祝ひぢやてゝ、大きな重箱に眼へ入るやうな餅七つ、朝茶の鹽にも喰ひ足らねど、貰はぬよりも忝い、禮も云ひたし、祝ひとは、マア何で御座る。

白太　サイノ菅丞相様の降つて湧いた御難儀、お下に住むおらゝが、身祝ひどころぢやなけれど、爲にやならぬさかいで爲るはするが、世間へも遠慮があつて、彼岸團子程な餅七つ宛配つたは、此四郎九郎丁度七十、此春年頭のお禮に登つた時、おらが年をお尋ねなされた故、七十と申上げたりや、古來稀な長命、その上珍しい三つ子の父親、禁裏から御扶持下され、悴共は御所の奉公、めでたい〳〵、生れ日、生れ月、生れ出た刻限違へず、七十の賀を祝へ、その日から名

も改へよと、コレ聞しやれ、伊勢の御師か何ぞのやうに、白太夫とお付けなされた。則ち今日が誕生日、白黒まんだらかいは掃溜へ投つて退け、今日から白太夫といふ程に、さう心得て下され。

十作　それはめでたい、序ながら問ひませう。三つ子を産むと御扶持を下さる、そのいはれも聞しやつたか。

白太　サイノ死んだ女房が産んだ時は、あたりとなりの外聞、ひよんな事ぢやと思うたが、もつけの僥倖、三つ子の父親一代は作取りの田地三反、日本ばかりぢやないげな、唐までさうぢやて、男の子なりや御所の牛飼ひ、女郎なれば東童とやら、これも御所で使はるゝ、法式は忝いもの、旦那様は流罪なれど、おらは所も追立られず、下された田地は其儘、そちの嚊も若い程に、産するなら、おらにあやかりや〳〵。

〽話の中道たどり來る、櫻丸が女房八重今日は舅の祝ひ日とて、風呂敷包片手に提げ。

ト此うち向うより、八重風呂敷包と菅笠を持ち出て來る、門へ來て。

八重　うれしや〳〵、こゝぢやわいなう。

へうれしや、こゝぢやと笠脱れば。

白太　オヽ櫻丸が女房八重か早かつ／＼た、外の嫁御も揃うて來るか、マア／＼上つて抱えも解きや。

八重　アイ／＼まだ皆樣はお出なされぬかいなア、私やまた遲からうと氣がせいて、淀堤から三十石の飛乘り、船の足の早いので草臥もせず、早う來たが仕合で御座んすわいなア。

十作　コレ四郎九郎殿や、お客さうな、もう行きませうかい。

白太　エヽ四郎九郎とは物覺えがない十作、白太夫といふを、早忘すりやつたかいの。

十作　イヤ忘れはせぬわいの、餅の祝ひとは格別、名酒飮さねばいつまでも四郎九郎ぢや。

白太　ハテサテ、盛つた酒を飮まぬとは、但しは飮み足らぬかい。

十作　コレそのやうに、ぬけ／＼と嘘云はしやるな、おらに酒をいつ飮しやつた。

白太　オヽさつきに盛つた、樽や徳利は目に立つ故、餅の上へ茶筅の先で酒鹽打つてやつたので、二度の祝ひは濟んだのぢや。

十作　エヽそれで聞えた、鼻が酒くさい餅ぢやと云うた、外へは遠慮でさうしやうと、おらは懇だけ、晚に來て寢酒に一杯よばれますぞや。（ト云ひ乍ら、門口へ出て。）そんなら四郎九郎殿、お客

人ゆるりとさんせや。

〽御客これにと、出て行く。

ト十作は向うへ入る、白太夫は跡見送り。

白太　ハヽヽコレ嫁女、アレ聞きやつたか、今の世の人はきめこまかで、おらが始末の手目見付けて、晩は來て寢酒飲まうとは、せち賢い懇振ぢやなうハヽヽヽ。

八重　又お前も大概な、つひに聞かぬ茶筅酒とは、あんまりで御座んすわいなア、ホヽヽヽ。

〽嫁と舅のむつまじさ、梅王、松王兄弟の、女房が來る道草も、女子の手業笠に摘み込み、たんぽゝ、よめな、枸杞の垣根を目印に。

ト唄になり、向うより千代、春の兩人、何れも好みの拵へ、小風呂敷を持ち、菅笠に嫁菜の入れたるを持ち、摘草をしながら出で來り。

千代　摘草にかゝつて、うか／＼と來ましたわいな、春さんマアお先へ。

春　イエお千代さん、マアお前から。

〽相嫁同志が、門での辭儀合、白太夫おかしがり。

白太　一時に生れた三つ子の嫁共、先の後のどころかい、八重がとうからゐやる、どちこちなしに入

れ入れ。

ト白太夫こなしあつていふ、千代、春内へ入り、春こなしあつて。

春　ほんに八重さん、早うござんしたナ、どうでござんす道なれば、春がところへ誘うて下さんしよかと、待つた程に遲うなつて、心せきな道すがら、千代さんに行き逢うて、連立つて來る道てんがう、今日の祝ひの浸しにと、よめな、たんぽゝ、二人の仕業。

八重　それはよう氣が付いた、春さん誘ふ約束も、日脚の長たに氣ぜきして、寄る事も忘れたに、お千代さんとはよいお出合で御座んしたなア。

千代　さいなア、お春さんに逢うたはわしが仕合、賑かな道連、それはそれぢやが親父様、料理の拵へ出來て御座んすかエ。

白太　イヤ出來てない、我御寮達にさす合點、こて／＼とむづかしい事はいらぬ、今朝搗いた餅で雑煮しや、上置は知れた昆布、隙の入らぬやうに茹て置いた、大根も芋もそこにある、勝手は知るまい、やアえい／＼。（ト立上る。）

千代　ア、イヤ申し、今日の祝ひは、お前が目當、料理方の出來るまで、何も構はず、一寝入なされませいなア。

春　それ〳〵、勝手は知れねど、三人寄つて何もかも出しませうわいなア。

白太　さうぢやてゝ、立つた序ぢや、棚のもの下してやろ。（ト二重舞臺より膳椀を持つて來り。）これこれ是を見や、祖父の代から傳つた根來椀ぢや、折敷も十枚、おらが息災なもこの椀、折敷、堅地なとて、かんまへて手荒う當るな、嫁女達、これマア悴共はなぜ遲いやら、來るまでに一餉やらかさうかい。

〽體を横にさし枕、堅地作りの親仁なり。

ト白太夫二重へ寢る。

春　コレ皆さん、何ぼうあのやうに仰つても、雜煮ばかりでもおかれまい、飯も焚ざなるまいし、何はせいでも膾、道草のよめな、お汁にしようぢやござんせぬか。

八重　ほんにそれがよう御座んす、そんなら私は味噌すり役。

春　此春は膾しかけする程に、千代さん、八重さん頼みます。

千代　ドレ〳〵、飯仕かけの始まり〳〵。

〽手々に爼板、擂粉鉢、米炊桶にはかり込み、水いらずの相嫁同志、菜刀取つて切刻み、ちやき〳〵〳〵と手品能く、味噌擂る音も賑はしゝ。

トちり／＼の合方に、三人俎板、庖丁、摺子木、摺鉢、米炊桶、大根、胡蘿蔔など取出し、料理にかゝる、此事よろしくあつて。

ヘ白太夫眼を覺し。

ト白太夫起上り。

白太　コリヤ悴共はまだ來ぬか、正月から知れてあるおらが祝ひ日、油斷せう筈はないが、ア、此中誰やら、オ、ソレ／＼今いんだ十作が話しに、時平殿の車先で三人の子供が大喧嘩、聞いてかと知らしてくれた、喧嘩の樣子嫗達は知つてゐるであらう、車先の喧嘩とあらば、時平殿に奉公するコリヤ松王の女房、こゝへ來て樣子話して聞かしや。

ヘ名ざしに逢うたは、千代が迷惑。

ト三人顏見合せ思入、千代餘儀なく前へ出で。

千代　父さんのお祝ひ事、目出度濟むまでは、お前の耳へ入れぬがよいと、三人ながら其心、いらぬ事喋られて、隠されねば申します、梅王さん、櫻丸さん、お二人の對手にこちの人、日頃の短氣言ひ上つて兄弟喧嘩したが、申し氣遣なされますな、三人ながら怪我もなく、其場はそれで濟んだれども、もちやくちや云うて居られます、春さん、八重さん、お前方もさうであろ、氣の

毒な男の不機嫌。

春　ほんにさうで御座んす、千代さんの云はんす通り、今日の祝ひを幸に、兄弟御の中直しも、親御のお詞かゝらいでは、矢張不機嫌で御座んせう。

八重　目出度い祝ひを言立に、どうぞ中の直るやうにしたいもので御座んすなア。

〽男思ひの壁訴訟

ト三人こなし、白太夫思入あつて。

白太　大方それと察しては居れど、我御寮達に問うたれば、知れやうと思つた喧嘩の樣子、知つて居ても云はぬか、同じ胤腹、一時に生れた悴でも、心は別々、よう似た顔を二子と云へど、それもさうとは極つてゐぬ、女夫子もあり、又顔の似ぬ子もある、マア大概顔が似れば心もよう似て、兄弟の中もよいものぢや、が、おらが悴共、誰が見ても一作とは思はぬ、生ぬるい櫻丸が顔付、理屈めいた梅王が人相、見るからどうやら根性の惡さうな松王の面構へ。ハヽヽヽ、千代の傍で麁相いうた、氣にかけてたもんな、ヤア怪我がなうて嬉しうおりやる。とかういふ間、もう七つ、おれの生れたは申の刻限、料理も大方出來たであろ、嫁女達膳を早く出さぬかい。

春　アイ〱此マア刻限の過るまで、連合は何故見えぬか、千代さん、八重さん、一寸道まで行つて見て來やうでは御座りませぬか。

千代　オ、それ〱こゝで待たうより、三人ながらサア御座んせいなア。

ト三人立かゝるを止めて、

白太　ア、コレ〱嬶達何云ふぞえ、子供共はとうに來てゐるわいの。

三人　主達が來てとは、何處に〱。

白太　エ、鈍な嫁女達、そこに居るを知らぬかい。コレこゝな三本のあの木が子供等、梅王、松王、櫻丸、顔は殘らず揃うてある、勿體ない菅丞相様、くゝめるやうにいはしやれました、生れ日の刻限が違やア惡い、祝儀には蔭の膳も据える習ひ、サア〱早う。

へサア〱早う、と白太夫が云ふに猶豫もなり難く、俄に盛るやら箸打つやら、椀の向うの小皿に鱓。

ト此うち三人膳拵へをして、八重白太夫の前へ膳を持つて行く。

八重　先づ一番に親仁樣、これでお坐りなされませ。

へ給仕は元より習はねど、見馴れ、聞馴れ、立振舞、八重が配膳御所めけり。

白太　イヤ／＼おれもあそこへ行つて、膳に着かうかエ。

八重　イエ土間では冷が上ります、やつぱりこゝでお上りなされませ。

千代　サアこれからは、めい／＼夫の給仕。

　　ト春膳を持ちて下り。

春　此梅の木が梅王殿。（ト梅の木の前へ直す。）

　ヘ枝振ずんと日頃の氣質八重が連添ふ男振。

八重　木振も吉野の櫻丸殿。

　ヘこれは千代まで、添遂げる夫婦の中の若みどり。

千代　色もつや／＼、勢ひよい、松王殿で子達も揃ふ。

　　トめい／＼よろしく膳を直す事あつて。

三人　なされませ。

　親仁様、日出度うお箸。

白太　オヽなされうとも／＼、親甲斐に座が高い、子供共へどれ挨拶。

春　モウそれには及びませぬ、お加減のさめぬうち。

白太　イヤ〳〵お春、さうではない、親でも子でも極つた辭儀作法ぢや。

〽庭に下りるもまめやかに、樹の前に畏り。

ト白太夫庭へ下り、こちらへ來て、

サア子供衆、何も御座らずとも、ようまいつて下されい、親が折角降りての辭儀、辭儀返しがしたうても、動かれぬは知れてある、そのまゝ〳〵、嫁達、子供達に飯かへてやらんかいの。

〽と尻餅ついて悦び笑ひ、我膳に押直り、箸を取るより。

ア、味い〳〵、扨て結構なあんばいぢや、こりや誰が加減ぢや、三人の嫁女達、給仕も片いきにせぬやうに、三杯は喰はゞなるまい、ア、目出度い〳〵、ところで一首浮んだ。千代かけて春めいて來たよめな八重、うまいこと〳〵。

ト無性に喰ふこと、これにて胸へつかへ、うんといふ、三人の嫁はみな〳〵びつくりして、介抱して湯を呑ませる、これにて心付き。

ヤレ〳〵すんでの事に飯と心中ぢやハヽヽ。（ト傍の三寶土器を見て。）コリヤ新しい三寶土器、誰が持つて來ましたぞ。

春　アイそれは八重さんのお祝物で御座んす。

白太　ハテよう氣が付いて、忝い、春、われも何ぞくれぬかい。

春　ほんに忘れて居りました。（ト風呂敷包から三本の扇を出して。）中の繪は梅、松、櫻、お子達の數を祝うて、三本ながら末廣がり、目出度う祝うて上げまする。

白太　コリヤ〳〵目出度い、忝い、中の繪も話で知れた、開けて見るにも及ばぬ、このまゝ〳〵、これ千代、われも何ぞ祝うてくれぬか。

〽機嫌に千代は袂から。

千代　これは切の有合で、私が縫うた此頭巾、頭に合はずば縫直さう、お召なされて下さりませ。

白太　イヤどれも不足のない心付な、おくりやりもの戴きます〳〵、サア盃も濟んだれば、おれが膳から上げてたも、子供等が膳は盛つたまゝで冷えたであらう、盛直してコレ嫁達二人前宛喰うてたもや。

千代　イヱ〳〵私等はまそつと待つて、主達が見えてから。

春　打並んで祝ひまする。

白太　そんならそれよ、おれは村の氏神樣へ、今のうち參つて來ませう。

春　そんならお參りとなされませ。

白太　ア、コレ拵へて置いた十二銅、そこにある、取つてたも。

ト春おひねりを取つて渡す、此うち白太夫扇を取り上げ。

三本の此扇、末廣な子供の生先、氏神樣へ賴んだり見せたりせうわエ、オ、八重、そちは氏神樣へ參るまい、序ながら連立つて行かうか。

千代　オ、恰度よい折で御座んす、八重さん、とゝさんと參つて來やしやんせ。

八重　アイ／＼さやうなら御一緒に、お二人さん、跡をお賴み申しますぞエ。

春　モシとゝさん、ゆるりと參つて御座んせ。

白太　ドレ行て來ようか。

〽表をさして出て行く。

ト白太夫駒下駄を穿き、杖をつき、八重を連れて向うへ入る。二人思入あつて。

春　モシお千代さん、年寄らしやつても、物覺えのよい事、お前や私は氏神樣知つてゐる、八重さんは今が始め、云はしやんすりやその通り、物覺えのよい親御と違ひ、物忘れする子供達、梅王殿は何故遲い事ぢやゝら、モウ見えさうなもので御座んすなア。

千代　こちの人もなぜ遲い事ぢやゝら、但しは來ぬ氣か、父さんの祝日に、今日見えいでよいものか

いなア。（ト云ひ乍ら門口より外を見て）噂をすれば影とやら、松王殿がアレ〱向うへ。

ト唄になり、向うより松王好みの拵にて出で来り、直に門口へ来る。

松王　ヤアべり〱とかしましい、時平様の御用あつて、それ了はねば動かれぬ、先へ参つて其訳言へと吩咐たを忘れたか、梅王も桜丸もまだ来ぬか、親仁殿も内に御座らぬか。

ト云ひ乍ら、内に入り、上手へ住ふ。

千代　サアその親仁様は、八重さんと同道で、もちつと先に氏神詣、兄弟衆は見えぬわいなア。

松王　ソレ見やれ、遅いと云ふおれは主持ち、梅王も桜丸も主なしの扶持放され、用もないわろ達が遅いのが、ほんの遅いの、お春殿、さうぢやないか。

〽詞の端にも残る意趣、梅王も日足はたける、せいて来かゝり突かゝり。

トやはり在郷唄にて、向ふより梅王丸、着流し大小、好みの拵にて出で来り、直に内へ入る。

〽松王は顔振りそむけ。

梅王　お千代殿、今日は大儀で御座んした、親人、桜丸、八重もこゝには何故居やらぬ。

春　アイ今も松王さんのお尋ね、桜丸さんはまだ見えられぬが、お二人は今宮詣。

梅王　ム、櫻丸はまだ來ぬか、待ち兼ねる者は來いで、胸の惡い見ともない面構へ。

へと梅王に當こすられ、松王逸徹短慮。

松王　あたぶの惡いねすり言、言分あらば直に云やれさ。

梅王　何の、われに遠慮がいらう、われの面構へを見る度に、ゲイ〱と虫唾が走るわ。

松王　ハヽヽぬかしたり腹の皮、此松王は生付いて涙脆い、櫻丸やそちがやうに、扶持放されの痩おとがひ、ひだるからうと思うてやるが、兄弟のよしみだけ。

梅王　ホヽ扶持放されと、笑ふ奴が喰ふ扶持がろくな扶持か、鐵丸を食すといへども、心穢れたる人の物を請ず、とは八幡大菩薩の御託宣、心汚れた時平が扶持、有難う思ふわナ、人でなしの猫畜生。

松王　ヤア畜生とは、舌長な梅王、今一言云うて見よ。

梅王　オヽ望みなら安い事、畜生〱、どう畜生。

松王　モウ此上は赦されぬ。

へと松王丸刀の柄に手をかければ、梅王も反打かへし、詰寄り詰寄る、二人の女房。

ト兩人柄へ手をかけ、双方急度思入、千代、春これをとめて。

千代　マア〳〵待つた、氣が狂うたか、松王殿。

〽千代が夫を抱き止むれば、春も夫に縋付き。

春　お前も待つて下さんせ、父さんの七十の賀を祝ひに來て、親仁樣に逢ひもせず、反打つてど
さつしやる、祝日に刀を拔いてよいものか、こちの人、梅王殿。

〽刀の柄にしがみつく女房春をとつてのけ。

梅王　七十の賀でも祝日でも、堪へ袋のやぶれかぶれ、留立して怪我するな、コリヤ松王おくれた
か、女房が止めるを幸に、頰げたに似ぬ腕なしめ。

松王　オヽ止められるを幸とは、我心に引較べて、松王には慮外の雜言、身が女房が止めたより、
そちが女房が親にはまだとの一言、肝先へきつとあたり、堪へ〳〵たがもう溜らぬ、眞劍勝負
は親人に逢うての後、それまでの腹癒せに、砂かぶらせねば堪忍ならぬ、コリヤ女房それまで
はこれを預ける。

〽雨腰脱いでほうり出し、裾引からげて身拵へ。

梅王　畜生めが、コリヤよい料簡、櫻丸が來るまでは、松王が命、松王に預ける。

〽同じく兩腰ほうり捨て。

ト大小を春に渡して。

刄物渡せば、血はあやさぬ、女房共邪魔ひろぐな。

〽ツッと寄つて、椽より下へ踏み落せば、早速の松王落ざまに諸足かけば、梅王丸眞逆さまに落重り、摑み合ひ、擲き合ひ、組んでは放れ、離れては又組合ひ、捻付け、引伏せ、蹴つ、踏づ、双方力も同年血氣ざかりの根競べ、千代と春とは二人の兩腰、取られもせぬかと氣遣半分、傍へも寄れずハア〳〵〳〵と、心をあせり氣をもみ上げ。

春　どちらが勝も負もせず、擲き合うたが二人の存分、梅王殿もうよいわいなア。

千代　こちの人、もうおかしやんせ、やめて下さんせいなあ。

松王　勝負つかいでは無駄働き、投げてくれん

〽松王丸嵩にかゝつて押す力、ひるまぬ梅王つゝかくる、肩先ひねつてかつくりさせ、横に抱える松の木腕、劣らぬ肘骨、梅の木腕、絡みもぢつて押合ふ

力、双方一度にこけかゝり、憑るゝ拍子櫻の立木、土際四五寸残る木の、上はほつきりぐはつさりと、折れたに驚く相嫁同士、二人が勝負も破角力、倶に呆れて手を打拂ひ、うろつく中へ早下向。

ト此うち有合ふ米俵を松王取つて梅王に投付ける、これを梅王きつと受け、両人共米俵を持つてきつと見得、これより大小入りの合方になり、立廻充分あつて、トヾ米俵を落す、誤つて櫻の木へ當る、これにて櫻の枝折れる事、みな〳〵驚くこなし、お春表を見て。

春　モシ〳〵待ちなさんせ、父さんが戻らしやんしたわいなア。

松王　ナニ親仁様が。

梅王　戻らしやつたか。

千代　モシ見やしやんせ、父さんが秘蔵になさる、櫻の枝が折れたぞエ。

梅王　おれではないぞ。

松王　イヤおれもしらぬぞ。

千代春　ひよんな事しなさんしたなア。

〽二人の肩入れ、裾おろし、腰刀指間もあらず戻られし、年はよつても怖いは

親、上へもあがらず犬蹲踞。

ト此うち松王びつくりして、肌を入れたり裾おろしなどする事よろしく、在郷唄になり、向うより以前の白太夫、八重出で來り、直に内へ入る。兩人を見て、白太夫こなしあつて二重へ上り思入、梅王松王の兩人薄氣味惡きこなしにて、手をつき辭儀をなす。八重こなしあつて住ふ。

松王　親人の七十の賀、

兩人　目出度う、御祝儀申しまする。

〽祝儀は述べても赤面なし、塵をひねらぬばかりなり、親はほや／＼機嫌顏。

ト此うち松王梅王の兩人凝とこなし、白太夫思入あつて。

白太　婢達が先へ來て、七十の賀を祝うてくれたで、今日の祝ひはさらりと了うた、知れてある今日の祝日、遲いは何ぞ障りあつて來ぬに極めた、梅王、松王、ようこそ／＼來てくれた。コレ二人の嫁女煮くちたであらうが、雜煮祝はしてたもつたか。

〽折れた櫻を見ながらも、誰所爲ぞと咎めもせず、呵る所を呵らぬ親、一物ありと知られたり。梅王丸懷中より、立文の願書を出し。

梅王　祝儀濟んで候へば、私の所存の願ひ、お容しなされて下さりませ。

〽親の前に差出せば。

ト白太夫の前へ出す、松王もこなしあつて願書を出し。

松王　松王も又一通、身の上の願ひこれにあり。

〽同じ所へ直せしは、言合せたる如くなり、白太夫打笑ひ。

白太　心安いは親子、兄弟、夫婦、かう並んだ中、願ひあらば口で云はいで、きつとした此書付、願は何やら聞えねど、春と千代とは夫の心を知つてゐる筈、さらばおらもきつとした代官所の格で、捌くとしよう。

〽願書手に取り白太夫、つぶ〳〵讀むも口の中、跡先知らねば案じる八重。

八重　三人の兄弟いさかひ、親仁樣へお願申し、今日仲直しと言合したも水の泡、千代さん春さんコリヤどうした譯で御座んす、何を云うてもこちの人櫻丸殿が御座らぬ故、心當りがみな違うた、道で眩暈が發つたか。

〽見えぬ夫を案じるやら、二人の顏も氣にかゝり、小首かたむけ案じ居る。

親父は二通讀みしまひ。

白太　コリヤ梅王、そちが願ひに、旅へ立つ隙くれとは、ム、推量するに外でもあるまい。菅丞相樣がござる島へ行く心ぢやな。

梅王　親仁樣御推量の通り、結構な御殿に引換へ、埴生の小屋の御住居、御用聞く人なければ、梅王下つて御奉公仕らん、身のお暇下されたし。

白太　ム、恩を知らねば人面獸心というてナ、顏は人でも心は畜生、島へ參つて御奉公がしたいとは、まんざら恩を辨へぬ畜生氣は離れた心、コリヤやい、御臺樣、若君樣、お變りも遊ばされず、御座る所も知れた上、旅立の願ひぢやな。

梅王　イヤ御臺樣はその以來お目にかゝらず、御座所も存じませぬ、併し女儀の御事なれば、若君樣とは又格別、菅秀才の御事はたしかに。

〽いはんとせしが、松王を尻目にかけ。

確に御座所は存ぜねども、息災に御座ある噂。

白太　ヤイ馬鹿者、大切な菅秀才樣息災と聞いたばかりで、お目にかゝらず在家も知らず、それでおのれ忠義がすむか、女儀の身とぬかし居る御臺樣は御主ぢやないか。コリヤやい不自由な配所のお住居、お傍へ參つて御用聞く膝行役の奉公は、この白太夫がよい役ぢやわい、血氣盛り奉

公儀り、菅丞相のゆかりであれば、根堀葉堀絶さんとて鵜の目鷹の目、油断のならぬ讒者の所爲、すわと云ふ時身を惜まず、御用に立つ所存はなうて、隱行役を願ふは命が惜いか敵が怖いか、旅立の願ひは叶はぬ、いつかな願ひは取上げぬぞ。

へ願書頭へ打付けて、はつたと睨む老の腹立、道理至極に梅王夫婦、あやまり入つたる風情なり。

ト白太夫思入あつて云ふ、梅王よろしくあつて。

コリヤ松王、そちが此願ひを見れば、勘當を受けたいといふ、神武天皇樣以來珍しい願ひぢやな。エヽ不孝といはゞ譬のないやつ、餘り珍しい願ひなれば、聞屆けてくれるぞ。

ト松王よろしく思入あつて。

松王　スリヤ此松王の願ひ、お聞屆け下さるとな、有難うござりまする。

へ忝しと悦ぶ松王、勇み立ち。

親子兄弟の緣を切る所存も問はず、容されしは此松王が主人へ忠義、推量あつての事なるべし。

白太　ハヽヽヽ、いかさま、口は調法なものぢや、主人への道立、臍がくねるわい、道も道によつて

尊し、横に取つて行く道を、蟹忠義と云ふわいやい、甲に似せて穴を掘ると、勘當請れば兄弟の縁も切れ、時平殿へ敵たはゞ切つても捨てん所存よな、尤も善惡差別なく、主人義は立つにもせい、親の心に背くをな、天道に背くと云ふはい、望み叶へてとらする上は、人外め早く歸れ、暇取らば親子の別れ、竹箒喰はさう、サア〳〵行け〳〵。

ト千代中へ入りて。

千代　モシ父樣に向つて、そのやうな事いふ事があるかいなア、どうぞ孫にお免じなされ。

白太　エヽ何の孫も可愛くない、サア出て行け、まだ出て失せねは、大方くれた頭巾が欲しいのか、きり〳〵持つて行きをらう。（ト頭巾を投出す。）

千代　モシ頭巾までも、お戻しなされたわいなう。

松王　エヽ戻したら取つて置け、親父が着にやア、おれが着る。

白太　エヽうぬ、叩き踏して。（ト箒にて打つてかゝる。）

松王　ナニ打つ、此松王は明日からは前髪を剃落し、時平公の諸太夫松王播磨守といふ侍だぞ。それ女房來やれ。

〽引立て行く、千代はさすがに親兄弟、名殘りも惜き相嫁の、顏を見る目もあ

かれぬ涙、袂しぼつて出て行く。

ト松王千代をせき立る、千代皆々に名殘惜しきこなしにて下手へ入る。

白太　ヤレ〳〵うれしや〳〵面倒な奴片付たぞ、ヤイそこな馬鹿者、御臺樣、若君樣の御行方尋ねにいかぬか、失せをらぬか。

〽手強うきめつけられ。

梅王　そんなら島へは。

白太　サア行つてよければ、おれが行くわいサア出て行ぬかい。(トきつといふ。)

〽出て行け〳〵を、こはがるお春。

春　申し八重さん、お前が跡でよいやうに。

〽お詫言を頼みます。

八重　氣遣さんすな、お氣を鎭めて、お詫言をせうわいなア。

白太　エヽうぢ〳〵とさらすかえ、エヽとつとゝこゝを出おらぬかい。

ト白太夫捨臺詞にて、梅王お春を表へ突出す。

〽夫婦は門口へ、白太夫は唾を呑んで奧へ入る。

ト梅王は外へ出てお奉へ一寸礙き、下手の藪へ小隱れする、白太夫奥へ入る。八重殘り思案をこなし、

〽兄弟夫婦に引別れ、取殘されし八重が身の、仕舞も付かぬ物思ひ、門へ立そに待つ夫、思ひがけなき納戸口、刀片手に莞爾と笑ひ。

櫻丸　女房共、嘸待ちつらん。

ト八重此聲を聞き、振返り櫻丸を見て。

八重　ヤいつの間にやら來た共云はず、案じる女房を思はぬ仕方、兄弟衆の事に就て親仁樣の御立腹、その事へは出もせいで、何でこなさんは納戸の內に御座んした、譯を聞かして下さんせ。

〽譯を聞して〳〵、と聞きたがるこそ道理なれ。暫くあつて白太夫、食み出し鍔の小脇差三寶に載せしほ〳〵、と出るも老の足弱車、舍人櫻が前に置き。

白太　サ用意よくば、とく〳〵。

〽と云ふに、女房が又びつくり。

八重　コリヤ何ぢや、親父樣、櫻丸殿どうぞいなア、何で死ぬのぢや腹切るのぢや、切らねばならぬ譯ならば、未練な根生出しやしませぬ、こなさんが云はれずば、親父樣の只一言。

〽案じる胸を休めてたべ、お慈悲〳〵と手を合はせ、泣くより外の事ぞなき。

ト八重よろしく、櫻丸思入あつて、

櫻丸　ヤア親人の何御苦勞、これまで馴染む夫婦の中、所存殘さず云聞かさん。

ト櫻丸こなしあつて、床の合方になり。

某が主人と申すも畏れ多き當世の君樣、百姓の倅なれ共、菅丞相の御不便を加へられ、親人へは御扶持方、御愛樹の松、梅、櫻、兄弟が名に象り、松王、梅王、櫻丸、憚りありや冥加なや、烏帽子子になし下され、御恩は上なき築地の勤、三人のその中に櫻丸が身の幸、人間の胤ならぬ竹の園生の御所奉公、下々の下々たる牛飼舍人、勿體なくも身近く召され、菅丞相の姫君とわりなき中の御文使、仕了ふせたが仇と成つて、讒者の舌に御身の浮名、終には謀叛と言立られ菅原の御家沒落、是非もなき次第なれば、宮、姫君の御安堵を見屆け、善心を顯はす我生害、今朝早々こゝまで來て、右の段々生きてゐられぬ最後の願ひ、お聞き屆けあつて腹切刀を親の手づから下さるゝ、女房共、我に代つてお禮も申し、死後の孝行頼むぞよ。

〽義を立守る夫の詞、女房わつと聲を上げ。

八重　仇な戀路のお取持、親王樣の御惡名、丞相樣の流され給ふ、其言譯に切る腹なら、此八重も生

きてゐられぬ、私に殘つて孝行せいとは、胴慾にもよう云はれた、それよりはまだ慘い、腹切る禮を申せとは、それが何の禮どころ、無理な事いふその手間で。

ヘ一緒に死ねと、これ申し、女房の願ひ立てたべ、親仁樣の思案はないか、俯向いてばかりござらずとも、よい智慧出して下さりませ。

夫の命の生死は、親仁樣の御詞次第、お前は悲しうござりませぬか。

ヘ親の手づから此三寶、腹切刀は何事ぞ、と恨みつ賴みつ身を投伏し、悶えこがるゝ有樣は、物狂はしき風情なり。白太夫顏振上げ。

白太 子に死ねといふ腹切刀、むごい親と思ふ、言譯ではなけれどな、此曉は我身の悅び、いつもより早く起き、門の戸明ければ櫻丸、ヤレ早う來てくれた、徒歩ならば夜通し、但しは船か、サアまあ此方へと呼入れて、樣子を聞けば右の次第、白太夫づれの倅には驚き入つた健氣者、とどめても聞入れず、今日の祝儀了ふまでは女房が來ても逢はせぬぞ、おれが出いといふ迄は納戸の内に隱れてゐい、と一寸延しに命をかばひ、助けてよいか惡いかは、おらが料簡に及ばず、神明の加護に任さんと、最前祝儀にくれた扇三本、幸ひ繪には梅、松、櫻、子供の行末祈

る顔で、氏神の祠に直し置き、信を取つて御鬮の立願、櫻丸が命ごひ、中の綸は上から見えぬ三本の此扇、初手に櫻を取らしてたべ、エ、ならせたまへと再拜祈念、取上げた扇ひらけば梅の花、南無三これは叶はぬ告か、神の心を疑ふ御鬮の取直しせぬ物なれ共、助けたいが一杯で取直す次の扇、今度も違うて又松の繪。

〽頼みも力も落果てゝ、下向すりや折れた櫻、定業とあきらめて、腹切刀渡す親、思切つておりや泣かぬぞ。

われも泣くな、おれも泣かぬ、エ、泣くなといふに。

櫻丸　ア、コレ女房、あれを聞いたか、櫻丸が命惜まれて、お老人の心遣ひ、御恩も送らず先立つ不孝、御赦されて下されい、下郎ながらも櫻丸、耻を知り義の爲に相果つる。

〽三寶取つて戴くにぞ、もうコレ今が別れかと、泣くも泣かれぬ夫の覺悟、白太夫目をしばたたき。

白太　潔い悴が切腹、介錯は親がする、その刀、これを見やれ。

〽懐より取出すは、願ひ込たる鐘撞木。

コレ此刀で介錯すれば、未來永劫迷はぬ功力、利劍即是彌陀號。

〽撞木を取つて打鳴す、鐘もしどろに。

南無阿彌陀々々々々。

ト白太夫佛壇へ向ひ、撞木にて鉦を打ち乍念佛を唱へる。此うち櫻丸肌を脱ぎ仕度をする、八重が縋り泣くをよろしく拂つて。

〽念佛の聲諸共に、襟押しくつろげ、九寸五分弓手の脇へ突立れば、八重が泣聲、打つ鉦も拍子亂れて。

ト櫻丸九寸五分を脇腹へ突立てる、八重ハッと縋り泣く、白太夫は無性に鉦を叩き。

南無阿彌陀々々々々。

〽右の脇へ引廻し。

櫻丸　親人、憚りながら御介錯。

白太　オヽ介錯。

〽後へ廻り撞木振上げ、南無阿彌陀佛と打つや此世の別れの念佛、九寸五分取直し、喉のくさりを刎切つて、かつぱと伏して息絶えたり。八重が覺悟も此場を去らず、夫の血刀取上ぐる。枳殼の蔭より、梅王夫婦走り寄つて。

ト白太夫傍へ立寄り、撞木を振上げる、櫻丸よろしくあつて、九寸五分にて喉掻切つて落入る。八重櫻丸が刀に手をかけ、自害しようとする、白太夫止める、此時以前の梅王夫婦窺ひ居て、走り寄つて止める。

梅王　樣子は聞いた、こりや何事、はやまるまいぞ。

〽刀捥ぎ取り、親の前に畏り。

先程歸れとありし時、表へは出たれ共、櫻丸が來ぬ不思議と、丞相樣の御秘藏ありし梅の折れたを詮議もなされぬ、かれこれ不審に存ずるから、裏から忍び立戻り、始終の樣子は承つて御座りまする、へエ是非に及ばぬ、あの樹と共に。

〽枯し命の櫻丸、兄弟の最期餘所に見て、親人の鉦鼓に合せ、女夫の者が忍びの念佛。

あつたら若者、殺しまして御座りまする。

〽悔む夫婦も、聞く親も、八重も死なれぬ身の繰言、是非も涙に南無阿彌陀佛と鉦打納め、撞木とかはる杖と笠。

白太　われはこれより片時も早く、丞相樣の御跡慕ひ、島へ遙く現世の旅立。

梅王　櫻丸が魂魄は未來へ旅立。

白太　亡骸頼む、梅王夫婦。

〽八重が事まで、つど／＼頼む詞の置土產。

白太　冥途の土產に只念佛、

三人　南無阿彌陀佛。

白太　南無阿彌陀佛。

〽南無阿彌陀笠打かぶり、西へ行く足十萬億土。

梅王　亡骸送る、親送る。

春　生きての忠義、

八重　死したる義臣、

白太　一樹は枯し、

皆々　無常の櫻。

〽残る二樹は、松王、梅王、三つ子の親が住所、末世にそれと白太夫、佐太の社の舊跡も、神の惠みと知られける。

ト段切にてこの模樣よろしく。

幕

七幕目

配所の場
天拜山の場

役名　菅丞相、白太夫、梅王丸、安樂寺住職、鷲塚平馬、漁師掛六、同綱藏、同沖六等。

筑紫濱邊の場　本舞臺三間の間一面の浪幕、上の方に絲船一艘乘捨てあり、こゝに平馬半合羽股引大小の旅拵、黑羽織股引の侍兩人附添ひ居る、下手の方に掛六、綱藏の兩人布の筒袖船頭の形にて控へ浪の音にて幕明く。

掛六　モシ小船とは云ひ乍、私共が精出したばつかりに。

綱藏　早く來たでは御座りませぬか。

平馬　いかさま、わいらが働き大儀々々、シテ最前某密々の一大事を申付けた沖藏めは、モウ歸りさうなものだなア。

捍六　お氣遣ひなされまするな、今に歸るで御座りませう。

ト向うより沖藏同じ船頭の拵へ、櫂を持ち出で來り。

沖藏　平馬樣これに御座りましたか、お頼みによつて菅丞相の配所の樣子窺ひましたる所、彼の三つ子の親の白太夫めが、宮仕へ致して居る樣子、殊に今日は老ぼれめが供をして、濱邊傳ひに野がけに出る樣子、その道筋に待受けて、ばらして了ひますのが、手短でよう御座りませう。

平馬　然らば身共は丞相が跡追駈け、途にて出逢はゞ、ばらして了はん、わいら三人は乘合にて出喰した大前髪を、人知れずぶち放せ、合點か。

捍六　イヤモシ、あの前髪には一大事を明して、お頼みなされたでは御座りませぬか。

平馬　さればサ、此方の捕擒人に頼みしが、よく〳〵思へば、菅丞相の身寄の奴であるまいものでもない、さすれば身共の工みの裏をかゝれる、片時も早くばらして來い。

三人　呑み込みました。

平馬　又家來共は身共よりも先へ行き、かの前髪が丞相へ近付くまいものでもない、道にて彼を支へをれば、そのうち身共は後より行く、合點か。

二侍　心得ました。

平馬　皆々ぬかるな。

皆々　合點だ。

ト船頭三人下手へ入る、侍二人は向うへ入る、浪の音、平馬は跡見送り。

平馬　夜に日について、此島へ難なく渡つて、手筈の通り命知らずの濱邊の奴等、板一枚の其下は地獄の沙汰も金次第と、誘ひ出したる今の者共、これもよし、この上は丞相に近付いて。

ト身拵へする、このうち漁師〇出かゝりゐて。

〇　丞相樣に敵對ふ、怪しい曲者。

トかゝる、立廻り、見事に中返りして、

平馬　蟇は口故、さうだ。

ト時の鐘になり、逸散に向うへ入る、チヨント浪布切つて落す。

本舞臺うしろ黒幕、正面藪への草土手、菜種一面の花盛り、花道の左右、舞臺共に菜種の花をせり上げて、道具納る。

〽君を思へば、よやヨホイホ、結ぼれ糸の、ハリナ、とけぬ心が辛ござる、いよつろござる、つらき筑紫に立つ年月、御悼はしや菅丞相、讒者の業に罪せられ、埴生の小家の起臥も、昨日とくれて今日は早や、延喜三年如月半ばも、春めく野山の眺め、野飼に召させ奉り、我楽しみは在郷歌、君を思へば、よやヨホイホ。

トこの淨瑠璃のうち、向うより白太夫牛の綱を牽いて出る、この牛の脊の上に、さくら、菜種の花を結び付け、菅丞相本を手にして讀み乍出る。花道よき所に留る。

白太 ハヽヽヽ、ハア何をがなお氣ばらしと、しはらくさいどつてう聲、ハヽ牛殿の手前も面目ない。モシ我君樣、今をさかりのこの眺め、好い景色では御座りませぬか。

丞相 寂光淨土のうらゝかさは、佛書にも見たれども、それにも劣らぬ今日の眺め、予も心を養うたわやい。

白太 お勸め申してお供致しましたが、御意に叶ひまして、この親仁めもおうれしう存じます。牛殿

も御苦勞ながら。

〽たゞ一筋の畦道を辿り〳〵て。

トこの淨瑠璃にて本舞臺へ來り。

これからは道もたひらか、チトお抉みにおひろひなされませ。

ト合方になり、牛の鞍より更紗の沓を出して直す、丞相牛より下りる、白太夫牛の脊へ敷いた布團を取り、岩臺の上に敷く。

丞相　淸らかなる此の御座所、これから見渡す景色も、又一しほで御座ります。

いかさま、健かながらも老人の、大儀にもありつらん、暫く疲れをやすめ、牛にもつかれをいれてよからう。

白太　有難うござりまする、いつもは野山へ追うて行く此牛、今日は丞相樣を乘せまするは、わいらが仕合大きな果報、ア、見れば見る程見事な毛並、角の構へ、眼の備へ、頭持の樣子、骨組、あしあひ、惣毛一色、眞黑黑牛、渡り繻子も及ばぬ色艶、天角地眼、一黑、直頭、耳小、齒違、あつぱれ御牛。

〽ちよ〳〵らのちよせいと譽めにける、菅丞相はめづらかに聞馴れ給はぬ褒

詞。

丞相　いやとよ。白太夫、春は耕し、秋は刈穂の稲を負はせ、耕作の助けとなる牛の善悪、能く知る筈、天角地眼と申せしは、角と眼の備への事、一石六斗二升とは、牛を買取る其價、升目を積るものなるか、語れ。

〽聞んと仰せける。

白太　さつてもしたり、天下にあるとあらゆる事共、餘さず漏さず知つてござる丞相様、牛の事は御存知なく、お尋ねに預るは百姓に生れた一徳、御慮外ながら牛の講釋聞かしやりませ、まづ一黒と申しますのは。

〽俵物の升目でなく、毛色を吟味する時は、

黒いが極上、それで一黒。

〽次に直頭とは、あたまの見所、頭とは頭、どつちへも傾かず、まんろくなが

好いさかいで、直頭と申します。

耳小の耳は耳、小はちいさし、隨分耳はちいさいを好みます、扨て歯違ふとは、きやつがおね

おね哃を嚙む、上下の歯先揃ふは惡し、五一に生たが歯違ふの、歯の見所で御座ります。

ヘ次第を上から言立つれば、一石六斗二升八合。

牛の講釋、もう仕舞。

承相　誠に性は道に依て賢し、白太夫の話を聞き、一つの徳を得たわエ。

ヘ仰にひよこ／＼小踊りして。

白太　こりやマアあんたる仰ぞい、親の代から御領分の百姓、三つ子の事までお世話になされ、御恩に御恩有難うて、寢た間も忘れぬ、此親と違うて、三人の悴共、一人は死ぬる、あと二人は氣も揃はず、面倒な奴等打放つて、此太宰府へ参つたは去年の三月、うら淋しい不自由なお住居、一年の日數は經てど、月見、花見にお出もなされぬ故、今日はこの親仁がお勸め申し、お供して來て見れば殊の外御意に叶ひ、私が皺も腰も、ア、延びやかな春の野面で御座りまするなア。

承相　成程そちが勸めに任せ、こゝまで來たが、これから安樂寺へ詣たい、サ、案内致せ。

白太　ハ、ア、さやうなら安樂寺への御參詣は、御歸洛の御立願でかなござりませう。

承相　否やとよ、道眞に犯せる科なければ、佛に苦勞かけ奉り、身の上祈る所存はなし、讒者の業としろし召さば、罪なき事も世に顯はれ、歸洛の勅諚下るべし、それまで月にも花にも目はふ

れず、私なき臣が心、帝はしろし召されず共、天の照覽明かなり、安樂寺へ志すは、此曉不思議の靈夢。

〽菅丞相が愛樹の梅、今如月の花ざかり、都の住居思ひ寢の、枕の硯引寄せて、筆に任せて斯くばかり。

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、主なしとて春な忘れそ、と心を述べてまどろみしに、妙なる天童我枕に立たせ給ひ、汝憐愍の心深く、仁義を守る忠臣の功、心なき草木まで情を請し主を慕ひ、花ものいはねど其驗、安樂寺へ詣で見よと、示現に依つて參るのぢやわエ。

〽仁現に依つてと宣ふ所へ、安樂寺の住僧杖をたよりに老の足、それぞと見奉りしより、小腰をかゞめ立寄れば。

ト此文句のうち、下手より安樂寺の住僧、緋の衣淺黄の頭巾にて中啓を持ち、三寶に梅の一枝を載せ香僧の所化二人、菓子入の提重を持ち、これに附添ひ出で來る。

丞相　住僧は何處へ行かるゝぞ、我は貴院へ參る折柄、これにて對面祝着々々。

安樂　ハア愚僧も外ならず、公の御目にかゝりたく、參る仔細と申すは、別の儀でも御座りませぬ、夜前不思議の夢の告げ、御慈愛の梅の一樹、配所の主に見せよとあるより、餘り不思議に存ず

る所、示現にかはらぬ觀音堂の左の方、一夜に生出る不思議さに、その一枝御覽に入れ奉らんと、これまで持參いたして御座る。

〽語るも聞くも、正夢の割符を合せしごとくなり。

白太　承れば不思議なお話、御住職のお出なれば、私も牛を牽いてお供致すで御座りませう。

安樂　これより安樂寺へは程近し。

丞相　然らば御僧御同伴。

安樂　イザ御案内仕りませう。

〽打つれてこそ出給ふ。

トこの淨瑠璃に冠せ、三味線入り靜なる禪の勤めになる、この件殘らず下手へ入る、知らせにつき道具廻はる。

安樂寺飛び梅の場　本舞臺うしろ黑幕、眞中に觀音堂、此傍に白梅の立木、誂への通り、床几一脚直しある。此道具納る。

〽急ぎ御寺へ入り給へば、それぞとしるき梅花の薫り、袖に留木の心地せり。

トやはり禪の勸めになり、右の人數殘らず出で來り。

安樂　暫くこれにて御詠めあるべし、ナニ同宿共、それなる床几へ御褥を。

同宿　ハツ。

〽床几直させ、褥を設け、御菓子小竹筒と住寺の饗應。

丞相　御僧の詞に違ひなく、都に殘せし我愛樹、梅の一木に相違御座らぬ。

安樂　實にや、非情の草木だに、丞相の德を慕ひ、飛び來りしものやらん、同宿共、なんと不思議な事を見るものではないか。

同宿　左樣に御座ります。

〽白夫太はこつそこそ、梅の土際覗き廻り。

白太　コリや、不思議、イヤ希代ぢや、申し丞相樣、途中お住寺の夢語、へゝ何をやらるゝやら、そんな事があらうと、疑うてをりましたが、來て見てびつくり、此木の枝ぶり花の匂ひ、佐太の御下屋敷に預つて居りました、それぢや／＼、その梅でござりまする、ア、神佛の告は爭はれぬ、おらがこゝへ來た跡では、水一杯飲まし人もあるまいに、ぶき／＼とした木の色艶、芽立の氣合つらいつい、花はうるさい程ついたれば、梅漬の時分二三斗は確に在らう、四

五升は地を借りた年貢代、お寺へも進ぜます、あとは此方の實入々々

安業　イヤ氣さくな老人、丞相樣、貧相な饗應、持たせし竹筒、イザ一獻きこし召されませう。

丞相　忝し、予よりも親仁よ、これはそちに遣はさん。

白太　ハイ／＼、今は先腹の實入、戴きます／＼。

安業　愚僧がお酌いたさう。

白太　アヽこれは恐れ入りまする、イエ／＼白太夫が盃は、いつでも此天目、それではこれへ御馳走酒下さりましよ、立酒は氣にかゝる。

〽床几の傍にちよつゝくばひ、口も心も有りの儘、見えた通りの律義者、花の眺めに一入の、興を催しおはする所に、そりや喧嘩よ。

ト禪の勤になり。

〽アリヤ拔いた、切合うた、そりや來るは、寺内へ入れな、門打てといふ間あらせず、踏込み／＼。

ト向うより梅王幕明の平馬と立廻りながら出で來る。

白太　アヽコレ／＼見れば、双方旅裝束、こゝは境内、口論ならばこゝで仕舞は付けさせぬ、出やれ

出やれ。

へ云ふをも聞かず、切合ふ一人は我子の梅王。

コリヤまア、そちは何として、ハア／＼ひあいな、切られるな。

へ氣をもみあせる親心、聲の助太刀、相手の刀、梅王に打落され、逃るをすかさず飛びかゝり。

承相　そちは梅王丸。

梅王　ヤア我君樣。

へ片手づかみに筋斗打たせ、膝に固めし健氣の振舞。

安樂　オヽ出來されたり／＼、さては聞及んだ梅王殿でありつるか、喧嘩の次第はどうした譯で。

白太　またそちが下つた樣子、都の事を案じてござる、幸ひこれに承相樣、樣子一々申上げい。

梅王　ハアハア恐れながら、梅王が念願達し、變らせ給はぬ御尊體、見奉るは生涯の本望、都に御座あるお二人樣、世を忍ぶお身なれば、一つ所に置き參らせ難く、若君樣は武部源藏に預け置き、御臺樣のお傍には、私が妻櫻丸が女房、八重と春とが御介抱、お身の上は差措かれ、配所の樣子見て參れ、と仰に幸ひ出立の手番、天運に叶ひ日和よく、千里一跳ね日數も込まず、夜

前此地へ筑紫船、乘合の中に時平が家來荒塚平馬、此梅王を見知らぬ馬鹿者、ぶつくりかけて樣子を問へば、丞相樣を殺しに來たと、おのれが口から最期を急ぐうつけさ、寺に御座るを能く知つて直にしかけるこの平馬、即ち引括つて梅王が御土産。

ト此うち立廻あつて、提緒にて平馬をくゝり上げる。

〽心地よくこそ見えにける、丞相御悅喜淺からず。

丞相　戀しき都の樣子を知らず、忠義の花は有情の梅王、示現によつて飛び來る花は非情の此梅の木、有情無情の隔なく、道眞を慕ひ來る。

〽梅に褒美の御言の葉。

梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん、つれなかるらん松王は時平の舍人、枯れし櫻は宮の舍人、梅王は我舍人。

〽花の榮えは安樂寺、其名も高き飛梅の、不思議は今に隱れなし。

白太　コリヤ梅王、有難い今の御歌、此梅に准へ其方をお褒め遊ばし、櫻は枯るゝ世の中とは、死んだ倅を御悔み、つれなかるらんとある松王めは、時平に追從してをらうな。

梅王　ホヽ、親人の推量に違はず、兄弟といふも穢らはしい、畜生めはさて措いて、さす敵は此荒塚、

平馬　サア時平が工み眞直に白狀しろげ、いやと吐かすと命がないぞ。縱へ命があらうがあるまいが、身に覺えがなけりやア、そんな事云つた覺えは猶ないわ。

梅王　コリヤおのれ知らぬと申すか。

平馬　オヽ知らぬ〳〵、知らぬわい。

梅王　しぶといやつ、一應や再應ではぬかすまい、ムヽよし〳〵ぬかさにやア、かうして。

ト刀の鐺にて締め上げる、平馬こなし。

平馬　オヽ痛え〳〵、主從の義を立抜き、命にかへて云はぬは古風、云はして置いて殺すも古風、新しう助かるやうに殘らず申す、マア丞相殿を殺しに來た、其譯と云ふは時平公には御謀叛の御企。

梅王　我君もお聞遊ばされましたか。

ト顏を見合せ思入。

丞相　ハテいくりなき時平が工み、豫て腹黑なる行跡は憎みつれど、さまでの大望は企てまじと思ひしに、南面の德に代らんと、今ぞ天子の御大事と成つたるか、ホヽホイ。

ヘ怒りに交る御涙。

梅王　サア今のあとをぬかせ。（ト又こじ上げる。）

平馬　やかましいわエヽ今云つて聞かせる、何かにつけて兎角邪魔なは丞相殿、ある事ない事奏聞なし、とう／＼罪に取つて落した其跡は、時平公の心の儘、加茂吉田への参籠も偏に天子の御幸同然、五畿七道の領主郡主も威勢に恐れ、面出しならず、都の内は上見ぬ鷲、さりながら兎角心にかゝるは菅丞相、島へ渡り首取つて立歸れ、軍神の血祭して、大望の旗を上げ、主上、親王、院の御所、片端仕舞うて天下を一呑み、身共も公家になる樂しみ、客悦びの裏が來て、恥をさらす縛り繩、早う解いて下さりませ。

へ時平が反逆、一々殘らず聞し召れし菅丞相。

ト是より本釣鐘、床二挺の弾き合方になり、丞相思入あつて、住僧の持つて來りし梅に目を付け、取上げて。

丞相　ム、。

草木心なしとは云へど、情を請し我を慕ひ、心筑紫の此處へ來れば來る有情の飛び梅、いかなれば道眞は、君の御大事目前に在りながら、奏聞なす事も叶はぬか、梅花に劣りし此身の上、この所に朽果てゝ、末代不忠の名に穢し、萬民の歎きとなるかエヽ。

ト梅の枝を持ち、向うを見て無念の思入、持つたる梅の枝で、思はず丁と平馬の首を打てば、首前へ落ちる。

皆々　ヤア。

トびつくり、思入、浪の音打込み。

〽柔和の形相忽ち變り、御眦に血をそゝぎ、眉毛逆立御憤り、都の方を睨み付け、物狂はしく立給へり。

安樂　知れてある時平が工み、今お聞きなされしかなんぞのやうに、つひぞ覺えぬ御顏色

白太　たとへこゝから睨しやつたとて都の方へはとゞきませぬ、御持病の痞が發つたら、エヘン悲しうござります。

安 白　丞相樣。

丞相　いかに梅王、白太夫、時平の大臣が謀叛の企、聞捨られぬ御大事、赦免なければ歸洛も叶はず、榮位を望む朝敵としろし召されぬ玉體危し、臣が忠義いたずらにこゝに朽果る、骸は虚命蒙る共、死したる後は憚りなし、靈魂帝都に立歸り、帝を守護なし奉らん、ヤア汝等、かゝる大事をきくからは、片時も早く時平が工みを奏問せよ。

〽我は見上ぐる此高山絶頂に、三日三夜、立行荒行、根氣を碎き、魂魄雲井に鳴雷。

ト これより、雷の音、稻妻の仕掛になる。

十六萬八千の首領となつて、眷屬引連れ、都に登り、謀叛の奴原引裂捨ん、現世の對面これまでこれまで。

梅王　御尤なる御諚なれども、若君の事思召され。

白太　デハ御座りませうが。

丞相　ヤア未練な事を。（ト行からとする。）

三人　モシ。

ト立寄る三人を突退け〳〵、梅の元へ寄る、ドロ〳〵になる、白梅の枝覆ひかゝり丞相の姿を包む仕掛にて、花バラ〳〵と散る、これにて三人あたりを見て。

やゝこのありさまは。

ト寄らうとする、梅は元の如くになる。

丞相樣〳〵〳〵。

ト呼びながら、白太夫住職下手へ入る、梅王も續いて行かうとする、幕明の船頭三人出で來て。

三人　わつぱめ動くな。

梅王　コリヤ最前の船頭めら、先刻の手並に懲りもせず、またうしやアがつたな。

沖藏　知れた事だ、菅丞相をぶつちめる、

楫六　邪魔ひろぐ、わつぱめ。

綱藏　それ。

兩人　合點だ。

皆々　どつこい。

ト鳴物變り、十分面白き大立あつて、トド梅王三人を追うて、下手へ入る、大ドロ〳〵にて道具廻る。

天拜山の場　本舞臺三間の間黑雲の書落し、嶮岨なる天拜山の道具、大雷の音にて留ると、よきところまで押出す。

ト奥より菅丞相紅梅の枝に、告文を結びつけたるを携へ出で來り、絶頂を見上げきつと見得。

丞相　神明和合納受あれば、天心稿ふ可きなし、讒者の爲に我命今日に限れり、五臟六腑を此儘に雷

となつて、我に憂かりし者共に、恨みを晴さで置くべきか。

ト思入、下手より梅王丸走り出で、此體を見て。

梅王　ヤ我君樣の此有樣は。

丞相　我はこの絕頂によぢ登り、鳴神となつて、朝敵一味の佞人原、片端から退治てくれん、梅王、

さらばぞ。

梅王　どうあつても我君樣には。

丞相　いそふれ、梅王。

梅王　ハ、ツ。

〽いそふれやつ、と御聲も共に烈しき颶風。

ト此うち奧より權六出で梅王にかゝる、投げ人形にて投り出し、向うへ走り入る。

〽ふき立て〳〵。

ト三重迯り、丞相思入あつて。

丞相　早や天帝の惠みによつて、形は此儘鳴神の不思議を見よ。

トこれから誂への鳴物になり、丞相思入、告文の卷を口に咬へ、葛かつらに取りつき、絕頂へよぢ登

る、これに從ひ、山を段々せり下げる、舞臺前へ雲、松杉の梢をせり上げる、うしろ黒雲、稲妻の光り、雨きびしく、都て天拜山の頂上、雷の音に納る。

〽敬白、それ清く澄めるは天なり、梵天帝釋、閻魔王、三天王。

淸淨淸光無量天。

〽御袖ちぎつて、夕汐の誓詞、神明和合、正直の人を照らすと聞くからは、天心犒ふ所なし。

三拾三天、見そなはせ給へ。

〽天心諸願滿足と祈り給へば、あら不思議や。

八雲立つ、雲に心のまゝなるか、あら、うれしやよろこばしやナア。

〽雲井はるかに都の方。

ト大どろ〳〵にて、菅丞相の骸を日覆へ仕掛にて引上げ、こゝにてきつと見得。

これより直に都の方へ、さうだ。

〽あやし、おそろし。

ト三重大どろ〳〵にて。

幕外、雷の音大どろ〳〵、誂への鳴物にて虚空へ飛行く。

幕

八幕目

寺子屋の場

役名　菅秀才、松王丸、松王一子小太郎、武部源藏、春藤玄蕃、手習子供、百姓、捕手大勢、御臺所園生の方、松王女房千代、源藏女房戸浪等。

鳴瀧村源藏内の場　本舞臺三間の間藁葺の二重舞臺、見付赤壁、納戸口暖簾、上の方反古張の障子屋體、門口藪疊、寺子屋のかゝり、こゝによだれくりの外子供大勢机を出し、手習をしてゐる、菅秀才やつし形にて此内に交り、二重上の方に手習をしてゐる、子供みな〳〵手本を讀み、大聲張上げ等してゐる。角兵衞獅子にて幕明く。

〽一字千金二千金、三千世界の寶ぞ、と教ふる人に習ふ子の、中に交る菅秀才、

武部源蔵夫婦の者いたはり傅き、我子ぞと人目に見せて片山家、芹生の里へ所替へ、子供集めて讀書の、器用不器用、清書を顔に書く子と手に書くと、人形書く子はあたまかく、教ふる人は取分けて世話をかくとぞ見えにける。中に年かさ五作が息子。

よだ　コレみんな、コレ見や、御師匠樣の留守に、手習するは大きな損、おりや坊主頭の清書した。

ト草紙を出して見せる。

〽見せるは十五の涎くり、若君はおとなしく。

菅秀　一日に一字學べば、三百六十字の敎へ、そんな事書かずとも、ほんの清書したがよい。

〽八つになる子に叱られて。

よだ　アヽませよ〳〵。

〽ませよ〳〵と指さして、嘲戯かゝるを殘りの子供。兄弟子に口過す、涎くりをいがめてこませ。

〽てんでにけさん振廻す、自然天然肩持つも、傅ふる筆の威德かや、主の女房

奥より立出で。

ト子供ごや〳〵云うてゐるうち、奥より戸浪出で来り。

戸浪　又こりやいさかいか、ア、おとましや〳〵、今日に限つて連合の源藏殿、振舞にいてなれば、戻りもしれぬ、ほんに〳〵此方衆で一時の間も待兼ねる、今日は取分寺入りもある筈、晝からは休ます程に。

よだ　そりやまた休みぢや、嬉しや〳〵。

戸浪　そなたは、いつち大きな形をして、惡さが過ぎる。

よだ　ハア。

戸浪　他の者は精出して習うた〳〵。

よだ　ハア〳〵。

〽筆より先に、讀聲高く。

子供の一　いろはにほへと。

子供の二　此間はお人下され。

子供の三　一筆啓上まひらせ候。

ト大勢ごつちやになり、手本の字を讀む事、大聲によろしく。

〽男が肩に堺重、文庫机を擔はせて、悧發らしき女房の、七つばかりの子を連れて。

ト向うより、千代小太郎が手を引き出て來る、後より三介机文庫を擔ぎ、片手に風呂敷包を提げ出で來り、舞臺へ來る、千代こなしあつて。

三助　チトお賴み申しまする、たけへらの源藏樣のお内は、こちらで御座りまするかな。

千代　ア、コレ。お賴み申しまする、武部源藏樣のお内は、こちらでござりまするか。

戸浪　ハイどなたかは存じませぬが、こちらへお入り下されませ。

千代　左樣ならば、御免なされませ。

〽愛に愛持つ女子同士。

トこれにて三人内へ入り、下手に住ふ、合方になり。

千代　私事は、此村はづれに輕う暮してをる者で御座りまする、これなる悴をお世話なされて下さりよか、とお尋ね申しにおこしましたれば、おこせ、世話してやらうと仰りまするお詞に甘へ、早速連れて參じまして御座りまする。

戸浪　ホンニ左樣で御座りますか、ようマアお出なされましたなア、そして寺入のお子は此のお子樣で御座りまするか。

千代　左樣でござりまする。

戸浪　氣高い、よいお子樣で御座りまするなア。

千代　イエモウ腕白者でござりまする、承りますればお內方にも御子息樣が御座りますとの事、どのお子樣でござりまする。

戸浪　あれにをりまする。こゝへおぢや〳〵、則ちこれが源藏殿の跡取りで御座りまする。

ト千代、小太郎と菅秀才を見較べる事あつて。

千代　テモよいお子樣で御座りまする。

戸浪　さうしてそのお子のお名は、何と仰ります。

千代　小太郎と申しまする、腕白者で御座りまする。

戸浪　サアもうよい、上へ行きや〳〵。

ト菅秀才立つ、千代祝儀包を出し。

千代　これは餘りお麁末でござりますが、心ばかりの品、お納めなすつて下さりませ。

戸浪　これは〳〵、マア御叮嚀に、納めて置きまするで御座りまする。マ、折悪う、今日は連合源藏も振舞に參りまして、まだ歸られませぬわいなア。

千代　左樣ならば、お師匠樣はお留守で御座りますかいなア。

戸浪　お待ちどうなら、私が一寸呼びに參りませう。

千代　イエ〳〵それには及びませぬ、幸ひ私も參つて來る所もあれば、その間にはお歸りで御座りませう。

戸浪　左樣なされませ、その間には、夫源藏も歸られますで御座りませう。

千代　これ〳〵三助、その持つて來たもの、こゝへ出しや。これはお麁末では御座りまするが、此子が寺入の印ばかりで御座りまする、お取納め下さりませ。

戸浪　これはマア何から何まで取揃へて、御念の入つた事、戻られたら見せませうわいなア。

千代　イエもうほんの心ばかり、よろしうお頼み申しまする。

よだ　ハア、、、。（ト泣出す。）

千代　びつくりいたしました、あのお子はどうなされたので御座りまする。

戸浪　かやうで御座りまする、師匠が留守ぢやと思うて、手習はせずに、外の子供を泣かしたり、惡

戯ばかりします故、仕置に立たせて置きまする。

千代　左樣で御座りまするか、かやう申さば、恐れ入りまするが、御勘忍なされて下さりませうなら
ば、有難う存じまする。

戸浪　イエ〳〵捨て置いて下さりませ、いつも〳〵世話やかせてなりませぬ、もそつと仕置をせねば
勘忍なりませぬ。

千代　さうでは御座りませうが、どうぞ今日ばかりは、サア〳〵私が詫言してあげます程に、これか
らおとなしう習ひなさんせ。

ト机の上よりおろし、鼻をかんでやる。

よだ　アイ〳〵。（ト悄げてゐる。）

千代　どうぞマア、御堪忍なされて遣はされませ。

戸浪　これは大にお世話をかけまする、サアちやつとお禮を申さぬかいなア。

よだ　おばさん、有難う。（ト不器用に辭儀をする。）

戸浪　あの通りで御座りまするわいなア。

千代　ホヽヽヽ。サヽ機嫌よう習ひなさんせ。

(トよだれくりそこに置いてある重箱の蓋を開けて、菓子を摑み出す。)

三助　ヤイ〳〵わりやその菓子どうするのぢや。

よだ　オヽどうもせぬわ、お師匠様がお留守だから、これは私が預つて置くのだ。

三助　エヽ馬鹿をぬかすな、今おらが見てゐれば、その重箱へ手を入れて、菓子を袂へ入れたぞな。

よだ　イヽヤそんな覺えはないわな。

三助　ナニねえ事があんべい、そんなら袂を改めべいか。

よだ　サアそれは、

三助　サア、

よだ　サア、

兩人　サア〳〵〳〵、

三助　きり〳〵菓子を出して了へ。(トきつといふ。)

よだ　チエヽ殘念や口惜しや、計る〳〵と思ひの外、三助めに見顯はされたか殘念やなア。(ト見得。)

三助　ヤアおろかや子僧、今此所にてその菓子を取上ぐるは安けれど、今日寺入りの祝儀にめでゝ、此三助が見遁してくれるわ。

よだ　また重ねての參會まで、
三助　まづそれまでは、
よだ　おしなの三助、
三助　寺子の大ぼや、
よだ　かたく、
兩人　さらば。

ト兩人屹度なつて、肌を脫ぎ、不器用な見得をする。

三助　東西これより、ぢばんめはじまる。（ト三助きりだめを持出る。）
よだ　きりだめ口上、茶湯ツ。（ト土瓶を出す。）
三助　てゝんがてんく。（ト手拭を出す。）
よだ　くわしくく。（トきりだめを出す。）
戸浪　ホヽ靜にせぬかいなう。（ト涎くりを叱る。）
千代　コレ小太郎、私は一寸隣村まで行て來る程に、おとなしう待つてゐや、わるあがきせまいぞ、
左樣なら行てさんじませう。

ト云ひ〱門口へ出かける、小太郎千代の袂を控へ。

小太　かゝさま、私も行きたいわいなう。

と取付くを振拂ひ。

千代　これはしたりたしなまぬか、大きな形して跡追ふのか。御覧じませ、まだ頑是が御座りませぬわいなア。

戸浪　そりや道理ぢやわいなア、ドリヤ私がよいものをやりませうぞや。モシツイ戻つてやりなさんせいなア。

千代　ハイ〱ツイ一寸一走り、ドリヤ行て参じませう。

〽跡追ふ子にも引かさるゝ、振返り見返りて、下部引連れ急ぎ行く。

ト千代思入よろしく、三助を連れて向うへ入る、戸浪こなしあつて。

戸浪　ドリヤこちのと近付にさしませう。

ト小太郎をつれて、二重上の方へ行き、こなしあつて。

〽二人を伴ひ奥へ入る。

トこれにて戸浪先に皆々奥へ入る。

〽若君の傍へ寄せ、機嫌紛らす折柄に、立歸る主の源藏、常に變りて色青褪め、内入りわるく子供を見廻し。

ト向うより源藏來り、思入あつて舞臺へ來て、直に門口を開ける、子供大勢出て迎へる。

源藏　エヽ氏よりも育ちといふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育ち、世話甲斐もなき役に立たず。

〽思ひありげに見えければ、心ならずも女房立寄り。

ト奥より戸浪出で來り。

戸浪　いつにない顏色もわるし、振舞の酒機嫌かは知らぬが、山家育ちは知れてある、子供の憎體口は聞えも惡い、殊に今日は約束の子が寺入して居まする、さがない人と思ふも氣の毒、機嫌直して逢つてやつて下さんせいな。

〽小太郎つれて引合せど、差俯向いて思案の體、幼氣に手をつかへ。

小太　お師匠樣、今からお賴み申しまする。（ト辭儀をする。）

〽云ふに思はず振仰向き、屹度見るより暫くは、打ちまもり居たりしが。

源藏　扨々、器量優れて氣高い生れ、公家高家の子息と云うて、おそらく耻しからず、ハテ扨、そなたはよい子ぢやなア。

〽機嫌直れば、女房も。

戸浪　それ〳〵〳〵、何とよい子よい弟子で御座んせうがな。

源藏　よいとも〳〵上々吉、シテその連れて來たお袋は、いづくに。

戸浪　サアお前の留守なら、隣村まで行て來うというてなア。

源藏　オヽそれもよし〳〵大極上、まづ子供を奥へやり、機嫌好う遊ばしめされ。

戸浪　それみな、お隙が出た、小太郎も奥へ行きや。

子供皆々　サア〳〵奥へ行て、遊ぶのぢや〳〵。

菅小　アイ〳〵。

〽若君諸共誘はせ。

ト子供大勢奥へ入る、源藏戸浪殘り。

〽跡先見廻し、夫に向ひ。

戸浪　最前の顏色は常ならぬ氣相、合點の行かぬと思うたに、今またあの子を見て、打つてかえての

機嫌顏、猶以て合點行かず、これには樣子が有りさうな事、もし樣子聞して下さんせ。

〽問へば源藏。

ト合方になり。

源藏　オヽ氣遣な筈、今日村の饗應と僞り、某を庄屋に呼寄せ、時平が家來春藤玄蕃、今壹人は菅丞相の御恩を着ながら、時平に隨ふ松王丸、こいつ病みほうけながら、檢分の役と見え、數百人にて追取卷き、汝が方に菅丞相の一子菅秀才、我子となしてかくまうよし、訴人有つて明白、急ぎ首討つて出すや否や、但し踏込み請取ふや、返答いかにと退つ引ならぬ手詰、是非に及ばず首討つて渡さうと、請合うた心はあまたある寺子の中で、いづれなりとも身代り、と思うて歸る道すがら、あれかこれかと指折つても、玉簾の中の誕生と菰垂の中で育つたとは似ても似付かぬ、所詮御運の末なるか、いたはしや淺間しや、と居所の歩みで歸りしが、天道のひかへ強きにや、あの寺入の子を見れば、まんざら烏を鷺とも云はれぬ器量、一旦身代で欺き、此場さへ遁れたれば、直に河內へ御供する思案、今暫くが大事の場所。

〽と聞いて戸浪は。

戸浪　モシ待しやんせ、その松王といふ奴は、三つ子の內のいつち惡者、若君のお顏はよう知つて

ゐるぞえ。

源藏　サアそこが一かばちか、生顏と死顏は相格の變るもの、面ざし似たる小太郎が首、よもや似せとは思ふまじ、よしまたそれと顯はれたれば、松王めを眞二つ、殘る奴原切つて捨て、叶はぬ時は若君諸共、死出三途の御供、と胸を据ゑたが、一つの難儀、今にもあれ、小太郎が母親迎ひに來らば何とせん、この儀に當惑いたしたわエ。

戸浪　イヤその事は氣遣ひさしやんな、女子同士の口先で、ちよつぼくさ欺して見ようわいなア。

源藏　イヤその手では行くまい、大事は小事より顯はるゝ、殊によつたら母諸共。

戸浪　エ。（トびつくり思入。）

源藏　コリヤやい、若君には替られぬ、お主の御爲を辨へよ。

戸浪　さうで御座んす、氣が弱うては仕損ぜん、コリヤモウ鬼になつて。
〽鬼になつてと、夫婦は突立ち、互に顏を見合せて。

源藏　弟子兒と云へば、我子も同然。

戸浪　サア今日に限つて寺入した、アノ子の業か、母御の因果か。

源藏　報ひは此方が火の車。

戸浪　追付廻つて來ませうわいなア。

源藏　これを思へば世の中に、

戸浪　せまじきものは、

兩人　宮仕へぢやなア。

ト兩人よろしく思入、此時向うにて百姓大勢。

百姓大勢　お願ひで御座ります〳〵。

〽共に涙にくれゐたる。かゝる處へ春藤玄番、首見る役は松王丸、病苦を助くる駕乘物、門口にかきすうれば、後には大勢村の者、附隨うて。

ト向うより、春藤玄番龍神卷侍烏帽子、首桶を抱へ中啓を持ち、後より陸尺二人乘物を舁ぎ出で來り、續いて村の者四人附添うて、直に舞臺門口へ來て。

□　ヘイ〳〵申上げまする、みなこれに居る者の子供が、手習に參つてをりまする。

△　モシ取違へて、首打れては、取返しがなりませぬ。

ⅹ　よく〳〵お改めなされた上、

○　どうぞお戻し下さりませうならば、

皆々　ヘイ〱有難う御座りまする。

〽願へば玄番。

玄番　ヤアやかましい蠅虫めら、うぬらが餓鬼の事まで、身共が知つた事か、勝手次第に連れてうせう。

〽叱り付れば松王丸。

ト乗物の内より。

松王　ヤレ暫くお待ちなされい。（ト駕の内より松王好みの形にて出で。）

〽駕より出るも刀を杖。

憚りながら、彼等とても油断はならぬ、病中ながら拙者めが検分の役勤むるも、外に菅秀才の顔見知りし者なき故、今日の役目しおふすれば、病身の願ひお暇下さるべしと、有難き御意の趣、疎には致されず、菅丞相の所縁の者を此村に置くからは、百姓共もぐるになつて、めい〱が悴に仕立て助けて歸る術もある事、コリヤやい百姓めら、ざわ〱とぬかさず共、一人宛呼出せ、面改めて戻してくれふ。

〽退引させぬ釘鎹、打てばひゞけの内には夫婦、豫て覺悟も今更に胸轟かす

ばかりなり、表はそれとも白髮の親仁、門口より聲高に。

□　長まよ〳〵。

長松　アイ〳〵。

〽アツト答へて出で來るは、腕白顏に墨べつたり。

ト奥より出て來るを、松王引捕へ檢める事。

〽似ても似付かぬ雪と炭、これではないとゆるしやる。

△　岩まはゐぬか、岩まよ〳〵。

岩松　祖父樣、何ぢや。

〽祖父樣何ぢやと、はしこくて出來る子供の頑是なき、顏は丸顏きみしり茄子。

トめい〳〵門口へ出る、

松王　詮議に及ばぬ、連れてうせろ。

〽睨み付けられオヽ、怖や。

△　嫁にも喰さぬ此孫を、命の花落遁れました。」

〽祖父が抱へて走り行く。

ト子供を連れて向うへ入る。

〽次は十五の涎くり。

⧗ ぼんよ〳〵。(ト手招きする。)

よだ 父よ、おれはもうこゝから抱れていの。

〽あまへる顏は馬顏で、聲きり〳〵す。

⧗ オヽ泣くな〳〵、抱いてやらう。

〽乾鮭を猫撫親がくはひ行く。

ト涎くりを負って行く。

○ 私が忰は器量よし、お見違へ下さるな。

〽斷り云うて呼出すは、色しろ〳〵と瓜實顏、こいつ胡亂と引捕へ、見れば首筋眞黑々、墨か痣かはしらねども、こいつでないと突放す、その外山家在所の子供殘らず呼出して、見せても〳〵似ぬこそ道理、土が產したはかり芋、

子ばかりよつて立歸る。

ト此うち松王始終改める事よろしくあつて、みなく〳〵花道へ入る。

〽スハ身の上と、源藏も妻の戸浪も胸を据ゑ、待つ間程なく入來る兩人。

ト此うち松王玄番入る、能き所へ住ひ玄番思入あつて。

玄番　ヤア源藏、此玄番が目の前で、討つて渡さうと請合うた、管秀才が首サア請取らう。

〽早く渡せと手詰の催促、ちつとも憶せず。

源藏　かりそめならぬ右大臣の若君、掻首捻首にも致されず、暫しの間御用捨。

松王　ヤアその手は喰はぬ、暫しの用捨と隙どらせ、逃支度いたしても、裏道へは數百人を付置きたれば、蟻の這出る所もない、生顏と死顏は相格の變るなぞと、身代の僞首それも喰はぬ、古手な事して後悔するな。

源藏　ヤアいらざる馬鹿念、病みほうけた汝が目玉がでんぐり返り、逆さま眼で見やうは知れず、紛れもなき管秀才の首討つて見せう。

玄番　その舌の根のかはかぬうち、

松王　早く討て、

玄番　疾く切れ。
〽玄番が權柄、はつとばかりに源藏は、胸を据ゑてぞ入りにける。
ト源藏首桶を抱へ、思入よろしく、奥へ入る。
松王　ヤア合點の行ぬ、先刻行つた餓鬼等は以上八人、机の數が一脚多い、その悴はいづくにをる。
〽傍に聞ゐる女房は、こゝぞ大事と心も空、檢使は四方八方に、眼をくばる中にも松王、机文庫の數を見廻し。
戸浪　イヤこりや今日初めて寺、寺詣した子が御座んす。
松王　何を馬鹿な。
戸浪　オヽそれ〳〵、これが即ち菅秀才の御机文庫。
〽木地を隱した塗机、ざつとざばいて云拔ける。
松王　何にもせよ、隙どらすが油斷の元。
玄番　實に尤も。
〽玄番もろとも突立上る、此方は手詰命の瀨戸、奥にはばつたり首打つ音、は

つと女房胸を抱き、踏込む足もけしとむうち、武部源藏白臺に首桶載せてしづ〳〵出で、目通りに差置き。

ト此うち奥にて太刀音して、上手の障子へ血煙立つ、皆々思入、奥より源藏首桶を抱へ出で來り、松王の前へ首桶を直し。

源藏　是非に及ばず、菅秀才の御首討奉る、いはゞ大切な御首、性根を据ゑて、サア松王、しつかりと檢分せよ。

〽忍びの鍔元くつろげて、虚といはゞ切りつけん、實といはゞ助けんと、片唾を呑んで控へ居る。

松王　ハヽヽヽ、何のこれしきに性根所か、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄極樂の境、家來衆、源藏夫婦を取卷きめされい。

捕手　ハツ。動くな。（トよろしく取卷く。）

〽捕手の人數十手を振つて立懸る、女房戸浪も身を固め、夫は元より一生懸命。

源藏　サア實檢せよ。

〽檢分といふ一言も命がけ、後は捕手向うは曲者、玄番は始終眼を配り、こゝぞ絶體絶命と思ふうち、早や首桶へ寄せ、蓋引明けた首は小太郎、贋といつたら一討と、はや拔かける、戸浪は祈願、天道樣、佛神樣、憐み給へと女の念力、眼力光らす松王が、ためつすがめつ伺ひ見て。

ト源藏戸浪思入、松王首桶の蓋を取り、思入あつてとつくり見て。

松王　ムウコリヤ菅秀才の首打つたは、まがひない、相違ない。

〽云ふにもびつくり源藏夫婦、あたりきよろ〳〵見合せり、檢使の玄番は檢分の詞證據に。

玄番　出來した〳〵、能く討つた、褒美にはかくまうた科赦してくれる。イザ松王丸、片時も早く時平公にお目にかけん。

松王　いかさま隙取つてはお咎もいかゞ、拙者はこれよりお暇給はり、病氣保養の豫ての願ひ。

玄番　役目は濟んだ、勝手にせよ。

松王　然らば御免。

玄番　イヤナニ源藏、世の諺にも云ふ如く、背に腹は代へられずと、三代相恩の主人の小倅、忠臣顔にかくまつても、うぬが刀の鐔際にやア、可愛や餓鬼めもこの通り、なまくら武士の分際で、隠立した其報ひ、切刃詰つて惨な態だア、フヽハヽヽヽ。

〽玄番は館へ、松王は駕にゆられて。

ト玄番は首桶を抱へ、松王は乗物にて向うへ入る、兩人跡見送り思入あつて。

〽夫婦は門の戸ぴつしやり締め、物をも云はず、青息吐息五色の息を一時にほつと吹出すばかりなり、胸撫でおろし源藏は、天を拜し地を拜し。

源藏　ハアヽ有難や忝や、凡人ならぬ若君の、御聖徳が顯はれて、松王めが眼がかすみ、若君と見定めて歸つたは、天性不思議のなす所、御壽命は萬々歳、悦べ女房。

戸浪　イヤモウ大抵の事ぢや御座んせぬ、あの松王が眼の玉へ、菅丞相様が入つてござつたか、但し首が黄金佛ではなかつたか、似たと云うても瓦と金、寶の花の御運開き、餘り嬉しうて涙が溢れるわいなア。

兩人　エヽ有難うござりまする。

〽有難や尊やと、悦び勇む折柄に、小太郎が母いきせきと、迎ひと見えて門の

戸叩き。

ト向うより千代出で來り、門口へ來て。

千代　寺入りの子の母で御座りまする、只今歸りまして御座りまする。

ト兩人これを聞いてびつくり思入。

戸浪　サア〳〵こりやマアどうせう、何と云うたらよからうぞいなア。

源藏　こりや最前云うたはこゝの事、若君には代へられぬわエ。（ト思入あつて。）うろたへ者めが。

〽門の戸引開け。

トこなしあつて、源藏門口を明ける、千代思入あつて内へ入る。

千代　これはマア〳〵お師匠樣で御座りまするか、悪さをお頼み申しまして御座りまする、何所に居りまするやら、お邪魔で御座りませう。

源藏　イヤ奥に子供と遊んでゐます、連れて歸らつしやりませ。

千代　ハイ〳〵左樣なら、連れて歸りませうわいなア。

〽ずつと通るを、うしろより只一討と切付くる、女もしれものひつぱづし、逃げても逃さぬ源藏が、刀するどに切込むを、我子の文庫でハツシと受止め。

トよろしく立廻つて、千代以前の文庫にて受止め。

これ待つた、待しやんせ。

〽はねる刀も、用捨なく、また切付くる文庫は二つ、中よりぱらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡、顯はれ出しはこはいかにと、不思議の思ひに劍もなまり、進みかねてぞ見えにける。小太郎が母涙ながら。

ト此うちよろしく立廻あつて、文庫の内より經帷子、六字の幡出る、源藏見て不思議の思入あつて。

源藏　ヤ、何と、シテ〳〵それは得心か。若君菅秀才樣のお身代、お役に立て下さんしたか、但しはまだか、樣子が聞きたい。

千代　得心なりやこそこの經帷子、六字の幡。

源藏　ムウシテ其許は、何人の御內證。

〽尋ぬるうちに、門口より。

トこのうちよき時分、松王いつもの拵へにて、門口に窺ひ出で、松の枝へ短册を付けて持ちたるを內へ投込む、源藏取つて見て。

源藏　梅は飛び櫻はかゝる世の中に。

ト短册を讀んで、不思議の思入。門口にて。

松王　何とて松のつれなかるらん。女房悦べ、忰はお役に立つたわやい。

千代　エヽ。ハア、、、。（ト泣落して思入。）

〽聞くよりわつとせき上げて。

松王　ヤア未練者めが。

〽前後不覺に取亂す。

ト思入あつて內へ入る。

〽ずつと通る松王丸。

源藏殿、御免下され。

〽見るに夫婦は二度びつくり、夢か、現か、夫婦か、とあきれて詞もなかりしが、武部源藏威儀を正し。

源藏　一禮は先づ後の事、是まで敵と思ひし松王、打つてかはつた所存はいかに。

松王　ホウ御不審尤、御存じの通り我々兄弟三人は、めい／＼別れての奉公、情なきは此松王、時平公に從ひ親兄弟とも肉縁切り、御恩を請し丞相樣へ敵對、主命とは云ひながら皆これ松王

が因果、何とぞ主従の縁切らんと作病構へ暇の願ひ、菅秀才の首見たらば暇やらん、と今日の役目、よもや貴殿は討ちはせまい、なれども御身代に立つべき一子なくば如何せん、これぞ御恩報ずる時、と女房千代と言合せ。

〽二人が仲の悴をば、先へ廻して此身代り。

机の数を改めしも、我子は來たかと心のめど、菅丞相には我性根を見込給ひ、何とて松のつれなからうぞとの御歌を、松はつれない〳〵と世上の口に。

〽かゝる口惜しさ、推量あれ、源藏殿。

悴がなくばいつまでも人でなしと云はれんに、持つべきものは子で御座る。

〽云ふに女房なほせき上げ。

千代　草葉の蔭で小太郎が聞いて、嬉しう思ひませう、持つべきものは子なりとは、あの子の爲によい手向、思へば最前別れた時、いつにない跡追うたを、叱つた時のその悲しさ、冥途の旅へ寺入と早や虫が知らせたか、隣村へ行くと云うて、道まで行んで見たれ共、子を殺させに寄越して置いて、どうまア内へいなるゝものぞ、死顔なりとも今一度見たさに、未練と笑うて下さんすな、包みし祝儀はあの子の香奠、四十九日の蒸物まで持つて寺入さすといふ、悲しい事が世

にあらうか、育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子は器量よしと、美しう生れたが、可愛や其身の不仕合、何の因果に疱瘡まで仕舞うた事ぢやぞいなア。

へせきあげて、かつぱと伏して泣きければ、共に悲しむ戸浪は立寄り。

戸浪　最前も連合が身代と思付いた傍へいて、お師匠樣今からお頼み申します、というた時の事思出せば、他人の私さへ骨身が碎ける、親御の身ではお道理で御座りまするわいなア。

松王　イヤこりや御內證。こりや女房共、何でほえる、覺悟した御身代、內で存分ほへたではないか、御夫婦の手前もあるわい。イヤ源藏殿、申付けてはよこしたれど、定めて最期の節、未練な死を致したで御座らうな。

源藏　イヤモ菅秀才の御身代といひ聞したれば、潔う首差延べ。

松王　アノ逃げもかくれも致さずにな。

源藏　につこりと笑うて。

松王　ムヽ、出來しをりました、源藏殿、九つになりまする、怜悧な奴、健氣な八つや九つで、親に代つて恩送り、お役に立つたは孝行者、手柄者と思ふにつけ。

へ思出すは櫻丸。

御恩も送らず先立し、嘸や草葉の蔭よりも、羨しかろ、けなりかろ、忰が事を思ふにつけ、不愍な事を致しで御座る。

〽流石同性同腹を、忘れ兼たる悲嘆の涙。

千代　もしその伯父御に、小太郎が逢ひますわいの。

〽取付いてわつとばかりに泣沈む、歎きも洩れて菅秀才、一間の內より立出給ひ。

菅秀　我に代ると知るならば、此悲しみはさすまいに、可愛の者やなア。

〽御袖を絞り給へば、夫婦はハッと共に浸する有難涙。

ト松王千代思入あつて。

松王　序ながら若君へ、松王めがお土產。（ト門口へ出て。）申付けた用意の乘物、これへ。

ト向うにて。

家來　ハア、。

〽ハッと答へて家來共、御目通に舁据うる、はや御出と戶を開けば、菅丞相の御臺所。

ト文句のうち、向うより松王の家來乘物を舁ぎ出で來り、舞臺へ据える、松王立寄り戸を開ける、內より御臺所出る、菅秀才見て。

菅秀　なら母樣か。

御臺　菅秀才か。〽御親子不思議の御對面、源藏夫婦横手を打ち。

源藏　所々方々と御行方を尋ねしに、何處にか御座ありし。

松王　さればく北嵯峨の御隱家、時平の家來が聞出し、召捕に向ふと聞き、某山伏の姿となり、危い所奪取たり、急ぎ河內の國へ御供あつて、姫君にも御對面、こりやく女房、小太郎が死骸、あの乘物へ移し入れ、野邊の送りを營まん。

千代　アイ。〽アイと返事の其中へ、戸浪は心得抱いて來る。

ト戸浪上手の障子を開け、小太郎が死骸を抱いて來る、千代これを乘物へ乘せ。

〽死骸を網代の乘物へ乘せて、夫婦が上着を脫れば、憐れや內より覺悟の用意、下に白無垢麻上下、心を察して源藏夫婦。

ト松王上着を脱ぐ、下に白無垢水上下、千代も同じく白無垢の形になり。

源藏　野邊の送りに親の身で、子を送る法はなし、我々夫婦が替り申さん。

松王　イヤ〳〵これは我子にあらず、菅秀才の亡骸にお供申す、何れもは門火々々。

〽門火を頼み、頼まるゝ、御臺若君諸共に、しやくり上げたる御涙。

御臺　冥途の旅へ寺入の、

松王　師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛、

源藏　六道能化の弟子となり、

戸浪　賽の河原で砂手本、

千代　いろは書く子はあへなくも、

皆々　ちりぬる命。

トこれより門火を焚く事よろしくあつて、

〽是非もなや、あすの夜誰か添乳せん、らむ憂目見る親心、劔と死出の山けこえ、あさき夢見し心地して、跡は門火にゑひもせず、京は故郷と立別れ、鳥邊野さして。

さらば。

連れ歸る。

とよろしく段切にて。

幕

卷末に

石川五右衛門の狂言はいろ〳〵ある。併し今日割合に行はれるのは、三つ位のものであらうか。それは、繼子いぢめから藤の森で出る、「釜淵双絶巴」と、小冬殺しから足利館で出る、「木下蔭狭間合戰」と、所謂山門で出る、「樓門五三桐」とである。前の二つは院本物で、後のが純粋の歌舞伎物である。だが、實際に演ぜられる場合は、この三つ物が交錯してゐる事が多い。殊に「山門」は、石川五右衛門の狂言に、附物のやうになつてゐる。それは恰も「鈴ケ森」が、權八長兵衛の狂言に、なくてならないやうなものである。さうして又「鈴ケ森」が、獨立した中幕物であるやうに、「山門」は、序曲や開幕劇のやうな意味で、獨立して演ぜられる。私は、餘程前の事であるが、故人眼玉の五右衛門を明治座で見た。始終旅を廻つてゐた優だけに、古風なやり方で、緞帳臭くはあつたけれど、歌舞伎味たつぷりの五右衛門だつた。藤の森で捕手に圍まれ乍ら、五郎市やアいと、我子を呼ぶ、しはがれ聲がいまだに耳の底にある。その時も藤の森の次が、御殿場だつたと覺えてゐる。

三つものがまぜ〳〵になつた始めは、何時であるかといふに、嘉永四年正月中村座の小團次からで

ある。その時の臺本が「増補双絶巴」で、場割の順序をいふと、大序が犀ケ崖、二幕目山門、三幕目が小冬殺し、四幕目御殿場、六幕目繼子いぢめ、七幕目藤の森、大詰釜煎りの八幕である。釜煎りの五右衛門が、江戸の舞臺で演じられたのは、これが最初で、非常な評判であつたと云はれてゐる。この時分から、純歌舞伎物である「樓門五三桐」は、山門だけで認められてゐる形である。

「樓門五三桐」の書卸は、安永七年四月大阪小川吉太郎座の「金門五三桐」、作者は並木五瓶である。初代嵐雛助の石川五右衛門、初代尾上菊五郎の眞柴久吉だつた。これが江戸で上場されたのは、寛政十二年二月市村座「樓門五三桐」で、二代目嵐雛助の石川五右衛門である。

序に言ふ。この狂言の名題は、當然「金門五三桐」である「樓門五三桐」では意味をなさぬ。金門と書いて、山門と讀したのを、當時の學者は、狂言作者の無學だといつて、非難したといふ話がある。無論作者のこゝろでは、豊臣家の五三の桐の金紋を、京都五山の一たる南禪寺の山門へ、引掛けての洒落である。そこで「金門五三桐」だから面白いのである。それを「樓門五三桐」では、洒落が通らないばかりでなく、五つの文字から組立られた、一箇の詩を失ふ道理である。

本卷に收錄した臺本は、文政十一年三月市村座の時のもので、河竹繁俊君所藏の三升屋二三治自筆本である。その時の一番目三立目、四立目、五立目大詰の三幕である。役割を云へば、石川五右衛門の

七代目團十郎、此村大江之助、眞柴久吉の三代目三津五郎、眞柴久秋の十二代目羽左衛門、大淀姫の紫若（七代目半四郎）、大江之助妻呉竹の粂三郎（六代目半四郎）等が主なる顏である。

「和田合戰女舞鶴」は、五段物の院本で、並木宗輔が享保廿一年三月の作である。この本の序幕は、原作の第二段の中と切で、二幕目は、その第三段の切である。私が使つた臺本は、嘉永五年正月河原崎座の時のもので、當時の主なる役割を擧げると、板額の三代目璃寛、與市の八代目團十郎、政子の九藏（六代目團藏）、城の九郎（海老藏）等である。

原作の荒筋を云へばかうである。第一段は、勅使中の院爲氏卿鎌倉へ下向ある、實朝は奥州巡見の留守で、尼將軍政子が、和田北條の二人に饗應の役を命ずる。實朝の妹齋姫は爲氏を慕つてゐる。和田北條も互に思ひを寄せて勅使の面前で舞爭ひになる。それを板額が留めに入る。二人は勅使饗應の能に事寄せて對手を殺さうと計る。齋姫は藤澤入道に預けられる。

第二段の口は、與市と共に、荏柄の平太が鳥賣に身を偷して、善哉丸を盜む。それから、この本の序幕につゞく。

第三段の口は、實朝公の御前評定で、大江廣元の言葉に從つて、子供の軍勢を狩り集める。「軍勢た

まのこざくら」と小名題のある勢揃ひがあつて、切が、この本の二幕目である。

第四段は讀んでみると一番面白い。舞臺ではどうか。大時代で見た目も變つてゐるし、詩趣も相當にあつて面白いと思ふ。ところでこれが行はれないで、第二段第三段と板額の件だけが、通俗になつたかと云ふと、恐らく女武道に得意であつた中村富十郎が、江戸の舞臺にこの狂言を演じてから、女形が氣を吐くものになつたからであらう。それに子役の芝居として「盛綱陣屋」等に次ぐ時代物であるといふ理由もある。が結局それだけで、餘りに內容貧弱である。第四段は「道行こがれ松虫」に始まる、綱手が公曉を連れ、京都まで逃れて來て、追手が掛つて危いところを、豫て公曉の行方を尋ねてゐる鶴ケ岡の別當に逢ひ、若君を手渡して、自分も落延びる。その次が小倉山の山莊で、爲氏は百人一首の撰をしてゐる。そこへ一人の旅人がやつて來て、一首の歌を示して、撰の中に入れてくれろと云つて、一夜の宿を賴む。爲氏は文臺に凭れたまゝうと〳〵すると、齋姬の靈が現はれる。それが實は平太が助け出して來た本當の姬である。爲氏の召仕車戶次夫婦は、和田北條に賴れて、姬を盜み出さうとする。その日夫婦を尋ねて來た綱手が、身代になつて死ぬ。旅人は實朝で、綱手は車戶次夫婦の義理ある子と云ふのである。

第五段は、和田北條合戰の最中へ、與市が平太が引立てゝ來て、そこで藤澤入道の陰謀が分る。板

額が入道を討つて取る。

「敵討襤褸錦」の粉本は、福井彌五左衛門の「非人仇討」である。「非人仇討」は、彌五左衛門が弟子の荒木與次兵衛に、寛文四年に書いて演じさせたもので、續き狂言の最初である。それまでは、歌舞伎劇は能のやうに、一曲宛獨立してゐたものであるが、この作は二番續きに書かれてゐる。即ちこの作は續狂言の先驅をなすべきものであるといふ點で、歴史的に重要な意味を持つてゐる。惜しい事には脚本が傳つてゐないので、どんな筋であるか明かでない。が、少くとも「敵討襤褸錦」の大晏寺の場は、大體「非人仇討」から取つたものである事は、俳優佐渡島長五郎の「佐渡島日記」を見ても想像する事が出來る。それには手負事の名人と傳へられる荒木與次兵衛の「非人仇討」の演出と、當時の俳優姉川新四郎のそれを比較して「仕内も古へとは甚野卑なり」と批評してゐる。「敵討襤褸錦」は元文元年の書卸であるが、姉川新四郎はそれから十餘年後の寛延二年に歿してゐる役者であるから、當時の習慣から考へて、豐竹座の文耕堂、三好松洛が「非人仇討」の主なる場面を、操に移植したものが、取りも直さず「敵討襤褸錦」の大晏寺である事は、殆ど疑問の餘地が無い。

それはそれで一通り片付くのであるが、更に私は、本卷に収めた「織合襤褸錦(おりあはせつゞれのにしき)」に就て、新しい

疑ひを持つのである。「織合襤褸錦」の二幕目は、新七の仲兄治兵衛が幕切に出るのと、治郎右衛門がその場で死ぬことを除いては、殆ど「敵討襤褸錦」の下の巻の大晏寺の場と同じである。併し、序幕の春藤邸正月の場は　純粋の歌舞伎の脚本であつて、主なる人物の役名が同じである以外、内容は全然違つたものである。そんなら「織合襤褸錦」と「敵討襤褸錦」の關係、延いては「織合襤褸錦」と「非人仇討」との間に、何等かの關係はないだらうか。

話の順序として、「敵討襤褸錦」の梗概を記すと、全體が上中下の三段に分れてゐる。上の巻は、春藤助太夫の京の旅宿で、家中の須藤六郎右衛門が朋輩の彦坂甚六と諜し合せて、助太夫の次男助太郎の白痴を利用して、若殿の寵愛する藝子おてるを盗み出さうとする。それを助太夫が遮ぎるので、兩人は討つて立退く。

中の巻は、國元備後の助太夫留守宅に始まる、三男の新七は隣屋敷須藤の娘お霜と契る。長男の治郎右衛門は二人に祝言させやうとする。そこへ奴の佐兵衛が助太郎を伴つて歸る。旅先の異變が傳へられる。治郎右衛門は弟達と共に敵討に立たうといふ。母は實子である助太郎を、足手纏になるといつて殺して、妾腹に出來た二人の繼子に義理を立てる。隣屋敷ではお霜が自害する。次は留守中の佗住居で、佐兵衛、伊兵衛の義兄弟の忠僕が主人の母と妻に仕へてゐる。二人の妻も主家の爲に身賣を

する。それから道行になつて、一文奴に姿を變へた佐兵衛伊兵衛は、主人の後を慕つて大阪へ出る。

下の巻は、大和の郡山で、須藤彦坂を匿つてゐる加村宇田右衛門が、須藤の連れて來たおてるの身の代金を調達する爲に、須藤の刀を家中の高市武右衛門に賣らうとする。そこで刀の眞僞を試す事になつて、次が大晏寺の三昧である。併しそこで治郎右衛門は死なゝい、敵二人も手を負つて逃げ延びる。それから後に宇田右衛門の屋敷のところがあつて、須藤彦坂の二人を長持へ入れて逃がさうとするのを、武右衛門がその長持を押へ、佐兵衛と伊兵衛は馬方になつて入込み、そこで主従が仇を殺して本懐を遂げる。

右の荒筋だけを見ても、「敵討襤褸錦」が、「非人仇討」から、その中心になる場面を取り入れたにしても、全體は大分違つたものである事は分る。内容は復雑になつてゐるし、形式も整つてゐる。翻つて「織合襤褸錦」の方はどうかと云へば、何時頃、誰の手になつたものか、私には分らないのであるが、序幕、體の調子を見ても、かなり古いものである事だけは確かで、幕の初めのところに新七の臺詞で、俳句や前句附の事がある等から、安永天明時分のものではないかと思はれない事はないが、その内容形式の單純稚拙な點に關するかぎり、どうかすると「敵討襤褸錦」以前の作でないかしらとも思ふ、無論これは據處のない私の空想にすぎないのであるが、そんな疑ひを持ちたくなるのである。

この疑問は、この問題にもう少し深く入れば手掛りがありさうに思はれるのであるが、今のところでは私の單なる空想であるに過ぎない。「敵討襤褸錦」のやうな纒つたものがあるのに、その後から「織合襤褸錦」の序幕のやうな素樸な、何處か間の拔けた作品を造るといふ事は、一寸順序が逆になる譯である。だか「織合襤褸錦」の二幕目は、明かに「敵討襤褸錦」の下の巻から取つたものであるから、「織合襤褸錦」はその名題の示すやうに、全く「敵討襤褸錦」以後に補綴加筆されたものに相違ない。私の空想をゆすぶり動かすのは、その序幕に限つての事である。しかも、作品としての單純稚拙さに驚つてゐる。さうして更に私の空想が許されるとすれば、春藤邸正月の場と、「非人仇討」とは、何等かの關係があるのではあるまいか。私の疑ひと云ふのは實はこの事である。

今日、雁治郎が演じる大晏寺は、新七の外に治兵衞が出て來る。この「織合襤褸錦」の方の臺本である。仁左衞門や吉右衞門は「敵討襤褸錦」でやつてゐる。古くからこの兩方ともかなり上場されてゐる。治郎右衞門役者としては、寶曆明和時代に大阪に初代嵐雛助があつて著名である。

「菅原傳授手習鑑」は延享三年八月竹本座書卸で、作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲である。この竹本座の興行は、翌年三月まで打續ける程の大當りであつた。江戸の歌舞伎では、

翌四年中村座と市村座で上演してゐる。

私が取り上げたのは、天保二年九月河原崎座の臺本である。その時の主なる役割は、菅丞相、櫻丸源藏の源之助（五代目宗十郎）、立田の前、櫻丸妻八重の粂三郎（六代目半四郎）、御臺園生の方の珉子栗莉太郎の高麗藏（六代目幸四郎）、土師兵衞、時平の五代目幸四郎、菅秀才の音吉、齋世親王の菊世、苅屋姫の鐵之助、源藏妻戸浪、梅王女房春の[illegible]瀧、判官代照國、春藤玄番の壽美藏、宿禰太郎、白太夫の三代目鰕十郎、後室覺壽、梅王丸、松王女房千代の五代目菊之丞、松王丸の七代目團十郎等である。

院本は五段に分れてゐる。歌舞伎臺本も殆どその通りであるが、第五段目と、第四段目の飛梅のあと、寺子屋の前になる、北嵯峨の隱れ家が省略されてゐる。第五段目はほんの結末であるが、北嵯峨の隱れ家は、御臺が夢に飛梅の不思議を見るところで、時平方の討手が掛つて、八重が切死にする事や、源藏が山伏姿で御臺の危急を救ふ始末を書いてゐる。

この「菅原傳授手習鑑」では、三子の兄弟といふ奇想天外に驚かされるが、これには據處がある。當時大阪の天滿に三子の兄弟を生んだ女があつて、上役人から鳥目五十貫文を賜つたのを、早速これに持込んだのである。次で、世間に傳はる「梅は飛び」の歌から思付いて、梅王、松王、櫻丸とその

名を呼んだのであらう。兎に角作者は、この三人に各「力」と「義」と「色」を代表させてゐるのである。

それから又この作では、骨肉の別れを主題にして、松洛が道明寺を書き、千柳が賀の祝を書き、出雲が寺子屋を書いたといふ話は、非常に有名である。さすがにこの三場には力が籠つてゐる。これらの場面がみんな立派に書けてゐる位であるから、全體として院本物の傑作と稱せられる所以である。同じ骨肉の別れを取扱つてゐるが、趣向が三場ともハツキリ違つてゐて、文章もさう優劣がない。寺子屋が源藏の歸つて來るところから幕切まで、源藏夫婦の心持をしめつゆるめつ押して行く力、賀の祝で主人公の櫻丸を幕切近くなつて出すやうな澁い行方、道明寺では菅公の威徳を現はすのに木像を使つて、それを自由自在に活躍させる技巧、それ〴〵に實に見事な腕競べである。さうして寺子屋が、世間に喜ばれる理由もある。けれど作品としての價値を云へば、私は一番道明寺が立優つてゐると思ふ。寺子屋は旨く作られた劇である、やゝ見物に媚び過ぎてゐるところがある、さういふよりは餘りに院本の定石通りである。そこへ行くと、道明寺は着想が平凡でない、詩趣に富んでゐる、全體の調子が一段と高い。それに世間と人間とから離れ、じつと孤獨の世界を見詰めてゐる菅丞相を、さう筆を費さずに、立派に描出してゐる。「菅原傳授手習鑑」の主人公に足るだけの風格を具へてゐる。又立田の前の一箇平凡な女房振は、珍しい程自然の感を盛つた書方であると思ふ。（澤村米吉）

大正十五年三月十八日印刷
大正十五年三月廿一日發行

『時代狂言傑作集』第三卷
定價金參圓

編纂者檢印

編輯者　河竹繁俊
　　　　濱村米藏
　　　　澤美濤太郎
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彥
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　瀧澤一郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂
（電話大手五一、四二一〇番
振替東京一六一七番）